

新屋敷遺跡 4

—国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2015. 3

熊本県教育委員会

新屋敷遺跡4

—国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査—

2015.3

熊本県教育委員会



新屋敷遺跡遠景（北東から）



1 A区 SX7 道路状遺構完掘状況



1 B区 SI2 かまど埋土遺物出土状況



1 D区 調査区全景



2 B区 SK7 遺物出土状況



2 B区 SB1 栗石出土状況



1 B区 土層断面



1 B 区 出土遗物



1 区 主要遗构内出土遗物



2区 主要遗構内出土遺物



1区 出土遺物（灯明皿）

序文

熊本県教育委員会は、白川河川改修工事に伴い、新屋敷1丁目、白川左岸側の埋蔵文化財の調査を実施してまいりました。

新屋敷遺跡は、大江遺跡群に近接し、奈良時代から平安時代にかけて、西海道駿路の西、託麻国府が存在したと推定されている出水国府跡の北に位置する遺跡です。このあと、国府は二本木へ遷っていくと考えられています。

このような立地から、新屋敷遺跡は奈良・平安時代の政治的中心地の近隣の集落の様子を垣間見ることができる遺跡です。主に8世紀から9世紀にかけての堅穴建物が多く出土した集落跡が見つかりました。

今回の調査によって出土した遺構、遺物により、その当時の人々の生活の様子の一端を知ることができた反面、地下に保存されていた貴重な遺構等が姿を消し、図面や写真等での記録保存となりました。

この報告が今までの周辺の調査や今後調査される発掘資料と併せて、この地域の歴史の資料の一つとして活用され、皆様の埋蔵文化財に対する理解と保護のために役立てれば幸いに存じます。

今後とも、皆様のご指導・ご助言を賜りますよう、お願い申し上げます。

なお、本調査を実施するにあたり、文化財保護の観点から多大のご協力をいただきました国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、熊本市教育委員会及び地元の方々、またご指導・ご助言をいただきました諸先生方に深く感謝申し上げます。

平成27年3月31日

熊本県教育長 田崎 龍一

例言

- 1 本書は、白川河川改修工事に伴い実施した埋蔵文化財発掘調査の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、上記工事に伴い、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所の依頼を受けて熊本県教育委員会が実施した。
調査費及び整理報告費については、全額国土交通省熊本河川国道事務所が負担した。
- 3 現地調査は、IA区は平成17年11月1日～平成18年3月27日に実施し、宮崎敬士が担当した。IB・IC区は平成20年4月22日～10月6日に実施し、水上正孝・前田真由子が担当した。ID区は平成22年8月4日～8月24日に実施し、上村龍馬が担当した。
2A区は平成18年1月10日～3月17日に宮崎が担当した。2B区は平成20年1月15日～3月20日に坂口圭太郎・水上が担当した。
2C区は平成21年4月20日～5月18日、2D区は平成24年6月6日～9月26日に上村が担当した。現地での写真撮影は、調査区担当職員及び非常勤嘱託職員、図面作成は左記の者と現場作業員が行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 4 世界測地系での測量基準杭の設定は、（株）埋蔵文化財サポートシステム、長田測量設計（株）、（株）十八測量設計に委託した。
- 5 空中写真撮影は、（株）九州文化財研究所、九州航空（株）、（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 6 整理作業、報告書作成は、熊本財文化財資料室において実施した。
- 7 出土遺物の整理作業は、前田佳代子・唐木ひとみが担当した。
- 8 道構ト雷斯は、前田・唐木・坂本貴美子・立石美代子・結城あけみ・川上薫が行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 9 遺物実測、トレスは、坂本・立石・結城・川上・藤本香織・木田美咲が行い、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 10 出土遺物の写真撮影は、村田百合子・松本智子・蓮池千恵が行い、前田・高瀬美智代・坂本・立石・結城・岡村聖子が補助した。
- 11 本書の執筆は、第4章第3節3を上村、そのほかの文章を水上が行い、文化財資料室長後藤克弘の指導のもとに編集を行った。編集で前田が補助した。
- 12 遺物・写真・図面等は、熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町西口1667）に保管している。
- 13 本書中での人名はすべて敬称を省略させていただいた。

凡例

- 1 発掘遺構は道構の種別を示す以下の記号と一緒に番号の組み合わせにより表記した。
S A : 墓、欄列 S B : 建物 S C : 回廊 S D : 溝 S E : 犬塚 S F : 道路 S G : 池
S I : 壁穴建物 S K : 土坑 S P : 柱穴 S S : 足場 S T : 墓 S X : その他、不明道構等
(本書で使用していない記号も含んでいる)
- 2 道構名称は、IA区S 1 1というように、区の名称の後に道構記号と番号で表記した。以下の注意点がある。
 - (1) IA、IB、IC、ID区は、隣接した区ではあるが、調査時期が異なるため、同調査区ということで最終的に通し番号に変更し、またがって存在している道構に関しては、初出でIB区S 1 2（IA区S 1 8）というように道構名称の後に括弧書きで後の区の道構名称を表記し、次からはIB区S 1 2とした。
 - (2) 調査全体をとおして、一度道構番号を付けたものの、調査の過程において道構と認められないと判断した番号については空き番をしている。そのため道構名称の最後の番号が、調査区でのその道構の出土数とは限らない。
- 3 道構図における上辯注記は、理土を意味する理という字を省略する。
- 4 現地における上層、遺物（土器類）の色調表記は「新版標準土色帖 2004年版」（小山正忠・竹原秀雄編著）に基づく。
- 5 本書で使用している方位は、北を示す。
- 6 本書に掲載した地図、道構実測図の縮尺は不統一であり、各頁に明記した。
- 7 出土遺物実測図において以下の注意点がある。
 - (1) 番号は土器類が3分の1、3分の1で収まらない遺物については図に明記した。
 - (2) 出土遺物の実測図において、須恵器については、断面を黒で塗り、その他のものは白抜きにした。
 - (3) 赤彩及び黒色土器Aについては、実測図には表記せず、觀察表に表記した。
 - (4) 土器器表等の内面の調整で、ヘラケズリは矢印で方向を示した。

本文目次

卷頭図版

序文

例言・凡例

目次

第1章 序章

第1節	調査に至る経緯	1
第2節	調査の契機となる白川河川改修工事について	1
第3節	調査組織	2
第4節	発掘調査の経過	4

第2章 遺跡の位置と環境

第1節	地理的環境	19
第2節	歴史的環境	19

第3章 調査の方法

第1節	調査区・グリッド設定	29
第2節	基本土層概略	29
第3節	調査方法	29
第4節	調査の概要	29

第4章 調査の成果

第1節	基本土層	37
第2節	1区古代遺構・遺物	45
第3節	2区古代遺構・遺物	81
第4節	1・2区近現代遺構	114
第5節	遺物観察表	133

第5章 まとめ

写真図版

あとがき

報告書抄録

挿図目次

- 第 1 図 新屋敷遺跡周辺遺跡地図 (1/25000)
第 2 図 新屋敷遺跡内調査地点図 (縮尺任意)
第 3 図 新屋敷遺跡全調査区位置図 (縮尺任意)
第 4 図 1 区・2 区調査区グリッド位置図
第 5 図 1 区 古代主要遺構配置図 (1/300)
第 6 図 2 区 古代主要遺構配置図 (1/300)
第 7 図 調査区土層断面図及び土層模式図
第 8 図 1 区 古代遺構配置図 1 (1/100)
第 9 図 1 区 古代遺構配置図 2 (1/100)
第 10 図 1 区 古代遺構配置図 3 (1/100)
第 11 図 1 区 古代遺構配置図 4 (1/100)
第 12 図 1 区 古代遺構配置図 5 (1/100)
第 13 図 1 区 古代遺構配置図 6 (1/100)
第 14 図 1 区 古代遺構配置図 7 (1/100)
第 15 図 1A 区 SI7 平面・断面図
第 16 図 1A 区 SI8 平面・断面図
第 17 図 1 区 道路状遺構平面・断面図
第 18 図 1A 区 道路状遺構内機能面移行図
第 19 図 1A 区 出土遺物実測図 (1)
第 20 図 1A 区 出土遺物実測図 (2)
第 21 図 1B 区 SI1 平面・断面図
第 22 図 1B 区 SI1 かまど平面・断面図
第 23 図 1B 区 SI2 平面・断面図
第 24 図 1B 区 SI2 かまど平面・断面図
第 25 図 1B 区 SI4、SI5 平面・断面図
第 26 図 1B 区 SI4 かまど平面・断面図
第 27 図 1B 区 SD3、SB5、SB15 平面・断面図
第 28 図 1B 区 SB6、SB7、SB9 平面・断面図
第 29 図 1B 区 SB11、SB12 平面・断面図
第 30 図 1B 区 出土遺物実測図
第 31 図 1C 区 SI9 断面図
第 32 図 1C 区 SI6 平面・断面図
第 33 図 1C 区 古代遺構平面・断面図
第 34 図 1C 区 SD11 平面・断面図
第 35 図 1C 区 SK52、SK59、SK60、SK66
平面・断面図
第 36 図 1C 区 出土遺物実測図
第 37 図 1D 区 SD15～SD19 平面図 (1/200)
第 38 図 1D 区 SD15～SD19 平面・断面図

- 第 39 図 1D 区 SD15～SD19 土層注記
第 40 図 1D 区 出土遺物実測図
第 41 図 2 区 古代遺構配置図 1 (1/100)
第 42 図 2 区 古代遺構配置図 2 (1/100)
第 43 図 2 区 古代遺構配置図 3 (1/100)
第 44 図 2 区 古代遺構配置図 4 (1/100)
第 45 図 2 区 古代遺構配置図 5 (1/100)
第 46 図 2A 区 SI1 平面・断面図
第 47 図 2A 区 SX2 平面・断面図
第 48 図 2A 区 出土遺物実測図
第 49 図 2B 区 SI2 平面・断面図
第 50 図 2B 区 SB2 平面・断面図
第 51 図 2B 区 SB4 平面・断面図
第 52 図 2B 区 SB5、SB8 平面・断面図
第 53 図 2B 区 SB9、SB6 平面・断面図
第 54 図 2B 区 SB7、SB10 平面・断面図
第 55 図 2B 区 SK8、SK7、SK9、SP94
平面・断面図
第 56 図 2B 区 出土遺物実測図
第 57 図 2C 区 SK12 平面・断面図及び出土遺物
実測図
第 58 図 2D 区 調査区断面及び遺構配置図
第 59 図 2D 区 SI3 平面・断面図
第 60 図 2D 区 SI4 平面・断面図
第 61 図 2D 区 SI5、SI6、SI7、SI9 平面・断面図
第 62 図 2D 区 SI5 かまど平面・断面図
第 63 図 2D 区 SI8 平面・断面図
第 64 図 2D 区 SD4 平面・断面図
第 65 図 2D 区 SK 平面・断面図 (1)
第 66 図 2D 区 SK 平面・断面図 (2)
第 67 図 2D 区 出土遺物実測図
第 68 図 1 区 近現代主要遺構配置図 (1/500)
第 69 図 2 区 近現代主要遺構配置図 (1/500)
第 70 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (1)
第 71 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (2)
第 72 図 1B 区 SB1、SB2 平面・断面図
第 73 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (3)
第 74 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (4)
第 75 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (5)

写真目次

- 第 76 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (6)
第 77 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (7)
第 78 図 1C 区 SD9 平面・断面図
第 79 図 1B 区 近代遺構平面・断面図 (8)
第 80 図 2B 区 近代遺構平面図
第 81 図 2B 区 近代遺構平面・断面図
第 82 図 2C 区 近代遺構平面・断面図
第 83 図 座標測定点図
- 図版 1 1A 区 SX7 道路状遺構出土状況
1A 区 SX7 道路状遺構機能面3 検出状況
(南から)
1A 区 SX7 道路状遺構機能面3 検出状況
(東から)
1B 区 SX7 道路状遺構側溝完掘状況
1A 区 SI7 完掘状況
1A 区 SI8 硬化面検出状況
1B 区 SI1 完掘状況
1B 区 SI1 かまど残存状況

表目次

- 第 1 表 新屋敷遺跡周辺道路一覧
第 2 表 新屋敷遺跡内調査地一覧
第 3 表 出土遺物観察表①
出土遺物観察表②
出土遺物観察表③
出土遺物観察表④
出土遺物観察表⑤
出土遺物観察表⑥
出土遺物観察表⑦
- 図版 2 1B 区 SI2 完掘状況 (1B 区側)
1B 区 SI2 完掘状況 (1A 区側)
1B 区 SI2 かまど埋土遺物出土状況 (上層)
1B 区 SI2 かまど埋土遺物出土状況 (下層)
1B 区 SI4 機能面完掘状況
1B 区 SI4 かまど残存状況
1B 区 SI5 機能面完掘状況
1B 区 SB5 (手前) SB7 (奥) 完掘状況

図版 3 1B 区 SB15 完掘状況

1B 区 SB6 完掘状況

1B 区 SB9 完掘状況

1B 区 SB11 完掘状況

1B 区 SB12 完掘状況

1B 区 SK13 遺物出土状況

1C 区 SI6 完掘状況

1C 区 SI6 かまど検出状況

卷頭目次

- 1 新屋敷遺跡遠景 (北東から)
2 1A 区 SX7 道路状遺構完掘状況
3 1B 区 SI2 かまど埋土遺物出土状況
4 1D 区 調査区全景
5 2B 区 SK7 遺物出土状況
6 2B 区 SB1 栗石出土状況
7 土層断面
8 1B 区 出土遺物
9 1 区 主要遺構内出土遺物
10 2 区 主要遺構内出土遺物
11 1 区 出土遺物 (灯明皿)
- 図版 4 1C 区 SI9 かまど土層断面
1C 区 SB16 完掘状況
1D 区 SD19 土層断面完掘状況
1C 区 SK62 遺物出土状況
2B 区 SI2 完掘状況
2B 区 SI2 かまど残存状況
2A 区 SI1 硬化面検出状況
2B 区 SB2 完掘状況 防空壕完掘状況

- 図版5 2B区 SB4 完掘状況（右は防空壕）
2B区 SB5 完掘状況
2B区 SB8 完掘状況
2B区 SB9 完掘状況
2B区 SB6 完掘状況
2B区 SB7 完掘状況
2B区 SB10 完掘状況
2B区 SK7 遺物出土状況
- 図版6 2C区 調査区全景
2D区 SI3 完掘状況
2D区 SI5 完掘状況
2D区 SD4 完掘状況
2D区 SI8 かまど残存状況
2D区 調査区完掘状況
1B区 SB3 栗石出土状況
- 図版7 1B区 SB1 SB2 栗石出土状況
(K1より北西側)
1B区 SB1 K7 ~ K10 栗石出土状況
1B区 SB4 K1 K2 栗石出土状況
1B区 SK15 組石出土状況
1B区 石垣出土状況（北西から）
1B区 石垣出土状況（南西から）
1B区 石垣南部出土状況
1B区 石垣土層断面
- 図版8 1C区 SD9 完掘状況
1B区 近現代烟跡出土状況
2B区 SB1 栗石出土状況
2C区 SB11 栗石出土状況
2A区 石垣出土状況
1B・1C区 完掘状況
1C区 完掘状況
1区 土層断面
- 図版9 1区 出土遺物 1
図版10 1区 出土遺物 2
図版11 1区 出土遺物 3
図版12 1区 出土遺物 4
図版13 1区 出土遺物 5
図版14 2区 出土遺物 1
図版15 2区 出土遺物 2

第1章 序章

本書は、国土交通省白川河川改修工事に伴い、熊本県熊本市中央区新屋敷1丁目に所在する「新屋敷遺跡」を熊本県教育委員会が平成17年（2005）から平成24年（2012）に発掘調査し、その成果を取りまとめたものである。

新屋敷遺跡の所在する熊本平野は白川の下流域にあたり、熊本市の中心地に位置する。白川は阿蘇中央火口丘の一つである根子岳を源として阿蘇カルデラの南の谷（南郷谷）を流下し、同じく阿蘇カルデラの北の谷（阿蘇谷）を流れる黒川と立野で合流した後、溶岩台地を西に流下し、熊本平野を貫流して有明海に注ぐ、流域面積480km²、幹川流路長7.4kmの一級河川である。上流域には、これまで何度も噴火を繰り返し、大量の火山灰を噴出して、時には流域に甚大な被害を及ぼしてきた阿蘇活火山が位置している。

流域はジョヨー型になっており、流域の約80%を占める上流域の阿蘇カルデラは、外輪山と火口原及び中央火口丘群を形成して草原及び田畠が多く、また、細長い中流域は河岸段丘及び洪積台地上に田畠が多く、下流域は扇状地及び沖積平野で熊本市街地が広がり、河口域は水田地帯となっている。

流域の地質は、上流域では阿蘇の火山活動によって生成された阿蘇溶岩を基盤とし、地表にはヨナと呼ばれる火山灰土が厚く堆積しており、中流域は段丘砂礫層が黒色ロームで、下流域は沖積層で覆われている。新屋敷遺跡は標高約14～15m、遺跡の北東で蛇行する白川の流れが南西に直進する流域の左岸側に位置する。白川下流域は現在河川堤防の整備が進んでいているが、大雨の際には河川氾濫が心配される地域である。

第1節 調査に至る経緯

熊本市中央区新屋敷2丁目から1丁目の白川左岸において、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所による河岸掘削工事と築堤工事が計画された。工事予定地は新屋敷遺跡の南西端側の白川沿いであり、主に、古代～中世の遺跡を包蔵することが予想されたため、平成15年5月27日、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所から熊本県教育庁文化課に埋蔵文化財確認調査が依頼された。これを受けて平成16年2月17日から3月10日にかけて確認調査を行ったところ、古代の埋蔵文化財の残存が確認された。よって、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所と文化課の間で協議し、平成17年より、工事によって遺跡が破壊される区域について、記録保存のための発掘調査を実施することとなった。

第2節 調査の契機となる白川河川改修工事について

白川上流域の阿蘇地方は全国的にも雨の多い豪雨地帯である。降雨は夏期に集中し、梅雨前線による洪水が多く、特に流域面積の約80%を占める上流域（阿蘇カルデラ）の降水量が多いうえに、雨に流されやすい火山灰土（ヨナ）を多量に含んで渦流となりやすい。

また、中流部の河床勾配がおむね1/100～1/300と他の河川と比べて急であり、扇状地である熊本平野まで一気に洪水が流下することや、熊本市街地を中心とする下流域では川幅が狭いことから、渦流によって多大な洪水被害が発生しやすいといった特徴がある。

昭和28年6月26日（1953.6.26）の大洪水では、阿蘇地方各所で山崩れが起き、火山基層を覆う「ヨナ」が洪水で流されてきて熊本市内で氾濫、堆積し、かつてない甚大な被害を被った。

この大水害を契機に、翌昭和29年（1954）、「白川改修基本計画」が国により策定され、昭和31年（1956）にはこの計画に基づき白川の改修工事が、左岸は熊本県中央区大江町渡鹿より河口、右岸は熊本県中央区黒髪町より河口に至る区間について始まった。主な改修工事は子飼、大江地区的特殊堤工事、洪

水の阻害となった橋の改築工事、下流部における堆積土砂の浚渫、小島捷水路工事などである。この間、昭和42年（1967）に「白川改修基本計画」に基づいた「白川水系工事実施基本計画」が策定され、さらに、熊本市を中心とする市街地の拡大、土地利用の高度化が進み、資産の集中が更に進んだことから、昭和55年3月（1980.3）には、「白川水系工事実施基本計画」を全面的に改定した。

その後、昭和55年（1980）8月30日の洪水の激甚災害対策特別緊急事業により、左岸は十津川地区から世安地区を、右岸は蓮台寺地区から二本木地区を対象区间として3カ年の緊急的な改修が行われた。その後も築堤工事などをを行いながら、流下能力の増大を図ってきたが、平成2年（1990）に黒川で洪水・土石流が発生し、下流側の熊本市街部でも氾濫被害をもたらした。

熊本市街部での治水の問題点は、白川が天井川になっており、洪水時の水位は周辺の地盤より高い位置を流れ、十分な川幅も確保されていないため、洪水氾濫の可能性が高く一旦氾濫すると広範囲に氾濫水が流れ込み、都市部に壊滅的な被害をもたらす事である。

調査区が存在する明治橋から大甲橋間は、熊本の「森の都」にふさわしい景観を残す所で、樹木が両岸に繁茂しており、川面に映しだされる樹木や立田山などと相まった景観や公園が熊本市民らから親しまれているところである。しかし、この区间は特に川幅が狭く、堤防も整備されておらず、治水上非常に危険な区间となつておらず、熊本市中心部を浸水被害から守るうえで重要な箇所となっている。国土交通省は治水と環境の調和を図るべく、用地幅を小さくできる自立式構造の特殊堤を基本とし、堤防のデザインや水辺づくり、樹木の配置について住民の意向を採用しながら検討し、治水整備を進めているところである。

第3節 調査組織

本工事に伴う埋蔵文化財発掘調査は、熊本県教育委員会が主体となり、熊本市教育委員会の協力を得て実施している。また、調査に伴い関係機関の方々より各種の助言、指導も得ている。

以下、当課の調査体制を記すとともに芳名を記し感謝申し上げたい。（敬称略、役職は当時）

平成15年度（2003）確認調査

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 成瀬烈大（文化課長）

島津義昭（教育審議員兼課長補佐）

調査統括 高木正文（主幹兼調査第1係長）

調査事務局 吉田 恵（課長補佐）

欄杭正義（主幹兼総務係長）

天野寿久（主任主事）

杉村輝彦（主事）

調査担当 岡本真也（参事）

調査事務局 吉田 恵（課長補佐）

四元正明（主幹兼総務係長）

塚原健一（参事）

小谷仁志（主事）

調査担当 宮崎敬士（学芸員）

手柴智晴（非常勤嘱託職員）

宮本利邦（非常勤嘱託職員）

平成17年度（2005）本調査【1A・2A区】

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 梶野英二（文化課長）

倉岡 博（課長補佐）

調査統括 高木正文（課長補佐兼調査第1係担当）

平成19年度（2007）本調査【2B区】

調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 梶野英二（文化課長）

江本 直（課長補佐）

調査統括 高木正文（課長補佐兼調査第1係担当）

調査事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）

高宮優美（主幹兼総務係長）

塚原健一（参事）

高松克行（主任主事）	山田京子（高校教育課参事）
調査担当 坂口圭太郎（参事）	松島英二（高校教育課主任主事）
水上正孝（文化財保護主事）	調査担当 上村龍馬（文化財保護主事）
遠山 宏（非常勤嘱託職員）	横田光智（非常勤嘱託職員）
吉留 広（非常勤嘱託職員）	島浦 健（非常勤嘱託職員）
	木下 勇（非常勤嘱託職員）

平成20年度（2008）本調査【1B・1C区】

調査主体 熊本県教育委員会	調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 米岡正治（文化課長）	調査責任者 小田信也（文化課長）
江本 直（課長補佐）	西住欣一郎（課長補佐）
調査統括 高木正文（課長補佐兼調査第1係担当）	調査統括 村崎孝宏（文化財調査第1係長）
調査事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）	調査事務局 川上勝美（課長補佐）
川上勝美（主幹兼総務係長）	中津幸三（施設課課長補佐兼総務係長）
山田京子（参事）	稻本尚子（施設課参事）
高松克行（主任主事）	天草英子（施設課主任主事）
調査担当 水上正孝（文化財保護主事）	調査担当 上村龍馬（文化財保護主事）
前田真由子（学芸員）	横田光智（非常勤嘱託職員）
橋口剛士（非常勤嘱託職員）	福田拓也（非常勤嘱託職員）
吉留 広（非常勤嘱託職員）	

平成24年（2012）本調査【2D区】

調査主体 熊本県教育委員会	調査主体 熊本県教育委員会
調査責任者 小田信也（文化課長）	調査責任者 小田信也（文化課長）
西住欣一郎（課長補佐）	西住欣一郎（課長補佐）
調査統括 村崎孝宏（文化財調査第1係長）	調査統括 村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）
調査事務局 川上勝美（課長補佐）	後藤克弘（参事・文化財資料室長）
中津幸三（施設課課長補佐兼総務係長）	整理事務局 馬場一也（課長補佐）
稻本尚子（施設課参事）	広石啓哉（主幹兼文化・総務係長）
天草英子（施設課主任主事）	有馬綾子（参事）
調査担当 上村龍馬（文化財保護主事）	天草英子（主任主事）
横田光智（非常勤嘱託職員）	整理担当 水上正孝（文化財保護主事）
	前田佳代子（非常勤嘱託職員）
	唐木ひとみ（非常勤嘱託職員）

平成21年度（2009）本調査【2C区】

調査主体 熊本県教育委員会	整理主体 熊本県教育委員会
調査責任者 米岡正治（文化課長）	整理責任者 小田信也（文化課長）
木崎康弘（課長補佐）	西住欣一郎（課長補佐）
調査統括 村崎孝宏（文化財調査1係長）	整理統括 村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）
調査事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）	後藤克弘（参事・文化財資料室長）
辛川雅弘（主幹兼総務係長）	整理事務局 馬場一也（課長補佐）
山田京子（参事）	広石啓哉（主幹兼文化・総務係長）
高松克行（主任主事）	有馬綾子（参事）
調査担当 上村龍馬（文化財保護主事）	天草英子（主任主事）
横田光智（非常勤嘱託職員）	整理担当 水上正孝（文化財保護主事）
	前田佳代子（非常勤嘱託職員）
	唐木ひとみ（非常勤嘱託職員）

平成25年（2013）調査報告書作成

整理主体 熊本県教育委員会	整理主体 熊本県教育委員会
整理責任者 小田信也（文化課長）	整理責任者 小田信也（文化課長）
西住欣一郎（課長補佐）	西住欣一郎（課長補佐）
整理統括 村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）	整理統括 村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）
後藤克弘（参事・文化財資料室長）	整理事務局 馬場一也（課長補佐）
整理事務局 馬場一也（課長補佐）	広石啓哉（主幹兼文化・総務係長）
有馬綾子（参事）	有馬綾子（参事）
天草英子（主任主事）	天草英子（主任主事）
整理担当 水上正孝（文化財保護主事）	整理担当 水上正孝（文化財保護主事）
前田佳代子（非常勤嘱託職員）	前田佳代子（非常勤嘱託職員）
唐木ひとみ（非常勤嘱託職員）	唐木ひとみ（非常勤嘱託職員）

平成22年度（2010）本調査【1D区】

調査主体 熊本県教育委員会	平成26年度（2014）調査報告書作成
調査責任者 小田信也（文化課長）	整理主体 熊本県教育委員会
木崎康弘（課長補佐）	整理責任者 手島伸介（文化課長）
調査統括 村崎孝宏（文化財調査第1係長）	西住欣一郎（課長補佐）
調査事務局 宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）	整理統括 村崎孝宏（主幹兼文化財調査第1係長）
元島 茂（高校教育課課長補佐	後藤克弘（参事・文化財資料室長）
兼総務係担当）	

整理事務局 松永隆則（課長補佐）
 広石啓哉（主幹兼文化・総務係長）
 有馬綾子（参考）
 天草英子（主任主事）
 整理担当 水上正孝（文化財保護主事）
 前田佳代子（非常勤嘱託職員）
 高瀬美智代（非常勤嘱託職員）

調査助言・指導及び調査協力者

新屋敷1丁目の方々、国土交通省九州地方整備局熊本河川国道事務所、熊本市教育委員会、
熊本市立白川小学校

調査・整理に伴う業務委託先

4級基準点測量及びメッシュ杭設置業務

株式会社埋蔵文化財サポートシステム、長田測量設計株式会社、(株)十八測量設計

空中写真撮影業務

株式会社九州航空、株式会社九州文化財研究所、(株)埋蔵文化財サポートシステム

遺構実測業務（一部）

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

出土遺物実測及びデジタルトレース業務（一部）

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

遺構実測図デジタルトレース業務（一部）

株式会社埋蔵文化財サポートシステム

第4節 発掘調査の経過

現地調査は、1A区は平成17年11月1日～平成18年3月27日、1B区・1C区は平成20年4月22日～10月6日、1D区は平成22年8月4日～8月24日、2A区は平成18年1月10日～3月17日、2B区は平成20年1月15日～3月20日、2C区は平成21年4月20日～5月18日、2D区は平成24年6月6日～9月26日に実施した。その間の経過は以下のとおりである。（調査日誌より抜粋）

調査日誌

平成17年度（2005年）

【1A区、2A区調査】

11月1日、2日、4日 1A区表土剥ぎ開始。

11月7日 1A区搅乱除去。本日より作業員入る。

11月8日～10日 1A区搅乱除去。

11月11日 雨のため現場作業休止。

11月14日 1A区搅乱除去。

11月15日～17日 1A区搅乱除去。2層掘削開始。国土交通省から光ケーブル埋設用のビニル

テープ、用地地形測量成果簿を借り受ける。

11月18日 1A区搅乱除去。2層掘削。白川小3年生児童が総合学習の一環として遺跡を20分程度見学していく。

11月21日 1A区搅乱除去。2層掘削。

11月22日 1A区2層掘削。

11月24日、25日 1A区2層掘削等。

11月28日 1A区精査。

11月29日、30日 1A区遺構確認。2層掘削。

搅乱除去。

12月1日 1A区精査及び遺構確認。2層掘削。

搅乱等の除去。

12月2日 現場作業休止。

12月5日～7日 1A区2層掘削。遺構検出。

12月8日 雨天により現場作業休止。

12月9日 1A区搅乱除去。2層掘削。

12月12日 1A区2層掘削。1区川側全景、搅乱、土層、硬化面撮影。

12月13日 1A区遺構検出。2層掘削。1A区川側調査区北東壁面、調査区中央壁面撮影。

12月14日 1A区SX7、S17掘削。SX7は1区を縱走する道路跡である。両脇に側溝を備え、路面には、硬化面が形成されている。3層上面（黄色砂層）で確認しているが、遺構使用時の生活面は、より上位と考えられ、切通し風に、生活面より一段下がった道路であったと考えている。

12月15日 1A区SX7、S17、埋土掘削。

12月16日 雨天により現場作業休止。

12月19日 1A区2層掘削。搅乱除去。

12月20日 1A区SX7掘削。硬化面実測。SX7床面検出状況、山側最東部完掘状況（使用時）、SX7完掘状況（使用時）撮影。

12月21日 1A区SX7掘削。S17掘削。

12月22日 現場作業休止。

12月26日 1A区、SX7はS17との切り合い部分を残し掘削完了。SX7他の遺構の光波による実測を開始。SX7掘削状況、SX7南側溝土層断面、北側溝土層断面撮影。川側の調査区埋戻し完了。

12月27日 1A区東端部分埋戻し。SX7光波にて実測。

12月28日 1A区東端部埋戻し。光波実測。周辺清掃等。深堀のある箇所を重点的に埋戻し、正月期間の事故防止に努める。機材等（テント他）はプレハブに撤収。最後に調査区周辺を清掃。

2006年

1月4日、5日 1A区光波実測。光波、カメラ等機材搬入。

1月6日 1A区光波実測。午後、雪がひどく作業を休止する。

1月10日 2A区表土剥ぎ開始。1A区埋戻し。清掃他。光波実測。

本日から作業員による現場を開始した。また、2A区の表土剥ぎを重機（0.7m³）にて開始。

1月11日 2A区表土剥ぎ。1A区埋戻し。光波実測。作業員から数名、光波の取扱いを習得してもらうことにした。

1月12日 2A区表土剥ぎ。搅乱除去。1A区2層掘削他。光波実測。遺物への注記開始。

1月13日、16日 2A区表土剥ぎ。搅乱除去。埋理蔵文化財サポートシステム（以降省略）によるメッシュ杭打ち。1A区光波実測。

1月17日 1A区光波実測。2A区搅乱除去。埋文サポートによるメッシュ杭打ち。

1月18日 雨天により現場作業休止。

1月19日 1A区光波実測。2A区搅乱除去。

1月20日 雨天のため現場作業休止。1A区データ整理他。

1月23日～25日 1A区光波実測。2A区搅乱除去。

1月26日 1A区光波実測。2A区搅乱除去。重機で掘削不可能であった箇所について、手掘りでの表土剥ぎと搅乱除去に着手する。

1月27日 1A区光波実測。現状完了。落ち込み部の掘削及びSX7、S12の掘削（補完）終了後に再開の予定。

1月30日 1A区山側西端の落ち込み部の掘削を再開。2A区搅乱除去。午後より雨天のため、遺物整理を行う。

1月31日、2月1日 雨天により現場作業休止。

2月2日、3日 1A区光波実測。2A区搅乱除去。

2月6日、7日 雨天により現場作業休止。

2月8日 2A区遺構確認。搅乱除去。川側全景撮影。

2月9日 2A区遺構掘削。撮影。

2月10日 2A区遺構掘削他。終了状況撮影。

2月13日 2A区終了部分埋戻し。終了状況撮影。

2月14日 2A区埋戻し。1A区2層掘削。午後

より雨天のため現場作業休止。遺物整理を行う。

2月15日、16日 雨天により現場作業休止。

2月17日 2A区埋戻し。

2月20日 雨天により現場作業休止。図面補正他。

2月21日 2A区土器集中地点の精査、取り上げ。埋戻し。2A区川側に2層相当層序に5世紀土師器が1m以内の狭範囲に集中していた。遺構(S1等)の角に該当する可能性もあるものの、あまりに部分的なため、当該包含層を土層図に記録し、地点として測量するに留める。

2月22日 2A区埋戻し。午後より雨のため現場作業休止。遺物整理を行う。

2月23日、24日 2A区埋戻し。

2月27日 2A区S11検出。埋戻し。

2月28日 2A区S11検出。埋戻し。1A区S18硬化面検出状況撮影。

3月1日 雨天により現場作業休止。図面補正等。

3月2日 2A区包含層掘削。2A区S11検出。埋戻し。

3月3日 2A区埋戻し。2A区S11検出。S11平面図実測。1A区S18完掘状況、1A区SD11土層断面、SD11完掘状況撮影。

3月6日 雨天のため現場作業休止。

3月7日 2A区埋戻し。2A区S11完掘状況撮影。1A区落ち込み実測。

3月8日 1A区落ち込み部掘削。埋戻し。1A区S17硬化面検出状況撮影。2A区S11実測。2A区S11土層断面、硬化面出土状況、かまと検出状況撮影。調査区完掘状況撮影。

1A区落ち込み部の掘り下げを進めると、最下部(地山)から溝となって道路最下面を検出。

3月9日 1A区落ち込み部掘削。2A区深掘り土層断面、2A区S11かまと掘削、1A区S17最下硬化面検出状況撮影。

3月10日 1A区落ち込み部掘削。わずかに膨らむ。石塔他なし。2A区埋戻し。

3月13日 1A区落ち込み部掘削。S17完掘状況撮影。2A区埋戻し。

3月14日 1A区S12貼床検出状況、完掘状況撮影。2A区S11かまと完掘状況。

3月15日 1A区落ち込み部S17発掘。落ち込み部完掘状況撮影。2A区埋戻し。落ち込み部掘削完了。コンタ回しを決定。

3月16日 1A区S17掘削、落ち込み部光波実測。2A区埋戻し。午後は雨天により現場作業休止。

3月17日 1A区S17掘削。S17光波実測。2A区埋戻し。調査終了とする。

3月20日 1A区S17掘削。落ち込み部コンタ回し。S17実測。撮影。コンタについて古墳測量を目途として実施する旨を伝える。

3月22日 雨天により現場作業休止。

3月23日 1A区埋戻し。S17、落ち込みS17実測。

3月24日 1A区埋戻し。調査本体は終了する。

3月27日 1A区埋戻し。1A区調査を終了する。2A区終了。

平成19年度（2007年）

2008年

【2B区調査】

1月15日、16日 表土剥ぎ開始。調査区中央から東側にいくつか集石が残存する。規模は小さく、又、並びもはっきりしない。16日には作業員に入つてもらい、土のう作り、南東側壁面、北東側壁面にトレーナを入れる。土層はこれまでの調査区の基本土層を当てはめると、現代整地層→薄い砂層→1層（暗褐色土）→3層（褐色土）である。

1月17日 作業としては1層の上面で近現代遺構（特に残りの良いもの）を検出し、3層上面で近世、中世、古代の遺構検出となる。2B区でも一部集石を確認した。今回の2B区は侍屋敷（元新屋敷）の範囲からは離れており、明治13年の地図に見られる一番丁付近になり、明治期に元新屋敷から白川上流へ向け市街地を拡張した地域に当たる。それ以前の地図では畠地となっている。よってそれらの集石はその頃のものではないかと考えているが、現代の整地及び擾乱により、その残存は非常に悪い。集石（家基礎）の掘方ラインが確認にくく、現代の整地により石が散乱していたため、1層中位まで掘削し確認することとした。

1月18日 調査区北側を除いて近代～現代の層は除去してしまった。近現代建物の基礎部分は一部しか残っておらず、建物を復元することはできそうにない。残りの良い基礎部分のみ図面に収めることにした。

1月21日 先週の掘り残しを除去し全体を精査する。粘土が入ったビットなど多数検出する。井戸の周りを囲むビットはSB2とする。

1月22日 雨のため現場作業休止。

1月23日、24日 摂乱除去、建物基礎石清掃。近現代建物基礎（集石）実測。東側に深い掘り込みがあり、周りに石が積んである。井戸の可能性がある。しかし石を積むための掘方が分からぬ。

1月25日 摂乱除去、建物基礎石清掃、ビット半截。近現代建物基礎（集石）実測。井戸の可能性があった掘り込みは、内側を掘り下げていくと鼠色の砂層が出てくるため摂乱であると判断した。

1月28日 雨天のため現場作業休止。

1月29日 午前中雨天のため現場作業休止。雨上がり11時頃より調査区の清掃を行い、SB1（1層）基礎石出土状況を撮影する。その後レベルが入った基礎石を外し掘方まで出す。

1月30日 SB1（1層）基礎石撤去の後、レベルを合わせて1層を掘削していく。北東側の摂乱表面を掘削し、摂乱の範囲を決定する。その後摂乱を掘削。

1月31日 1層を除去し、近現代遺構を検出するが案外少ない。3層上面は黄褐色土の軟質砂岩ブロックが広がっていたため遺構が見えにくい。少し掘り下げて検出をしていきたい。

2月1日 1層と3層の層界より少し掘り下げる。だいぶ遺構が見えやすくなった。北東側、北西側の摂乱で階段のような掘り跡があり、防空壕ではないかと思われる。

2月4日、5日 1層除去、清掃、検出。多くのビットが出土する。掘立柱建物がいくつか検出できそうである。

2月6日 遺構上端を実測し、掘立柱建物が建つかどうか想定していく。

2月7日 雨天のため現場作業休止。

2月8日 掘立柱建物に関わるビットを半截し、土層断面を実測する。

2月12日 調査区を清掃し、SB2、SB4、SB6、SB7の完掘写真撮影を行う。

2月13日 SB9半截。SB9P7は柱痕がはつきり確認できた。SK3の外側にSK5を確認し掘削する。SK3、SK5上層断面撮影。

2月14日 SB9上層断面を掘り、SB5、SB8、SB9の完掘状況を撮影する。清掃時ビットを検出し、掘立柱建物が建つかを試みるが建たなかつた。SI2を掘削。江戸中期の遺物やその下の土坑から古墳時代の土器が出土する。

2月15日 掘立柱にかかわらないビットを半截する。1層のビットと思われるものを掘削すると中から釘やガラスが出土した。掘立などを確認するために南東側を拡張するが、それにより壁がなくなるため、土層断面の実測、撮影を行う。

2月19日 南東側拡張部を掘削する。併せて拡張部の摂乱除去作業を行う。

2月20日 南東側拡張部を層位掘削。1層を掘削した段階で検出を行い、摂乱を抜き2層の掘削を行う。

2月21日 南東側拡張部の掘削を終了し検出を行う。拡張部分に伴う掘立柱建物のある可能性もある。

2月22日 SB7P7、SB4P13（南東側拡張部、掘立柱建物に伴うビット）の半截、実測、撮影。南東側拡張部2層除去検出状況撮影。拡張部南側で焼土と粘土が出土する。堅穴建物の可能性がある。

2月25日 調査区北東側、検出していたビットを半截する。SP23～33を付す。北東側拡張部を掘削する。

2月27日 ビット群完掘（SP24～39）する。SB10完掘状態撮影。

3月4日 SP82（1層）～92掘削。

3月5日 ビット掘削。SI2断面、平面、かまど断面実測。SI2検出状況、土層断面撮影。かまどは建物掘方とともに掘り、建物貼床時に高さを合わせているようである。SX1では埋土1は1層のような埋土、埋土2が暗褐色土で3層ブロックを含んでいる。

3月6日 S I 2かまどは、上に見えている粘土など建物の機能面が深いことから、上部の崩れの可能性が高い。

3月7日 S I 2かまど崩落部分を除去すると、きれいな粘土ではないが、粒々の白いブロックの裾部分が出土する。S X 1掘削。S P 94 遺物出土状況撮影。

3月10日 S P 94 完掘。S P 94 上層断面、S I 2かまど残存状況実測、撮影。

3月11日 S I 2かまど焼成面を外す。かまど平面図実測。かまど作成状況、S K 8 土層断面撮影。

3月12日 S K 10、S K 11半截。下層部分は大きめのブロックを含んでいて、堅穴建物の貼床のようになっており、何らかの目的で貼床してあると思われる。S K 9 ベルト外し。S I 2かまど掘方は4cm程掘るとすぐに砂岩に達する。焼土は砂岩まで達しているところもあった。完掘状況撮影。

3月13日 S I 2の貼床部を掘削する。貼床部自体が薄く、すぐに砂岩に達する。砂岩はきれいに削られていた。

3月17日 朝から調査区全体を清掃し空掘を行う。

3月18日～20日 現場片付けを行い、2B区調査を終了する。

平成20年度（2008年）

【1B区、1C区調査】

4月22日 1C区表土剥ぎを行う。2006年度、2007年度調査時の新屋敷遺跡表土剥ぎよりも深く、約80cm重機掘削していった。これまで川原石を押し固めた基礎跡（明治～昭和初期と思われる）が残っていたが、1C区には全くなく、煉瓦、瓦などの搅乱が多く、残りはあまり良くない。搅乱が多かつたため表土剥ぎの進度は遅れている。遺物は土師器、近世の磁器が出土したが、あまり多くはなかった。

4月24日 1C区表土剥ぎを続ける。住宅の基礎部分が調査区にかかり、ほとんど残存していない。約8、9割方搅乱を受けている。午後から1B区の表土剥ぎに入る。調査区北側から開始するが、西半分は後世の埋立地のよう地上面が見当たらない。東半分は遺構が残存している。埋立部と遺構残存部

の境から石垣が残存する。

4月25日 1B区表土剥ぎを行う。まず石垣の範囲を確認しながら作業を進める。高木佑佐、今村専門員（熊本市）、坂口参事、坂田参事に石垣を見て頂く。今村専門員によると、積んである石が小さいこと、形を整えた割石であること、きっちりとした布積みであることから、少なくとも明治以降、おそらく大正期の石垣ではないかとの見解であった。

4月28日 作業員による作業を開始する。まず調査区の壁出し、撹乱掘り、土のう作りをやってもらい、1B区の表土剥ぎの続きをを行う。南北側は建物の基礎が残り遺跡が壊されていた。

4月30日 1B区調査区東側に確認された石垣の全面検出に取りかかる。特に、コの字型に凹み階段が残存していると考えていた部分の検出では、階段は確認できなかった。また、東西に延びていた石垣はコの字型に凹むと考えていた部分から南北に向きを変えて延びることが分かった。おそらく住宅の堀で、石垣は家の区画であろう。調査区外であるが調査区東側にあるフェンスの下に現在でも石垣が残存している。観察の結果、石垣は、調査区内石垣と同じ様相を示すもの、コンクリートで目を詰めているものの2つから成っている。調査区内石垣と同じ様相を示すものに継ぎ足すようにコンクリートで目を詰めている石垣を北（川の方向）に増築したようである。1C区調査区東側、遺構が残存していると考えられる部分から1層掘り下げに入る。同時に調査区東側撹乱部も掘り下げる。

5月1日 1B区石垣の全面検出と清掃を行う。午前中に東西石垣石材の輪郭は検出し終わる。上段から清掃にかかる。午後から南北石垣の全面検出および東西石垣の写真前清掃を行う。清掃を行う際に上段石垣の掘り込みラインの検出を行ったが、不明瞭で確認できなかった。1C区撹乱部確定後、撹乱掘りにかかる。撹乱部と風呂場か釜焚き場のような場所から、近現代の柱礎石と思われる丸石の集石を検出した。近くにビンの集積があり、その中から牛乳ビンが出土したため、新しいものと思われる。

5月2日 1B区は朝から写真撮影のために石垣を清掃し石の前面を水洗いする。午後すぐに曇りとなっ

ため、撮影に入る。撮影のあと、上段石垣掘り込みライン検出を再度行うが、やはり判然としない。1C区擾乱掘りを行う。井戸2基と防空壕を検出する。

5月7日 1B区で3年前の調査区との境界を探すが今一つはっきりしない。土層も以前は表土、1層(暗褐色土)、2層(黒褐色土)、3層(褐色土、地山)であったのが、擾乱にやられているのか、表土、擾乱、地山ではっきりとしない。思いのほか深く明日も継続して行う。便覧が3基出土し、そのうちの1基から銭貨検出。縁青がひどく詳細は不明である。

5月8日 1B区烟畠の跡があり、掘削する。煙の高さとトレチ壁面の状況から、この辺りは煙のために3層(地山)まで削平されているのではないかと考える。畠の切れ目から5cm程振り下げていく必要がある。

5月9日 1B区擾乱を掘っていく。擾乱が多く苦労する。1C区調査区北側部分の精査を行う。2条の溝を検出し、検出状況を撮影する。途中で1条に合流するため、ベルトを残し、2条に分かれている箇所の溝内振り下げを行う。北側壁面にトレチを掘り、1条に合流する箇所の土層断面を確かめると、合流ではなく時期が異なる溝の切り合いであった。調査区南側1層を5cm程落とす。東西に走る溝のようなものの(のちのSD10)を検出する。

5月12日 係会議のため現場作業休止。

5月13日 雨天のため現場作業休止。

5月14日 長田測量4級基準点及びメッシュ杭設置。1B区、近現代遺構検出のため全面清掃を行い、近現代の遺構検出状況を撮影する。石組みの井戸が出土する。その後擾乱を掘削する。1C区SD9及びSD9'の振り上げを進める。断面ベルトの土層を実測し、撤去する。ただ、溝の中央付近でSD9'がSD9に合流する可能性が出てきた。SD10の検出及び検出状況の撮影を行い、その後断面ベルトを残し振り下げる。住宅基礎残存部の精査を行い、SD10とつながると思われる溝を確認する。溝と思われる遺構が擾乱の下に残存するようである。

5月15日 メッシュ杭設置業務。1B区擾乱を掘削する。4区と同様に近現代の建物の柱受けと思わ

れる川原石の集石が出土している。住居とかまど跡が出土するが、煙のために筋状に切られている。1C区SD9'溝が埋まった後に再度SD9を作っている。SD11溝の北西側は擾乱が激しく判然としなかったため、擾乱を抜いた後でSD11検出を試みる。SD11を検出したのち検出状況を撮影する。断面ベルトを残し、溝内振り下げにかかる。

5月16日 1B区は昨日に引き続き擾乱掘削を行う。近現代建物の基礎の川原石の集石はSBとする。1C区SD11断面ベルトを残して振り下げ、その後土層断面図を実測する。SD10土層断面図を実測する。

5月19日 1B区を先週に引き続き擾乱掘りを行う。午後雨天のため作業休止。

5月20日 1B区石垣南側の擾乱掘削を行う。比較的浅い。1C区SD9(1層)完掘状況写真撮影。

5月21日 1B区南西側建物の基礎と思われる川原石の集石は、抜けはあるが1列だけ2m間隔で並ぶ。しかし瓦が石の間にあって時代は古くはない。また、高さの違いもありプランを当てはめて良いものか。さあたって、集石の洗浄、検出状況を撮影するようにする。1C区SD11完掘状況、SD10完掘状況撮影。

5月22日 1B区南西側清掃。烟畠ベルトを残し掘削する。SB1出土状況、K1~K9出土状況撮影。

5月23日 1B区烟畠ベルトを残して掘削していく。SB1基礎石実測。

5月26日 1B区を清掃し近世~近現代の遺構検出を行う。その後検出状況を撮影し、近現代の遺構は掘削に入る。遺構と考えていたものでも掘削中にゴミが出て擾乱となるものが多い。

5月27日 雨天のため現場作業休止。

5月28日 1B区の集石を外し、振り込み掘削していく。K6、K7の間にあった集石は表土剥ぎの際にとばしてしまった。集石があったところはしまりが弱い。SB1がどうもしつくりこない。1層の土坑は基本的に浅いものが多い。表土剥ぎで掘削深度が深かったのかもしれない。

5月30日 1B区石垣部分撤去作業に伴う進入路

確保のため、北東端付近の土のうを除去しシートを剥ぐ。石垣の上端、下端の実測を行った。石が完全に露出したものは四隅を、土が覆っている部分は見える部分の四隅を実測した。作業は完了し石垣の撤去作業中に行う断面実測等で作図は完了する。1C区の擾乱部の実測を行い完了する。

6月3日 1B区SKB1の掘削、清掃。石垣部分の断面の調査をするために、上の段の石垣を撤去してしまい、下の段の石垣の一郎の石を外して、石の形、裏込めの状況を記録する。四角錐の形のものが多く、裏込めの石も丸石でなく削れた石を入れているようである。下は砂を敷き詰めてレベルを調整し、瓦を入れて下に沈まないようにしている。石垣は敷き詰めてある砂層が流れていなければ、川の流れには直接当たらなかったと思われる。土が石垣上段でも生きているため、なだらかに川側に下がっていた地形を生かして石垣部より川側を掘削し、石垣を作ったのではないかと考えられる。SB1（1層）についてはレベルの違いとプランから建て替えを行っていると考えられる。

6月4日 1B区石垣断面実測。SK1（1層）、SK2（1層）断面、SK3（1層）出土状況撮影。1C区1層を掘り下げ2層の検出を行う。S16は竪穴建物の立ち上がり部を途中で検出したことと礎が出土したことから、竪穴建物と捉え調査の軌道修正を図る。S16としていたもののうち、竪穴建物に含まれないものは何かを検討していかなければならない。

6月5日 1C区相互2層遺構検出を行い南西から撮影を行う。写真撮影終了後検出ピットの検討、グルーピング。掘立柱建物およそ4、5軒か。

6月6日 1B区北側11G付近を5cm程下げて遺構検出を行うが、擾乱が多く遺構が壊されている。14・15・E・Fグリッド付近は、土坑と思っていたものが半截で擾乱扱いになるものが多い。1C区昨日検出SKの個別、半截、断面の撮影を行う。掘立柱建物に関しては光波で地点を測定し、どのような組み合わせになるのか検討していかなければならぬ。S16の北側よりかまどを検出する。S1であることが確実となる。SK52、SK59、SK60

は、当初1つの遺構と考えていたが、ベルトを設定し、掘り下げを行ったところ、3つの遺構が切り合っていることが分かった。古い順にSK59、SK52、SK60と思われる。SK52より古代の土師器碗が出土する。

6月9日 午前中は係会議のため、午後から1C区S16、SK52、SK59、SK60上層断面図実測、S16土層断面撮影を行う。

6月10日 1B区北端部擾乱掘り、清掃を行い、遺構検出を行う。南端部SKを掘り上げ、中世から古代の遺構を検出し検出状況を撮影する。柱穴が2、3個切り合っているものが多いため、同じような場所に複数回建て直しを行っていると思われる。SB2K2、K3断面撮影を行う。雨がひどくなり午後から作業を中止する。

6月11日 雨天のため現場作業休止。

6月12日 1B区南端部1層遺構発掘。北中央部の清掃。北端部1層遺構検出。南端部、中央部1層遺構実測。SK13遺物出土状況、SP16集石出土状況撮影。中央部1層完掘状況の撮影。1層完掘状況の撮影準備を行う。

6月13日 1B区中央北区の1層土坑、集石の圓面を入れ、1層完掘状況を撮影する。中央区北側1層遺構掘削。北端部1層ピット完掘。SK15集石、SX1実測、撮影。1C区SB16清掃後、検出状況の写真撮影。軸に直交するように半截を行う。SK60を掘り上げた後、SK52断面実測が終わっていないところを残しながら掘り上げにかかる。SK52からは大きめの土器片（土師質）が出土している。方形の土坑になりそうである。SK56サブトレレンチを入れた後掘り下げにかかるがピットが検出されたので掘り下げを止める。SK57サブトレレンチを入れた後掘り下げを行う。深さがある。黒褐色土層より土師器、須恵器が出土する。

6月16日 雨天のため現場作業休止。

6月17日 1B区南端近現代遺構完掘状況撮影を目指し、遺構実測、完掘を進めてきたが、撮影はできなかった。北端部の古代遺構検出等は進んでいる。SK3は石の上面に大量の炭化物、焼土が残存していたため、当初はかまどかと思っていたが、

半截すると、地山を掘り込んで川原石を入れ、突いて固めてあるものであった。石の間には、瓦、磁器が入っていて古くはないようである。掘方には、地山に鉛のような鉄分の沈着が見られる。S B 1、S B 2とは距離が離れているために伴った遺構とは考えにくい。1 C 区 S I 6、午前中平面図を取り、午後から少しづつ掘り下げを行う。焼土を検出した時点で掘り下げを止め、焼土検出撮影をする。焼土の範囲がごく僅かなので、もう少し下げるから撮影するかは検討をする。S B 16 柱穴の土層断面を検討後、断面写真を撮影し、断面を実測する。S K 57、S K 61 断面写真を撮影し断面図を実測する。S K 58 を完掘後、撮影を行う。

6月18日 1 B 区 S K 11 (1層)、S K 19 (1層)、S K 20 (1層)、S D 1 (1層) 発掘。S K 3 (1層) 平面図、S K 19 平面 S K 20 断面実測。南端部古代検出状況撮影。S K 19、S K 20 土層断面撮影。北端部において、かまどらしきものとその近くのピットから繩文土器が多く出土する。まずは近現代の遺構を調査後に取り組みたい。

6月19日、20日 雨のため現場作業休止。

6月23日 1 B 区中央北区清掃を行い、古代遺構の検出を行う。ピットが主であるので、掘立柱建物を想定し半截していくようにする。北端部の樹木の支えを外し、土を掘削する。S K 3 集石、平面、断面図を実測する。S K 3 集石平面図、断面図実測、撮影。2 層遺構検出状況撮影。1 C 区 S I 6 かまど、S B 16、S K 54 を完掘し写真撮影、平面図実測。S K 53 を掘り下げ断面撮影、実測、完掘、完掘状況撮影、平面図実測。S K 52、S K 59、S K 60 完掘、撮影、平面図作成。S K 52 下面から土坑を検出する。S K 57、S K 61 完掘。S P 381～S P 387 半截し土層観察。

6月24日 1 C 区 S P 381～S P 387 清掃後土層断面を撮影し、断面図実測、完掘し平面図を作成する。S K 62～S K 65 検出状況撮影後半截し、土層断面撮影、実測し、完掘、平面図を作成する。

6月25日 1 B 区中央南部の1層完掘状況を撮影するため水抜きを行っていたが、10時以降本降りになったため、作業を切り替え、室内での遺物整理等

の作業を行う。

6月26日 1 B 区中央南部清掃し、1 層完掘状況撮影。北部掘り下げ、清掃。S K 3 は集石の下の埋土は薄く、地山との境に鉄分沈着が見られる。横が擾乱のため、遺物の混入があるかもしれない。集石の中にコンクリートがあったため、新しいものと考えられる。S K 25 断面、中央北部調査区断面実測。南中央部1層完掘状況、S B 3 K 1～K 3 (集石) 検出状況撮影。1 C 区 S K 62 土層断面写真撮影後、断面ベルトを残し土器を検出していく。S K 62、S K 64、S K 65 は單一層のため略図を取り、後から復元して断面図を作成することとする。S K 66、S K 52 土層断面図に S K 66 を追記した後、半截。土層断面写真撮影。S P 381～S P 387 は土層断面実測終了。S I 6 かまど、S K 62 土器溜り、S K 66 発掘。S K 52 南北土層追記。S P 381～S P 387 土層断面、S I 6 実測。

6月27日 1 B 区北部清掃を行い、1 層遺構完掘状況を撮影する。S K 26、S K 27、S D 2 等、急いで断面の図面等を仕上げることになった。南端部集石、北中央部壁断面の土層注記、S K 26、S K 27、S D 2 発掘。北中央部東側は竪穴建物が調査区外に広がるため、1 A 区まで拡張することとなった。そのため、何処まで広げのかを把握するため、トレチを入れる。1 C 区 S P 381～383、S P 385～387 を完掘し、撮影する。S P 384 を掘り上げ、須恵器出土状況写真を撮影、実測、完掘を行う。S K 66 土層断面図を作成後、完掘及び写真撮影。S P 388～S P 391 半截及び土層断面観察を行う。S P 388、S P 389 は黒褐色土の單層。S P 390 は2層で上層は黒褐色土、下層は暗褐色土である。

6月30日 1 B 区南中央部から南部の壁土層断面観察。北中央部東拡張のためのトレチ掘削。S B 3 K 1～K 3 実測。1 C 区 S P 388～S P 391 土層断面撮影後、断面図を取り完掘、撮影を行う。S P 392～S P 397 半截後土層観察、撮影。S P 395 下面より土器出土。断面にかかっているため、掘り下げを行いさらに検出をかける。

7月1日 1 B 区中央南区～南区、壁土層断面観察、実測。S B 3 K 1～K 3 (基礎集石) 実測。中央南

区～南区土層断面撮影。北中央部東側を上層から掘削していくと上層から集石が出土する。南中央部の集石と直線状に並ぶため同一の建物基礎と考えられる。1C区 S P 392～S P 397 断面撮影後、土層断面図作成。完掘途中。S X 9 内検出ピットが柱穴である可能性あり。

7月4日 1B区北中央部掘り下げ。1層上面を検出し擾乱層。1層と2層の遺構が見えてきた。1C区 S P 392、S P 394、S P 396、S P 397、S P 399 完掘、撮影。S P 395 遺物出土状況、S P 398 土層断面、S X 9 完掘状況撮影。

7月7日 1B区南東拡張部を掘り下げるとレベル15.5m付近に集石が出土する。S B 1、S B 2との関連を考える。S K 31は瓦が入っていて上面が平坦にならないため建物基礎の集石とは考えにくい。擾乱として取り扱う。S B 4 K 1～K 3 平面、S B 3 K 1～K 2 摂方断面実測。1C区 S X 8 P 4、S K 70、S P 402、S P 403 発掘、完掘状況撮影。S P 380、S P 402、S P 403、S P 405、S P 406、S P 407、S P 408、S X 8 P 4、S X 8 P 6、S X 8 P 7、S K 70、S K 71 土層断面撮影。

7月8日 1B区南中央部集石をきれいにして出土状況を撮影。先行して1層を下げていたため集石の摂方跡が分からなくなってしまった。しかし、掘り込んだ形跡は検出時もはっきり分からなかった。南部拡張部井戸側は擾乱が広がる。その上にモルタル、瓦片が入る集石があるため、かなり新しい時期のものではないかと思われる。1C区ピットを1つずつ完掘させながら、手の空いている作業員で最終的な遺構確認のため調査区全体を精査する。

7月9日 1B区南部東側近現代遺構検出。土坑、ピットが検出される。下には2層の遺構が多くある。南中央部1層掘り下げ。S B 3 K 1～K 3、S B 4 K 1～K 2、S K 28、29 完掘。南区集石実測。S K 28、S K 29 断面実測。1C区 S P 380、S P 413 土層断面図、土器出土状況をとりながら、完掘写真撮影に向け清掃を開始。清掃中に石包丁のような石器を検出（遺構に伴うものではない）。清掃終了後、昼休み中に調査区南西側より完掘状況撮影。午後からは調査区北西壁、土層断面図作成のための

準備及び遺構個別の完掘写真撮影。

7月10日 1B区南側の飛び地部を掘り下げる。層序は上から1：バラス、2：砂層、かなり綿まっている、3：砂層（2より柔らかい）、4：暗褐色土。砂質が強く乾いてすぐにぼろぼろになっていく、5：2層に相当する層、6：3層に相当する層、であり、他の調査区と異なる。2からは土師器、磁器が出土、3からは磁器ではなく、土師器中心となってくる。北中央部の歴史的埋里の埋土の掘削を行う。1C区北西壁土層断面を撮影し実測を行う。

7月11日 1B区南部東側拡張部の掘り下げと南中央部東側拡張部の掘り下げを行う。それとともに南中央部の清掃を行い、S B 4、S B 5 の検出を行う。

7月14日 1B区南部東側拡張部掘り下げ。S B 1 追加分 K 7～K 10 を完掘する。2層で2条の溝を検出する。1A区道路状遺構 S X 7 の端部の可能性が考えられる。中央部の東側を拡張し、近現代の層位で検出を行う。コンクリート基礎や石が出土する。

7月15日 1B区南部東側1層構造 S B 4 K 4 調査区壁に掛かっている場所を掘削。石が集まっていないため S B の基礎が分かりにくかったが、石の無い部分は擾乱が入っている（煙の土と思われる）ため、煙を作る際、そこだけ石が外されているのではと思われる。煙も2層程あり、上部の新しい層の煙で壊している。南部東側拡張部では溝内から硬化面が検出される。南端部では3層近くまで掘削。古代遺構検出する。

7月16日 1B区南区から掘立柱建物1軒検出す。中央北部東側拡張部、S B 4 K 4 と S B 8（コンクリート基礎）は周りの掘方が明確で無いため穴を掘り、石を入れ、土を入れ（コンクリートを流す）などをしていると思われる。

7月17日 1B区北部、中央北部を清掃、ピットを検出し、北部から掘立柱建物 S B 9、中央北区から掘立柱建物 S B 11、S B 12 を検出する。S B 4 K 4 完掘する。

7月18日 1B区中央北部検出のピットを3cm程掘り下げる。S B 11 のピットを半截するが、途中

から雨が降り仕上がりなかった。

7月22日 1B区SB11、SB12のピットを半蔵するが、深さが浅いものも多い。中央南部の土坑も埋土が砂岩ブロックのものが多くある。

7月23日 1B区中央北部検出ピットを3cm程掘り下げる。土坑を半蔵する。中央南部、南部の掘立柱建物を検出していくがうまく並ばないものが多い。

7月30日 1B区S11にベルトを東西に入れ、断面を確認する。北東側にブロックが少なく埋土が1層に近い土坑が出土した。上からの遺構と思われる。ピットも南側を半蔵する。

7月31日 1B区ピットを半蔵し、柱痕があるものは、撮影、実測、土層注記を行なう。無いものは略図と土層注記を行なう。傾向として、柱痕があるものは黒褐色が濃いピットに多いようである。

8月1日 夏休み体験発掘準備。

8月2日 午前中夏休み体験発掘を行う。多くの方に来ていただいた。

8月6日 1B区掘立柱建物とならなかつたピット群の半蔵と断面のラインを入れ、撮影する。その後掘削作業と並行して断面図の作成を行つた。

8月7日、11日 1B区掘立柱建物に関わるものと柱痕が認められるピットを実測、土層注記を行う。そして、柱痕がない、掘立柱建物と関連がないと思われるピットを台帳に記入していく。

8月18日 1B区ピットの完掘を進める。中央南部のS11では、埋土中に1層土が残っている。S11を壊す遺構があると考えられ、現時点では1C区からの溝の継ぎがここまで延びてきているのではないかと思われる。

8月20日 1B区ピット半蔵、完掘を進める。SB9はピットの並びが垂直にならないため、認定するのが難しい。

8月21日 1B区ピット半蔵、完掘を進める。S11では貼床面で周溝が一部認められる。

8月22日 1B区ピット半蔵、完掘を進める。SB15P1～P8の撮影。SK15、SK16半蔵、断面実測。

8月25日 1B区中央南部を清掃しSX3のライ

ンを引き直す。SD5を壊している遺構を半蔵する。3層上面で硬化面を検出する。トレンチを掘り、どの遺構にかかわるものか調べるようにする。SD3土層断面、SB5土層断面、SB15P8遺物出土状況実測。

8月26日 1B区SB15完掘状況を撮影する。SX3西端に硬化面を検出する。堅穴建物の可能性を考えたが、あまりに大きくなるために、2年前のデータと比較し、レベル、方向等がほぼ同じだったので、1A区で出土した道路状遺構SX7の一部ではないかと考える。

8月27日 1B区SB6、SK43土層断面実測。SB6完掘状況、SX2（道路状遺構）硬化面出土状況、SK43土層断面、S13P1、P2断面、SP347、SK41土層断面撮影。先日の硬化面は1A区で出土した道路状遺構の一部であること、また南端の先の調査区に出土した硬化面も1A区において出土した道路状遺構の一部であることを、1A区担当者に確認をとる。

8月28日 1B区S11、S12トレンチ、SX2、SX3、SK43内遺構掘削。SB6土層断面、空断面、S13P1、P2実測。S11生活面と検出状況。SB完掘状況、SX3硬化面範囲、SK43完掘状況撮影。SX3土層断面にブロック状堆積の箇所が認められる。一度埋めて、それから幅の狭い溝を掘ったと思われる。

8月29日 1B区SX2で硬化面を検出する。1A区の調査の際には硬化面が4面ほどあったらしいが、断面を見る限り上部と砂ブロックの上の粘土っぽい白い面の2面しか分からない。S12はかまどトレンチ付近に土師器の器が残っていた。雨のため、トレンチに断面ラインは引けなかった。SK44は半蔵したが、黄褐色土（3層上）がブロック状のため下まで掘りすぎてしまう。S14（仮）は低まりのような気もするが、堅穴建物の調査の手順を踏んでいく。

9月1日 1B区S14はかまど付きの建物であるが、かまどからの煙道が短いのかS14ラインから出でていない。SX2は硬化面を探しながら下げていくが、硬化面が出土しない。SX4、SX5はどちら

らも一辺が1.5mくらいで、S X 5には硬化面が残っている。しかし埋土の残りは5cm程度とあまり良くない。S X 4は埋土が20cm程残っているが硬化面は見られない。

9月2日 1B区中央北部の清掃をかけながら掘り残しがないかを確認し、S B 11の完掘状況撮影を行う。高木補佐来跡、S I 4は煙道が短いタイプのかまどではないかとのことで、2軒は重なっていないとのことであった。また、古代の烟の場合には何度か耕すので、3層に溝みたいには残らない。遺物も陶器器の破片が出ていたことから、近現代の烟かもしれない教えていただいた。

9月3日 1B区S X 3はS X 2とは異なり硬化面が2層にわたって出土する。S I 2のかまどを調査する。縦断面はかまどの煙道付近と焼土範囲が搅乱に壊され、また土器破片が残っているためそれなかった。

9月4日 1B区S X 3を5cm程掘り下げた面で硬化面が出土する。範囲はS X 3ほぼ長軸にわたって検出できた。S I 4かまどにトレチを入れ断面を確認する。粘土塊、焼成面等は分からなかった。層ごとに外していく中で確認していく。

9月5日 1B区S I 4かまど、土層ごとに掘削していく。砂岩塊が検出できたが崩れのよう原位置を保っていない。S I 1内遺構、S X 3硬化面(4、5)掘削。S X 4、S X 5土層断面実測。S X 2硬化面(4、5)、S I 4かまど残存状況撮影。

9月8日 1B区S I 4ではベルト横トレチを掘り土層確認すると、硬化面が2面確認できる。S X 4の掘方は深く、埋土中に硬化面が確認できる。S X 5は浅く、砂岩上に少し硬化した部分が付く。S I 2はかまど崩れ時に入った遺物が出土する。S X 3硬化面は6面で終了。下にはニガブロックが入る。(硬化面ではない。)

9月9日 1B区S I 1かまど、S I 2かまど、S X 2、S X 3整地層掘削。S I 4土層断面実測。S I 2土器出土状況、S X 2、S X 3整地状況撮影。S I 2かまど土器点上げをする。

9月10日 1B区S I 4はベルト断面より、機能面1の立ち上がりと機能面2の立ち上がりのずれが

あることから、S I 4機能面1はS I 4機能面2の建物とは別と考えられる。かまどは袖石のレベルより機能面1に伴うものではないかと考えられる。S I 1かまどは焼土がはっきり出ているが、他のところが搅乱で壊されているために今一つ想定がうまくいかない。

9月11日 1B区S I 4の機能面2の埋土からS I 5とする。

9月12日 1B区S I 4、S I 5完掘する。S I 1、S I 2かまど残存状況を実測。S I 2かまどは袖部などの残りがよく、プランの想定はできやすい。S I 1かまどは今のところ袖の一部、焼成部の一部しか残っていない状況のため想定ラインが引けない。

9月16日 1B区S I 1、S I 2かまど、S K 13、S K 50完掘。

9月17日 1B区調査終了。

9月20日 空撮のための清掃。

9月21日 空撮。

9月22日 完掘状況写真撮影。その後3層掘り下げを行い、縄文の遺構がないか検出をかける。ピット、土坑は検出できたが、現状では縄文と思われる遺構は検出されていない。縄文土器が集中して検出されたところもあるが遺構に絡んだものではない。

9月24日 先日の掘り下げの際に検出した土坑及びピットの調査を行う。

9月25日 調査区土層断面図を作成する。

9月26日 21日の代休。

9月29、30日 台風のため現場作業休止。

10月1日～3日 調査区土層断面図の作成、遺構の実測、土のう崩しを行う。

10月6日 調査区土層断面図の作成。土のう崩し等、埋戻しができる状態にする。本日で1B区、1C区の調査を終了する。

平成21年度(2009年)

【2C区調査】

4月20日 7月17日の国交省との現場協議から2C区よりも先に2D区(約150m)の煙地だった所(現工事用道路)を調査してほしいとのこと。今

日から表土を剥ぐ。上村、横田が担当。表土から50～60cmのところでローム層らしき土があるが、新屋敷で見える1～1、1～2層がなくなっている。

いきなり5層、6層が出てきて、いくら掘っても砂質土が続く感がある。南側の一部が少し残ってる。

4月21日 今日から作業員を入れて仕事を行っていく。しかも機材の搬入も合わせて実施する。表土剥ぎを水上が担当。機材関係は横田、宮本が担当。

表土剥ぎも2C区に移動。機材搬入も早前に終わらせて午後から調査区の2D区を作業員にきれいにしでもらいながら土のう作りを実施する。

4月22日 朝から表土剥ぎ及び堆土移動。作業員は2D区の清掃及び写真撮影準備。撮影後2C区の壁切り、土のう作り。井戸の跡らしきところに瓦が多く埋められていた。また、2C区は撹乱部が多く広がっており意図的に埋められた様子。近現代の敷石らしき丸石も6箇所ほど見える。熊本市教育委員会の方は白川小前までは屋敷跡は確認できるがこの辺りは畠地だったので、昭和時代などの極めて新しいものではないかとのこと。2D区の完掘全景写真撮影。

4月23日 写真撮影前清掃。撹乱掘り。トレーンチ掘り。調査区は撹乱の範囲が比較的広く北西(白川)側は狭くなっている。

4月24日 朝から南側より清掃して昼過ぎに写真撮影。全体と近代敷石(SB11)の検出状況を写真に撮る。その後、調査区東側にトレーンチ(約50cm)を掘る。

4月27日 今日から図面作成ができる作業員が来られ、P1～P5までの集石を検出した後に平面図に入ろうとしたが途中で雨が降る。SB11集石状況も近代だと思うが、P1～P5を時計回りに決め、写真と図面に残す。P1とP2は石の数も多く、まだ2層くらい下に残っている様子。東側トレーンチはトレーンチのところで道下の撹乱となっているため、壁際では分かりにくく調査区側では砂岩や地山の土が残っているようである。

4月28日 SB11集石(P1～P5)の平面図に着手。その間、トレーンチ掘りで土層の様子を見る。撹乱が大部分をしめる。

4月30日 SB11集石(P1～P5)は半截の進度が違うので、清掃後に写真撮影に入るようにした。その後、P2から断面図に着手。

5月1日 白川河川側の撹乱掘りを実施。SB11集石(P1～P5)の土層断面図を完成させる。乾燥がはげしかったため水をまく。

5月7日 2C区は半分以上が撹乱であるため、連日撹乱掘りが続く。

5月8日 朝から写真撮影前清掃を実施。昼過ぎから写真撮影の準備を行う。木があるためにベストショットがなかなかつかれない。調査区全景とSB11の完掘状況を撮影。

5月12日 新たに11名の作業員を迎えて作業開始。残りの良いところの下げに入ったが撹乱が多く生きている部分がどの範囲なのかはっきりしないため、途中で清掃を入れ、線を引き下げに入る。撹乱部分が思った以上に多い。撹乱の下げを行ってから全体的に遺構を見るしかなさそうである。

5月13日 3層を検出すために撹乱を除去する作業を行っているが、撹乱が切り合っていて、なかなか地山の土が残っていない様子。

5月14日 撹乱及び1～1、1～3層の除去した結果、残りの部分にピットらしき遺構が数点見つかる。掘立柱建物跡の柱穴でいけそうなので半截してもらう。午後から半分の作業員でプレハブ周辺の除草作業を行う。

5月15日 SB12、SK12、調査区(古代～中世)の実測。SB12、SK12の土層断面の写真撮影。

5月18日 朝から表土剥ぎのため重機等が入る。午前中にSB12、SK12の完掘状況の写真撮影。午後から8区に移動。2C区調査を終了する。

平成22年度(2010年)

【1D区調査】

8月4日 SD15の壁を確認して、完掘写真に向けて清掃。その後、図面、SD16へ掘り下げる。SD16の底は堅い盤になっているがサイドはわかりにくい。

8月5日 朝からSD16掘削。底が見えていたと

ころから、拡張して両側面を出す作業を行う。午後、木崎補佐が来跡され、溝の土について助言され、現場を見て帰られる。

8月17日 S D 16 の最下層から土器が出土。固い層のため検出しにくいので、時間がかかりそうである。どのくらいあるのか、明日また掘り下げてみて見ないといけない。

8月18日 朝から S D 16 の掘削。昨日土器が出てきたので、固い最下層部の土を追ってバチグワで下げてみる。小石が集中する部分があり、人為的に敷いた石なのかどうかトレーナーを入れて確認する必要がある。東側トレーナーではすぐに黒砂が出る。白川側は固い層が続いているため、黒砂までは抜いていない。流路として小石が流れ込んだものとも考えられるが、まだ全部を出し切っていないのでも言えない。

8月19日 朝から S D 16 の底部掘削及び完掘に向けて作業を実施。

8月20日 朝から 1 D 区は S D 16 土層断面を取るために清掃。

8月23日 明日の完掘作業に向けて清掃を実施する。

8月24日 1 D 区調査を終了する。

平成24年度（2012年）

【2 D 区調査】

6月6日 午前中に亀田事が来跡。2 D 区は当初遺跡もなく削平されると予定していたが、トレーナー掘りの土層確認からも近世の溝、ピット等が確認された。3 層上面で遺構検出して密度がどのくらいあるのかをはっきりする必要がある。

6月7日 2 区確認調査で表土剥ぎした部分の清掃及び、0 層掘削を実施。その後、搅乱部分を除去した。3 層上面での遺構の密度を確認する必要がある。

6月26日 2 D 区の表土剥ぎが進んだため、午後から作業員に入つてもらい壁切りや土のう作りを実施。清掃してきれいにしてもらった。堅穴建物跡が2 件、溝が1 条検出できた。

6月27日 雨天のため現場作業休止。

6月28日 表土剥ぎ2 日目。重機に危険がない場所から清掃して搅乱のラインを引く。10 時過ぎに宮崎事が来跡。遺構の様子を確認後、アドバイスをもらう。

6月29日 昨日に引き続き搅乱を掘削した。調査区北西の住居の切り合い箇所を清掃し再検出したところ、堅穴建物が5 軒切り合ってて、かまと付が2 軒ありそうである。

7月3日 雨天のため現場作業休止。

7月4日 雨天のため現場作業休止。

7月5日 朝から水抜きし、写真前清掃を実施。2 時半ごろから S I 3 検出状況、堅穴建物跡検出状況、調査区全体検出状況、S D 4 検出状況の撮影。

7月6日 雨天のため現場作業休止。

7月9日 朝からブルーシートに溜まった水をぬいでトレーナー掘りを実施。S I 3 のトレーナー設置掘りをはじめ。S D 4 の土層断面も兼ねてトレーナーを掘ったが上方2 層は瓦が埋めてあり、埋土の土層としては不適切とも考える。S D 4 に含まれる土器は古代が多いため、古代の溝の可能性が高い。

7月10日 S I 3 の土層断面の写真撮影前清掃や S D 4 の掘り下げを実施。S D 4 は1 ~ 2 層、3 ~ 4 層で遺物を一括した。調査区土層断面で S D 4 の土層断面を兼ねようとしていたが瓦入りの搅乱があるため、中央部分にもう一つ土層断面をつくる予定。写真是調査区北から3 カットを中判で撮影、S I 3 は土層断面が影で見えにくくなっている。

7月11日 雨天のため現場作業休止。

7月12日 雨天のため現場作業休止。記録的な雨で白川の水が氾濫する勢い。現場事務所から機材等を車に乗せて資料室に避難。その後、白川水域に避難勧告が出る。

7月13日 雨天のため現場作業休止。

7月17日 朝から梅雨明けをしたかのような暑さ。遺構配置図を書くための清掃。遺構ラインをはっきり表す。S D 4 は中央にトレーナーを入れて深さを確認。掘り下げを実施。

7月18日 S D 4 土層断面の写真撮影のための清掃を実施。その後、壁出しを行う。7月23日から

の追加作業員9名が来られ確認書や作業説明を受ける。

7月19日 昨日に続きSD4の掘り下げを実施。ベルトの土層断面も撮影、図面が終わっていたので崩す。掘り足りない部分がまだ多かったので時間がかかった。白川から市街地へ流れている溝だと考えられる。

7月20日 雨天のため現場作業休止。シートを外していたが、土日をはさむためシートをかけた。

7月23日 昨夜の雨のため、シートの水抜きから開始。全体清掃を実施して写真撮影の準備を行った。2時ごろSD4完掘状況を撮影。擾乱抜きを実施する。SD4は古代の住居を切っており、検出時の埋土も近世の土だったので、近世の溝として掘り進め。しかし掘り進めるにつれ、古代の遺物しか出土しないので、溝が使用されていた時代は古代と思われる。その後堆積していく、最後に埋土1、2層がたまつたのは中世・近世と思われる。また、当初は、溝は川への切り通しの溝と思われていたが、底面のレベルが川側の方が高いため、逆に川から水を引くための溝として使っていたのではないかと考える。発掘調査時に溝の壁出しをしていると、途切れ途切れではあるが側溝を検出。

7月24日 S15、S16、S17は切り合っているため横断するようにトレンチを入れる。S15にはかまどが確認でき、煙道や硬化面も残っている。S15には硬化面を切った土坑があり使用面で検出されるため、何らかの住居に伴って使っていたものと思われる。

7月25日 村崎係長来跡。竪穴建物跡を8人程度で掘削。晴天が続き、乾燥が激しく砂岩が白くなるので、夕方は水をまかないといけない。住居は砂岩があるので掘方が上下することがあるが、硬化面が残っているのでしっかりとした住居である。

7月26日 S15、S16掘削。S15かまど土層断面、S13、S16土層断面測量。S15かまど土層断面の写真撮影。

7月27日 連日の快晴で乾燥が激しく、S15のかまどの完掘状況を写真に撮る予定だったが、砂岩が白くなるので30日の朝から撮る予定で水をまい

てシートで養生する。

7月30日 S13完掘状況、S15完掘状況、S15硬化面範囲写真撮影。

7月31日 S16(P1~P4)完掘。S16(P5~P6)半截。S17、S18掘削。S15、S16測量。S16完掘状況写真撮影。

8月1日 SK14、SK15、SK16、SK17完掘。SK14~17土層断面、SK14~17完掘状況、S17土層断面、S17硬化面範囲写真撮影。

8月2日 SK18~SK22完掘。SK18~SK22平面、土層断面測量。SK18~SK22土層断面写真撮影。

8月3日 朝から全体清掃。調査区北側完掘状況、S17完掘状況、S18完掘状況、井戸1出土状況、井戸2出土状況、SK19~SK21完掘状況写真撮影。

8月6日 朝から重機で2D区押張部分の掘削(表土剥ぎ)。川側は以前やった部分がはっきりわかる様子。

8月8日 朝から重機で表土剥ぎの続きを実施。矢板より川側はほぼ擾乱でなくなっているが、家側は包含層が残っている。

8月9日 雨天のため現場作業休止。

8月10日 環境整備。

8月16日 摆乱除去。久しぶりの作業で気温も高くなつたことから、かなりバテバテの一になった。遮光ネットを張つて作業をしたので少しは違つた。2D区の擾乱はほとんど掘り終わつた。前調査区との境も表われたが、一部石垣が見える。石垣をどのように扱つたのか図面で確認したい。

8月17日 包含層が残っている部分を清掃してシートをかける。

8月18日 現場公開。子ども5名を含めて24名が参加。暑さが予想されたので遮光ネットを張つて体験発掘。勾玉つくりを実施。

8月23日 割り付け図作成。

8月24日 割り付け図作成。

8月25日 割り付け図作成。

9月3日 包含層掘削。

9月5日 朝から清掃し遺構を検出した。

9月6日 昨日検出した遺構の半截を行った。堅穴建物跡（S I 8）にトレンチを入れて確認したら、検出当初は 3.5m × 3.5m の方形の住居跡と思っていたが 3m × 3m の方形の北東かまどの住居跡だと分かった。

9月7日 SK 23～SK 25 完掘。S I 8 ベルトはずし。ピット完掘。写真撮影。

9月10日 S P、SK 23、SK 24、SK 26、SK 27、SK 28、SK 29 半截。

9月11日 昨日半截した遺構の写真撮影。土層断面図作成を行い半截の遺構類の完掘を行った。

9月12日 割り付け図作成。

9月13日 割り付け図、S I 8 個別図作成。

9月19日 SK 22～27、SK 29 完掘状況撮影。SK 31、SK 32 土層断面撮影。

9月20日 割り付け図、S I 8 かまど個別図作成。

9月21日 SK 33 半截。SK 30 完掘。割り付け図、S I 8 かまど個別図作成。SK 30 土層断面、S I 8 かまど残存状況撮影。

9月24日 割り付け図、S I 8 かまど土層断面図作成。SK 30 土層断面、S I 8 かまど土層断面、SK 28 遺物出土状況、SK 30 完掘状況撮影。

9月25日 S I 8 かまど掘削、SK 33 完掘。S I 8 かまど個別図、SK 28 遺物出土割り付け図、SK 34 土層断面図作成。

9月26日 SK 35 半截、S I 8 ピット類半截。調査区断面図、S I 8 かまど個別図、割り付け図作成。全景、SK 31～34 完掘状況、S I 8 完掘状況撮影。全体清掃をし、2D区調査を終了する。

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

新屋敷遺跡は、熊本市のほぼ中央部に位置する。東には阿蘇外輪山を望み、市内北部には立田山、北西部は金峰山から連なる京町台地に挟まれ、三方を山に囲まれた半盆地的な地形である熊本平野北側の白川下流左岸に位置する。熊本市の北部から東部にかけ台地が分布する。この台地は、火碎流台地と河岸段丘からなる。火碎流台地は、ほとんどが約9万年前に阿蘇火山の大噴火の際発生した火碎流による堆積物（Ash - 4火碎流堆積物）である。これを取り囲むように分布するのが、河岸段丘の堆積物である。河岸段丘の堆積物は、託麻砂礫層と保田窪砂礫層に区分できる。託麻砂礫層は、約9万年前から3万年前の間に形成され、託麻台地一帯に分布し中心街の地下にも広く伏在している。また、保田窪砂礫層は、約2万5千年前から6千3百年前に形成され、託麻台地を縁取るように龍田付近から木山付近まで分布している。さらに、熊市の中央を流れる白川地帯には、海拔20m以下の低地（沖積平野）が分布している。この低地には自然堤防と後背湿地が発達し、自然堤防は、源流路沿いのほか、離れたところ（①平田町から川尻方面、②南熊本から田迎方面、③八王子から画園町、④江津から下江津）でも見ることができる。このことは白川が現在の流路をとる以前に、過去に多方面に流れていることを示唆している。これらの自然堤防の多くは、現在、市街化して平坦な低地に見えるが、その中には集落等を形成するのに都合のよい自然堤防が伏在していることを意識しなければならない。しかし、これらの自然堤防の形成時期や白川の変遷等は十分解明されていない。

白川は、阿蘇カルデラを源にし、南阿蘇村立野において黒川と合流し、熊市に向かって小刻みに蛇行を繰り返し、その両岸に河岸段丘を作っていく。子飼橋を過ぎるとそこからその蛇行は緩やかになり、その両岸はほぼ平坦な地形へと変わっていく。白川は豪雨時には上流の土砂を削り、多量の泥流となって氾濫し、河川流域に大量の泥土をもたらし、自然堤防と後背湿地を形成することもたびたびであった。その堆積の繰り返しで熊本平野の白川下流域は形成されている。

今回報告する調査区は、新屋敷遺跡の南西端に位置し、熊本市電が通っている大甲橋より上流の白川左岸線地帯に隣接、またはその延長線上に位置している。

第2節 歴史的環境

新屋敷遺跡は、南東の江津湖にかけては大江遺跡群、北東は大江白川遺跡と接する。特に大江遺跡群は国府、国分寺、国分尼寺などの中央からの律令支配の広がりによる造営とそれに伴う巨大な周辺集落の様相を呈す。白川下流域の左岸から、江津湖にかけては多くの遺跡が分布しているが、いずれの遺跡も奈良時代から平安時代の遺構・遺物が多く出土し、元来はこの地域一帯が当時の大集落であったと考えられる。新屋敷遺跡と大江遺跡群、大江白川遺跡など現在別々の遺跡として取り扱っているが、これは現在の町名による区分に過ぎない。周辺の遺跡について、時代毎に見ていく。

【旧石器時代】

龍田陣内遺跡、新南部遺跡群から石器が出土している。

【縄文時代】

早期は押型文、撚糸文、窓ノ神式土器などが、新屋敷遺跡、大江遺跡群、黒髪町遺跡群、カブト山遺跡、大江白川遺跡などから出土している。新屋敷遺跡では、遺跡範囲東端付近において、押型文土器を伴う集石遺構が検出されている。後期の資料では、渡鹿貝塚（渡鹿遺跡群）、北久根山遺跡（新南部遺跡群）が有名である。

新屋敷遺跡では、遺跡範囲南西付近で辛川式土器が出土している。その他の遺跡では後期末から晩期前半の土器が主体で、新屋敷遺跡、大江遺跡群、大江白川遺跡などに多い。

【弥生時代】

前期の資料は、江津湖遺跡群、新屋敷遺跡、黒髪町遺跡群で検出されている。新屋敷遺跡では、遺跡範囲北東側の調査区において前期の濠が検出されている。中期の資料は大江白川遺跡、黒髪町遺跡、新南部遺跡群、神水遺跡などで集落、表棺墓群が形成される。

【古墳時代】

立田山山麓に横穴群が形成され、辻遺跡、新南部遺跡群では集落が営まれている。6世紀後半になると、本庄遺跡、大江遺跡群南西部にも集落が形成され始めている。新屋敷遺跡では、中央付近の範囲において、6世紀末～7世紀代の竪穴建物群を検出している。

【歴史時代】

奈良時代から平安時代にかけては、託麻郡の政治的中心である託麻郡衙が大江遺跡群内の渡鹿A遺跡、託麻郡寺が渡鹿B遺跡に存在したと推定されている。また、太宰府から肥後國府へと延びる西海道駅路も大江遺跡群内を通っている。これらの公的施設の周囲には大規模な溝や道路が意識して配置された。大江遺跡群の北西側に接する新屋敷遺跡でも大規模な溝が多数検出されている。それとともに集落域も大きく拡大し7世紀前半から9世紀前半にかけて肥後国内におけるもっとも大規模な集落が形成されている。特に8世紀末に近づくと建物の数は急増する。新屋敷遺跡でもこの期の竪穴建物が多数検出される。9世紀中頃になると、大江遺跡群周辺では集落規模が縮小し、道路、溝等が維持管理されずに埋没していく。

その後、長らくはこの地帯がどのような土地利用がなされていたか不明な点が多い。

江戸時代、熊本城が築城され、幕藩体制の中で新屋敷一帯は農村落が形成される。江戸時代末、白川に安巳橋が架けられると新屋敷には武家屋敷が形成される。国学者中島広足の居地も置かれている。明治13年に命名された町名も、新しく設置されたことから名づけられている。そして現在まで閑静な住宅街として発展しているところである。

新屋敷遺跡は、平成25年3月末現在、熊本市教育委員会事務局生涯学習部文化財課（当時、平成23年度より熊本市観光文化交流局文化スポーツ交流部文化振興課）で計56回、平成25年3月末現在、熊本県文化課で計26調査区の発掘調査が実施されている。熊本市の調査の大部分は個人住宅の建て替え又は、共同住宅の建設に伴うもので、比較的狭い面積の調査が多い。しかしながら、遺跡の特徴を窺い知ることができる調査であり、成果を着々と積み重ねている。県の調査は白川河川改修事業に伴うものであり、古代の集落跡の様子を知ることができる。

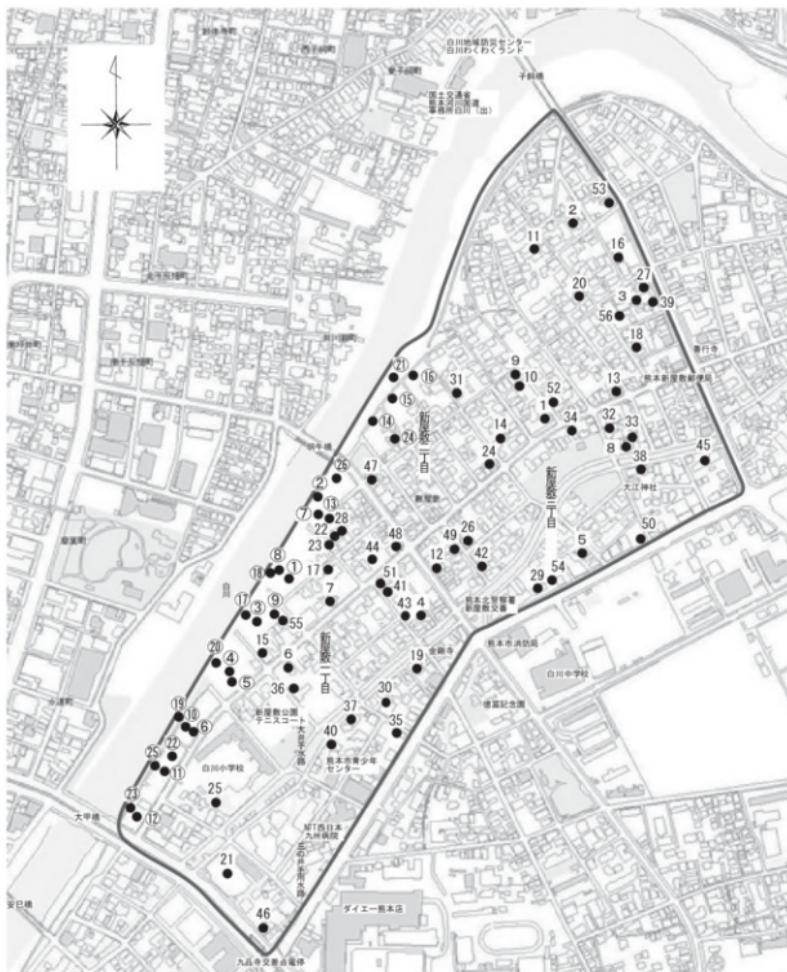


第1図 新屋敷遺跡周辺遺跡地図 (1/25000)

第1表 新屋敷遺跡周辺遺跡一覧

熊本県(43) 熊本市(20)

遺跡番号	熊本 市 地 国	遺跡名	所在地	時代	種別	指定	備考
201-225	8-32	池田山伏道跡群	池田 2丁目、清水町馬場	弥生・古墳	包蔵地	未定	石棺複式珠文鏡、長追模六式石室
201-226	8-35	水浦道跡群	清水町打越、水浦	古墳・中世	包蔵地	未定	
201-230	8-37	池田町(池田小学校)	池田町 1丁目	弥生～平安	包蔵地	未定	池田小学校遺物標基
201-231	8-38	津川一ノ谷積穴群	津川町津浦字補迫	古墳	古墳	6基以上	
201-232	8-39	一ノ谷	津川町津浦字中寺	古墳・平安	包蔵地		
201-233	8-40	西田様穴群	池田町西田字猪迫	古墳	古墳	6基以上	
201-234	8-41	舟塚	津川町津浦	縄文～中世	包蔵地		
201-235	8-42	舟塚山古墳	津川町津浦	古墳	古墳	円錐、石棺	
201-236	8-43	打跡道跡群	津川町打跡	弥生～中世	包蔵地		
201-237	8-44	打跡貝塚	津川町打跡	縄文	貝塚	北久裡山式	
201-238	8-45	原町台遺跡群	原町	弥生～中世	包蔵地		
201-239	8-46	寺原様穴群	原町	古墳	古墳	多數の横穴	
201-240	8-47	原町 2丁目遺跡	原町 2丁目	縄文～近世	包蔵地		
201-241	8-48	伝大通寺跡遺跡群	伝大通寺跡遺跡群	原町 2丁目	縄文～近世	伝大通寺跡を含む	
201-242	8-49	内坪井遺跡	内坪井前	弥生	包蔵地		
201-245	8-52	藤原中学校校庭	千葉城町	弥生～平安	包蔵地	復元群あり	
201-246	8-53	熊本城跡遺跡群	古城、吉原、千葉城町	古墳～近世	包蔵地		
201-247	8-54	熊本城跡	古城、吉原町、千葉城町	近世	城	国	国指定重要文化財、国指定特別史跡、加藤清正康長 12年
201-250	8-58 (新町 2丁目裏側遺跡)	船場町遺跡	新町 2丁目、鶴冶屋町	弥生	包蔵地	慶松群	
201-251	8-62	宇島町遺跡	宇島町	弥生・古墳	包蔵地		
201-254	8-63 (中曇人町遺跡)	古町 (旧唐人町)	唐人町、古町(ほか)	弥生～明治	包蔵地		
201-272	8-82	松崎道跡群	津川町松崎	古墳	古墳	平安	包蔵地
201-274	8-84	空園	津川町空園	縄文～中世	包蔵地		
201-275	8-85, 9-10	黒星町下立道跡群	黒星町	古墳～江戸	包蔵地		
201-276	8-86, 9-12 熊本藩主細川家墓所	細川寺細川家墓所	黒星 4丁目	江戸	寺社	国	細川家墓廟は国指定の史跡、寺跡を含む庭園は県指定
201-277	8-87, 9-17	小峰	黒星町小峰	縄文～平安	包蔵地		
201-278	8-88	黒星町道跡群	黒星町洋井	縄文～中世	包蔵地		一帯に慶松群
201-280	8-90	子供遺跡	子供町	縄文～中世	包蔵地		
201-281	8-91	大江白川遺跡	大江 1丁目	縄文～平安	包蔵地		
201-282	8-92	新屋敷遺跡	新屋敷 1丁目	古代	包蔵地		
201-283	8-93, 9-55	大江遺跡群	大江 3丁目	縄文～明治	包蔵地		
201-285	8-95	本庄 (熊大病院敷地)	本庄 2丁目	古墳～平安	包蔵地	熊本大学埋蔵文化財調査委員会	
201-290	8-100	出水市所跡	九品寺、国府、府司本町	弥生～中世	包蔵地		
201-291	番号未記載	西水前寺町跡	水前寺 1丁目	縄文～中世	包蔵地		
201-292	8-102, 9-72	郡分寺跡	出水 1丁目	縄文～中世	包蔵地		
201-293	8-103, 9-75, 13-1	大江湖遺跡群	神水町、画面町ほか	縄文～中世	包蔵地		
201-296	9-4	万古茶山	津川町万古茶山	縄文・弥生	包蔵地	県・市による多数の調査あり	
201-297	9-5	林野	粗田山林上立田	縄文	平安	夜臼式土器	
201-300	9-8	立田山山頂	黒星町	古墳	古墳		
201-301	9-9	万古山古墳	津川町万古 (通称) 茶山	古墳	古墳	横穴式石室	
201-302	9-13	立田山東中腹	黒星町	古代・中世	包蔵地		
201-303	9-14	牛畜毛山黒星地	黒星町 7丁目	縄文～平安	墓地		
201-306	9-18	牛畜毛中学校松原道跡	黒星町 5丁目	古墳	古墳		
201-307	9-19	カトト山遺跡	黒星町牛畜毛甲山	縄文	包蔵地	早期、轟毛、北久裡山、黒川、山の寺	
201-308	9-20	牛畜毛A遺跡	黒星町 6丁目	縄文	包蔵地		
201-309	9-21	牛畜毛B遺跡	黒星町 6丁目	縄文	包蔵地		
201-310	9-22	津山第2段穴群	黒星 7丁目津山	古墳	古墳	県	
201-316	9-28	宇留毛神社周辺遺跡群	黒星町 6・8丁目	古墳・中世	包蔵地	立田山南麓吉原溝 2基横穴式石室	
201-332	9-48	新南原遺跡群	熊本市新南原町	旧石器～平安	包蔵地	県北ヒバス科調査、市マシンジョン調査、田辺 組二頭査などにより、H 12.2.24範囲修正	
201-335	9-51	渡鹿遺跡群	熊本市渡鹿 5丁目	縄文・古代	包蔵地	縄文土器 (晩～既晚)、弥生土器 (中期後半) 土師器、漆器 (古: 8c ~ 8c) 陶磁器 (近世以降) H 16.4.21範囲修正	
201-336	9-52	渡鹿資源神社境内遺跡	熊本市渡鹿 6丁目	寺社	市	市指定史跡	
201-337	9-53	立塙跡	熊本市立塙 7丁目	縄文～平安	包蔵地	縄文後晚期、へら形土器、巻唇土器	
201-338	9-54	新町原西原遺跡	熊本市新町原町	縄文	集落		
201-339	9-56	御手芋遺跡	熊本市新大江 7丁目自南上	奈良・平安	包蔵地		
201-340	9-57	等山道跡群	熊本市等山 1丁目	縄文～平安	包蔵地	布目瓦、管窓、阿萬、竹崎	
201-347	9-107, 9-64	北水前寺遺跡	熊本市水前寺 3丁目	奈良・平安	包蔵地	H 21.7.22範囲修正	
201-348	9-66 水前寺廻寺 (園)	水前寺廻寺跡	熊本市水前寺公園	奈良・平安	包蔵地		
201-350	9-68	熊本寺成趣園	熊本市水前寺公園	江戸	庭園	国指定史跡及び名勝、細川忠利、山水式	
201-352	9-70	舞山奥寺	熊本市水前寺公園	奈良・平安	寺社	H 21.7.22範囲修正	
201-355	9-74	神水遺跡	熊本市神水本町・出水 2丁目	縄文	包蔵地	県・市調査、報告書あり	
201-469	9-108	池田跡	池田町宿泊	中世	城		
201-481	9-106	お葉園跡	葉園町	古墳	包蔵地	藩主貢開園	
201-556	9-111	水道町遺跡	熊本市水道町	古代	包蔵地	H 20.10.1新規記載 (白川河川改修工事に伴う調査結果により)	



第2図の調査地点番号は第2表の番号に対応する。

なお、

・数字は熊本市教育委員会文化財課による調査地点

・丸囲み数字は熊本市教育委員会文化課による調査地点を示す。

調査箇所は、平成25年3月末現在であわせて82地点である。

第2図 新屋敷遺跡内調査地点図（縮尺任意）

第2表 新屋敷遺跡内調査地一覧

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
1	第1次調査区	1988	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居など	土師器・須恵器	1
2	第2次調査区	1989	熊本市教育委員会	弥生前期 奈良・平安	溝(弥生)・竪穴住居道路など	弥生土器・石器 土師器・須恵器	3
3	第3次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑・溝道路	土師器・須恵器 縄文土器	9
4	第4次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安 江戸	竪穴住居・土坑 水路など	土師器・須恵器 陶磁器・石器など	1
5	第5次調査区	1990	熊本市教育委員会	奈良・平安	水田・溝	土師器・須恵器 白磁 青磁・縄文陶器など	9
6	第6次調査区	1991	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴住居・土坑・溝	土師器・須恵器 白磁	9
7	第7次調査区	1994	熊本市教育委員会		竪穴住居・土坑 柱穴群	土師器・須恵器 縄文陶器片・青磁 軒丸瓦など	10
8	第8次調査区	1996	熊本市教育委員会		柱穴		10
9	第9次調査区	1996	熊本市教育委員会		竪穴住居・溝	土師器・須恵器	10
10	第10次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安 中世	竪穴住居・溝	土師器・須恵器・青磁片 鉄製品・石鏡	10
11	第11次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居 掘立柱建物	土師器・須恵器 獸足鏡・墨書き土器 へら書き土器	2
12	第12次調査区	1996	熊本市教育委員会	奈良・平安	溝など	土師器・須恵器	3
13	第13次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	柱穴列	土師器・須恵器	4
14	第14次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑 柱穴	土師器・須恵器 鉄製品	11
15	第15次調査区	1997	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴住居・土坑	縄文後期土器 土師器・須恵器	7
16	第16次調査区	1997	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・掘立柱建物	土師器・須恵器	4
17	第17次調査区	1999	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・掘立柱建物 土坑墓・小穴群・不明遺構	土師器・須恵器・鉄製品 網目土器	11
18	第18次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 柱穴	土師器・須恵器	12
19	第19次調査区	1999	熊本市教育委員会	古代	溝	土師器・須恵器	12
20	第20次調査区	1999 ~ 00	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・掘立柱建物 土坑・柱穴	土師器・須恵器 縄文土器	12
21	第21次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	水田・竪穴住居・掘立柱建物・ 土坑・溝柱穴	土師器・須恵器 青磁・白磁片・耳環	13
22	第22次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	柱穴・小穴・溝・道路	土師器	13
23	第23次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・柱穴群	土師器・須恵器 青磁水注片	13
24	第24次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・土坑・溝 井戸・柱穴	土師器・須恵器 陶磁器	13
25	第25次調査区	2000	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・掘立柱建物・土坑 溝・柱穴	土師器・須恵器 馬の骨・齒	13
26	第26次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居	土師器・須恵器	6
27	第27次調査区	2000	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居など	土師器・須恵器	3
28	第28次調査区	2001	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・溝	土師器・須恵器 金鋳製耳環	13
29	第29次調査区	2001 ~ 02	熊本市教育委員会	古代・中世	水田・溝	土師器・須恵器 弥生土器・縄文土器	13
30	第30次調査区	2002 ~ 03	熊本市教育委員会	古墳 ~ 平安	竪穴住居・溝・小穴	土師器・須恵器 馬骨	14

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
31	第31次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代・近世	竪穴住居・土坑・溝	土師器・須恵器 風字模・縄文土器	15
32	第32次調査区	2003	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・掘立柱建物 土坑・柱穴	土師器・須恵器 黒色土器・鉄製品	15
33	第33次調査区	2003	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器	6
34	第34次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	掘立柱建物	縄文土器・土師器 須恵器	4
35	第35次調査区	2004	熊本市教育委員会	縄文・奈良 平安	竪穴住居・溝	縄文土器・土師器 須恵器	4
36	第36次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近世	竪穴住居・溝	土師器・須恵器 陶磁器	4
37	第37次調査区	2004	熊本市教育委員会	奈良・平安 近代	溝・道路・小穴 井戸	縄文土器・土師器 須恵器・鉄斧・獸骨	16
38	第38次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	土坑・柱穴など	土師器・須恵器など	16
39	第39次調査区	2005	熊本市教育委員会	縄文・古代	集石遺構・柱穴	縄文土器・石器 土師器・須恵器	17
40	第40次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代・近代	竪穴住居・土坑・溝・柱穴・小穴	縄文土器・石器・土師器 須恵器・陶磁器	17
41	第41次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑・溝・小穴	土師器・須恵器	5
42	第42次調査区	2005	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑	土師器・須恵器	6
43	第43次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 小穴	縄文土器・土師器 須恵器・青磁片	17
44	第44次調査区	2005	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑 小穴など	縄文土器・土師器 須恵器・石製鋸鋸車	17
①	1A区	2005 ～06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 道路状遺構など	土師器・須恵器	今回
②	2A区	2005 ～06	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 柱穴など	土師器・須恵器	今回
45	第45次調査区	2006	熊本市教育委員会	古代・中世 近世	溝・柱穴・竪穴状遺構 掘立柱建物	土師器・須恵器 瓦質土器・陶磁器	18
③	3A区	2006 ～07	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑・井戸 掘立柱建物	縄文土器・土師器 須恵器	23
④	4A区・4B区	2007	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器	21
46	第46次調査区	2007	熊本市教育委員会	古墳・古代 中世	水田・竪穴住居 土坑・柱穴群	土師器・須恵器	19
⑤	4C区	2007	熊本県教育委員会	縄文・古代 近代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	21
⑥	5A区	2007	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・井戸・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	21
⑦	2B区	2008	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器	今回
⑧	1B区・1C区	2008	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	今回
⑨	3B区	2008	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	縄文土器・土師器 須恵器	23
⑩	5B区	2008 ～09	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物	土師器・須恵器 陶磁器	21
47	第47次調査区	2009	熊本市教育委員会	奈良・平安	竪穴住居・土坑 小穴・不明遺構	土師器・須恵器 縄文土器・近世陶磁器	8
⑪	6A区・6B区	2009	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・竪・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	22
⑫	7区	2009 ～10	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 掘立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	22

番号	調査地点名	調査年	調査機関	主な時代	主な遺構	主な遺物	文献
⑪	2 C 区	2009	熊本県教育委員会	古代	近代建物基礎	縄文土器・土師器 須恵器・石燈・石斧	今回
⑫	8 区	2009	熊本県教育委員会	古代・近世	溝・土坑	縄文土器・土師器 須恵器	
⑬	9 区	2009	熊本県教育委員会	縄文・古代 近世	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	縄文土器・土師器 須恵器	
⑭	10 区	2009	熊本県教育委員会	縄文・古代	竪穴建物・土坑	縄文土器・土師器 須恵器・石燈・石斧	
48	第 48 次調査区	2009	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居・土坑・柱穴群	土師器・須恵器	20
49	第 49 次調査区	2010	熊本市教育委員会		道路	越州窯青磁・軒丸瓦	
50	第 50 次調査区	2010	熊本市教育委員会	中世～近世	溝・土坑	縄文後期土器	
⑮	3 C 区	2010	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器 陶磁器	23
⑯	1 D 区	2010	熊本県教育委員会	古代	溝	土師器	今回
⑰	5 C 区	2010	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	
51	第 51 次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・近世	溝		
52	第 52 次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代	竪穴住居		
53	第 53 次調査区	2011	熊本市教育委員会	縄文～中世	流路・土坑・柱穴	縄文時代土器・石器 土師器・須恵器・陶磁器	24
54	第 54 次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・中世	水田・溝		25
55	第 55 次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・近世	道路・竪穴住居	鉄製鍵・白磁・越州窯青磁 縄文後期土器・石器	25
56	第 56 次調査区	2011	熊本市教育委員会	古代・近世	溝・道路・竪穴住居 縄文早期集石	縄文早期・中期 後期土器・石器	25
⑯	4 D 区	2011	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	
⑰	11 区	2011	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器	
⑱	6 D 区	2011	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝		
⑲	7 D 区	2011	熊本県教育委員会	古代・近代	竪穴建物・溝・土坑 据立柱建物・近代建物基礎	土師器・須恵器 陶磁器	
⑳	12 区	2011	熊本県教育委員会				
㉑	6 C 区	2011 2012	熊本県教育委員会				
㉒	2 D 区	2012	熊本県教育委員会	古代	竪穴建物・溝・土坑	土師器・須恵器	今回

参考文献

(番号は第2表 新屋敷遺跡内調査地一覧の参考文献番号と一致する)

1. 納田龍生・美濃口雅朗 1999 「新屋敷遺跡第1次調査区」「新屋敷遺跡第4次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成10年度－』熊本市教育委員会
2. 林田和人 2003 「新屋敷遺跡第11次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成13・14年度－』熊本市教育委員会
3. 納田龍生 2004 「新屋敷遺跡第2次調査区」「新屋敷遺跡第1・2次調査区」『新屋敷遺跡2・7次調査区』『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成15年度－』熊本市教育委員会
4. 松村真紀子 2005 「新屋敷遺跡第1・3次調査区」「新屋敷遺跡第1・6次調査区」『新屋敷遺跡第3・4次調査区』『新屋敷遺跡第3・5次調査区』『新屋敷遺跡第3・6次調査区』『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成16年度－』熊本市教育委員会
5. 岩谷史記 2006 「新屋敷遺跡第4・1次調査区」「熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成17年度－」熊本市教育委員会
6. 美濃口雅朗 2007 「新屋敷遺跡第2・6次調査区」「新屋敷遺跡第3・3次調査区」『新屋敷遺跡第4・2次調査区』『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成18年度－』熊本市教育委員会
7. 美濃口雅朗 2008 「新屋敷遺跡第1・5次調査区」「熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成19年度－」熊本市教育委員会
8. 美濃口雅朗 2010 「新屋敷遺跡第4・7次調査区」「熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成21年度－」熊本市教育委員会
9. 熊本市教育委員会編 1995 『熊本市埋蔵文化財年報第1号－昭和63年度～平成3年度－』熊本市教育委員会
10. 熊本市教育委員会編 1999 『熊本市埋蔵文化財年報第2号－平成4年度～平成8年度－』熊本市教育委員会
11. 熊本市教育委員会編 2000 『熊本市埋蔵文化財年報第3号－平成9年度～平成10年度－』熊本市教育委員会
12. 熊本市教育委員会編 2001 『熊本市埋蔵文化財年報第4号－平成11年度－』熊本市教育委員会
13. 熊本市教育委員会編 2003 『熊本市埋蔵文化財年報第5号－平成12年度～平成13年度－』熊本市教育委員会
14. 熊本市教育委員会編 2004 『熊本市埋蔵文化財年報第6号－平成14年度－』熊本市教育委員会
15. 熊本市教育委員会編 2005 『熊本市埋蔵文化財年報第7号－平成15年度－』熊本市教育委員会
16. 熊本市教育委員会編 2006 『熊本市埋蔵文化財年報第8号－平成16年度－』熊本市教育委員会
17. 熊本市教育委員会編 2007 『熊本市埋蔵文化財年報第9号－平成17年度－』熊本市教育委員会
18. 熊本市教育委員会編 2008 『熊本市埋蔵文化財年報第10号－平成18年度－』熊本市教育委員会
19. 熊本市教育委員会編 2009 『熊本市埋蔵文化財年報第11号－平成19年度－』熊本市教育委員会
20. 豊崎晃一 2012 「新屋敷遺跡第4・8次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成23年度－』熊本市の文化財 第12集 熊本市教育委員会

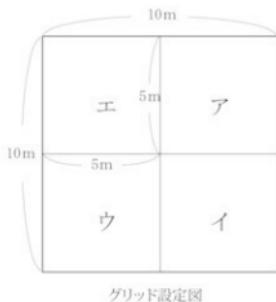
21. 水上正孝 2012 「新屋敷遺跡1」 熊本県文化財調査報告第270集 熊本県教育委員会
22. 水上正孝 2013 「新屋敷遺跡2」 熊本県文化財調査報告第286集 熊本県教育委員会
23. 水上正孝 2014 「新屋敷遺跡3」 熊本県文化財調査報告第298集 熊本県教育委員会
24. 綱田龍生 2012 「新屋敷遺跡1」 熊本市の文化財 第22集 熊本市教育委員会
25. 熊市教育委員会編 2013 『熊本市埋蔵文化財年報第15号－平成23年度－』熊本市教育委員会

第3章 調査の方法

第1節 調査区・グリッド設定

本調査は、同一の建築工事を原因としている。したがって、両調査区は隣接・連続する1区調査は平成17年11月～平成18年3月、1B・1C区調査は平成20年4月～10月、1D区調査は平成22年8月、2A区調査は平成18年1月～3月、2B区調査は平成20年1月～3月、2C区は平成21年4月～5月、2D区調査は平成24年6月～9月を行った。

各調査区の位置、10mグリッドを、第3・4図に記す。細長い調査区が多く、調査区にグリッド杭が設定しにくいため、10mグリッドを5m×5mを1単位に右図のように右上から時計回りにア・イ・ウ・エとした。グリッドの標記は1Kイ（南北軸の数字・東西軸のアルファベット・5mグリッドの記号）と表す。なお、1A区・2A区に関しては10mグリッドのため、グリッド標記は1Kと表す。



グリッド設定図

第2節 基本土層概略

層位について、遺構外と遺構内の層の区別を行うため遺構外の層については、算用数字で表土層（近現代の整地・搅乱層）の下の層から、1層、2層と標記し、遺構内の層はそれと区別するため、算用数字の前に「理」を付け、理1層、理2層…と標記した。分層詳細は各調査区の成果において報告するが、本項では大略を記す。

- | | |
|-----------|---|
| 1層： 暗褐色土層 | 近世、古代遺物を含む。中世以降の整地層と思われる。 |
| 2層： 黒褐色土層 | 古代遺物を含む。後世の削平を受けたのか総じて薄い。
場所によっては堆積が見られない。 |
| 3層： 褐色土層 | この層位の上面で古代の遺構を確認した。 |

第3節 調査方法

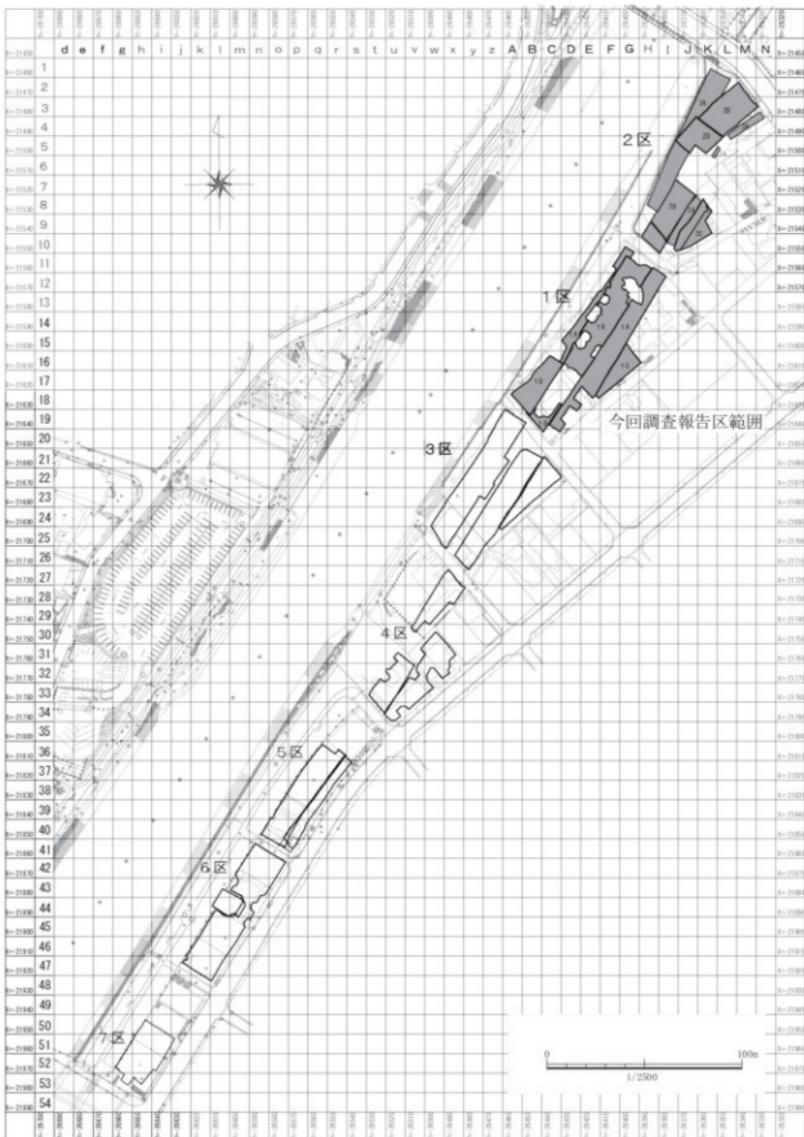
表土、1層は重機により掘削し、2層、3層、遺構は手掘りしている。3層以下は未調査である。埋戻しは、派生土を用いて重機にて行った。

実測は調査担当者・作業員で、1/20の縮尺で断面図、平面図を作成した。遺物出土状況、かまどについては1/10の縮尺で作成した。なお、遺構の実測図作成にあたっては、手実測とともに実測の迅速化を図るために光波測距儀を活用したデジタル図化を行った。デジタル図化にはCUBIC社製の遺構実測支援ソフト「遺構くん」を使用した。

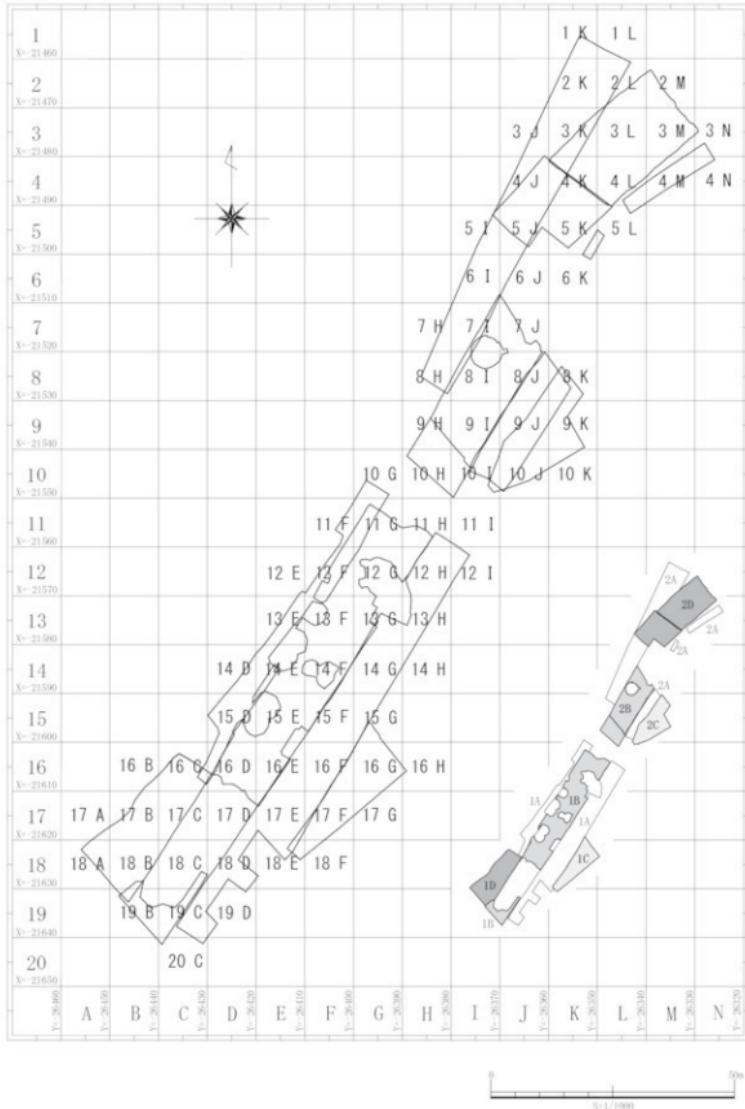
写真は、検出時、遺物出土時、使用時（使用当時の状態）、撮影時の各段階において、適宜、モノクロフィルムとリバーサルフィルムで、小型カメラ（35mm）と中型カメラ（6cm×7cm）を使用し、撮影した。

第4節 調査の概要

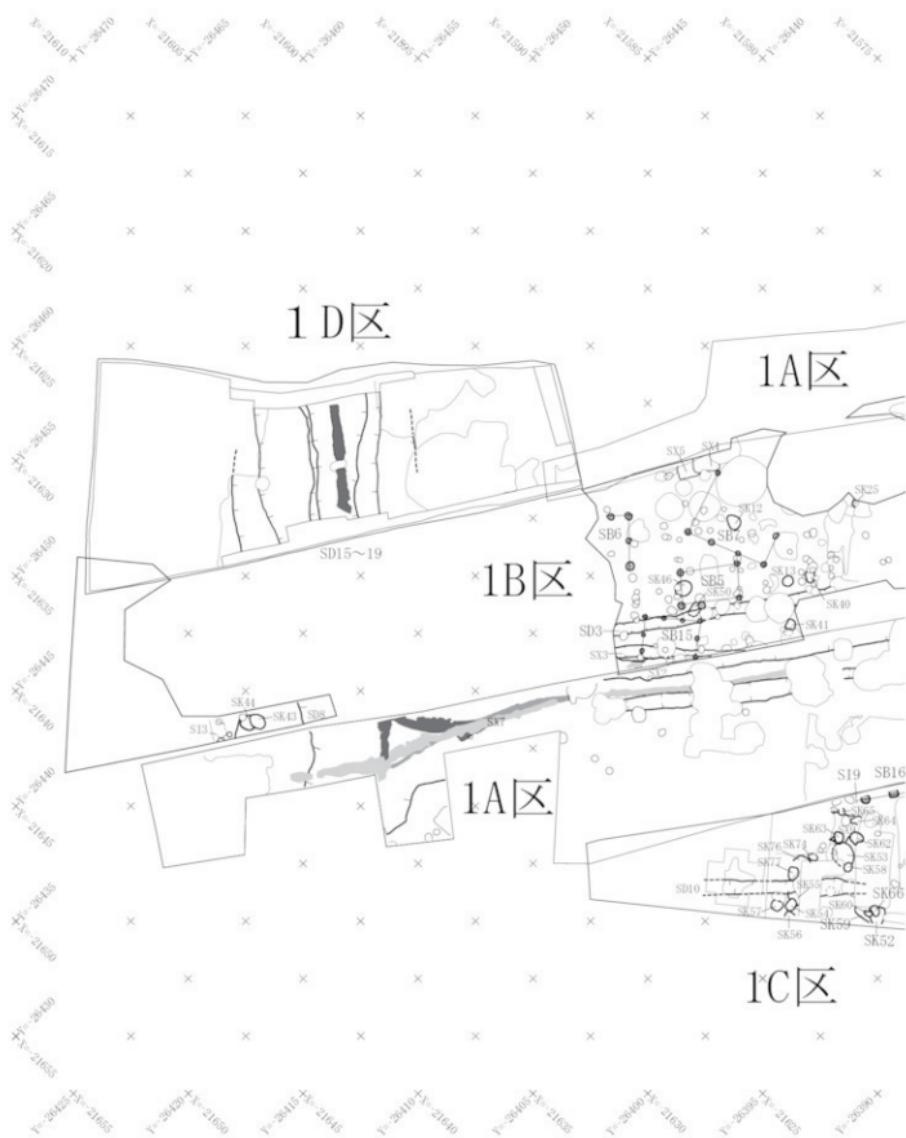
調査区には現代の搅乱に壊されながらも主に古代の遺構が残存していた。そこで、1区古代を第5図、2区古代を第6図に記す。又、近現代遺構については1区を第68図、2区を第69図に記す。



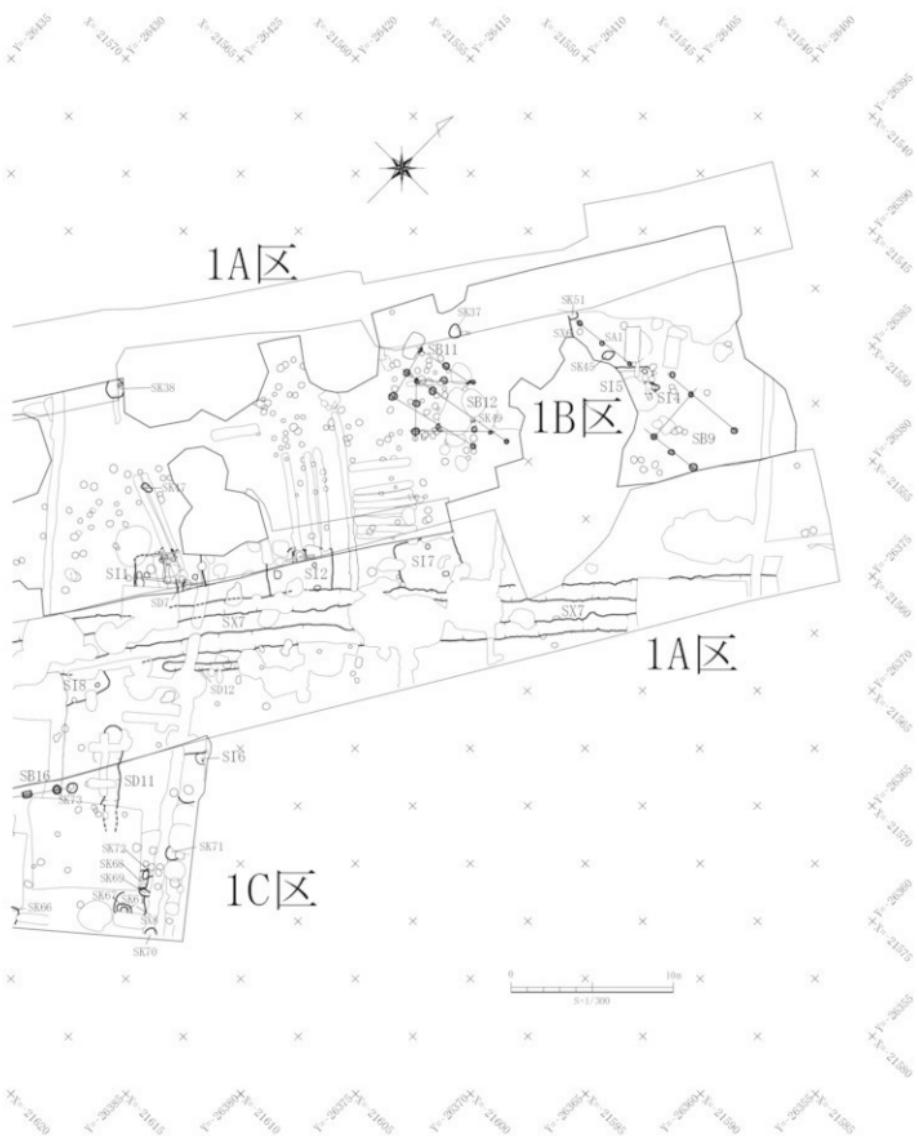
第3図 新屋敷遺跡全調査区位置図（縮尺任意）

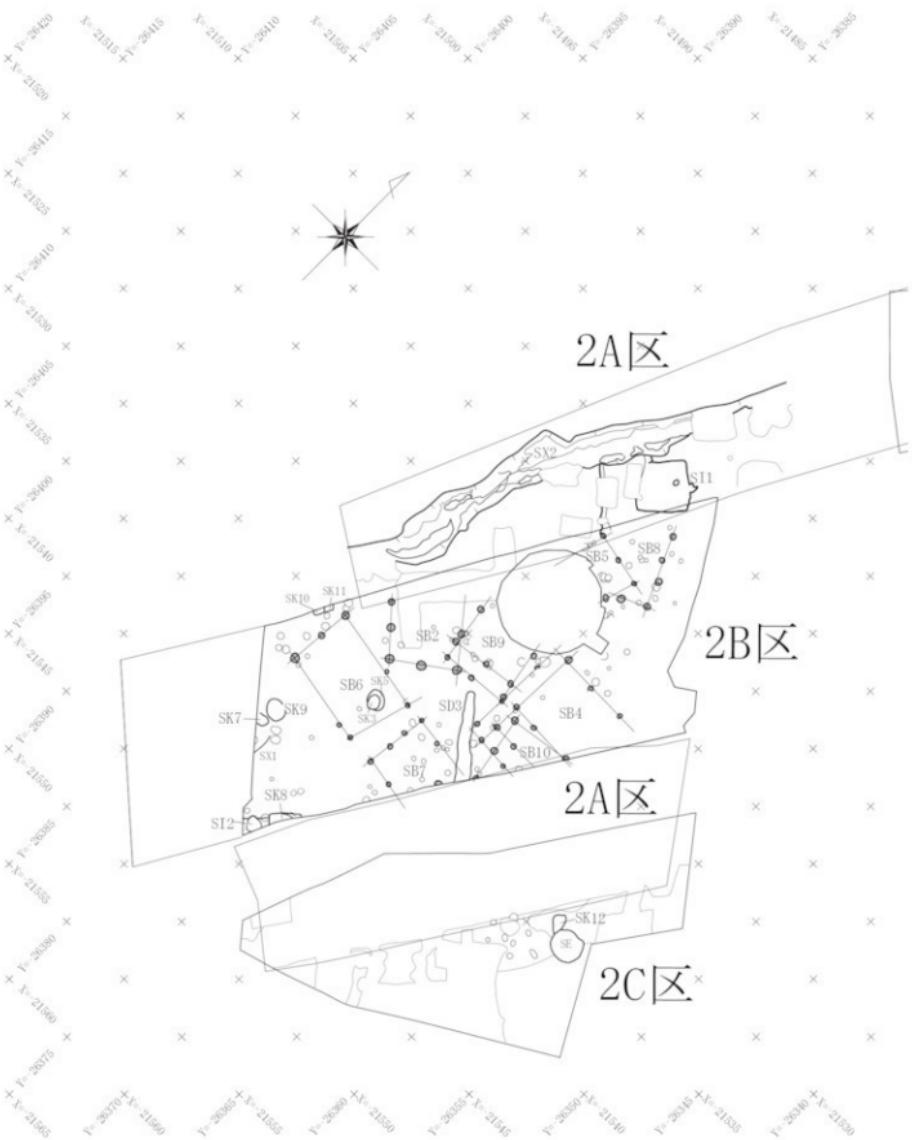


第4図 1区・2区調査区グリッド位置図

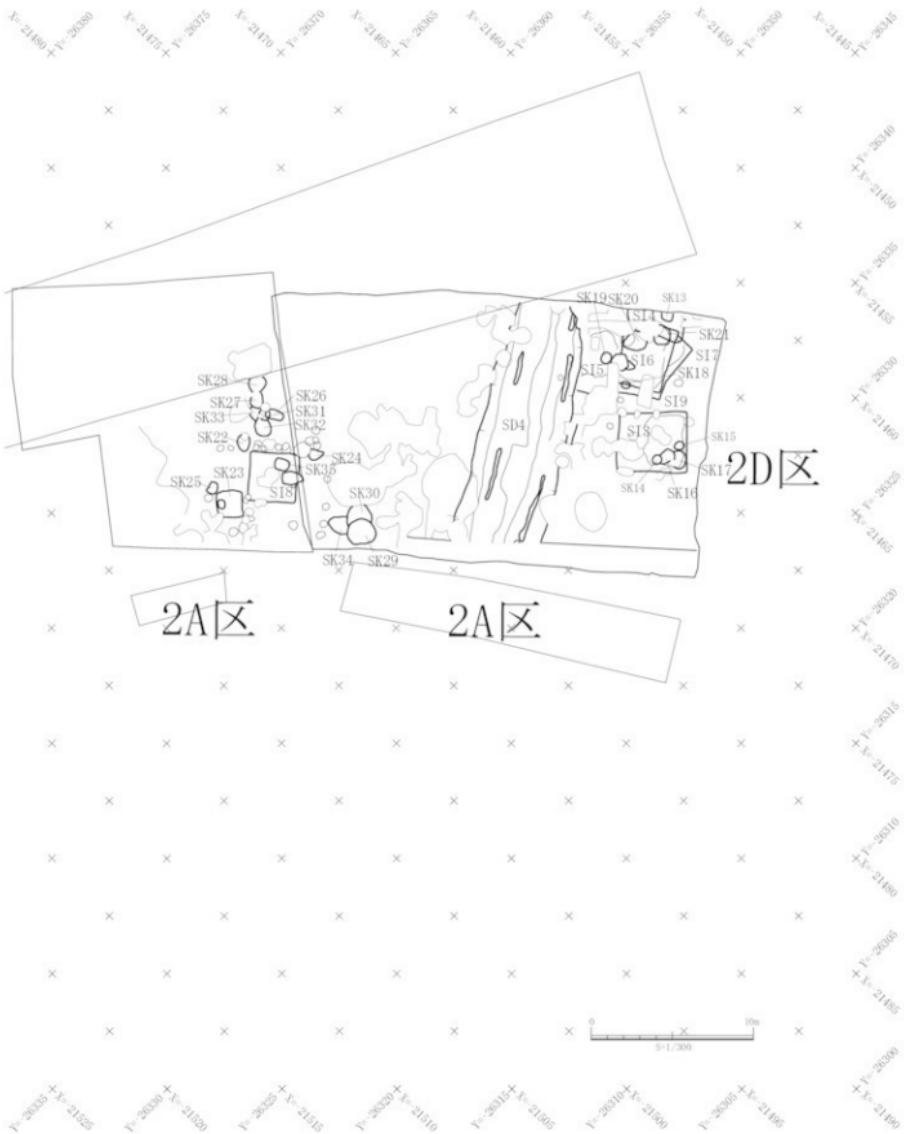


第5図 1区 古代主要遺構配置図 (1/300)





第6図 2区 古代主要遺構配置図 (1/300)





白川絵図



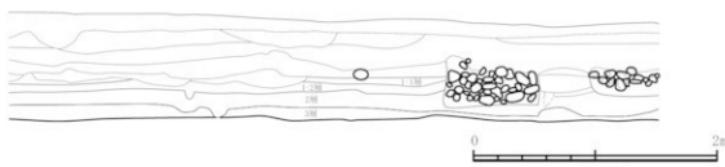
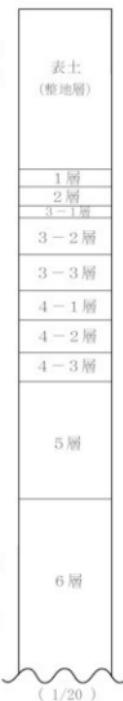
戦時中白川航空写真

第4章 調査の成果

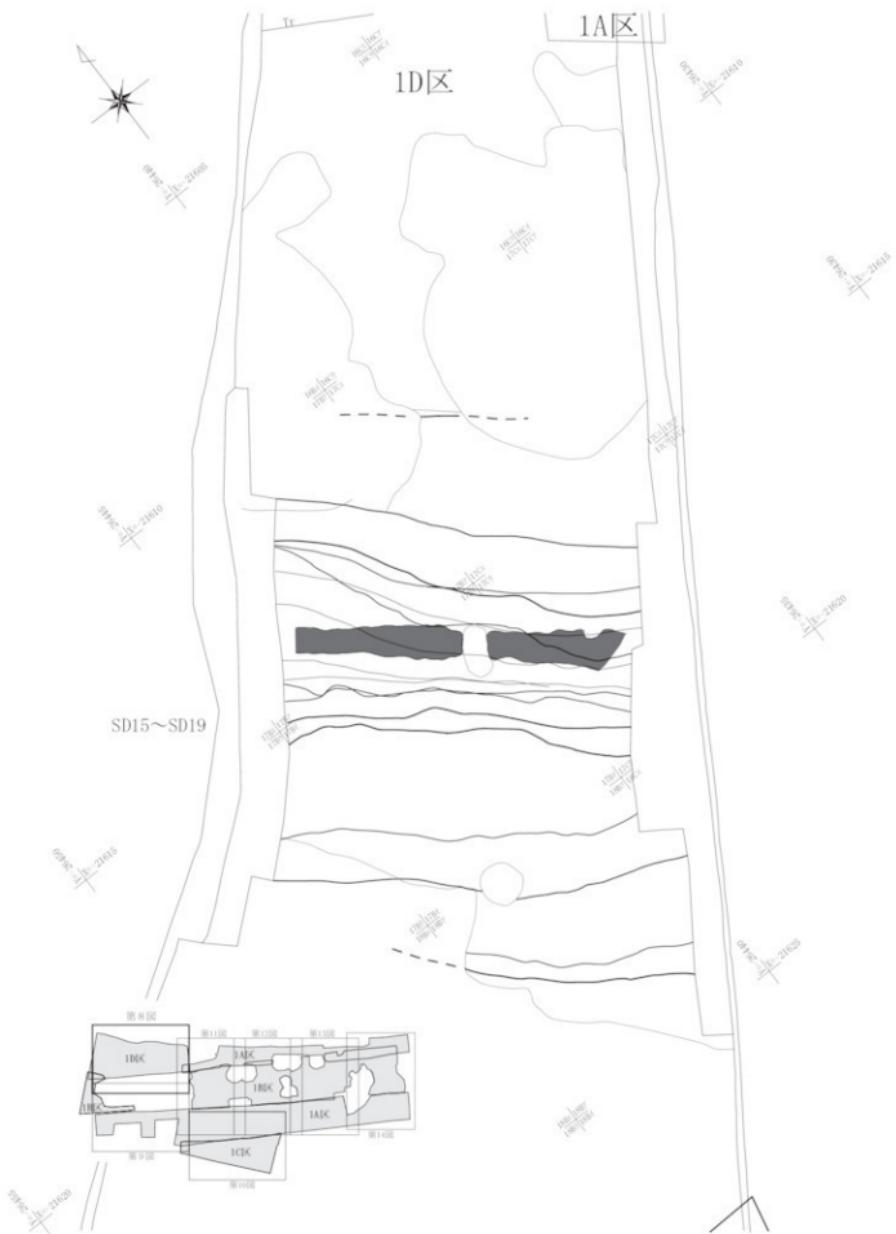
第1節 基本土層

調査区の基本土層は、現代の整地層を除き、第7図に示したとおり、大きく6つの層に分けられる。この基本土層図は調査地区、地点によって層序が異なるところを含めたうえで再編したものである。

- 1層：暗褐色（10 YR 3/4） 極細砂混じりシルト層。1cm大のオレンジ粒、赤色粒、炭化物を少量含む。しまりややあり。粘質ややあり。近世、古代遺物を含む。5~20cmほどの厚さを持つ。
- 2層：黒褐色（10 YR 3/2） 極細砂混じりシルト層。1~2mm大の赤色粒が少量混入する。しまりあり。粘質ややあり。場所によっては堆積が見られない。古代遺物を含む。5~10cmほどの厚さを持つ。
- 3-1層：褐色（10 YR 4/6） 細砂混じりシルト層、上層の黒褐色シルト層、下層のローム混じる。炭化物少量含む。しまりややあり。粘質あり。古代遺構検出面。5cmほどの厚さを持つ。
- 3-2層：褐色（10 YR 4/4） ローム層。微細なガラス粒子含む。しまりややあり。粘質なし。
- 本層以下は未調査。
- 3-3層：褐色（7.5 YR 4/4） 細砂混じりシルト層。オレンジ粒、黄褐色土ブロック少しうまじる。しまりややあり。粘質なし。
- 4-1層：極暗褐色（7.5 YR 3/4） ローム層。暗色帶。しまりややあり。粘質あり。場所によっては堆積が見られない。
- 4-2層：オリーブ褐色（2.5 Y 4/4） ローム層。粒子はやや粗い。混入物なし。しまりなし。粘質なし。
- 4-3層：にぶい黄褐色（10 YR 4/3） ローム層。ガチガチに硬く、ブロック状になっている箇所もある。しまり強い。粘質なし。
- 5層：暗オリーブ褐色（2.5 Y 3/3） 砂質層。ところどころ硬化している。暗褐色土層（10 YR 3/4）が入るところもある。しまりあり。粘質なし。
- 6層：黒褐色（10 YR 3/1） 砂質層。上層は細かい礫が混じり、硬化しブロック状になっているところも見られる。下層は砂層でぼろぼろと崩れる。

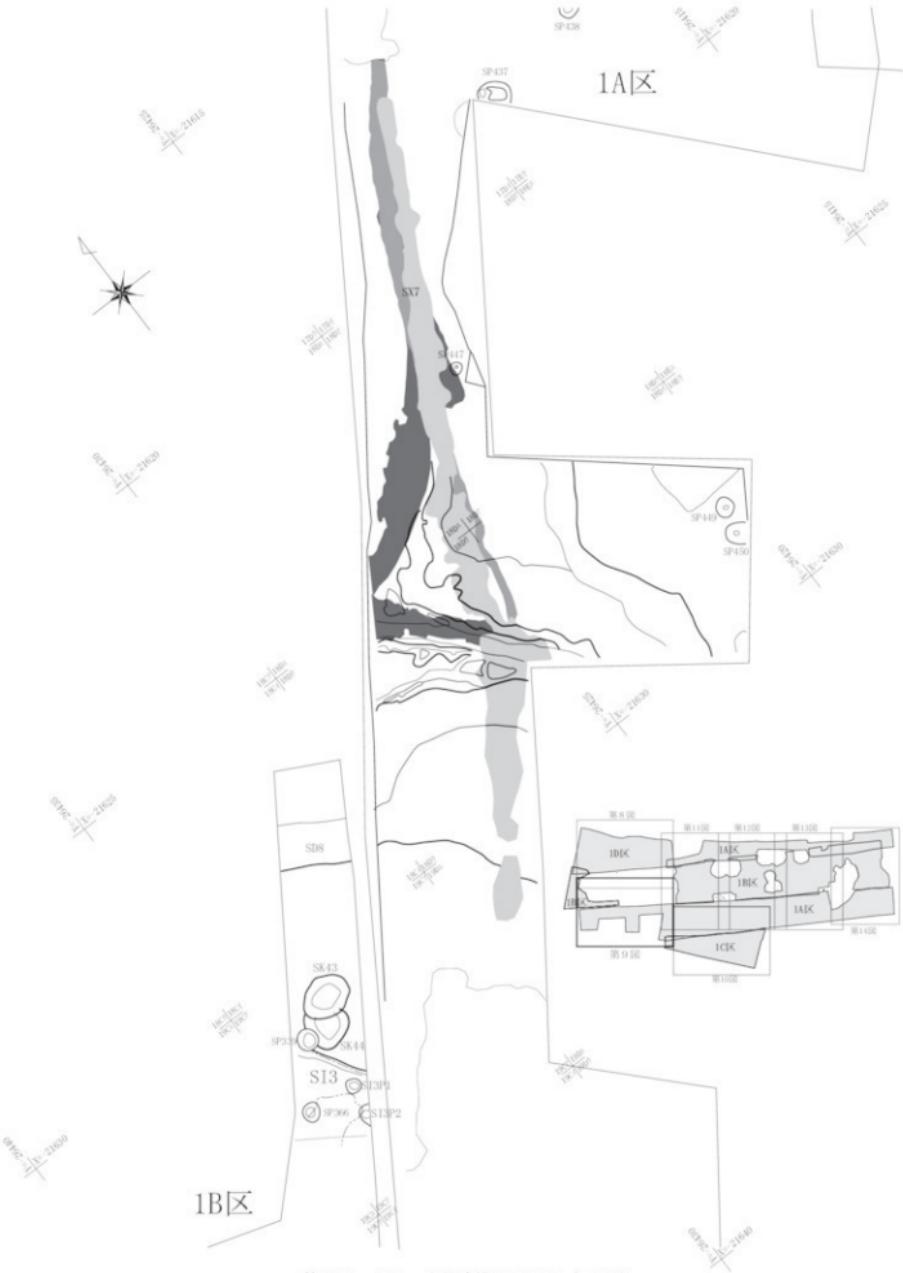


第7図 調査区土層断面図及び土層模式図



第8図 1区 古代遺構配置図 1 (1/100)

第2節 1区古代遺構・遺物



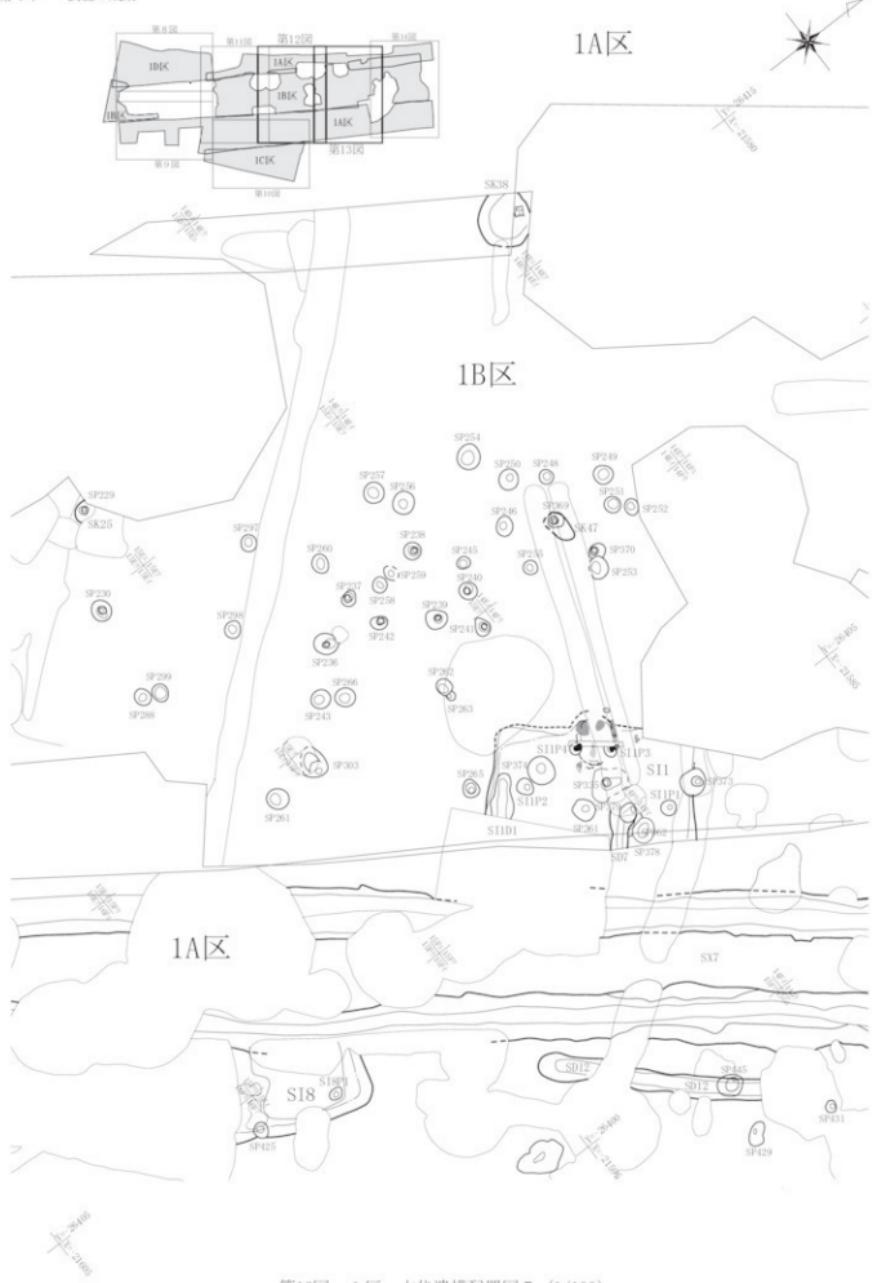
第9図 1区 古代遺構配置図2 (1/100)



第10図 1区 古代遺構配置図3 (1/100)



第11図 1区 古代遺構配置図 4 (1/100)



第12図 1区 古代遺構配置図 5 (1/100)



第13図 1区 古代遺構配置図6 (1/100)



第2節 1区古代遺構・遺物

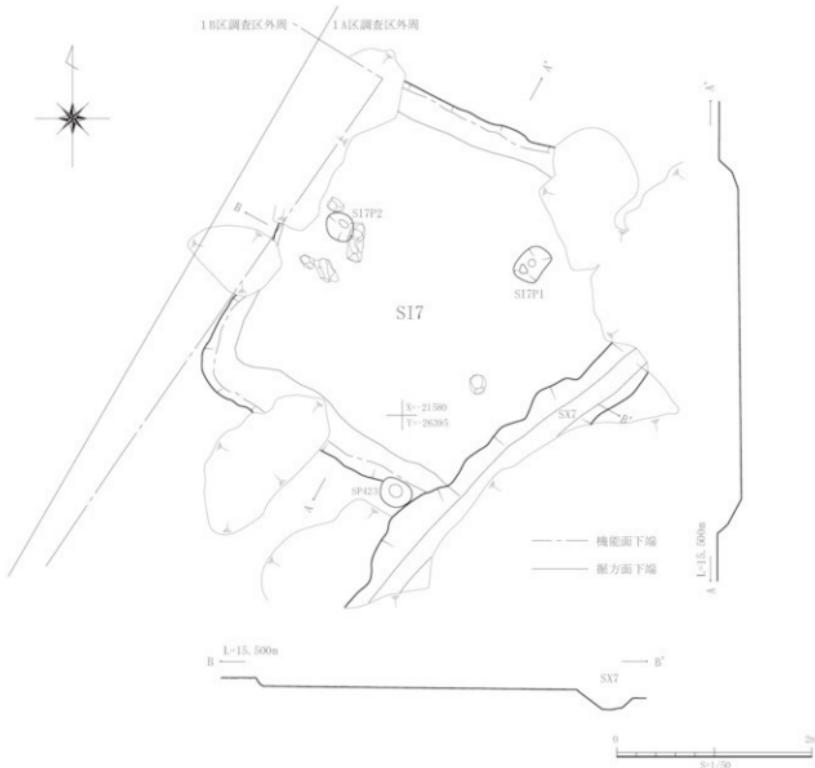
調査は、平成17年度に1A区、平成20年度に1B区・1C区、平成22年度に1D区を行った。記載遺構について、調査区をまたがる場合、検出されなかった遺構もあるが、現況を報告する。

1. 1A区

堅穴建物

S I 7 (第15図)

3層上面より検出した。13Gイ・ケ・14Gア・イ・グリッドに位置する。隅丸方形のプラン。南東側壁を壊す、SX7に破壊される。現況では南北約3.8m、東西3.3m以上、検出面から床面の深さは約18cmを測る。主軸はN-61°-Wである。内部施設にかまどをもち、袖石が配されるが、原形を留めない。袖石は砂質の石材を用い、

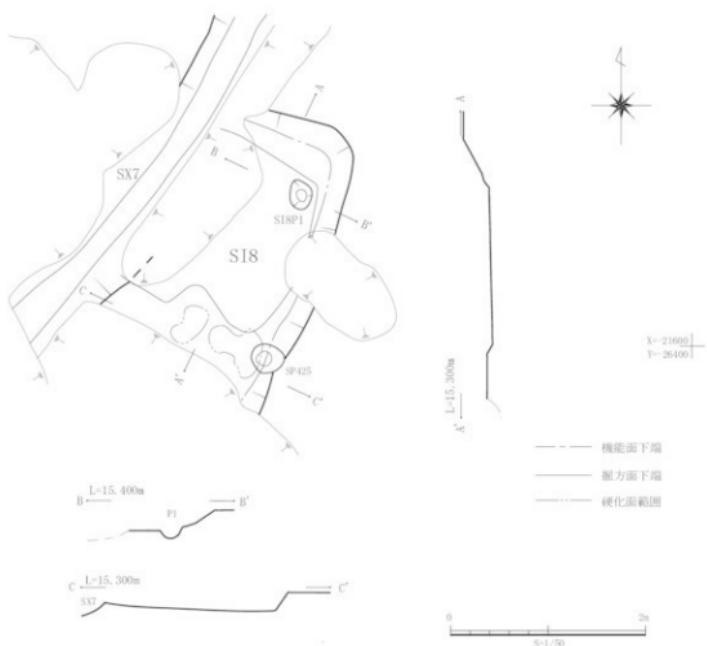


第15図 1A区 S I 7 平面・断面図

被熱により赤褐色に変色する。内部にピットを1基検出したが、主柱穴の検出はできなかった。遺物は、土師器楕(第19図11)が出土した。底部には高い高台が付く。体部がほとんど残っていないため詳細は不明である。

S I 8 (第16図)

3層上面より検出した。15Fイ・ウ・グリッドに位置する。大部分がSX7に切られるとともに、搅乱によって破壊されている。北東部の隅部のみ確認でき、隅丸方形のプランと推定される。床面からピットが検出されるものの、主柱穴の確認はできなかった。硬化面がわずかに残存していた。



第16図 1A区 S I 8 平面・断面図

道路状遺構

SX7・SX2・SX3（第16、17図）

3層上面より検出した。IA・B・C区に渡る道路状遺構である。調査区を白川沿いに縦走し、軸はN-38°-Eである。両脇に側溝を伴う。道路面は幅0.9~1.3mを測り、一部に硬化面が見られる。南西に向かうに従って、自然地形の落ち込みに伴い硬化面の幅が縮小しレベルも下がる。右側側溝も消失する。

道路南端では三叉路と考えられる交差点となる。これは、SX7と、1D区で検出された白川方向へ下る溝との交差点である。

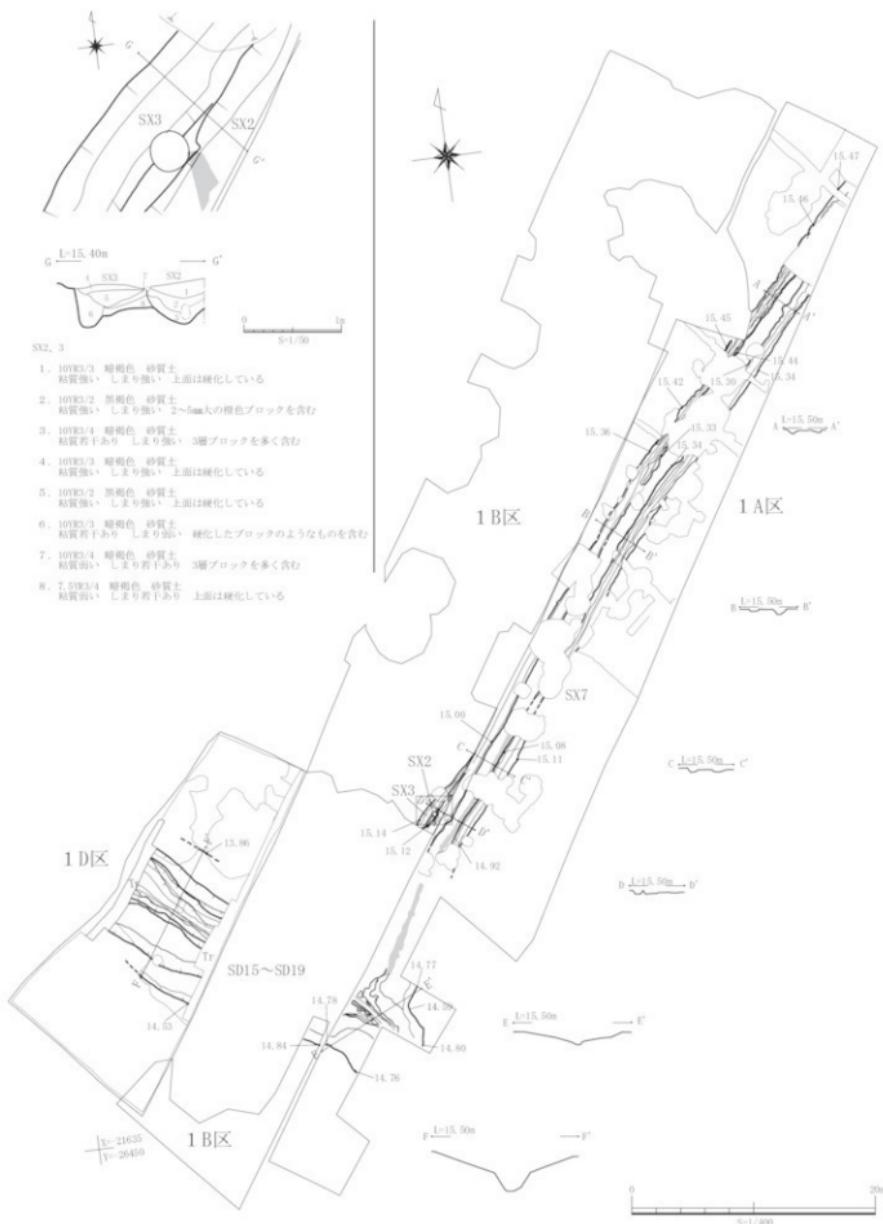
機能面3ではSX7から左曲りに溝へ向かう硬化面の残存と、溝の南東方向からの硬化面の残存が検出できることから、溝が機能していた時期は、人々はSX7から溝に入り、北西方向への往来があったことが確認できた。その上面に機能面2、またその上面に機能面1の硬化面が検出された。この2面の硬化面は溝方向には曲がらず溝を越えている。このことから、溝が埋没する過程で人々の往来が、北西～南東方向に変化し、三叉路であったものが、時間が進むにつれSX7を真っ直ぐに進むことが多くなったことが伺える。

左側側溝は拡張され、1B区SX2へと広がる。SX2に壊される溝SX3には硬化面が残存していることから、SX7が機能する前はSX3付近に人々の往来があったと思われる。

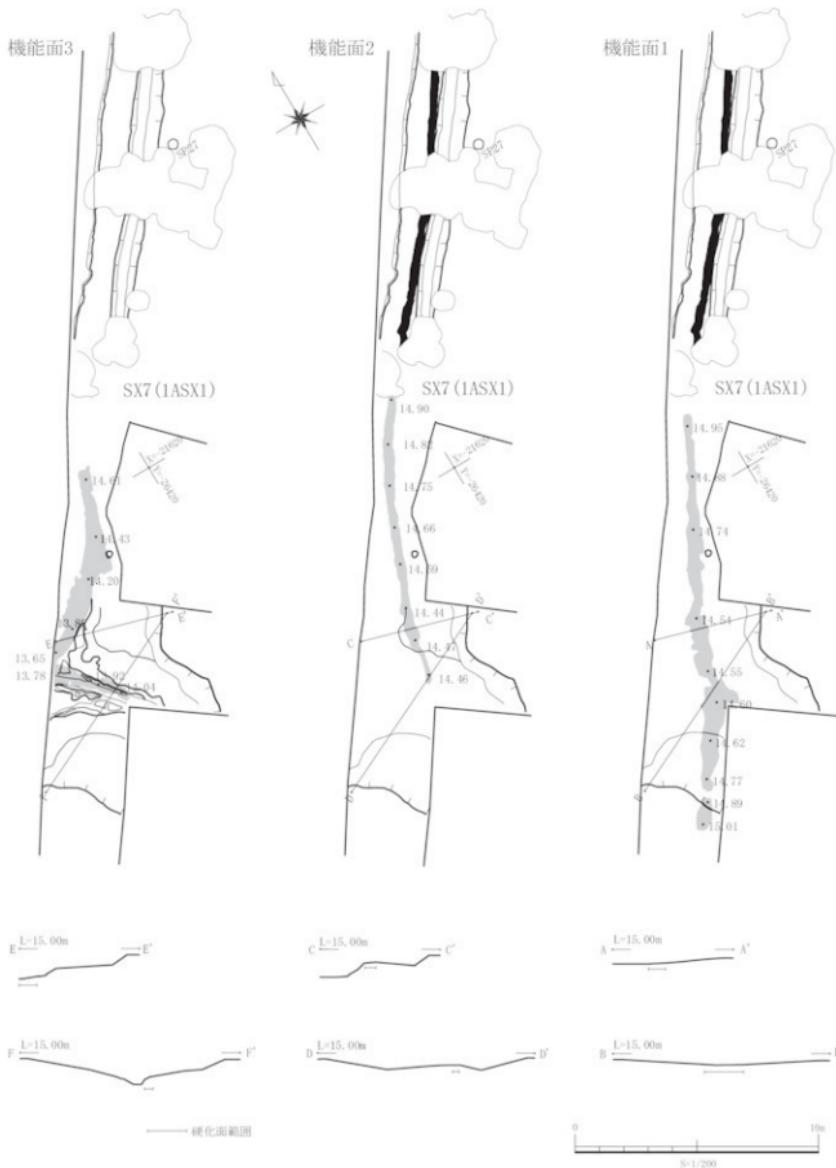
遺物は、土師器杯（第19図1）、（第19図3）、土師器椀（第19図4）、（第19図5）、（第19図7）、（第19図8）、（第19図9）、（第30図7）が出土した。19-1は左側（北を上にして）の側溝内の13H・グリッド範囲から出土した。体部が底部からやや開き気味に伸び、口縁部で外反する。底部外面には板状圧痕が残る。内外面に赤彩を施される。19-3は16E・グリッドから出土した。体部が底部端からやや内湾して伸びる。底部外面には板状圧痕が残る。19-4は右側の側溝内の14G・グリッドの範囲から出土した。底部端に断面が台形の高台が付く。少し残る体部は開きが小さい。内外面に赤彩を施される。底部外面に墨書が残るが、解読できなかった。19-5は左側の側溝内の16E・グリッドの範囲から出土した。高台が低く、端部はややはね上がる。体部の開きは小さい。底部外面に墨書が残るが解読できなかった。19-7はSX7左側側溝の拡張部であるSX2から出土した黒色土器Aである。19-8は左側側溝の16E・グリッドの範囲から出土した。口径14.4cm、器高は5.8cmと比較的大きめの椀である。体部中位から口縁に向かってやや開く。19-9は右側側溝内の14G・グリッド範囲から出土した。黒色土器Aで底部径がやや小さく、体部は内湾する。30-7は1B区のSX3から出土した。内外面に赤彩を施され、高台がやや外向きに付く。外底部には墨書が残るが判別できなかった。出土遺物は、19-8以外は9世紀中葉から後半の遺物と思われる。

1A区遺構外出土遺物

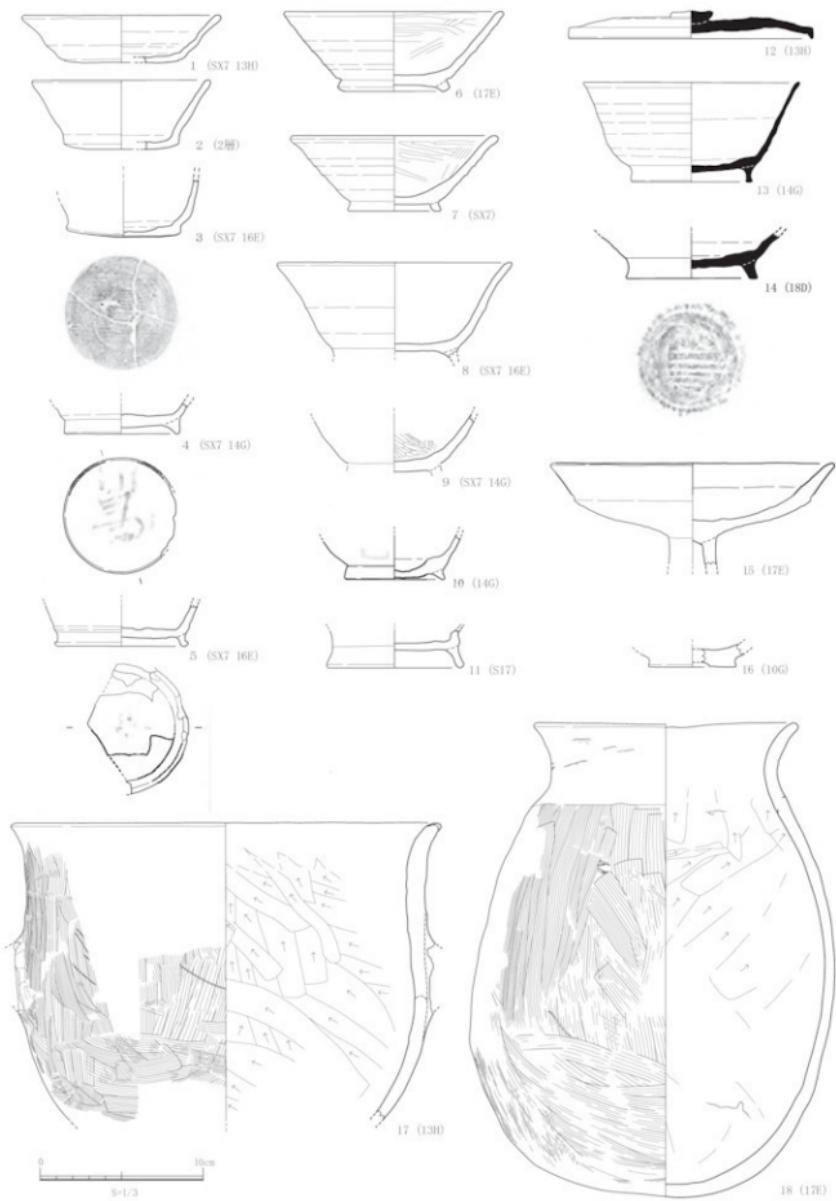
（第19図10）は土師器椀で14G・グリッドから出土した。側面に墨書が残るが一部であるため、内容は不明である。（第19図12）は須恵器蓋で13H・グリッドから出土した。扁平な擬宝珠状のつまみが付き、口縁部断面形は小さいがしっかりした三角形である。（第19図13）は須恵器椀で、14G・グリッドから出土した。高台は下向きにしっかりしたもののが付く。体部は直線的に口縁部に伸びる。（第19図14）も須恵器椀で、18D・グリッドから出土した。しっかりした高台が付き、体部は開き気味である。底部外面に板状圧痕が見られる。（第19図15）は土師器高杯で17E・グリッドから出土した。内外面に赤彩を施され、体部は内面はなめらかな曲線であるが、外面は中位に稜を持ち屈曲する。（第19図16）は陶器椀で10G・グリッドから出土した。縁陶器で底部は蛇の目高台である。（第19図17）は瓶で13H・グリッドから出土した。（第19図18）は甕で、17E・グリッドから出土した。どちらも外器面にはハケ目調整、内器面はケズリ調整される。（第19図2）は土師器杯で底部から体部が直線状に伸びる。（第20図1・2）は土師器杯である。壊乱内から出土した。内外面底部に黒斑があり、内面に1は油煙、2は煤が付く。中世のもの



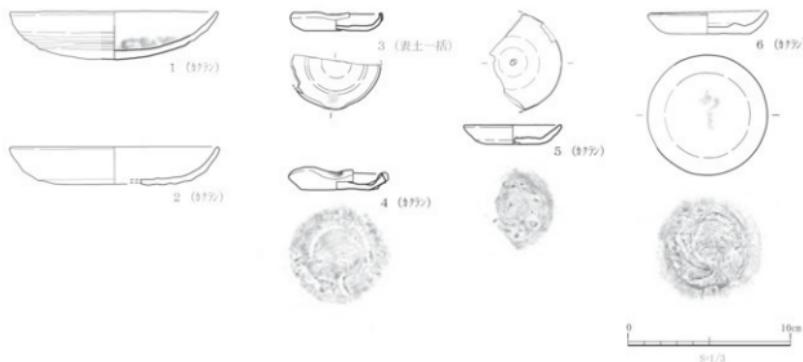
第17図 1区 道路状遺構平面・断面図



第18図 1 A区 道路状遺構内機能面移行図



第19図 1 A区 出土遺物実測図 (1)



第20図 1A区 出土遺物実測図 (2)

と思われる。(第20図3・4・5・6)は土師器灯明皿である。20-3は表土剥ぎで、20-4・5・6は擾乱内から出土した。20-3・4は芯を置く箇所を押し出してある。底部は糸切痕が付く。20-5は底部中央部に穴が開く。穴は中まで焼けているため、焼く前に穴を開けていると思われる。紡錘車として活用していた可能性もある。20-6は底部に墨書きに入るが内容は判別できなかった。

2. 1B区

竪穴建物

S 1 1 (第21、22図)

3層上面より検出した。14Fイ・ウ・15Fア・エ・グリッドに位置する。擾乱、SD7、SP335、SP361、SP362、SP373、SP374、SP378、SP379に壊される。南東側は調査区外に伸びるが、1A区では検出されていない。

南北2.0m以上、東西約4.4m、検出面から床面までの深さは約7cmを測る。主軸はN-41°-Wである。

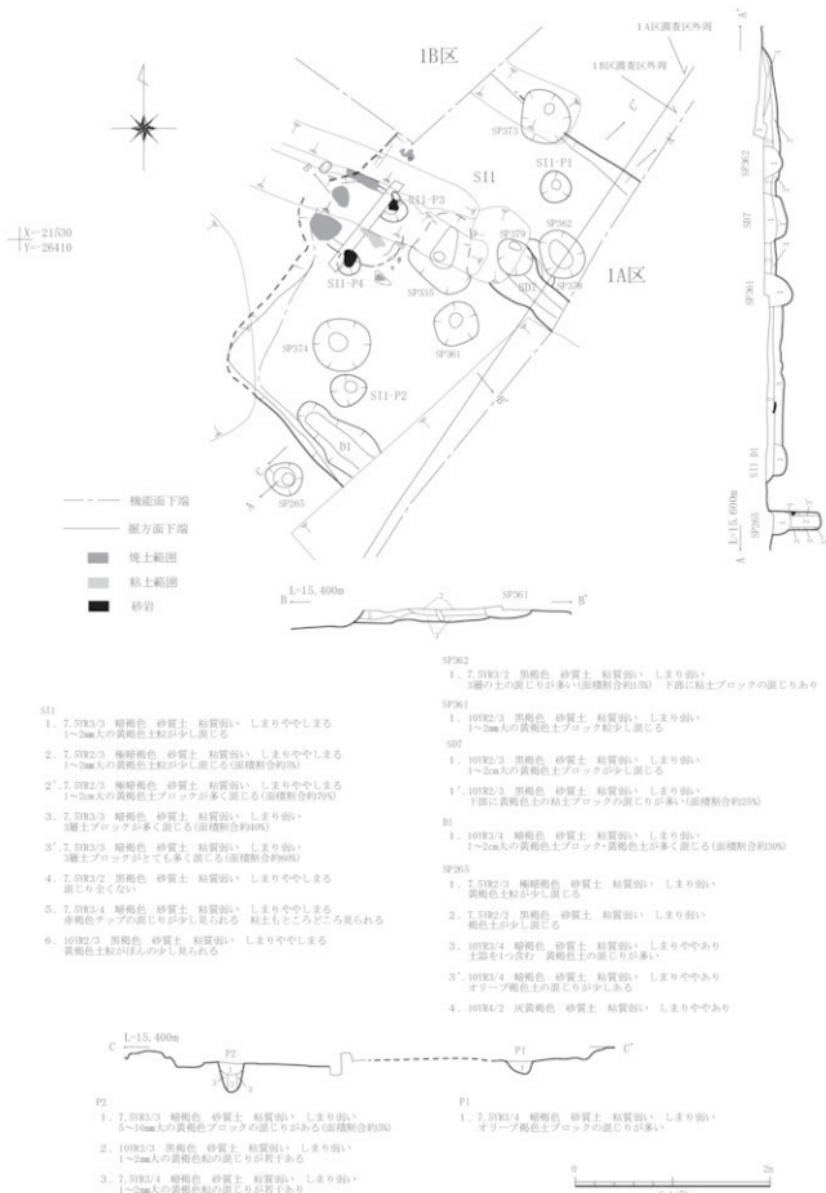
床面は埋3層上面で硬化面は検出できなかったが、他の埋土層に比べてしまがある。柱穴は埋3層上でP1、P2を検出した。柱穴間はP1-P2間で約3.0mを測る。

北西壁にかまどを有する。上部は削平を受け消失している。袖石と粘土の一部が残存する。袖石は軟質砂岩で原位置を留め、位置を固定するために地山を掘り埋められている。焼成面はかまど埋3層で焼土チップがかなり多く混じる。

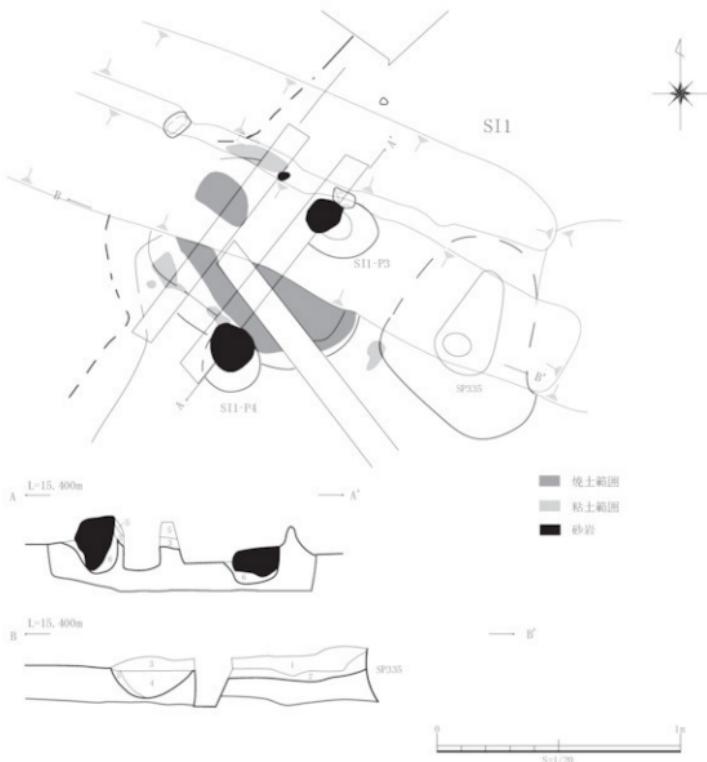
遺物は、土師器高杯の杯部(第30図10)が埋2層より出土した。内面はヘラミガキ調整され、内外面に煤が付着する。

S 1 2 (第23図)

3層上面より検出した。14Fア・イ・14Gウ・エ・グリッドに位置する。1A区でも検出された。南東側を道路状遺構SX7の側溝に壊される。南北2.6m以上、東西約4.0m、検出面から床面までの深さは約16cmを測る。主軸はN-55°-Wである。床面から柱穴が検出できたが主柱穴とは確定できなかった。床面の中央付近に土器の集中が見られる。床面から5cmほど上から杯蓋と杯身が出土する。



第21図 1B区 SII 平面・断面図



SII かまど

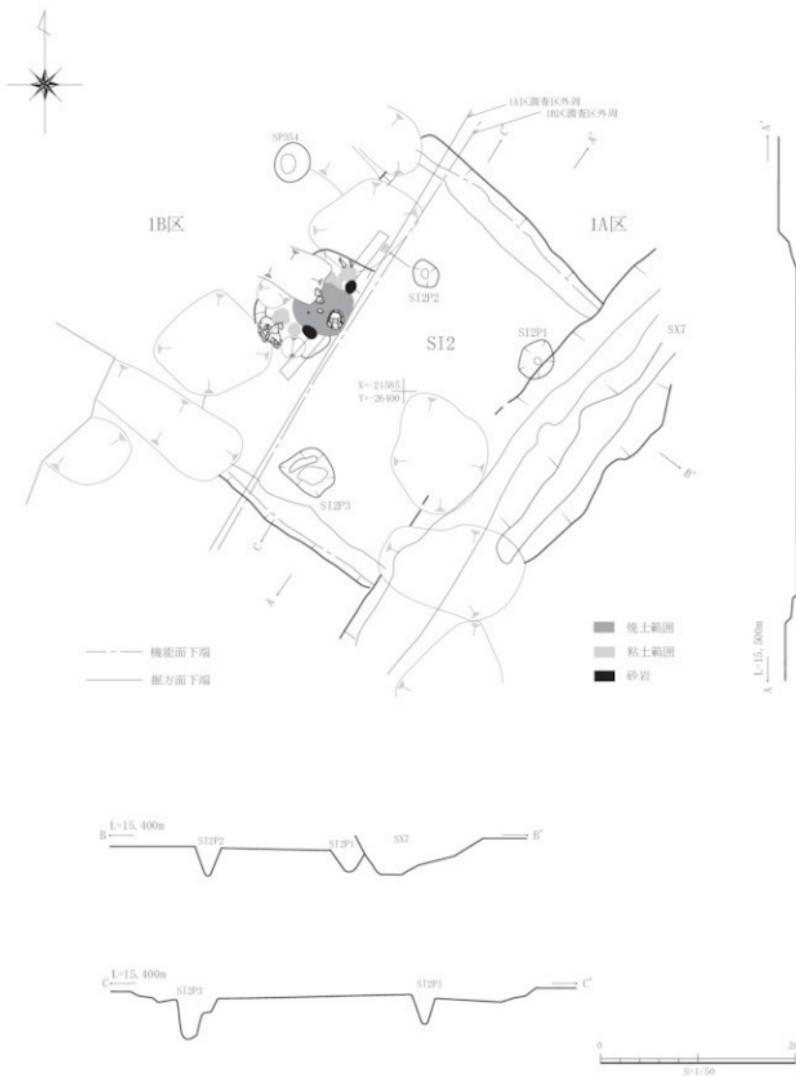
1. 7.SII01/4 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまりややあり
褐色色チップの混じり多いと見られる
トレシナ側に赤褐色色チップの混じりが多くなる
2. 7.SII01/3 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
3層以上の混じり多く見られる(面積割合約10%)
トレシナ側の層上の混じりが多いが少しがたっている
3. 7.SII01/4 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
純土チップがかなり多く混じる(面積割合約20%)

4. 7.SII03/3 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
5~20mm大の黄褐色土ブロックを少し入る(面積割合約10%)
5. 10II04/4 褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
5~10mm大の砂岩ブロックを少し入る(面積割合約10%)
6. 7.SII03/3 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
砂岩ブロック・樹木ブロックをまんべんなく含む
かまどの最初の層方より砂岩を埋め込むための掘方が深くなっている

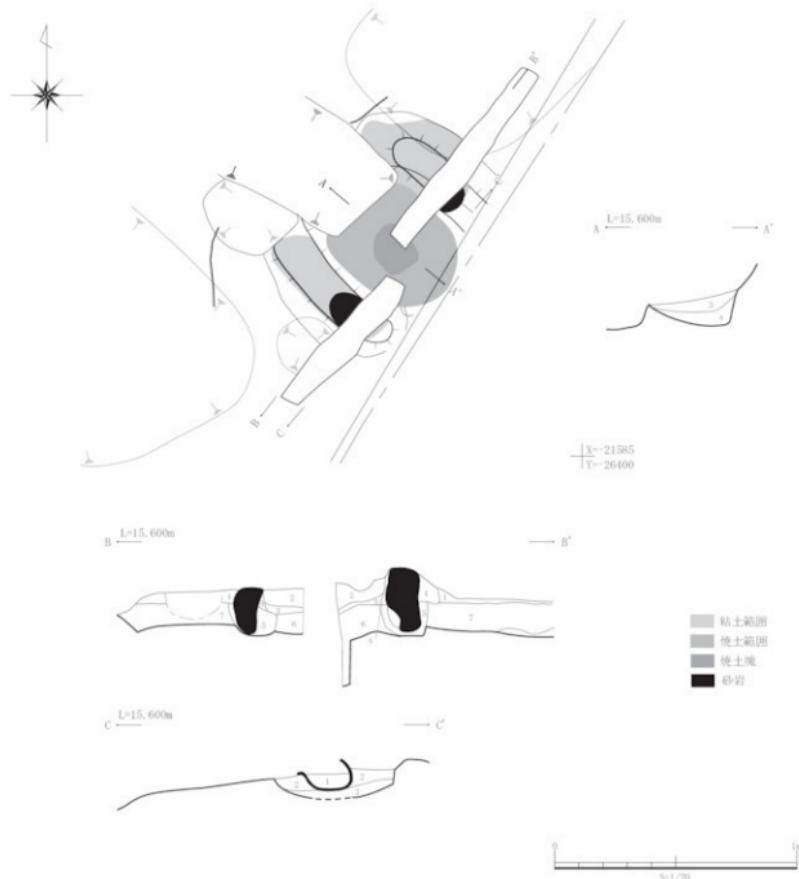
第22図 1B区 SII-1かまど平面・断面図

北西壁にかまどを有し、上部は削平を受け消失している。袖石は軟質砂岩で原位置を留め、貼床として掘方面に貼ったかまど埋7層土を掘り畠めて固定している。焼成面はかまど埋3層で焼土の塊を含む。

遺物は、かまどの崩れ埋土中から上師器高杯の杯部（第30図11）、土師器腹（第30図17）、埋土中から須恵器杯蓋（第30図14）、須恵器杯身（第30図15）、（第30図16）、把手付き盤（第30図12）が出土した。30-11は体部中央で屈曲する。30-17は受熱で胴部中位が赤変する。また外面に煤が付着する。外面はハケメ、内面はケズリ調整である。30-14は身受けの返りを持たない。また天井部は回転ヘラケズリされる。30-15は蓋受けの立ち上がりを持ち、底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリが残る。30-

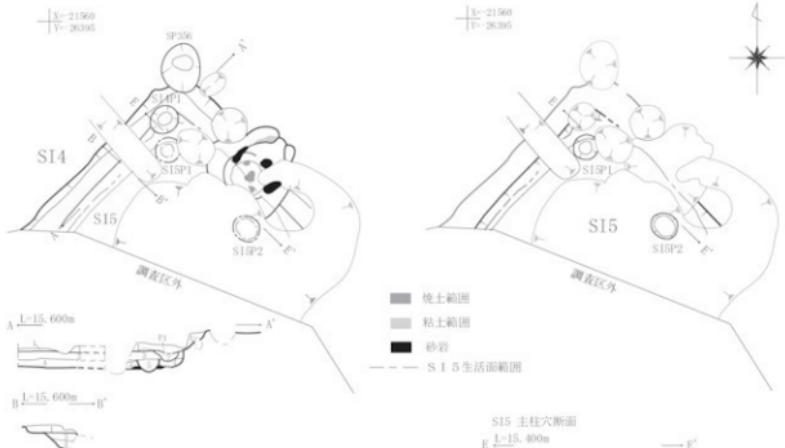


第23図 1B区 SI2平面・断面図



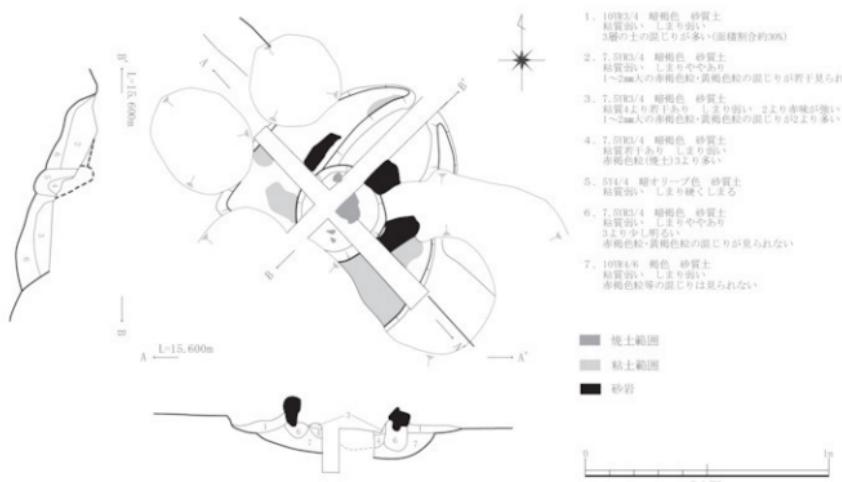
1. 7. 5IR3/2 黒褐色 砂質上 粘質弱い しまり弱い
3~50mm大の褐色ブロックを全般的に含む
2. 7. 5IR4/3 棕色 砂質上 粘質若干あり しまり弱い
粘土のかじらのようなもの・砂土・褐色ブロックを多く含む
3. 10IR4/3 にぶい黄褐色 砂質上 粘質弱い しまり弱い
焼土のかたまりを含む
4. 10IR4/2 灰黄褐色 砂質上 粘質若干あり しまりやや強い
粘土を含む 上の方はくずれの可能性もあるが断面での違いは特に見られない
5. 10IR3/4 増褐色 砂質上 粘質弱い しまりやや強い
3層ブロックを含む
6. 7. 5IR3/3 増褐色 砂質上 粘質弱い しまり弱い
1cm大の砂ブロック・3層ブロックを多く含む
7. 10IR3/2 黒褐色 砂質上 粘質弱い しまり弱い
3cm大の砂ブロック・3層ブロックを大量に含む

第24図 1B区 S I 2かまび平面・断面図



1. 10TR3/4 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
1~2cmの大・中・小の赤褐色土・砂岩ブロック+1~2cmの大・中・小の黄褐色粒が若干混じる
2. 10TR4/6 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
1~2cmの大・中・小の砂岩ブロックの混じりが多め(面積割合約20%)
3. 7.5TR3/4 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
3層の土の混じりがかなり多い(面積割合約30%) 砂岩ブロックが見られる
4. 10TR2/4 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
5層の土の混じりがより少ない(面積割合約10%) 砂岩ブロックがより多く見られる
5. 10TR2/3 暗褐色、砂質土、粘質弱い、しまり弱い
細・砂岩ブロックを含む 3層ブロックを多く含む

第25図 1B区 S I 4、S I 5平面・断面図



第26図 1B区 S I 4かまど平面・断面図

16も蓋受けの立ち上がりを持つ。30—12は脛部中位にやや盛り上がりがあり、把手が付くと推察される。脛部はほぼ直線状に立ち上がり、開きも小さい。遺物から6世紀後半から7世紀初頭の遺構ではないかと思われる。

S I 4 (第25図)

3層上面より検出した。12G7・グリッドに位置する。北西側と北東側の壁部しか残存せず、南側は搅乱、調査区外である。南北、東西とも2.1m以上、検出面から床面までの深さは約20cmを測る。主軸はN—45°—Wである。

床面は埋3層上面で一部に硬化面が見られる。柱穴は床面上で北隅にP1を検出した。北東壁にかまどを有する。上部は削平を受け消失している。袖石は軟質砂岩で原位置を留め、3層を掘り窪めて固定している。焼成面は埋3層で赤褐色粒が多く入る。SI4はSI5を拡張し、かまどを作った可能性がある。

S I 5 (第25図)

SI4下面より検出した。12G7・グリッドに位置する。SI4と同様に北西側と北東側の壁部しか残存せず、南側は搅乱、調査区外である。南北1.6m以上、東西1.8m以上、検出面から床面までの深さは10cmを測る。長軸はN—45°—Wである。

床面は埋4層上面で砂岩ブロックが多く見られる。柱穴は床面上で北隅にP1とSI4かまど袖部下からP2を検出した。SI4で述べたかまどについては、SI4に付随するものか、SI5のものなのか迷ったが、P2がかまどに近接していたこと、SI5床面よりも高い位置にかまどの掘面があることから、SI4に付随するものと判断した。

掘立柱遺構

S B 5 (第27図)

3層上面より検出した。16D7・イ・16Eウ・イ・グリッドに位置する。P1—P3—P4—P5での平面形が長方形であり、その間の柱穴が等間隔でなく、また、対にならないものもあるが、柱穴痕も見られることから、掘立柱建物とした。長辺P1—P5は約3.6m、P3—P4は約3.5m、短辺P1—P3は約2.0m、P5—P4は約2.1mを測る。長辺方向はN—36°—Eである。

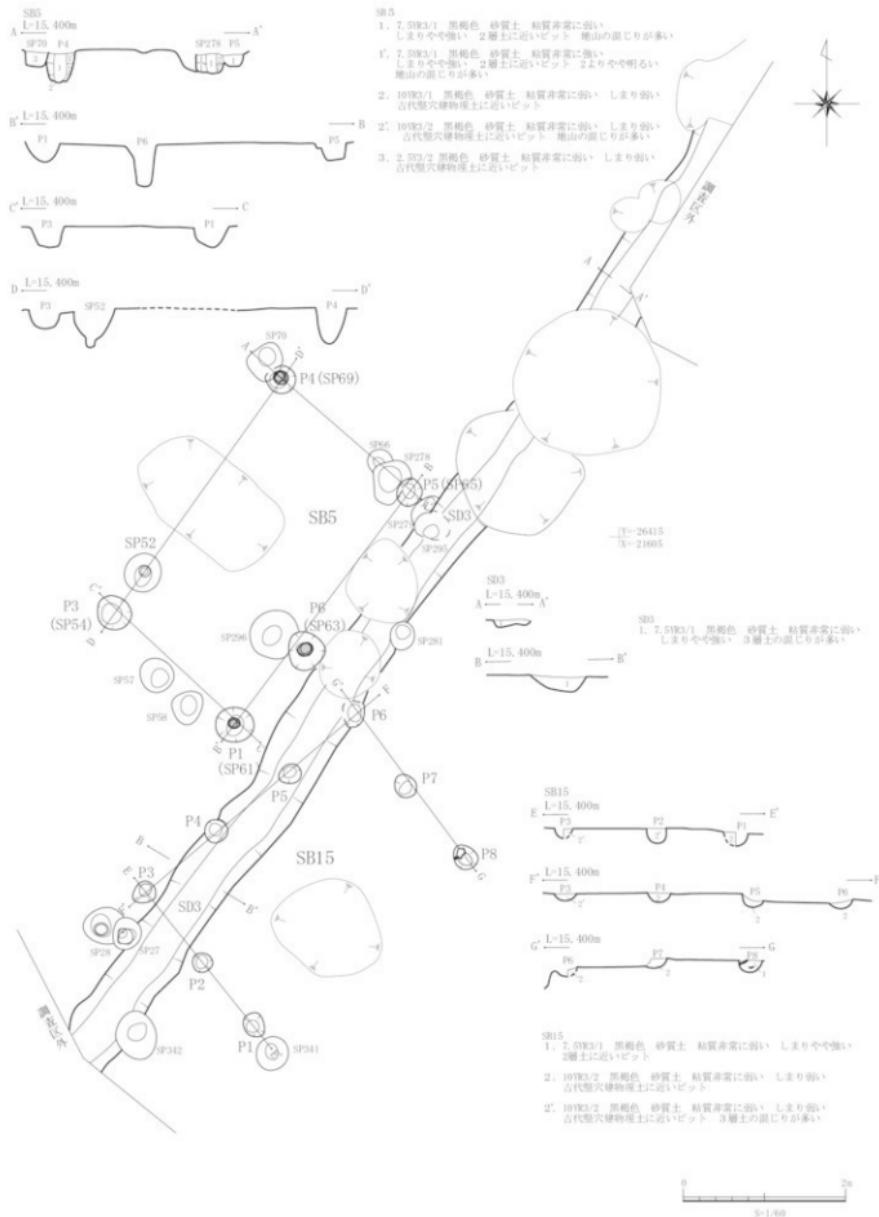
柱掘方は平面円形で径は48～60cm、深さは10～45cmを測る。下端レベルは不均一である。

S B 15 (第27図)

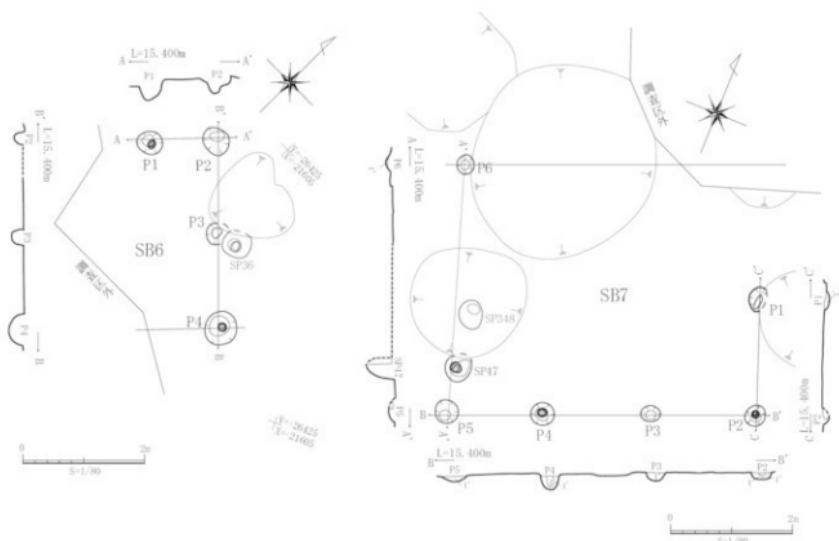
3層上面より検出した。16Dイ・16Eウ・17Eイ・17D7・グリッドに位置する。SD3との新旧関係はSB15のP4、P6がSD3の上端を壊していることから、SB15がSD3より新しいと判断した。また、SX2、SX3との新旧関係はP1がSX3の硬化面を壊し、P8がSX2の上端を壊していることから、SB15がSX2、SX3よりも新しいと判断した。

桁行は3間、梁行は2間以上の側柱建物である。北西側柱列(P3—P4—P5—P6)は約3.4m、北東側柱列(P6—P7—P8)は約2.2mを測る。桁行方向はN—37°—Wである。南西方向に延びると思われるが、SB15に伴うと思われる柱穴は1A区では検出されなかった。

柱穴間は桁行1.1～1.2m、梁行1.0～1.2mを測る。柱掘方は平面円形で径は24～34cmを測る。検出面からの深さは10～20cmを測る。下端レベルはほぼ一定で、標高14.9～15.1mである。

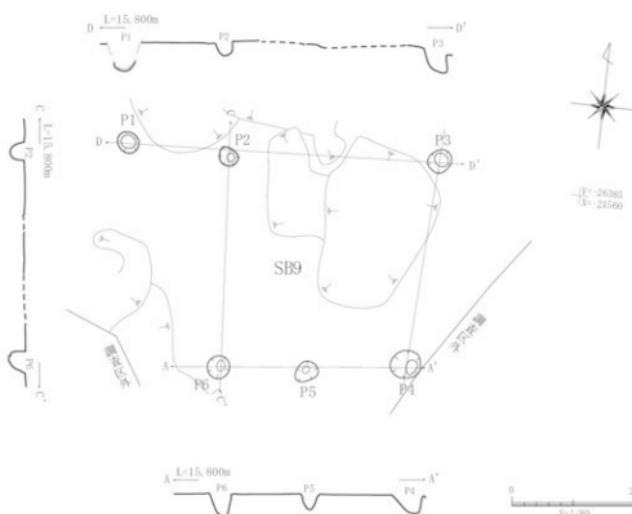


第27図 1B区 SD3, SB5, SB15平面・断面図

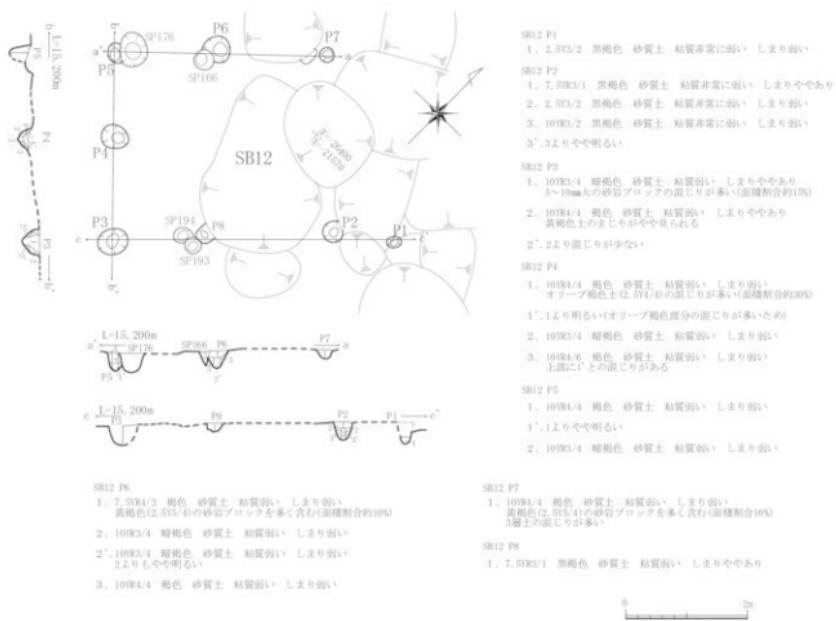
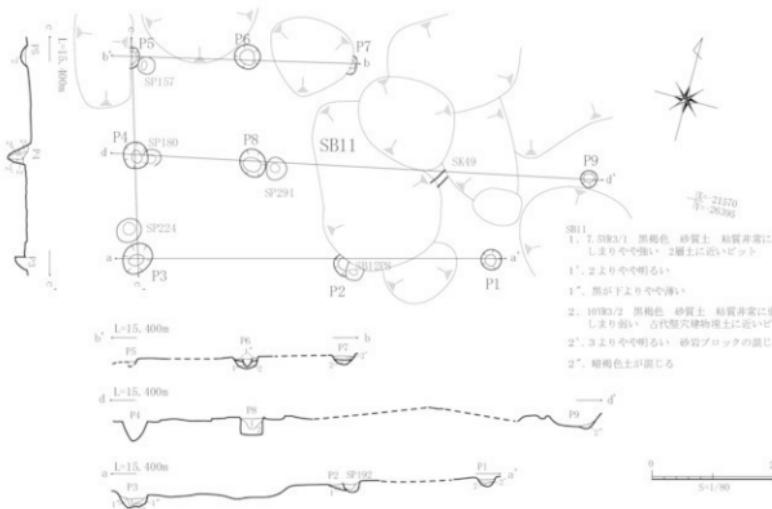


SB7
1. 10W3/2 黒褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
古代壁穴建物壁土に近いピット

1'. 10W3/2 黒褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
古代壁穴建物壁土に近いピット 3壁土の混じりが多い



第28図 1B区 SB6、SB7、SB9平面・断面図



第29図 1B区 SB11, SB12平面・断面図

S B 6 (第28図)

3層上面より検出した。16Dイ・ケ・グリッドに位置する。桁行1間以上、梁行2間の側柱建物である。南西方向は調査区外のため、規模は不明である。北東側柱列(P2-P3-P4)は約3.1m、北西側柱列(P1-P2)は1.1mを測る。桁行方向はN-45°-Wである。

柱穴間は桁行1.5~1.6m、梁行1.1m、柱掘方は平面円形で径は43~56cm、検出面からの深さは20~28cmを測る。下端レベルはほぼ一定で、標高14.8~15.0mである。

S B 7 (第28図)

3層上面より検出した。15Dイ・16Dフ・16Eケ・15Dエ・グリッドに位置する。桁行1間以上、梁行3間の側柱建物である。北西側は調査区外のため規模は不明である。東側柱列(P1-P2)は約1.9m、西側柱列(P5-P6)は約4.2m、南側柱列(P2-P3-P4-P5)は約5.0mを測る。桁行方向はN-18°-Wである。P1に対応する柱穴は攪乱に壊され、P6に対応する柱穴は調査区外であると考え建物を想定した。

柱穴間は現況で桁行1.9~4.2mであるが、残存する柱穴から1.9m前後と推察される。梁行1.5~1.8mを測る。柱掘方は平面円形で径は32~40cm、検出面からの深さは10~20cmを測る。下端レベルはほぼ均一で標高14.9~15.1mである。

S B 9 (第28図)

3層上面より検出した。11Gイ・11Hケ・12Hイ・12Gフ・グリッドに位置する。P2-P3-P4-P6での平面形は、やや歪んでいるが長方形であり柱穴痕も見られることから、掘立柱建物とした。P5、P1と対になる柱穴は攪乱で壊されている、または調査区外に残存すると思われる。桁行3間以上、梁行1間の側柱建物である。北側柱列(P1-P2-P3)は約3.6m、東側柱列(P3-P4)は約3.3mを測る。桁行方向はN-88°-Eである。柱穴間は現況で桁行1.4~3.5mであるが、残存する柱穴から1.4~1.7mと推察される。梁行3.3~3.6m、柱掘方は平面円形で径は38~52cm、検出面からの深さは20~44cmを測る。下端レベルは不均一である。

S B 11 (第29図)

3層上面より検出した。12Fイ・12Gケ・13Gイ・13Fフ・グリッドに位置する。東側が攪乱に壊されているが、桁行4間以上、梁行2間の総柱建物である。東側は調査区外のため規模は不明である。中央部柱列(P4-P8-P9)は約7.4m、西側柱列(P3-P4-P5)は約3.3mを測る。桁行方向はN-77°-Eである。

柱穴間は現況で桁行1.7~5.5mであるが、残存する柱穴から1.7~2.4mと推察される。梁行1.6~1.7mを測る。柱掘方は平面円形で径は32~54cm、検出面からの深さは6~28cmを測る。下端レベルは不均一である。

S B 12 (第29図)

3層上面より検出した。12Fイ・12Gケ・13Gイ・13Fフ・グリッドに位置する。中央部から東側にかけて攪乱に壊されているが、桁行3間、梁行2間の側柱建物である。東側は調査区外のため規模は不明である。南東側柱列(P1-P2-P8-P3)は約4.6m、南西側柱列(P3-P4-P5)は約3.1mを測る。桁行方向はN-45°-Eである。

柱穴間は現況で桁行1.0~1.8m、梁行1.4~1.7m、柱掘方は平面円形で径28~56cm、検出面から



第30図 1B区 出土遺物実測図

の深さ 10 ~ 32cm を測る。下端レベルは不均一である。

遺物は、P6 を壊す SP166 より土師器托（第30図8）、P5 を壊す SP176 より土師器皿（第30図9）が出土した。30-8は、外底部は丸く高台内面と境なく続く。高台内面には爪形痕が残る。10世紀後半のものと思われる。30-9は、内外面に赤彩を施され体部中位から外反する。

溝

S D 7（第21図）

3層上面より検出した。15F7・グリッドに位置する。SI1 を壊し、SP379 に壊される。南西側の1A区からは検出されなかった。長軸 66cm以上、短軸約 36cm、検出面からの深さ約 22cm を測る。長軸方向は N - 45° - W である。埋土は SI1 埋1層の土に似ていることから、SI1 が埋1層土に埋まる時期に埋没したものと思われる。

S D 3（第27図）

3層上面より検出した。16E7・エ・ウ・16Dイ・17Dア・グリッドに位置する。SB5、SP27、SP342、SP281、SP295 に壊され、長軸約 14.0m、幅 64 ~ 74cm、検出面からの深さ 10 ~ 20cm を測る。長軸方向は N - 35° - E である。底部のレベルは B - B' が低く標高約 15.0m であるが、A - A' では約 15.1m、南端部では約 15.1m であり、傾斜ははっきりとしない。埋土は黒褐色土の単層である。

土坑

S K 1 3（第11図）

3層上面より検出した。16E1・グリッドに位置する。平面楕円形で長軸約 76cm、短軸約 65cm、検出面からの深さ約 11cm を測る。埋土は暗褐色砂質土である。

遺物は、土師器杯（第30図2）、土師器椀（第30図5）が出土した。30-2は内外面に赤彩を施され、体部が直線的に伸びる。体部中位の厚みがやや薄く、全体的に歪みがある。30-5も内外面に赤彩を施される。体部は開きが小さいが口縁部付近で外反する。高台は体部と連続し直ぐに付く。30-2は外底部に墨書きが残るが判別できなかった。

ピット

S P 3 0（第11図）

3層上面より検出した。16Dイ・グリッドに位置する。径約 33cm、検出面からの深さ約 40cm を測る。土層断面に下部に柱抜き取り痕が見られたが、それに伴う建物は検出できなかった。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物は、土師器杯の底部（第30図3）が出土した。体部は開き気味である。内外面に赤彩を施され、外底部には墨書きが残るが、内容は判別できなかった。

S P 5 9（第11図）

3層上面より検出した。16Dイ・グリッドに位置する。長径約 50cm、短径約 43cm、検出面からの深さ約 43cm を測る。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物は、埋土の中位付近で土師器椀（第30図6）が出土した。黒色土器Aで内面はミガキ調整される。体部は直線的に伸び口縁部付近でやや外反する。高台は低い。この遺物の破片が近接する SP60 より出土したことから、この2つのピットの埋まった時期はほぼ同時期と思われる。

S P 1 2 4 (第13図)

3層上面より検出した。13Fイ・グリッドに位置する。一部を擾乱で壊されるが径約35cm、検出面からの深さ約17cmを測る。埋土は黒褐色砂質土である。

遺物は、須恵器杯(第30図13)が出土した。体部は開き気味で直線的である。

SP166とSP176出土遺物はSB9の説明を参照されたい。

遺構外遺物

(第30図4)は灯明皿である。擾乱からの出土で、底部内面に墨書で「クド」と縦書きに入る。底部外面には糸切痕が残る。かまど付近の灯明皿と思われる。

3.1C区

竪穴建物

S I 6 (第32図)

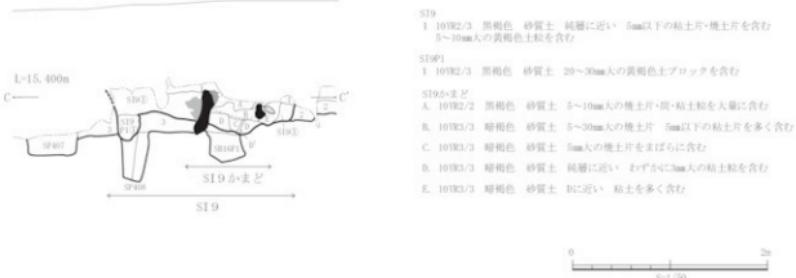
3層上面より検出した。15Gウ・グリッドに位置する。北東側は調査区外、南西側は擾乱に壊される。現況で南北約3.2m、東西1.4m、床面の検出面からの深さは約38cmを測る。主軸はN-40°-Wである。

床面は埋3層上面でしまりが強くなかったことから掘方面であると思われる。柱穴はSP399を床面で検出した。主柱穴の可能性がある。

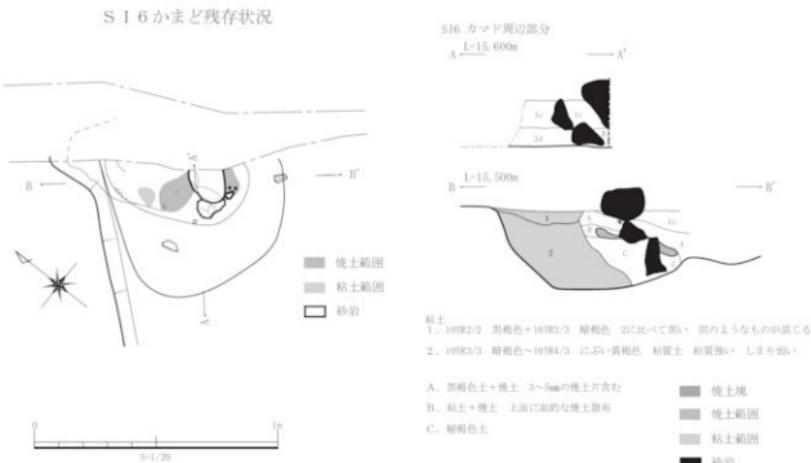
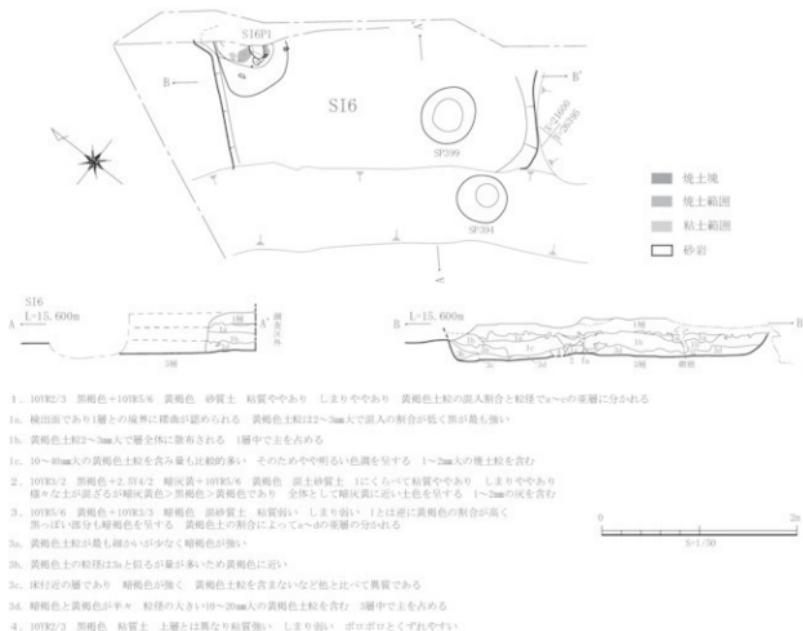
北西側にかまど跡が確認された。砂岩、焼土、粘土が残存する。いちばん深く埋まっている砂岩は脇の支脚として原位置を保っている。かまど掘方面に支脚を立て、その周囲に暗褐色土を置き安定させている。その上の2つの砂岩は壊されたもので原位置ではない。焼成面はかまどB層上面で面的な焼土が残存する。

S I 9 (第31図)

調査区北西側壁断面で検出した。16Fイ・グリッドに位置する。1A区では検出されていない。1C区では、擾乱に壊され、断面でかまど支柱、埋土等を確認した。壁面とSB16P1柱穴が少し重なっているため、壁断面の図面では竪穴建物の下から出土したように見えるが、P1埋土中にかまど粘土や焼土を含んでいないことから、実際にはSB16P1に壊されている。



第31図 1C区 S I 9断面図



第32図 1C区 SI6 平面・断面図



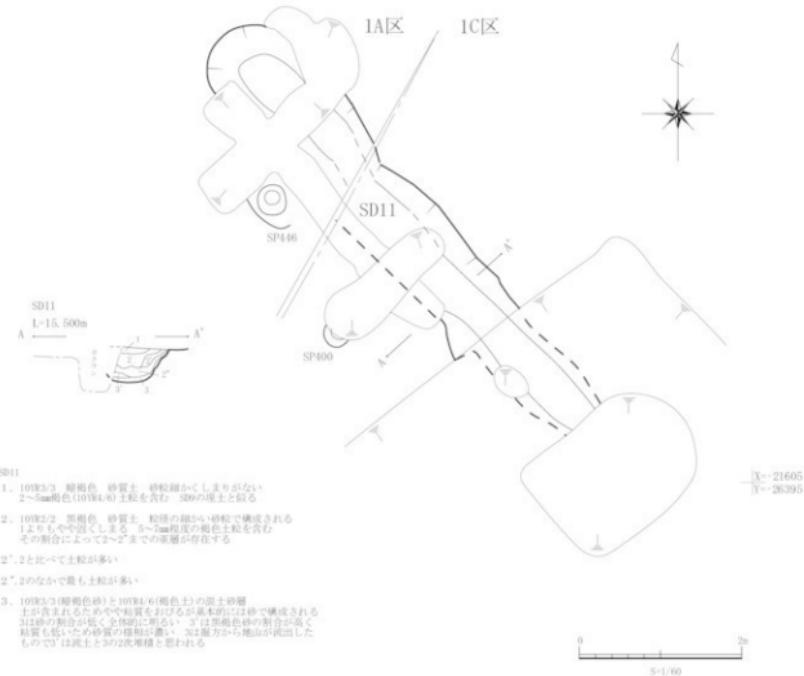
第33図 1C区 古代遺構平面・断面図

遺物は、壁面の支柱が埋設されている埋土中に須恵器杯身（第36図5）が出土した。蓋受けの返りを持ち、外底部は回転ヘラ切り後ナデ調整されているようである。6世紀後半から7世紀初めのものと思われる。

掘立柱遺構

S B 1 6（第33図）

3層搅乱内より検出した。16Fイ・グリッドに位置する。対になる柱列は1A区、1C区では検出されていない。柱列（P1—P2—P3）は約3.6m、柱穴間は、P1—P2は約1.7m、P2—P3は約1.9mを測る。平面形はP1、P3は円形、P2は隅丸方形である。P1、P3の径はどちらも54cm、P2の長軸は54cmを測る。検出面からの深さは20～50cmを測る。下端レベルはほぼ揃い標高約14.8m前後である。



第34図 1C区 SD11平面・断面図

土坑

SK62 (第33図)

3層上面より検出した。16Fイ・17F7・グリッドに位置する。平面不整円形を呈し、長軸約83cm、短軸約75cm、検出面からの深さ約5cmを測る。埋土は黒褐色土である。遺物が多く破棄されている土器溜りである。

遺物は、土師器櫃（第36図7）、（第36図8）が出土した。どちらも外器面はハケメ調整後にミガキが入る。

SK52 (第35図)

3層上面より検出した。17Gエ・グリッドに位置する。南西部はSK60に壊され、SK59を壊す。平面梢円形を呈す。北西部は擾乱、南東部は調査区外になるため、現況では長軸約106cm、短軸約98cm、検出面からの深さ約30cmを測る。底部よりSK66が出土した。

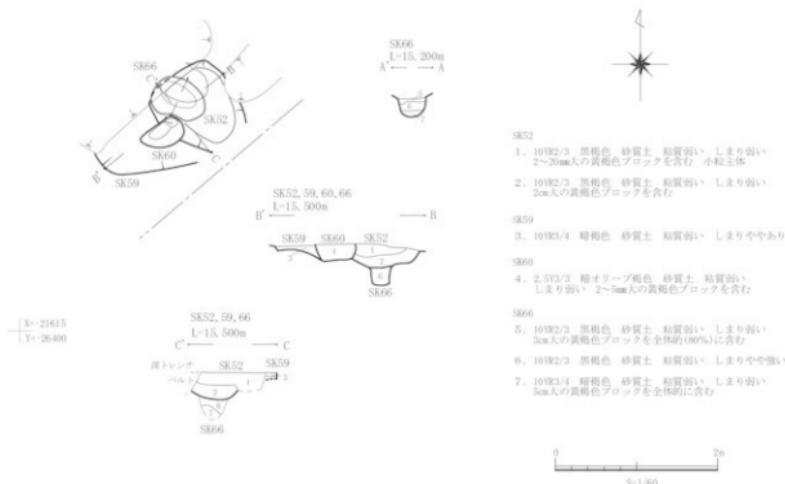
遺物は、土師器櫃（第36図3）が出土した。内外面に赤彩を施され、体部はやや内湾して口縁部に向かう。高台はやや外向きである。

SK66 (第35図)

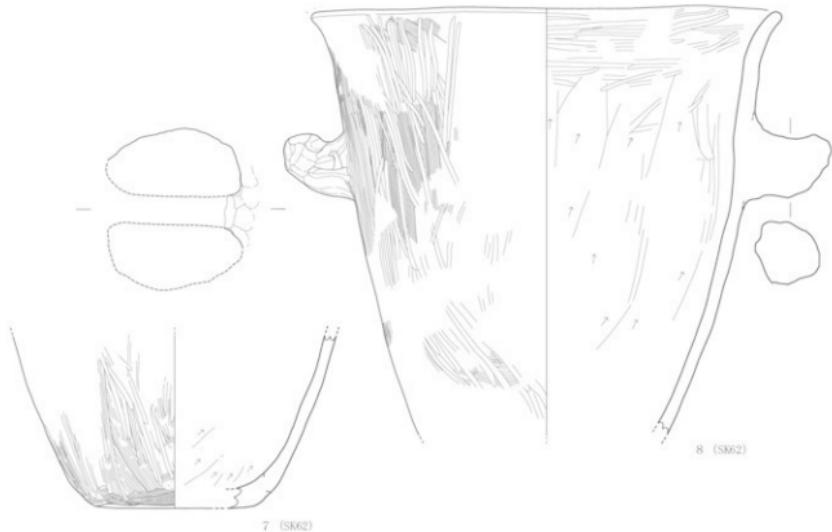
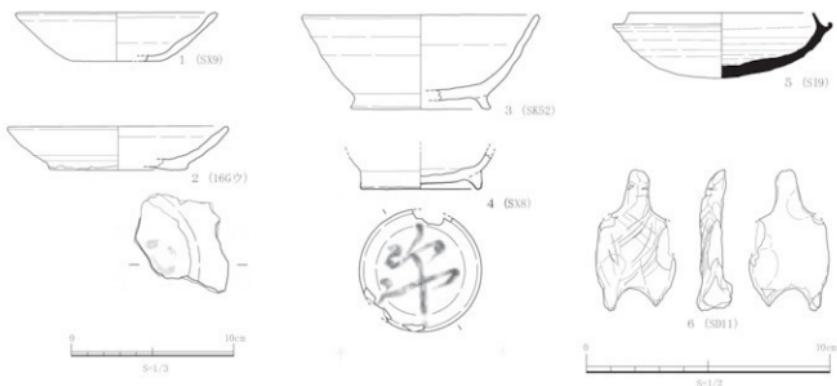
SK52底部より検出した。17Gエ・グリッドに位置する。上部はSK52に壊されている可能性が高い。平面梢円形を呈す。長軸約68cm、短軸約46cm、検出面からの深さ約41cmを測る。

SK59 (第35図)

3層上面より検出した。17Gエ・グリッドに位置する。北西部を擾乱、北東部をSK52に壊される。平面規形規模は不明である。現況で長軸89cm以上、短軸88cm以上、検出面からの深さ約5cmを測る。



第35図 1C区 SK52, SK59, SK60, SK66平面・断面図



0
5/1/3
10cm

第36図 1C区 出土遺物実測図

溝

S D 1 0 (第33図)

3層上面より検出した。17Fア・イ・グリッドに位置する。SK55を壊し、SK77、SP380に壊される。長軸は約7.3m、幅78~105cm、検出面からの深さ30~35cmを測る。長軸方向はN-42°-Wである。

土層断面の埋土の堆積状況から浚渫は2回程行われていると考えられる。まず埋土3の堆積後1回目の浚渫、埋土2の堆積後2回目の浚渫が行われたのではないだろうか。また、B-B'間では埋土1が堆積し、A-A'間では確認できないことから、1回目の浚渫に比べ2回目は小規模であったと思われる。また、埋土1がSD9(第78図参照)埋土と似ているため、同時期に廃絶した可能性がある。底部のレベルは約15.0mで、1回目の浚渫でもほぼ変わらない。傾斜は浚渫前と1回目の浚渫ではA、Bとともにほぼ水平であるが、2回目の浚渫では埋1層をAでは確認できなかったことから南西側に傾くようである。

S D 1 1 (第34図)

3層上面より検出した。15Fイ・16Fフ・16Gエ・グリッドに位置する。南西部、南東部を搅乱に壊される。長軸は約6.5m、幅は搅乱で壊されていないところで88~100cm、検出面からの深さ31~44cmを測る。長軸方向はN-45°-Wである。

土層断面の埋土の堆積状況から、埋土3が埋土2に切られ、埋土2が埋土1に切られていることから、浚渫は2回程行われていると考えられる。SD10と同様に2回目の浚渫は小規模のようである。傾斜は北西端より約17cm南東端が低くなる。

遺物は、土人形(第36図6)が出土した。

S X 8 (第10図)

3層上面より検出した。16Gイ・グリッドに位置する。SK61、SK67、SK69、搅乱に壊される。平面形は壊されているためはっきりとはしないが、隅丸方形と思われる。長軸は約195cm、短軸は現況で115cm以上、検出面からの深さ約23cmを測る。掘方面は東方向に12cm程度下がっている。埋土は黒褐色砂層土で、掘方面より遺構内ピットP1~P7を検出した。

遺物は、土師器楕の底部(第36図4)が出土した。底部に残る体部の一部から、体部の開きは小さいと思われる。高台は逆三角形に近い台形である。底部外面に墨書「出」に近い文字が残る。

S X 9 (第33図)

3層上面より検出した。16Fイ・17Fフ・グリッドに位置する。SK62、SK63、SK65、SP406、搅乱に壊される。平面形は搅乱に壊されるため不明であるが、現況で長軸は約187cm、短軸は112cm以上、検出面からの深さ約10cmを測る。掘方面からP2、P3を検出した。

遺物は、土師器杯(第36図1)が出土した。内外面に赤彩を施され、体部は開き、直線的に口縁部に向かう。

遺構外出土遺物

(第36図2)は土師器杯である。16Gウ・グリッドから出土した。内外面に赤彩を施され、体部はやや開き気味である。底部外面に墨書が残る。

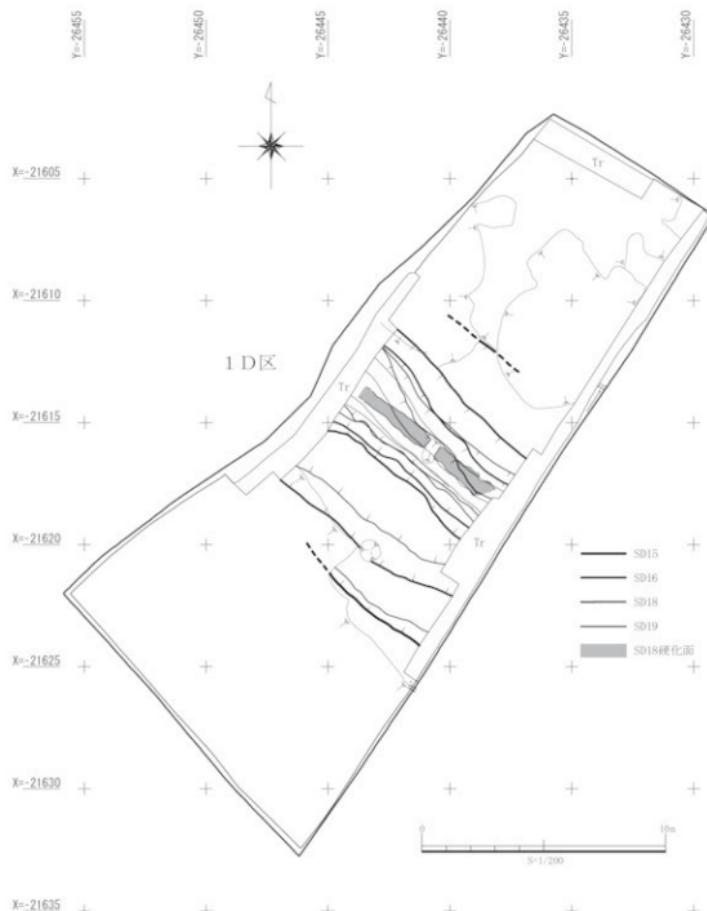
4. 1 D区

溝

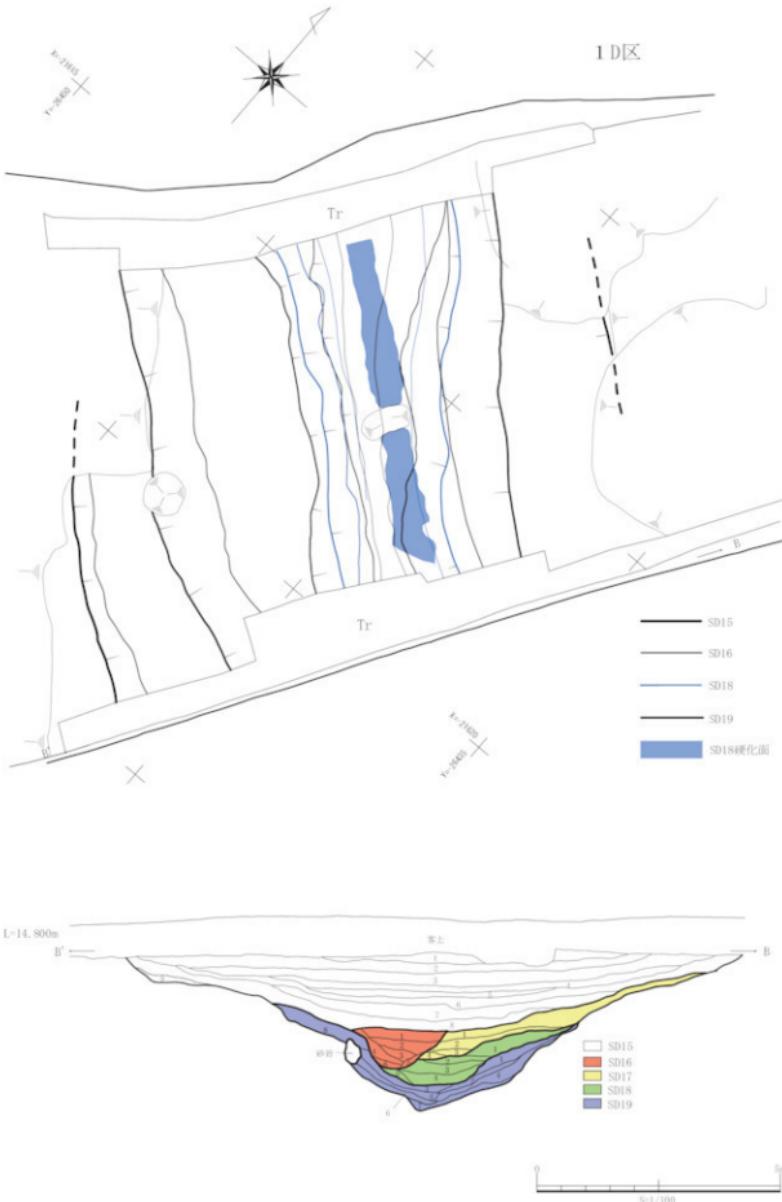
SD15~19 (第38図)

3層上面より検出した。1A区で報告した道路状遺構SX7に直行し三叉路となる溝となががっていると推察される。1D区南東側に調査区に直行するように掘られている。

掘削時、溝の重なりは意識していたが、1本の溝として掘削していくため、SD16、17の上端、下端、SD19の上端の記録は十分でない。SD18は硬化面を有する溝であり、その上端、下端、硬化面等を記録した。



第37図 1D区 SD15~SD19平面図 (1/200)



第38図 1D区 SD15～SD19平面・断面図

SD15

1. 10W3/3 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
褐色の粘土質の1~2cm大のブロック状のものを多く含む
2. 10W3/2 黒褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
3. 10W3/3 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
暗褐色の地色のものと少く含む
4. 10W3/3 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
5. 10W3/3 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
1~2cm大の暗褐色のものを多く含む
6. 10W3/4 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
8.8cmの砂質土層(土層化)で本來の層より若干はやばやしている
7. 10W3/4 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
1~2cm大の暗褐色の粒のものを多く含みます
8. 10W3/3 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
1~2cm大の暗褐色の粒のものを多く含みます
9. 2.5H4/4 オリーブ褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
8.8cmの砂質土層(土層化)で本來の層より若干はやばやしている

SD16

1. 7.5H3/2 黒褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
1~2cm大のオリーブ褐色のブロック状のものを多く含む
2. 10H3/4 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
オリーブ褐色のものを少く含む
3. 10H3/3 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
2~3cm大のオリーブ褐色のブロック状のものを多く含む
4. 10H2/3 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
7.5cm大のオリーブ褐色の土と黒褐色の土が混じて入ってくる
5. 10H2/3 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
若干粘土質が強くなる
6. 10H2/3 黑褐色 砂質土 粘質やや強い しまりやや強い
褐色の2~3cm大のブロック状のものを多く含む

SD17

1. 10H3/4 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
2~3cm大のオリーブ褐色のブロック状のものを含みます
2. 10H3/4 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
オリーブ褐色のものを少く含む
3. 10H3/3 暗褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
砂と粘土が混ざっている(硬化面として使われていた可能性は高)
4. 10H2/3 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや弱い

SD18

1. 7.5H3/2 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
褐色の1~2mmの粒状のものを少く含む
2. 2.5H4/4 黄褐色 砂質土 粘質強い しまり普通に強い
砂と粘土が混ざっている(硬化面として使われていた可能性は高)
3. 7.5H4/2 黄褐色 砂質土 粘質強い しまりやや弱い 砂質やや強い
砂を少く含む粘土が非常に強
4. 7.5H2/2 黑褐色 砂質土 粘質やや強い しまり弱い
砂分を多く含む(土層化し秋からたまつものだと想われる)
5. 10H2/3 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い
褐色の1~2mmの砂の塊を少く含む

SD19

1. 10H2/3 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
2. 7.5H3/2 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
3. 10H2/2 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
オリーブ褐色の1~2cm大の粒を少く含む
4. 10H3/3 黑褐色 砂質土 粘質やや弱い しまりやや強い
5. 2.5H3/1 黑褐色 砂質土 粘質やや弱い しまり弱い
砂分を多く含みます
6. 7.5H2/3 黑褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
砂分を多く含みます
7. 2.5H3/3 黃オリーブ褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまり弱い
砂分を多く含みます
8. 2.5H4/4 オリーブ褐色 砂質土 粘質非常に弱い しまりやや強い

第39図 1D区 SD15~SD19土層注記

S D 1 5 (第38図)

南東ー北西方向の調査区を横切る溝であり、方位はN-50°-Wである。東西は調査区外に伸びる溝であるため長さは不明であるが、現況では3層上面での幅約11.4m、長さ7.4m以上(SX7で確認された溝部上端からの距離(長さ)約26.8m)、検出面から掘方面までの深さは約1.5mを測る。硬化面等の残存は見られない。

遺物は、土師器榤(第40図2)、須恵器榤(第40図4)、土師器甕(第40図7)が出土した。40-2は体部はやや内湾し、高台は外側へ開く。40-4は赤焼けの須恵器で体部、底部は壊れている。底部外面に「×」のようなヘラ書きが残る。40-7は外面は破損がひどいが一部にハケメ調整が見られる。内面はケズリ調整である。

S D 1 6 (第38図)

SD17、SD18を壊し、上部をSD15に壊される。現況で幅約2.0m、上端から掘方面までの深さ約82cmを測る。方向はSD15とほぼ同じ方向と思われる。長さは不明である。

遺物は、須恵器榤(第40図3)が出土した。体部は直線的に口縁部に向かう。高台の断面形は台形である。

S D 1 7 (第38図)

SD18を壊し、北西側をSD15、SD16に壊される。壊されていなければ幅9.0m程の溝であった可能性がある。現況では幅約5.5m、上端から掘方面までの深さ約1.6mを測る。方向はSD15とほぼ同じ方向と思われる。長さは不明である。埋3層はしまりが非常に強く、砂と粘土の混ざった土であったことから硬化面の可能性が高い。

S D 1 8 (第38図)

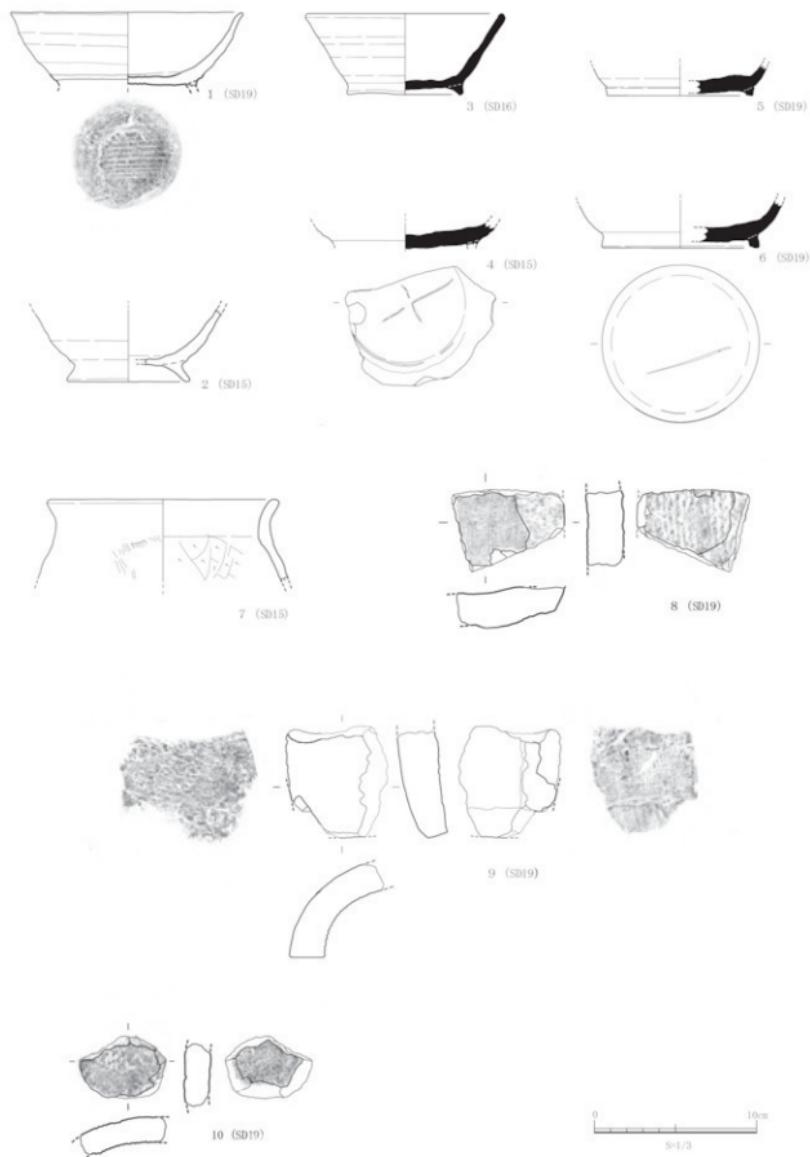
SD19を壊し、SD16、SD17に壊される。現況で幅約4.0m、上端から掘方面までの深さ約1.2mを測る。長さ7.4m以上で、方向はSD15と同方向である。埋2層はしまりが強く、砂と粘土の混ざった土で、硬化面を形成している。硬化面は46~71cmの幅で南東ー北西方向に伸び、南東端レベルが約12.4m、北西端レベルが約12.2mと南西から北東へ傾いている。この硬化面がSX7との三叉路とつながると思われる。

S D 1 9 (第38図)

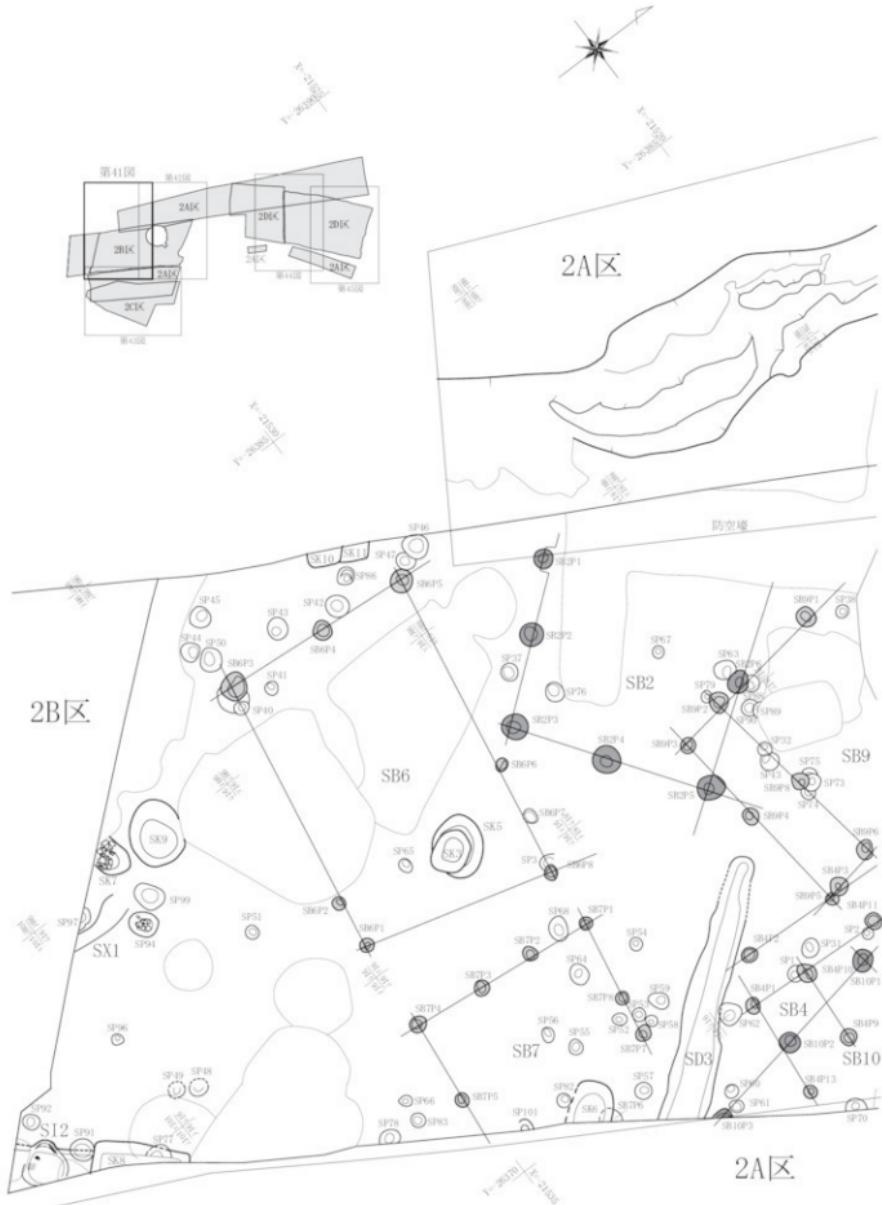
SD18に壊される。SD18とほぼ主軸を同じくしているが、土層の観察からも別遺構として認識し調査を行った。埋土は砂質が強く鉄分を多く含む。

遺物は、土師器榤(第40図1)、須恵器榤(第40図5)、(第40図6)、瓦(第40図8)、(第40図9)、(第40図10)が出土した。40-1は体部はやや内湾し、口縁部付近で少し外反する。底部外面に板状圧痕が残る。高台は壊れているが、やや外向きに付くようである。40-5は外面に自然釉が付く。高台は底部端に付く。40-6は外底部にヘラ書きが残る。40-8は平瓦で、内面に縄目痕、外面に布目痕が残る。40-9・10は丸瓦で、40-8とは逆に内面に布目が残り、外面には網目痕が一部に見られる。

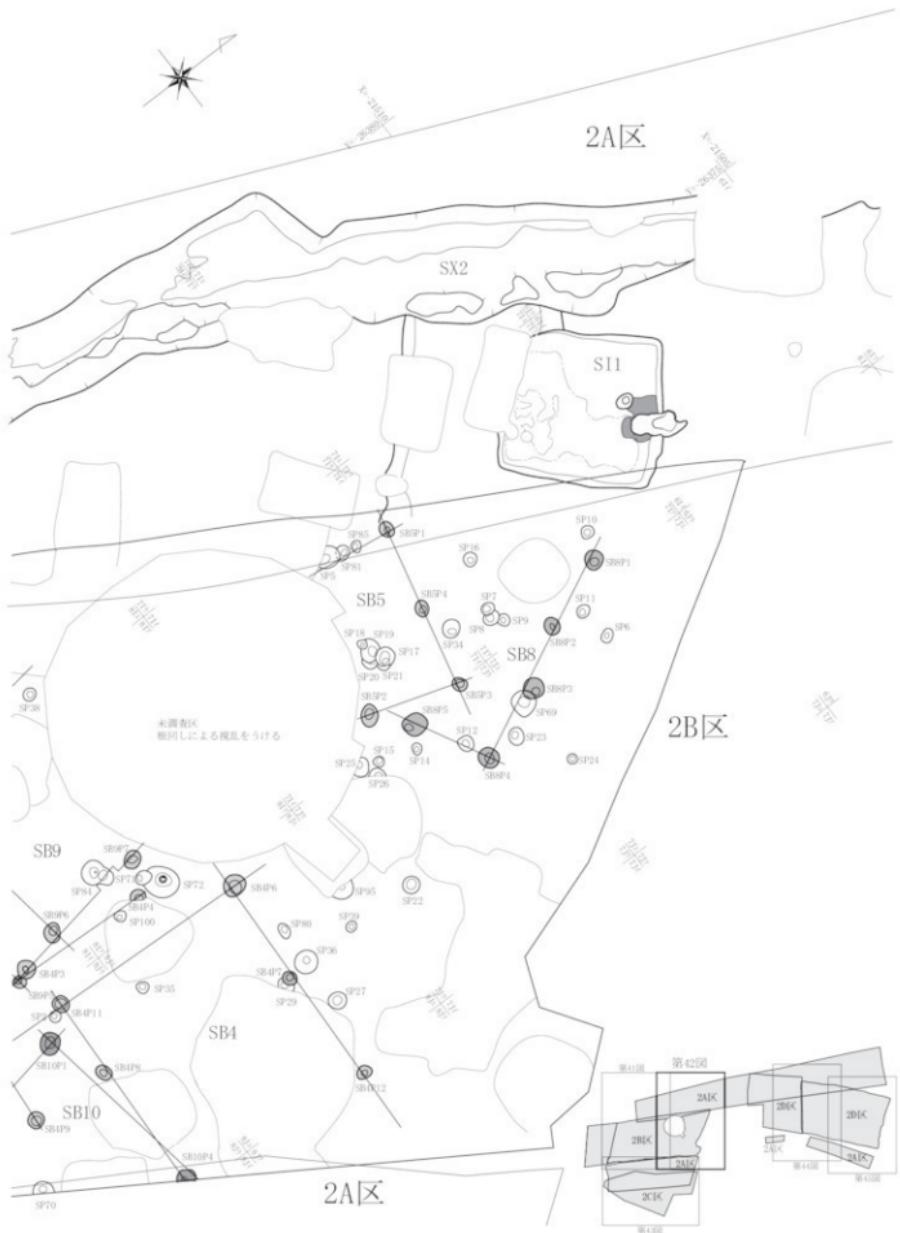
SX15~19の遺物から、道路状遺構SX9の三叉路となる溝が機能していた時期は9世紀中葉~後半ではないかと推察される。



第40図 1D区 出土遺物実測図

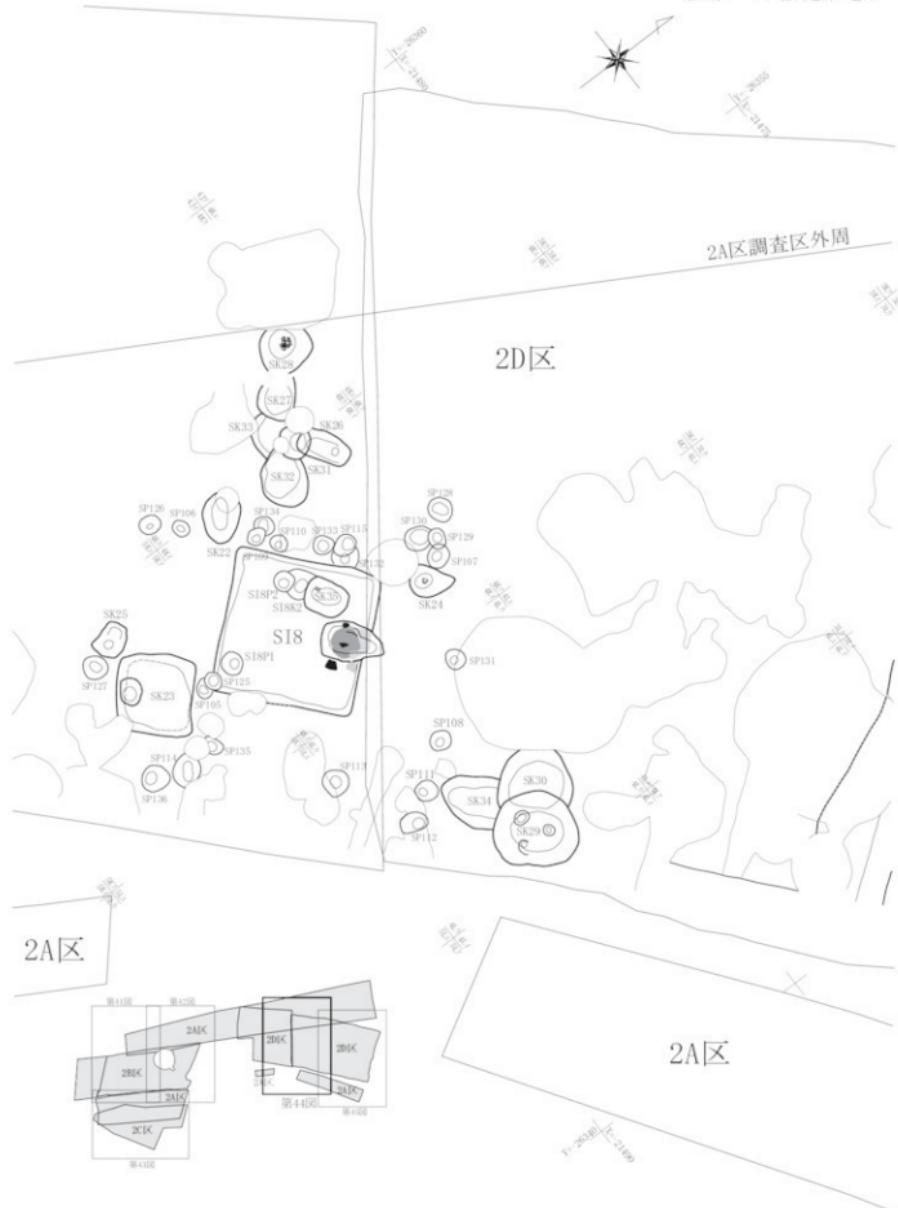


第41図 2区 古代遺構配置図1 (1/100)

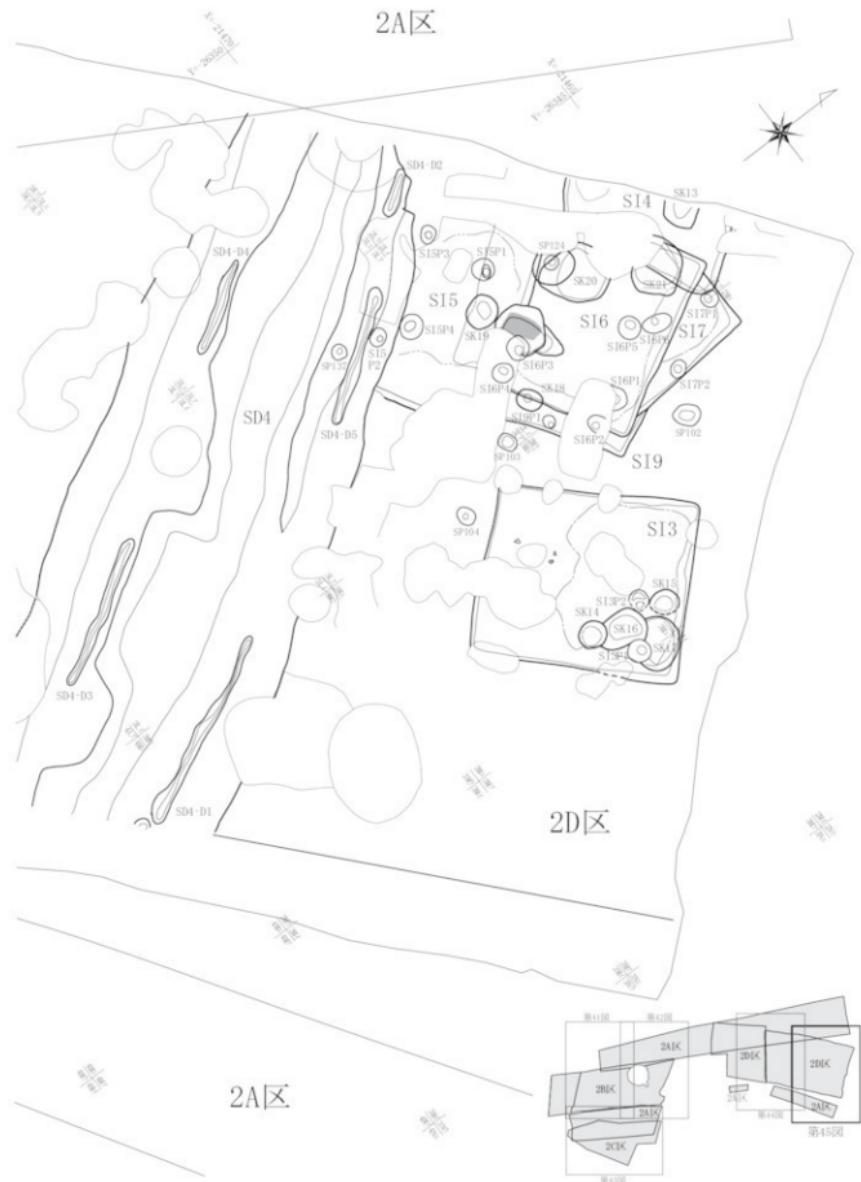


第42図 2区 古代遺構配置図2 (1/100)

第43図 2区 古代遺構配置図3 (1/100)



第44図 2区 古代遺構配置図4 (1/100)



第45図 2区 古代遺構配置図 5 (1/100)

第3節 2区古代遺構・遺物

調査は、平成17年度に2A区、平成19年度に2B区、平成21年に2C区、平成24年度に2D区を行った。記載遺構について、調査区をまたがる場合、検出されなかった遺構もあるが、現況を報告する。

1.2 A区

竪穴建物

S I 1 (第46図)

3層上面から出土した。61イ・71ア・グリッドに位置する。南西部を搅乱で壊される。南北(主軸)約3.3m、東西約3.1m、検出面から機能面までの深さは約50cmを測る。主軸はN-43°-Eである。壊されたかまどが北東側の中央部に残存する。袖石を配し、粘土も残すことから天井部が落ち込んだものと思われる。かまど内部からは土師器片が出土する。かまど焚口の前方に焼土と炭化物粒が散らばっている。袖石は軟質砂岩を用い、被熱により赤褐色に変色する。かまどから北東方向に向けて煙道が確認できたが、破壊され原形を留めていない。

機能面は、掘方面的東半分に硬化面が残ることから、貼床土を特に入れていよい様である。かまどの南方向にピットが検出できたが、主柱穴は検出できなかった。

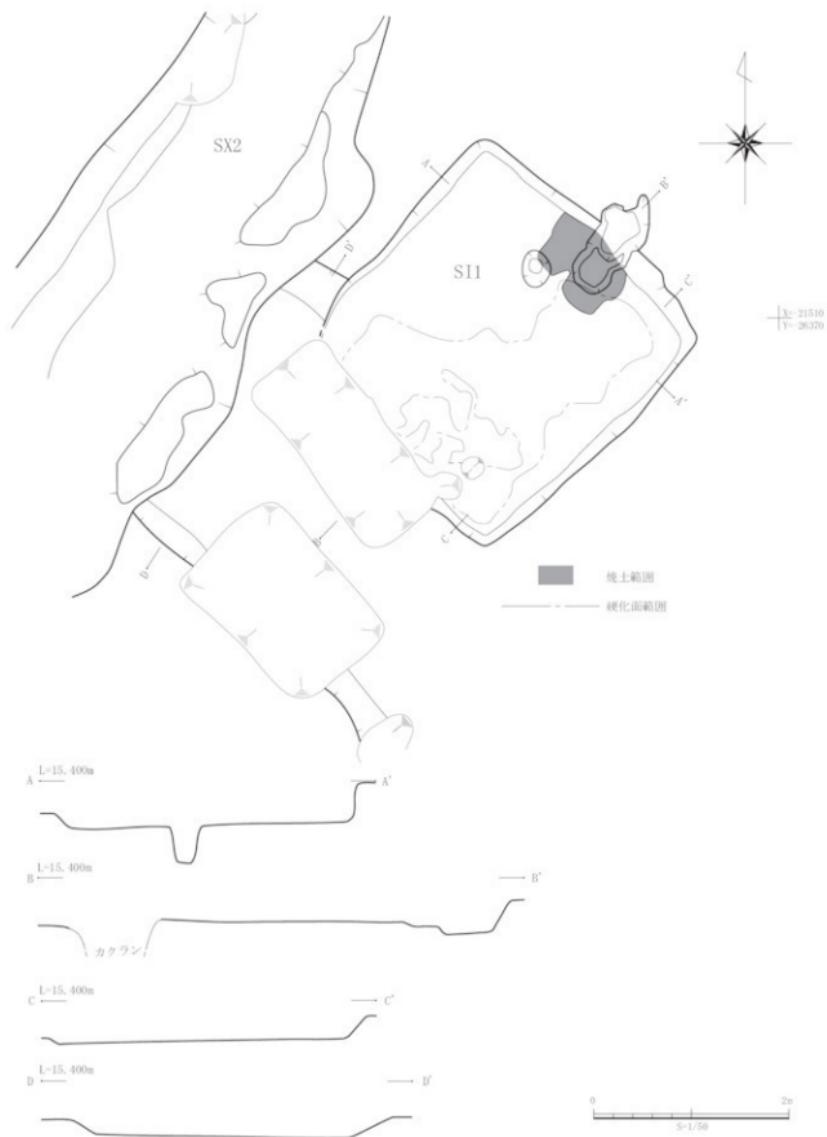
遺物は、土師器杯(第48図1)、須恵器楕(第48図4)、須恵器蓋(第48図5)が出土した。48-1は内面外面に濃い赤彩を施される。体部はやや内湾し口縁部に向かう。48-4は厚みが薄く、高台は底部端よりやや内側に付く。48-5は天井部は膨らみ、体部下位は横に広がる。口縁部では断面形が小さい三角形で下方へ向く。

S X 2 (第47図)

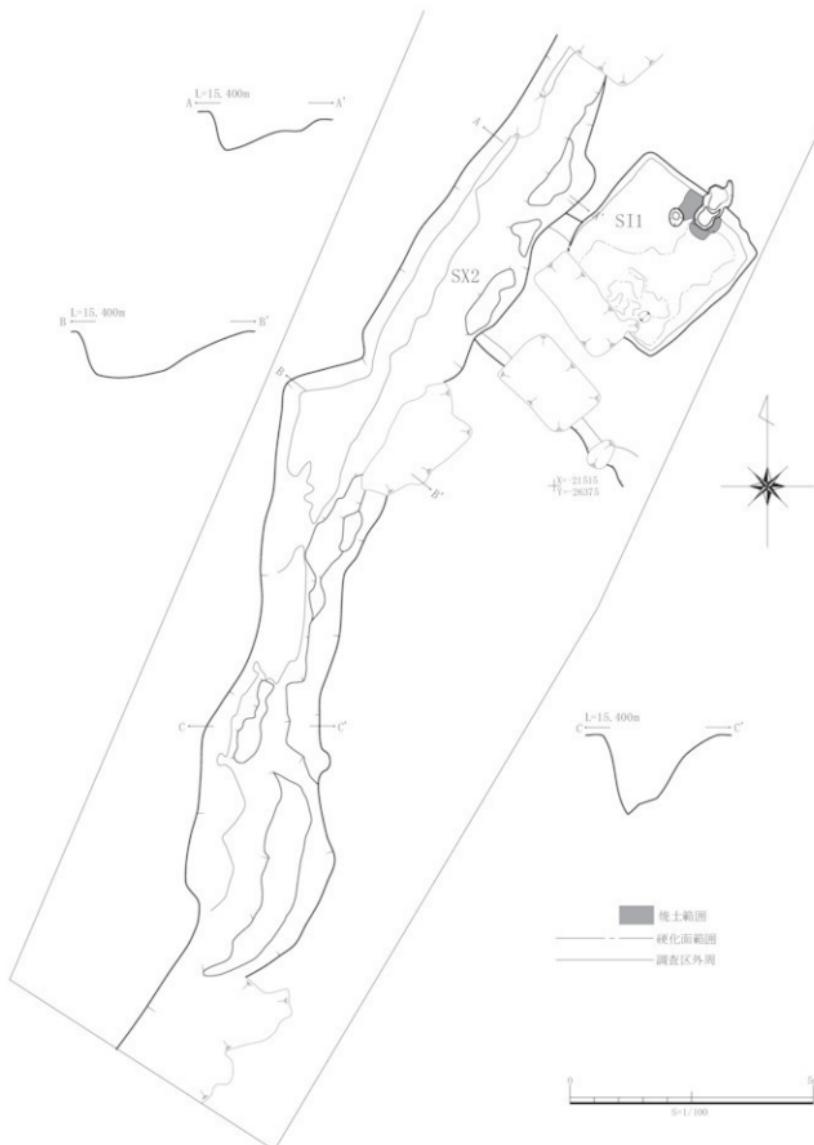
2A区西側に位置する。長さ約22.6m、幅はA-A'約2.2m、B-B'約3.5m、C-C'約2.6m、深さは検出面よりA-A'約0.8m、B-B'約1.0m、C-C'約1.6mを測る。方向はN-22°-Eである。西侧が深く、また、南側に向かうにつれ、深さを増す。自然流路の可能性もあるが、今回は不明遺構として挙げる。

遺構外出土遺物

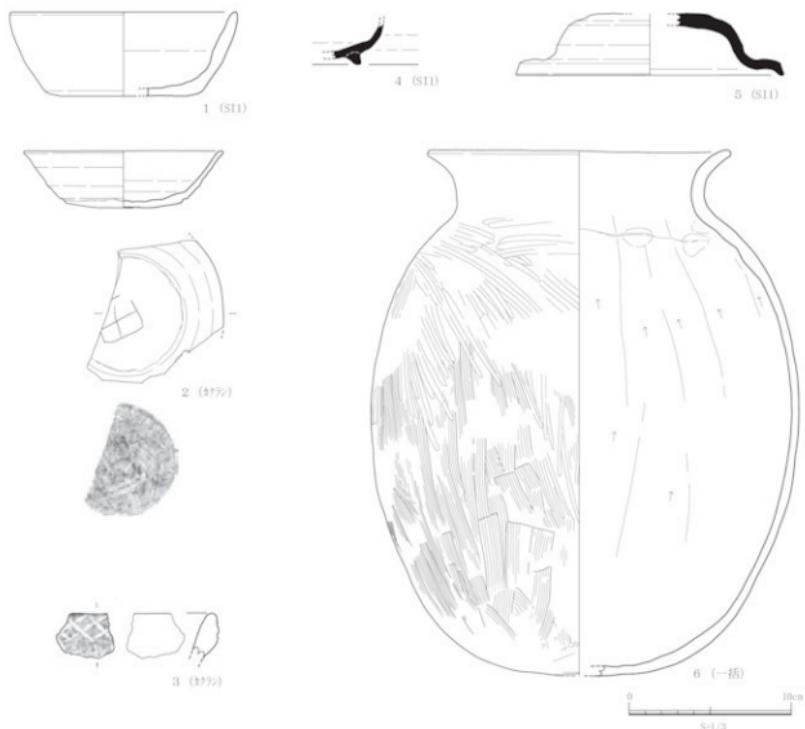
(第48図2)は土師器杯である。搅乱から出土した。内外面に赤彩を施され、体部は口縁部に向かって直線的に伸びる。外底面に「田」のような線刻が残る。(第48図3)は繩文上器の口縁部である。搅乱から出土した。外面に板等で刻み目を入れ、それを交差させ、菱形状の模様が付く。(第48図6)は土師器甕である。2D区との境界付近の土器溝より出土したが地点は不明である。内面はケズリ調整、外面は底部～胴部中位までハケメが入り、中位から上位はミガキ調整される。



第46図 2 A区 SI1 平面・断面図



第47図 2A区 SX2 平面・断面図



第48図 2 A区 出土遺物実測図

2. 2B・2C区

堅穴物

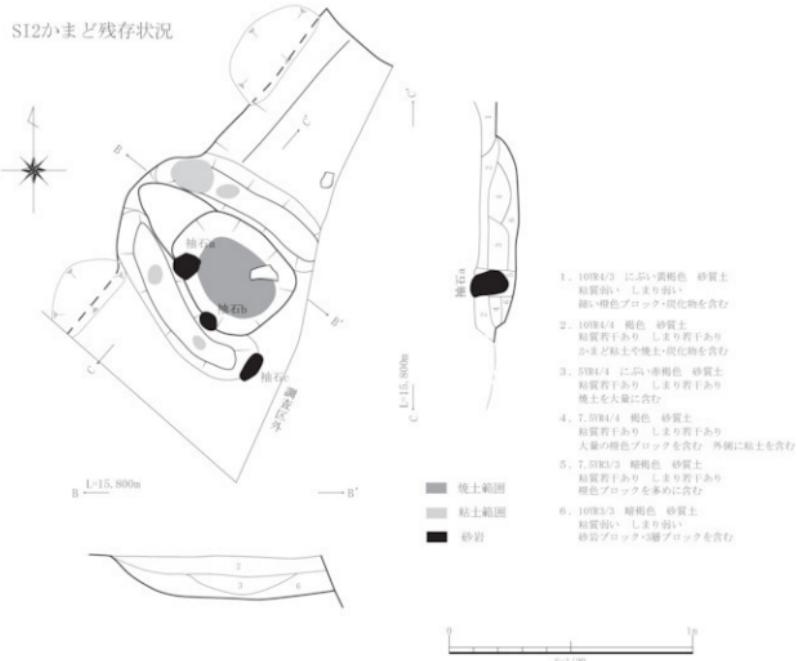
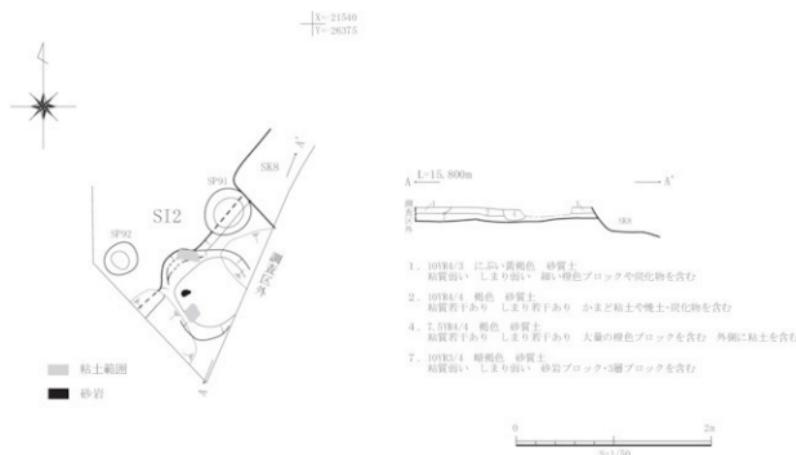
S12 (第49図)

3層上面から検出した。101エ・ア・グリッドに位置する。北東部をSP91、SK8に壊される。南西側は調査区外、東側は2A区であるが、2A区では検出されていない。

S12の残存は南北約1.6m、東西（主軸）は約1.0m、検出面から機能面までの深さは約7cmを測る。主軸はN-50°-Wである。壊されたかまどが残存し、袖石aはやや内寄りであるが埋められた形跡もあるため、原位置を保っていると思われる。袖石b、cは埋められた形跡もなく、下の土には焼土チップが混じるため、残存ではなく、崩落時に移動したものと思われる。

硬化面等の残存は認められないが3層上はブロック状に硬化し、また上面が凸凹で南北方向に下がっていることから、機能面は水平に堆積する埋6層上面と思われる。

断面の埋土状況より貼床の埋6層土がかまどの下部にも入っていることから、建物掘方時にかまどま



第49図 2B区 S I 2 平面・断面図

で掘り、その後、貼床土をかまと下部まで入れて、かまとを製作していると思われる。焼成面は焼土が出土する埋3層である。

残存がかまと周辺部のみであるため主柱穴等は検出できなかった。

遺物は、土師器高杯の杯部（第56図3）が出土した。外器面はヘラミガキ調整、内器面は一部ハケメ調整される。

掘立柱遺構

S B 2（第50図）

3層上面から検出した。8Iイ・ウ・エ・グリッドに位置する。北東側は壊乱（防空壕と思われる）に壊される。北西側の別調査区では、SB2の柱穴は検出されていない。桁行2間、梁行2間の側柱建物である。現況で南西側柱列（P1-P2-P3）は約3.5m、南東側柱列（P3-P4-P5）は約4.2mを測る。桁行方向はN-37°-Wである。

柱穴間は桁行1.6～1.9m、梁行2.0～2.2mを測る。柱掘方は平面円形で径は40～60cm、深さは検出面より4～44cmを測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

S B 4（第51図）

3層上面から検出した。8Iア・イ・8Jウ・エ・グリッドに位置する。東側の調査区では、SB4の柱穴は検出されていない。北側から2列目の柱列が検出されていないが、桁行2間以上、梁行4間、西側に廂が着く総柱建物を想定した。2列目の柱列は壊乱で壊されていると思われる。現況で西側柱列（P1-P10-P11-P6）が約7.3m、北側柱列（P6-P7-P12）が約4.6mを測る。桁行方向はN-88°-Wである。

西側柱列から約1.0m、西側に廂が着く柱列（P2-P3-P4）があり、約5.0mを測る。

柱穴間は不揃いで桁行1.6～2.5mを測る。梁行は1.3～4.3mであるが、残存する柱穴から1.3～2.3mと推察される。柱掘方は平面円形で径は24～44cm、深さは検出面より4～52cmを測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

S B 5（第52図）

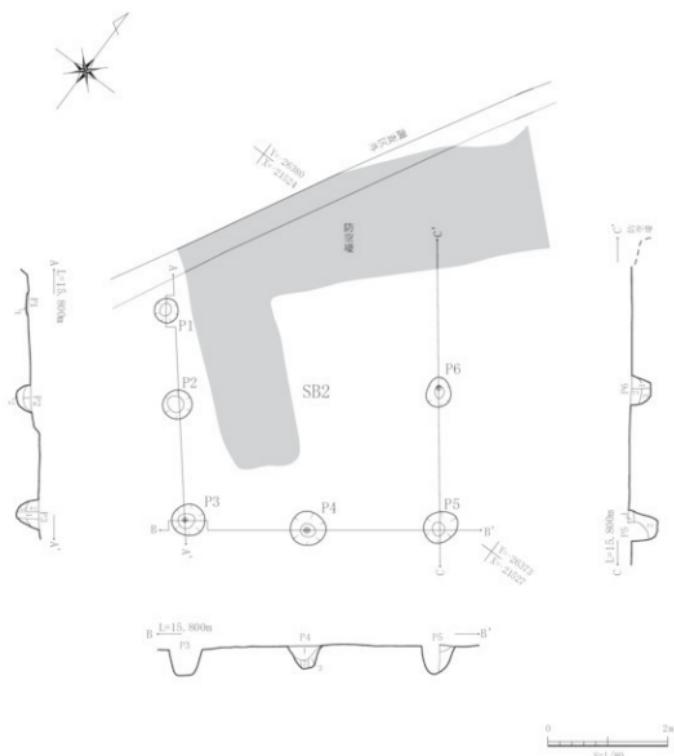
3層上面から検出した。7Iイ・グリッドに位置する。桁行2間、梁行1間の側柱建物である。P4と対になる柱穴は調査区外にあたり検出できなかった。現況で北側柱列（P1-P4-P3）が約3.5m、東側柱列（P3-P2）が約2.0mを測る。桁行方向はN-78°-Wである。

柱穴間は桁行約1.7～1.8m、梁行約2.0mを測る。柱掘方は平面円形で径は30～44cm、深さは8～36cmを測る。柱穴の下端レベルは不均一である。

S B 8（第52図）

3層上面から検出した。7Iア・イ・7Jウ・エ・グリッドに位置する。南西側は樹木のため調査できなかった。西側の2A区ではSB8の柱穴は検出されていない。桁行3間以上、梁行1間以上の側柱建物である。現況で北西側柱列（P1-P2-P3-P4）は4.5m、南東側柱列（P4-P5）は約1.8mを測る。桁行方向はN-25°-Wである。

柱穴間は桁行1.3～1.6m、梁行1.7mを測る。柱掘方は平面円形で径は37～54cm、深さは検出面より8～52cmを測る。柱穴の下端レベルは不均一である。



P1
1. 10TR3/3 増穂色 砂質土 粘質弱い

P2
1. 10TR2/3 増穂色 砂質土 粘質弱い 砂岩ブロックを含む
2. 10TR3/4 増穂色 砂質土 粘質弱い 硅酸粒子を少し含む

P3
1. 10TR2/3 黒褐色 砂質土 粘質弱い 2, 3よりブロックを多く含む
2. 10TR3/3 増穂色 砂質土 粘質弱い 砂岩ブロックを含む
3. 10TR3/4 増穂色 砂質土 粘質弱い 3層土ブロックを含む
砂岩は含まない

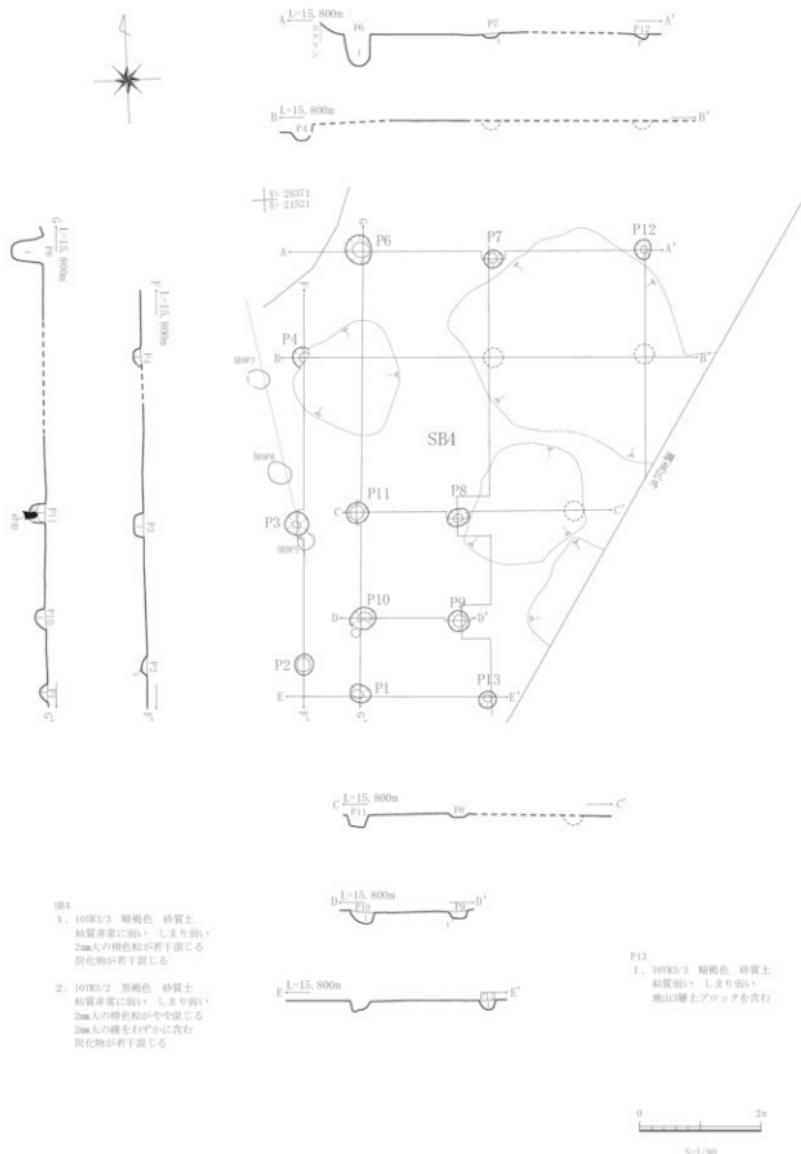
P4
1. 10TR3/4 增穂色 砂質土 粘質弱い 3層土ブロックを含む
砂岩を若干含む

2. 10TR2/3 黒褐色 砂質土 粘質弱い 3層土ブロックを含む
3. 10TR3/3 増穂色 砂質土 粘質弱い 砂岩ブロックを含む

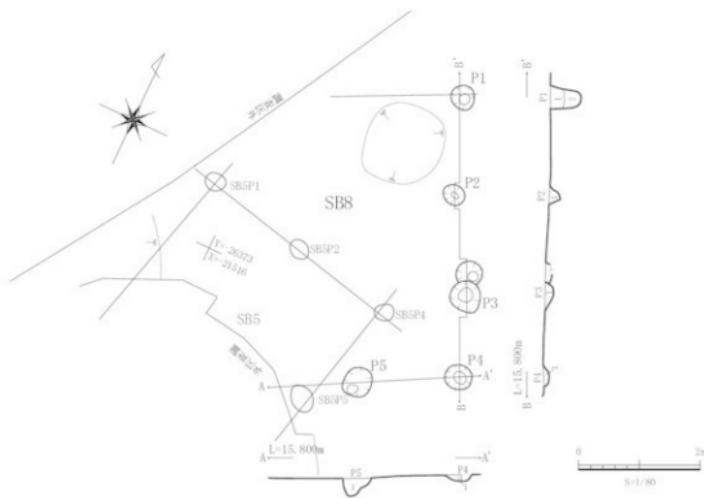
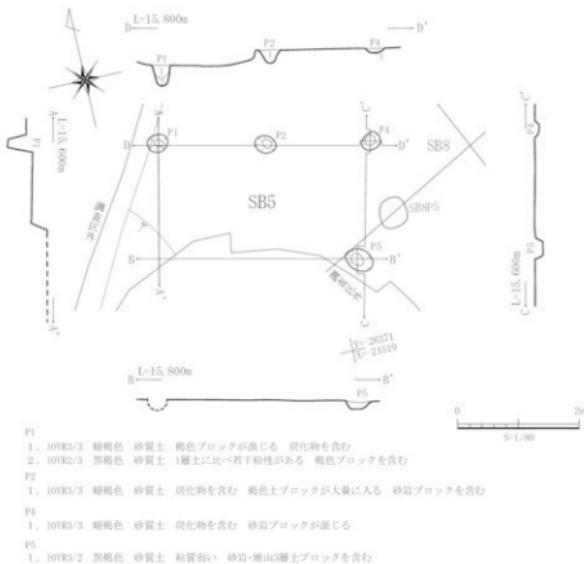
P5
1. 10TR3/3 增穂色 砂質土 粘質弱い 砂岩ブロックを若干含む
2層よりブロックを含まない
2. 10TR2/3 黑褐色 砂質土 粘質弱い 3層土ブロックを多く含む

P6
1. 10TR3/2 黑褐色 砂質土 粘質若干あり 3層土ブロックを少し含む
2. 10TR3/3 増穂色 砂質土 粘質弱い 砂岩ブロックを若干含む
3. 10TR2/3 黑褐色 砂質土 粘質弱い 3層土ブロックを少し含む

第50図 2B区 SB2平面・断面図



第51図 2B区 SB4平面・断面図



第52図 2B区 SB5, SB8 平面・断面図

S B 9 (第 53 図)

3 層上面から検出した。8Iア・イ・ウ・エ・グリッドに位置する。北側は樹木のため調査できなかった。桁行 2 間、梁行 1 間以上、南側に廂が着ぐ側柱建物である。現況で南側柱列 (P2 - P8 - P6) が約 4.3m、東側柱列 (P7 - P6) が約 2.2m、西側柱列 (P1 - P2) が約 3.0m を測る。桁行方向は N - 83° - E である。

側柱列から約 1.1 ~ 1.3m、南側に廂と思われる柱列 (P3 - P4 - P5) があり、約 3.6m を測る。

柱穴間は桁行で約 1.9 ~ 2.4m、梁行で約 2.2 ~ 3.0m を測る。柱掘方は平面円形で径は 26 ~ 42cm、深さは検出面より 10 ~ 28cm を測る。柱穴の下端のレベルは不均一である。

遺物は、P8 に壊される SP73 から土師器高杯の杯部 (第 56 図 4) が出土した。内外面に赤彩を施され、底部は平らに近いと思われる。

S B 6 (第 53 図)

3 層上面から検出した。8Hイ・9H7・9Iイ・7・グリッドに位置する。桁行 4 間、梁行 2 間の側柱建物を想定した。P5 - P6 間、P2 - P3 間の柱穴は擾乱によって壊されていると思われる。北側柱列 (P5 - P6 - P7 - P8) は約 6.8m、南側柱列 (P3 - P2 - P1) は約 5.9m、で西側柱列 (P3 - P4 - P5)、東側柱列 (P8 - P1) ともに約 4.1m を測り、北側にやや開く台形状の平面形を有する。桁行方向は N - 80° - W である。

柱穴間は桁行で 1.0 ~ 4.9m、梁行で 1.9 ~ 4.1m を測る。柱掘方は平面円形で径は 30 ~ 60cm、深さは検出面より 8 ~ 44cm を測る。下端のレベルは不均一である。

遺物は、土師器灯明皿 (第 56 図 1) が出土した。口縁部に油煙が残る。

S B 7 (第 54 図)

3 層上面から検出した。9I7・グリッドに位置する。桁行は 3 間、梁行は 2 間以上の側柱建物である。東側の 2A 区では SB7 の柱穴は検出されていない。現況で東側柱列 (P1 - P2 - P3 - P4) は約 4.0m、北側柱列 (P1 - P8 - P7) は約 2.6m を測る。桁行方向は N - 10° - E である。

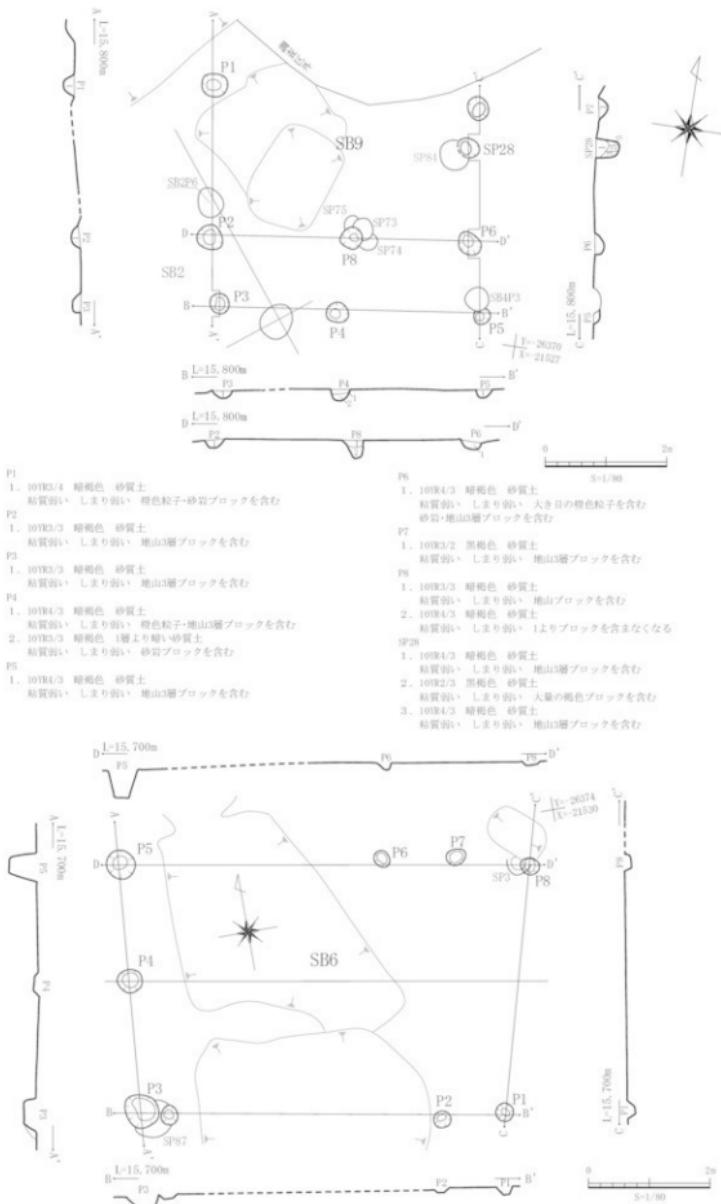
柱穴間は桁行で 1.3 ~ 1.5m、梁行で 0.9 ~ 1.8m を測る。柱掘方は平面円形で、径 28 ~ 37cm、深さは検出面より 6 ~ 28cm を測る。下端のレベルは不均一である。

遺物は、P4 より土師器杯の底部 (第 56 図 2) が出土した。内外面に赤彩を施され、厚さは薄い。

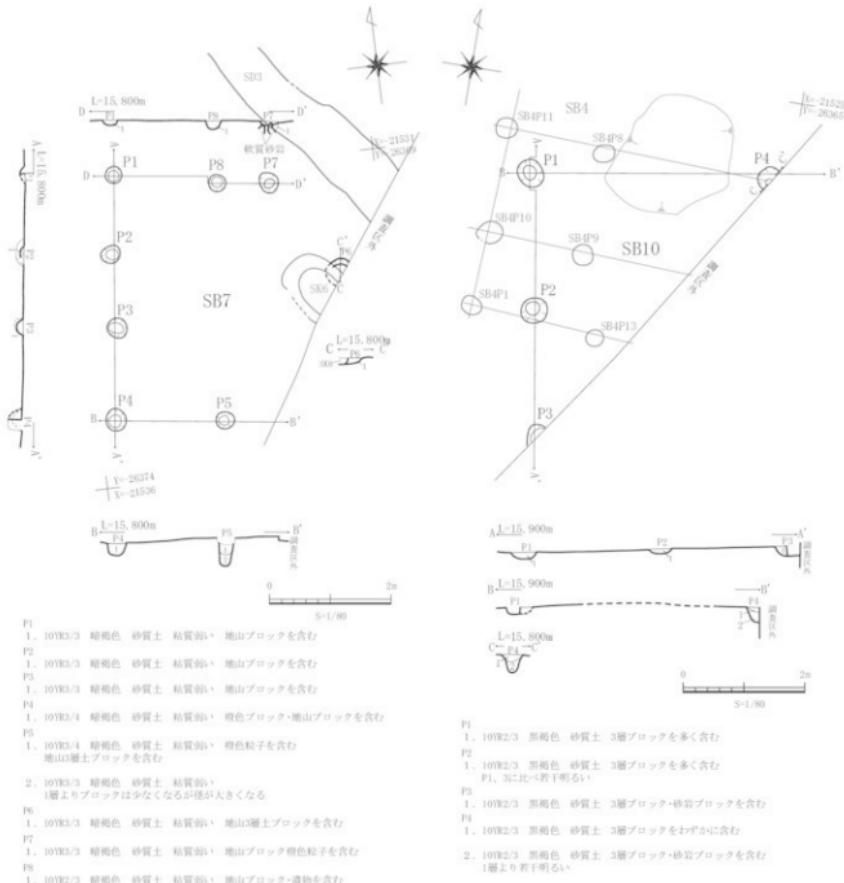
S B 10 (第 54 図)

3 層上面から検出した。8Jウ・グリッドに位置する。南東側の 2A 区では、P2、P3 に対応する柱穴は検出されていない。桁行 2 間以上、梁行 2 間の側柱建物を想定した。P1 - P4 間の柱穴は擾乱によって壊されていると思われる。東側柱列 (P1 - P2 - P3) は約 4.4m、北側柱列 (P1 - P4) は約 3.9m を測る。桁行方向は N - 9° - W である。

柱穴間は現況で桁行 2.2m を測る。梁行は 3.9m であるが 2.0m 前後と推察される。柱掘方は平面円形で、径は 40 ~ 47cm、深さは検出面より 9 ~ 27cm を測る。柱穴の下端レベルは不均一である。



第53図 2B区 SB9、SB6平面・断面図

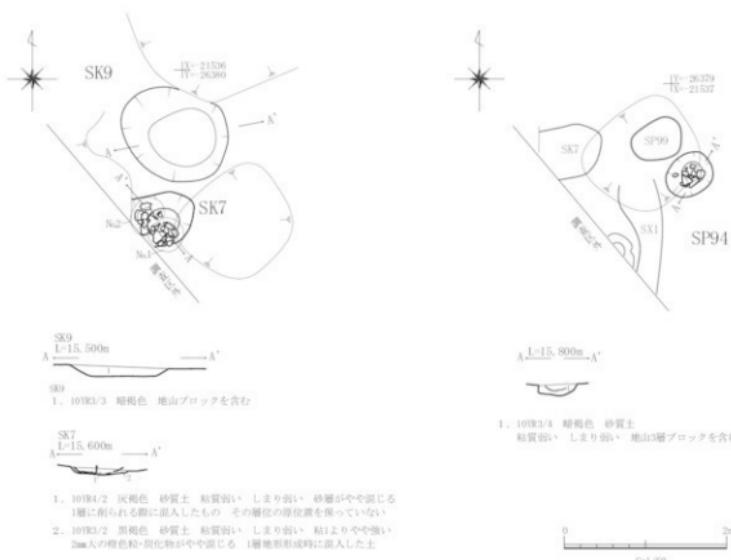
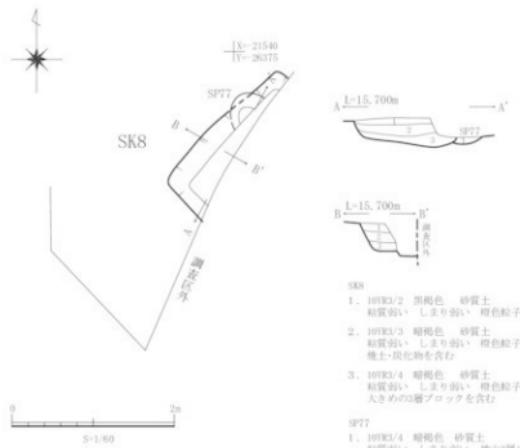


第54図 2B区 SB7, SB10 平面・断面図

土坑

SK8(第55図)

3層上面から検出した。10I7・エ・グリッドに位置する。壊乱に壊され、SI2、SP77を壊す。平面形は調査区分広がるためはっきりとしないが、隅丸長方形を呈し、長軸約195cm、短軸48cm以上、検出面からの深さ約30cmを測る。埋1層は黒褐色、埋2・3層は暗褐色である。



第55図 2B区 SK8, SK7, SK9, SP94平面・断面図

S K 7 (第 55 図)

3 層上面から検出した。9Hイ・9Iウ・グリッドに位置する。東側を壊乱に壊される。平面形は調査区外に広がるためはっきりとしないが、長楕円形を呈し、長軸 70cm 以上、短軸約 62cm を測る。検出面からの深さ約 10cm を測る。

遺物は、土師器壺（第 56 図 8）、土師器壺（第 56 図 9）が出土した。56-8 は、内面下位はケズリ、中位から上位にかけて指頭圧痕が残る。外面はハケメ調整される。56-9 は、壺の下半分に上半分を逆さにして重ねて埋めてあった。頸部は約 6cm を測る。内面はケズリ調整、外面はハケメが入る。外面に煤が付着することから、被熱していると思われる。

S K 9 (第 55 図)

3 層上面から検出した。9Hイ・9Iウ・グリッドに位置する。平面円形を呈し、径約 120cm、深さは検出面より 15cm を測る。埋土は黒褐色で地山ブロックを含む。

S K 12 (第 57 図)

3 層上面から出土した。9Kイ・グリッドに位置する。東側を井戸穴に壊される。平面形は隅丸三角形を呈し、長軸約 1.0m、短軸約 0.7m を測る。埋土は黒褐色でしまりは弱い。

ピット**S P 9 4 (第 55 図)**

3 層上面より検出した。9Iウ・グリッドに位置する。平面形は楕円形であり、長軸約 60cm、短軸約 30cm、検出面からの深さ約 15cm を測る。埋土は暗褐色土である。

遺物は、土師器壺（第 56 図 7）が出土した。内面はケズリ、外面はハケメ後工具ナデされる。外面に煤が付着することから、被熱していると思われる。

遺構外出土遺物

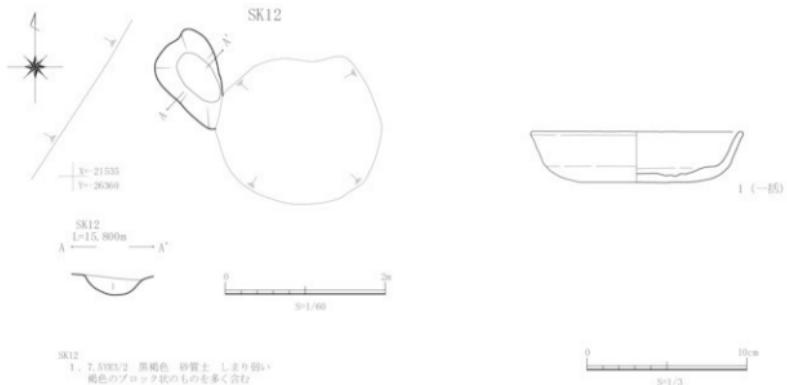
（第 56 図 5）は土師器碗で、9Iア・グリッドより出土した。内外面に赤彩を施され、体部はやや開き気味に伸び、口縁部付近で少し外反する。高台はやや外向気に付く。（第 56 図 6）は須恵器杯で、清掃時に採取したため位置は不明である。底部から体部中位にかけ丸みを持ち、口縁部付近でやや外反する。

（第 56 図 10）は繩文土器である。内外面ともにミガキが入り、ミガキが入れていない箇所に渦巻状の沈線施文が入る。

（第 57 図 1）は土師器杯である。2C 区出土遺物であるが、出土地点は不明である。体部は底部境に丸みを持ち直線的に口縁部に向かう。



第56図 2区出土遺物実測図



第57図 2C区 SK12平面・断面図及び出土遺物実測図

3.2 D区

D区の調査面積は約 656m²である。調査区が明午橋のすぐ横にあり、橋の建設に伴って壊されている可能性があった。そのため、遺構の広がりを確認するためのトレンチ掘りを行うことから始まった。その結果、基本土層 2 層の遺物包含層が広く残っていたため調査区を半分に分けて調査を開始した。

調査区東側（明午橋際）から住宅地の方にかけては 2 層包含層の残りが良く、白川側に向かって搅乱により壊されている部分が多くなっていた。また、南側で調査終了個所や樹木の移植等で一部公園化が進められていた。そんな調査区にあって、北側に 6 軒・南側に 1 軒の竪穴建物があり、近現代の搅乱に壊されながらもこの調査区を横断する大きな溝があった。

竪穴建物

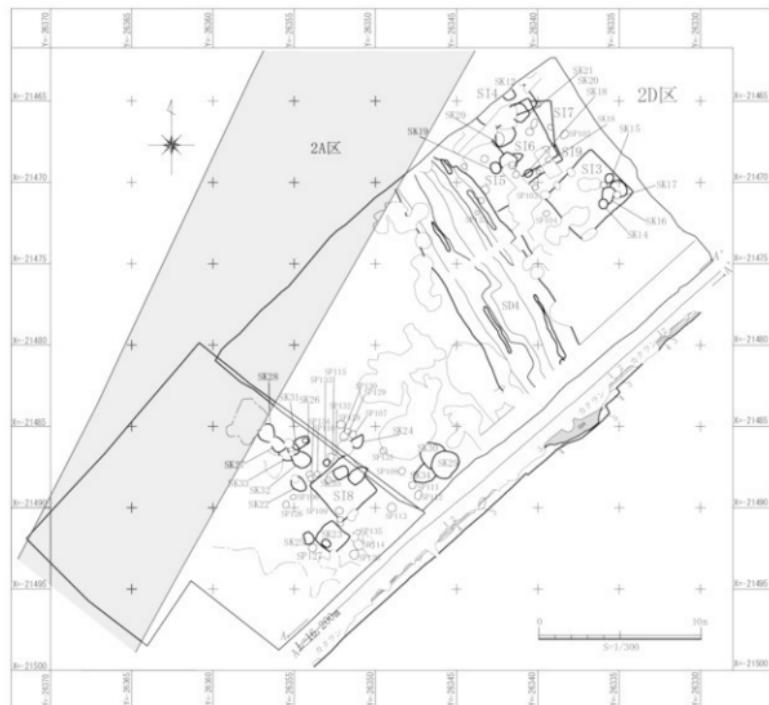
S13 (第59図)

3 層上面で検出した。2Mウ・3Mエ・グリッド上に位置する遺構である。長軸は約 4.4m、短軸は約 3.6m で、長軸の方向は N - 44° - E である。

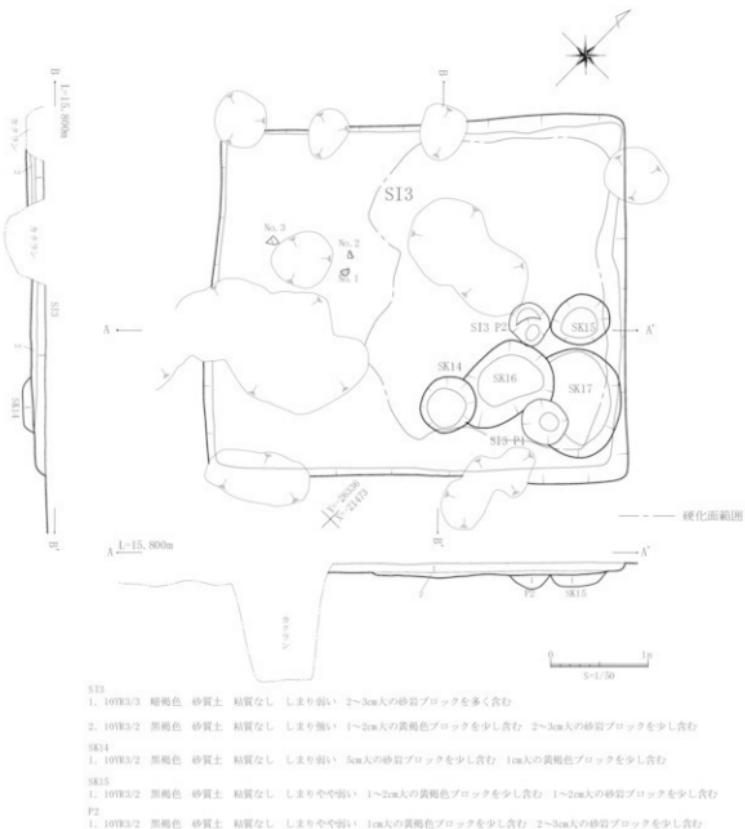
2 層包含層が残存し、表土剥ぎの段階から平面プランが確認できた遺構である。この遺構の南西部分は搅乱によって壊されているが、正方形に近い形の住居プランとして検出した。検出時に南西部の搅乱部分にかまどがあったのではないかと考えたが、かまどの痕跡は残っていなかった。

機能面は埋土 2 層で、建物の中心部から北側にかけて、かなりしっかりととした厚さ約 3 ~ 5cm の硬化面（埋 2 層）が広がっている。検出面から硬化面までの深さは約 15cm を測る。残念ながら柱穴の検出は建物東側隅の 1 基のみで、その他は柱穴と断定するには至らなかった。

また、建物内の搅乱周辺には砂質岩のブロック（黄褐色）が盛り上がりついて、乾燥すると白くてもろい砂質土となり、掘削時に崩れることになった。この遺構の完掘時に SK14・SK15・SK16・SK17



第58図 2D区 調査区断面及び構造配置図



第59図 2D区 S13平面・断面図

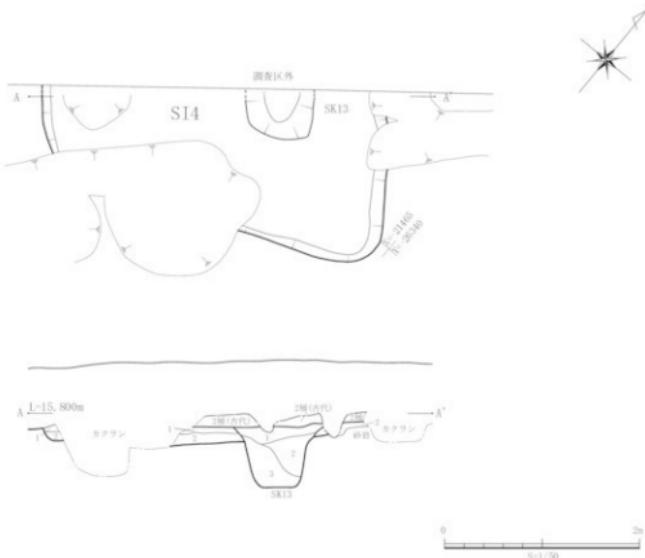
を検出した。これらは竪穴建物の埋土と異なっており、竪穴建物を建てる以前に使用されていたものである。

遺物は、土師器杯（第67図3）が出土した。内面に黒斑がある。厚みがあり、体部は直線的に口縁部に向かう。

S14（第60図）

3層上面で検出した。2L7・イ・グリッド上で、この調査区の北側で検出した遺構である。南東部を壊乱で壊され、北西部は調査区外になるため、建物の一部が残っているにすぎない。現況では長軸は約3.5m、短軸は約1.7mで、長軸の方向はN-50°-Eである。かまどや柱穴・硬化面は検出できなかった。

機能面は埋土2層で、検出面からの深さは約18cm測る。SK13が2層包含層から掘り込んでいて、この



- SI4
1. 10YE3/3 緑褐色 砂質土 粘質なし しまり弱い 1~2cm大の砂岩ブロックを少し含む
2. 10YE3/2 黒褐色 砂質土 粘質なし しまりやや弱い 2~5cm大の砂岩ブロックを少し含む 1~2cm大の黄褐色ブロックを少し含む
SK13
1. 10YE3/3 緑褐色 砂質土 粘質なし しまりやや弱い 0.5~2cm大の砂岩ブロックをわずかに含む
2. 10YE2/2 黒褐色 砂質土 粘質なし しまりやや弱い 1cm大の砂岩ブロックを少し含む 1cm大の黑色ブロックを少し含む
3. 10YE3/2 黒褐色 砂質土 粘質わずかにあり しまり弱い 1~2cm大の砂岩ブロックを少し含む 1cm大の黄褐色ブロックを少し含む

第60図 2 D 区 S I 4 平面・断面図

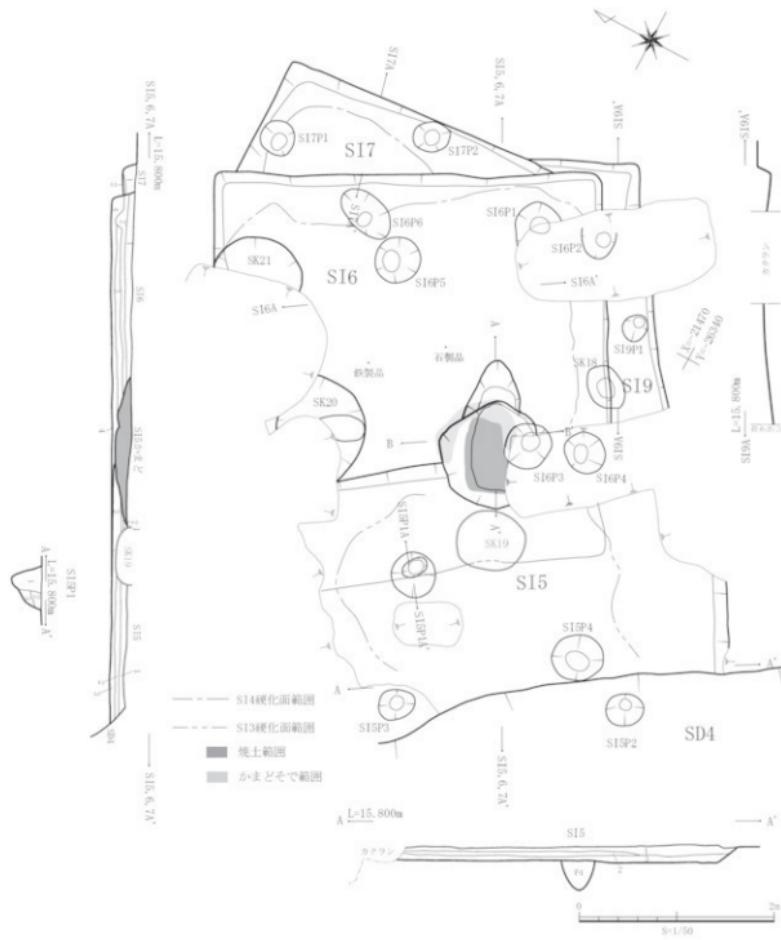
遺構を壊している。

S I 5 (第61図)

3層上面で検出した。2Lイ・3Lア・グリッド上に位置する。2層包含層が残存し、かまど的一部分が表土剥ぎの段階で確認できていた遺構である。SI6を壊し、南西部分をSD4に壊され、掘方の東西部分を擾乱によって壊されているため、竪穴建物としての平面プランは難しかった。しかし、かまどを中心とした硬化面の検出やトレーニングによる掘方の確認により竪穴建物と断定した。

現況では、長軸約4.0m、短軸約2.6mで、長軸の方向はN-31°-Wである。この遺構の北東部分にかまど跡を検出した。

かまどの埋土は4層で、直径が約100cm・掘方約15cmを測る。粘土を袖とし、一部馬蹄状に残存してい



SI5
1. 10TR3/3 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまりやや弱い
1~2cmの大砂岩ブロックを多く含む

2. 10TR3/4 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまり強い
褐色の土を少含む(硬化面)

3. 10TR3/4 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまりやや弱い

SI5P1
1. 10TR2/2 黒褐色 砂質土 粘質なし しまり弱い
砂岩ブロックが多くまじる

2. 10TR3/4 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまり弱い
褐色ブロック状のものが少量混じる

3. 10TR5/4 に近い黒褐色 砂質土 粘質なし しまり弱い
褐色色の土が少量混じる

SI6
1. 10TR3/4 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまりやや弱い
5mm~1cmの大砂岩を少量含む

2. 10TR2/3 黒褐色 砂質土 粘質なし しまり強い
1~2cmの大砂岩ブロックを含む(硬化面)

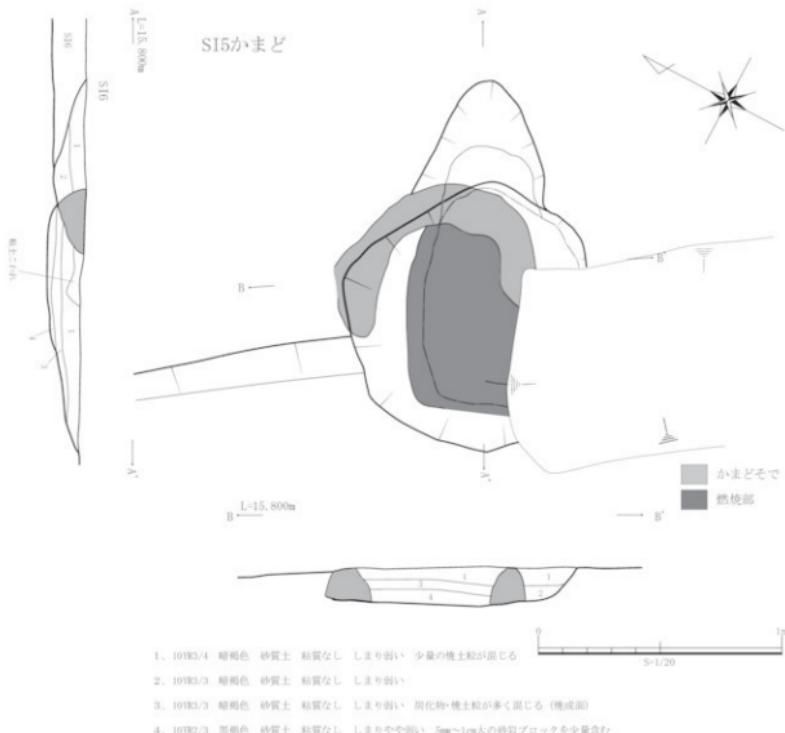
3. 10TR3/4 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまりやや弱い

4. 10TR3/3 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまり弱い
1cmの大砂岩ブロックを多く含む

SI7
1. 10TR3/3 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまり弱い

2. 10TR3/4 鮑褐色 砂質土 粘質なし しまり強い
ブロックを多く含む

第61図 2D区 S15, S16, S17, S19平面・断面図



第62図 2D区 S I 5 かまと平面・断面図

た。埋土1は破壊した際に入り込んだ土で、埋土2は煙道部分に堆積した土、埋土3・4は燃焼部に堆積した土である。

機能面は埋土3層で、かまと掘方から建物の中心部にかけて、約3～5cmの硬化面（埋2層）が広がっている。検出面から硬化面までは約18cmを測る。この遺構内から検出されたピットは4基あるが、P1のみが柱穴として確認できる。

S I 6 (第61図)

3層上面で検出した。2Lイ・2Mウ・グリッド上に位置する。SI5に壊され、SI7、SI9を壊す遺構である。この遺構の北西部には近・現代の擾乱があり、現況では長軸約4.0m、短軸約3.0mで、長軸の方向はN-32°-Wである。

かまどは検出できず、ピットはP1～P6まで検出できたが、この建物の柱穴はP1とP3と考えられる。

機能面は埋土4層で、この遺構の南側はSI5によって壊されているため、掘方の下端しか残っていない。しかし、残存部分には広く硬化面（埋2層）を確認することができた。検出面から硬化面までは約22cmを測る。

S I 7（第61図）

3層上面で検出した。2Lイ・2Mウ・グリッド上に位置する。SI6に壊され、SI9を壊す遺構である。SI6の掘方により壊され、この遺構の東側の一部が少し残っているだけである。残存状況での長軸は約3.0m、短軸は約0.8mで、長軸の方向はN-14°-Wである。

かまどは検出できず、ピットはP1・P2を検出しているが、P1のみが柱穴であると考える。残存部分に硬化面が確認できる。

機能面は上層断面のポイント位置では2層であるが、硬化面（ブロック状）の埋土を考えると3層になると言えるだろう。検出面からの深さは約12cmである。

S I 9（第61図）

3層上面で検出した。2Lイ・2Mウ・グリッド上に位置する。SI6・SI7に壊され、近現代の搅乱に壊されているため、掘方の一部が残っているだけである。検出時にSI7の一部と考えていたため、土層を確認することなく掘削した。その際、建物の平面プランに差異が生じ、SI7を完掘した後にも基本土層とは異なる埋土を確認したため、別遺構としている。検出面からの深さは約16cmを測る。

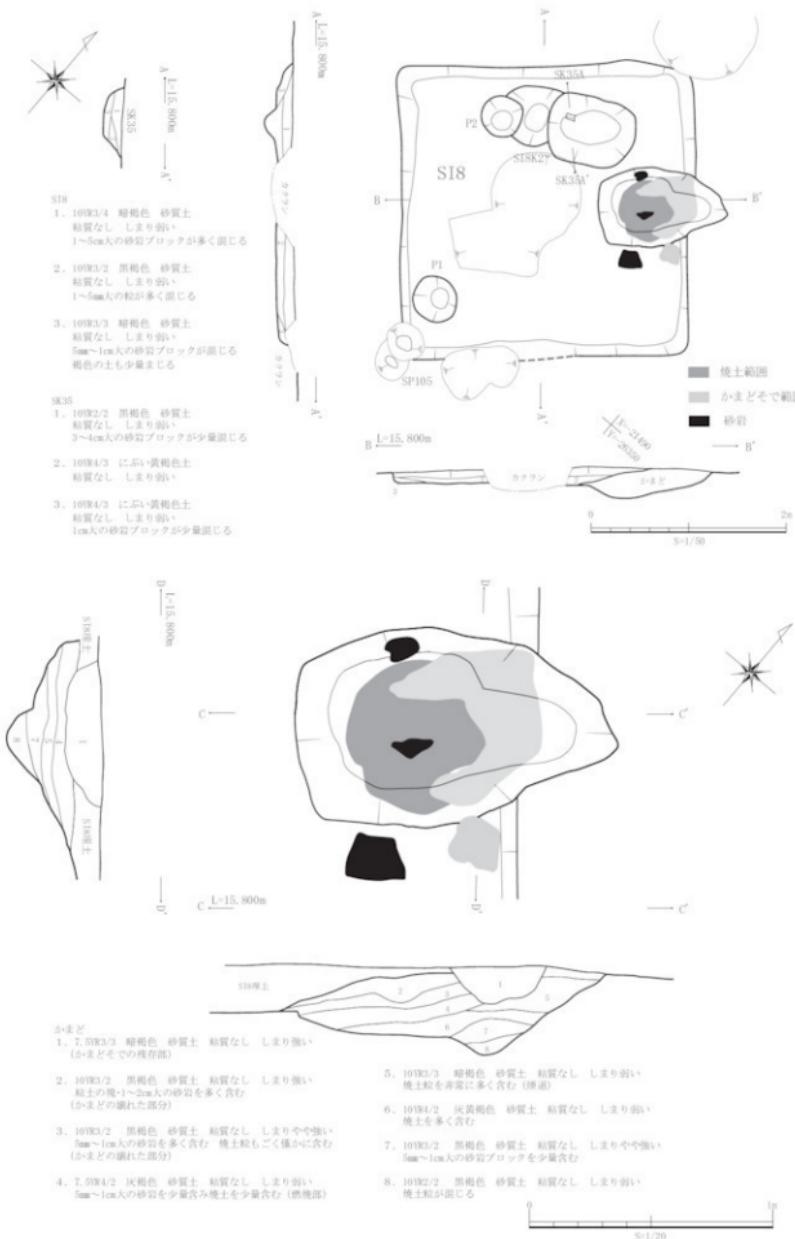
S I 8（第63図）

3層上面で検出した。4Kイ・5Kア・グリッド上に位置する。この調査区の南側で検出した遺構である。表土剥ぎの段階から2層包含層の残存が良好で、かまどの一部を確認し建物の平面プランが検出できた。この遺構の中央は近・現代の搅乱によって壊されているが、現況では1辺が約3.0mのほぼ正方形である。この遺構の北東側にかまど跡を検出した。

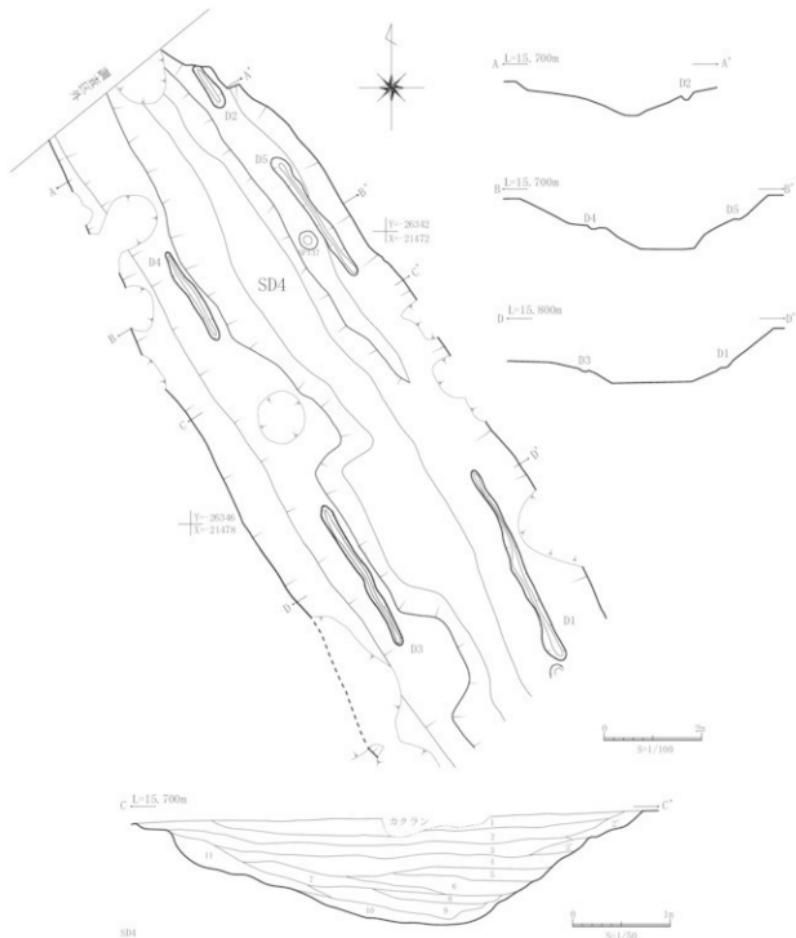
かまどの埋土は8層で、掘方の直径は約90cm、深さは約24cmを測る。かまどの掘方に粘土と砂岩で作られた袖部分の土台が馬蹄状に検出できた。埋土2～3層はかまどが破棄されたときに入った土である。埋土4・6層は燃焼部のため焼土を多く含み、埋土5は煙道部分の土が入る。直径約20cm大の砂岩は、かまどの支柱もしくは袖部分の補強として使用していた可能性が高い。

機能面は埋土3層で、検出面からの深さは約15cmを測る。1・2層は自然堆積と思われる。3層は竪穴建物の壁が崩落して堆積したと考える。硬化面は検出されなかった。また、この遺構内に柱穴と思われるピットは2基検出できたが、P1が柱穴であると考える。

掘方面と同レベルでSK35を検出した。この土坑は、長軸約0.9m、短軸約0.7m、検出面からの深さは約20cmを測る。この土坑は埋土が建物の埋土と異なるため、使用しなくなった後に建物を建てたと判断した。一部土坑の土層を掘り込んでいる部分があるが、掘削の際に同一の遺構と考えて掘ってしまったものである。



第63図 2D区 S18平面・断面図



- SD4
1. 109R3/3 離褐色 砂質土 粘質わざかにあり しまりあり 棕褐色をわざかに含む
 2. 109R3/4 離褐色 砂質土 粘質わざかにあり しまりあり にぶい黄褐色を少し含む
 - 2'. 109R3/2 離褐色 砂質土 粘質なし しまりあり 1~2cm大的黄褐色ブロックを多く含む
 3. 109R3/2 離褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 0.5~1cm大的にぶい黄褐色ブロックを多く含む
 4. 109R3/3 黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 1cm大的砂岩ブロックをわざかに含む
 - 4'. 109R3/4 黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 0.5~1cm大的にぶい黄褐色ブロックを少し含む
 5. 109R4/3 にぶい黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 1~3cm大的砂岩ブロックを少し含む
 6. 109R4/3 にぶい黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 1cm大的砂岩ブロックを少し含む
 7. 109R5/3 にぶい黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 0.5~1cm大的砂岩ブロックを多く含む
 8. 109R4/3 にぶい黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 1~2cm大的黒褐色ブロックを少し含む
 9. 109R3/2 黑褐色 砂質土 粘質わざかにあり しまりややあわ 1~3cm大的黄褐色ブロックを少し含む
 10. 109R3/3 離褐色 砂質土 粘質わざかにあり しまりややあわ 1~2cm大的黒褐色ブロックを少し含む
 - 10'. 109R3/3 にぶい黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 1~2cm大的黒褐色ブロックを多く含む
 11. 109R4/3 にぶい黄褐色 砂質土 粘質なし しまりややあわ 1~2cm大的黒褐色ブロックをわざかに含む

第64図 2D区 SD4 平面・断面図

溝

S D 4 (第 64 図)

竪穴建物とともに 3 層上面で検出した。2L イ・ウ・3L ア～イ・3M フ・4M イ・4L フ・グリッド上に位置し、この調査区をほぼ南北に横断する遺構である。表土剥ぎの段階から検出しており、近現代の擾乱によって表土近くの埋土は壊され、瓦等が入り込んでいた。

トレンチを入れて土層とともに深度を確定し、掘削を開始した。検出当初は、この遺構が北側の建物跡を壊していく、しかも上位の埋土も近世の土であったため近世の溝として掘り進めた。しかし、層ごとの掘削を進めるうちに古代の土器が多くなるため、使用時期は竪穴建物を破棄して間もない頃である可能性が高いと言える。埋土は 11 層であり、自然堆積で埋まっていき、埋土 1・2 層で中世・近世になったものと思われる。現況で長さは約 15.4m、幅は約 5.4m、深さは深いところで検出面から約 1.0m である。

掘削当初は、白川への切り通しのために作られたものと考えていたが、底面のレベルが白川側の方が高いため、白川から水を引くために掘られたものであると考える。立ち上がりの部分の掘り残しを掘削している際に、側溝らしきものを検出した。これらの溝は、検出状況からつながっていた可能性が高い。土層断面で硬化した所がなかったことで、道として使用していた時期があった可能性は低いと考えるが、断定はできない。

遺物は、埋 1～2 層から土人形の顔（第 67 図 10）、埋 3～4 層から陶磁器梶（第 67 図 6）、土人形（第 67 図 12）、埋 6～9 層から灯明皿（第 67 図 1）が出土した。67-6 は内面に軸がかけられ、やや白い光沢をもつ。高台は貼り付けでなく、体部と一体で製作され、小さい径の底部から丸みを持って体部が立ち上がる。67-1 は底部外面に糸切痕がある。底部の厚さが厚い。

土坑

S K 1 6 (第 65 図)

SI3 の掘方面で検出した。3M イ・グリッド上に位置する。SK17 を壊し、SK14 と SI3 のピットに壊される。平面形は梢円形に近いが不定形と言える。測定可能な長径は約 0.8m、短径は約 0.7m、検出面からの深さは約 10cm を測る。方向軸は N - 20° - E である。

SI3 の掘方を掘削する際に、平面を掘りすぎた遺構である。SK14 も SI3 の硬化面を除去する際に掘りすぎているため、埋土も薄く土坑として検出できない状況であった。

埋土は 2 層で約 1cm 大の黄褐色のブロック化した土を全体に含む。

S K 1 7 (第 65 図)

SI3 の掘方面で検出した。3M フ・3M イ・グリッド上に位置する。SK16 と SI3 のピットに壊される。平面形は壊されているために不明である。測定可能な長径は約 1.1m、短径は約 0.7m、検出面からの深さは約 10cm を測る。方向軸は N - 45° - W である。

SK16 と同様に、SI3 の掘方を掘削する際に平面を掘りすぎている。埋土は 2 層で SK16 よりしまりが強い土質を持っている。

S K 1 8 (第 65 図)

SI6 の掘方面で検出した。2L イ・グリッド上に位置する。SI6 の硬化面を除去し、掘方の完掘時に検出した遺構である。平面形はほぼ梢円形で、長径約 0.6m、短径約 0.4m、検出面からの深さは約 40cm を測る。方向軸は N - 50° - E である。

周辺の黄褐色の砂質土の中に縋まりの弱い暗褐色土として、検出しやすい土坑であった。埋土は3層で、1層が深く入り込んでいることから柱穴であった可能性が高い。

S K 1 9 (第65図)

SI6の掘方面で検出した。2Lイ・グリッド上に位置する。SI6の掘方の下端が残っている状況下で検出した遺構である。平面形は楕円形で、長径約0.7m、短径約0.6m、検出面からの深さは約10cmを測る。方向軸はN-35°-Wである。

SI6がSI5に壊され、下端の一部しか残っていなかったため、SI6の掘削時に平面を少し削っている。埋土は1層である。

S K 2 0 (第65図)

SI6の掘方面で検出した。2Lイ・グリッド上に位置する。SI6硬化面除去後に検出した遺構である。北側を近・現代の搅乱で壊されていて、平面形は不明である。測定可能な長軸は約1.3m、短軸は約1.2m、検出面からの深さは約30cmを測る。方向軸はN-65°-Eである。

掘削時にSP124を検出したが、SPの土層断面ではなくSK20の土層と判断していたため、埋土2層と表記している。しかし、埋土2はSPの土層である可能性が高い。

S K 2 1 (第65図)

SI6の掘方面で検出した。2Lイ・グリッド上に位置する。西側を近現代の搅乱で壊され、平面形は不明である。測定可能な長径は約1.1m、短径約0.7mで検出面からの深さは約10cmを測る。方向軸はN-80°-Wである。

埋土は1層で、粘土の塊を多く含むことから、搅乱で壊されている部分にかまどがあった可能性も考えられ、かまどに付随する土坑ともとれる。

S K 2 3 (第65図)

3層上面で検出した。5K7・グリッド上で、この調査区の南側に位置する遺構である。一部搅乱によって壊されているが、長径は約1.7m、短径は約1.6m、検出面からの深さは約10cmを測る。方向軸はN-45°-Wである。

埋土は単層で、底部には1cm大の砂岩ブロックが少量混じる。

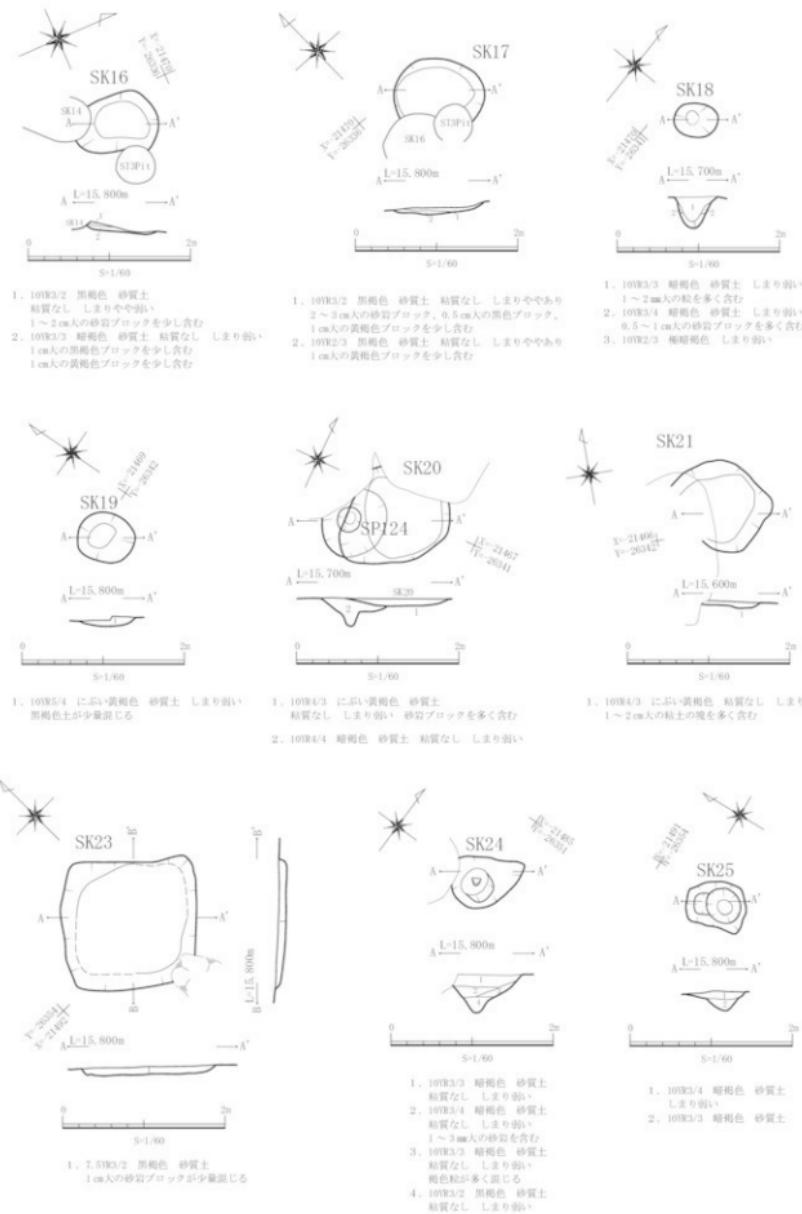
S K 2 4 (第65図)

3層上面で検出した。4K7・グリッド上で、この調査区の南側に位置する遺構である。SI8の北側にあり、この遺構の西側を搅乱で壊されているため、平面形は不明である。測定可能な長径は約0.8m、短径は約0.6mで、検出面からの深さは約50cmを測る。方向軸はN-52°-Eである。

埋土は4層で、底部近くから土器が出土している。

S K 2 5 (第65図)

3層上面で検出した。5K7・グリッド上で、この調査区の南側SK23の西側に位置する遺構である。平面形はほぼ楕円形に近い形状である。長径は約0.7m、短径は約0.6m、検出面からの深さは約25cmを測る。方向軸はN-30°-Wである。



第65図 2D区 SK平面・断面図(1)

埋土は2層からなっている。

SK26（第66図）

3層上面で検出した。4Kイ・グリッド上で、この調査区の南側にある遺構である。平面形はほぼ梢円形である。長径は約1.1m、短径は約0.6mで検出面からの深さは約20cmである。この遺構の東側は深さが約50cmになる。これはピットが埋まつた後に土坑が形成されたため、このような深掘りの部分ができたものと思われる。方向軸はN-57°-Eである。

埋土は4層で、深掘りの周囲は固くしまった砂質岩がある。

SK27（第66図）

3層上面で検出した。4Kウ・グリッド上で、この調査区の南側に位置する遺構である。この遺構の北西部分は矢板設置時に壊されている。平面形は不明であるが、測定可能な長径は約0.8m、短径は約0.8m、検出面からの深さは約15cmを測る。方向軸はN-60°-Eである。

埋土は1層で、約5cm大のブロックを多く含む。

SK28（第66図）

3層上面で検出した。4Kウ・エ・グリッド上で、この調査区の西側に位置する遺構である。この遺構の北西側を搅乱で、南東側を矢板で壊されているため、平面形は不明である。測定可能な長軸は約1.1m、短軸は約0.9m、検出面からの深さは約20cmを測る。方向軸はN-40°-Eである。

埋土は2層で、底部には約10cm大の土器片が10点ほど出土した。

遺物は、須恵器蓋（第67図4）、土師器甕（第67図7）、（第67図8）が出土した。67-4は器高が高く丸い形態で、天井部から口縁部にかけて回転ナデ調整される。67-7、67-8はともに内面はケズリ調整、外面は部分的にハケメが入る。

SK29（第66図）

3層上面で検出した。4Lイ・4Lウ・グリッド上で、この調査区の南側に位置する遺構である。表土剥ぎの段階から包含層の残りが良好な場所として認識していた遺構である。この遺構はSK30とSK34を壊す。平面形は梢円形に近く、長径は約1.8m、短径は約1.5m、検出面からの深さは約40cmを測る。

埋土は4層で、流れ込みによる自然堆積したものと思われる。

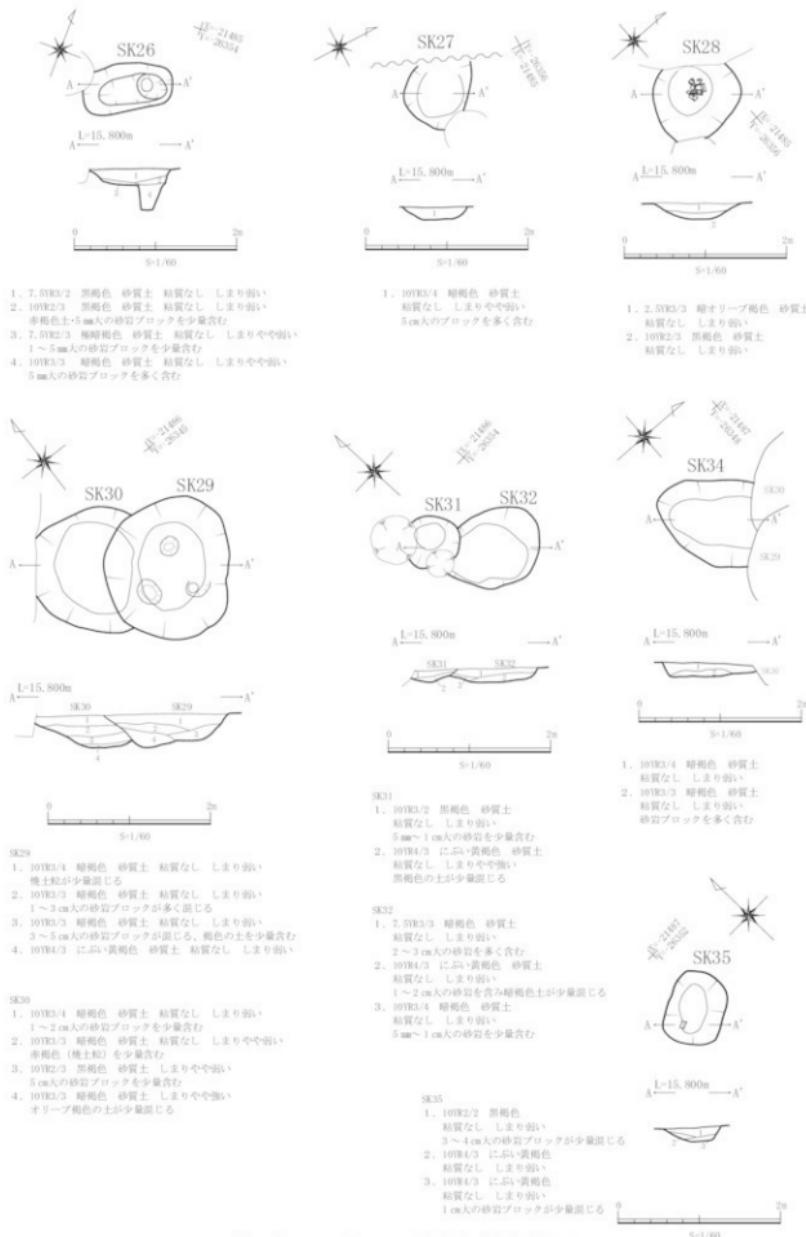
SK30（第66図）

SK29と同じく3層上面で検出した。4Lウ・グリッド上に位置する遺構である。この遺構はSK34を壊し、SK29に壊される遺構である。測定可能な長径は約1.5m、短径は約0.8mで、検出面からの深さは約40cmを測る。

埋土は4層で、SK29同様に埋土の中に焼土粒を含む層があり、焼土坑の1つである可能性が高い。

SK31（第66図）

3層上面で検出した。4Kイ・4Kウ・グリッド上で、この調査区の南側に位置する遺構である。先に表記したSK26に一部壊され、SK32を壊す遺構である。この遺構の平面形はほぼ円形で、長径は約0.7m、短径は約0.5mで、検出面からの深さは約15cmを測る。埋土は2層である。



第66図 2D区 SK平面図・断面図(2)

SK32（第66図）

SK31と同様に3層上面で検出した。4Lイ・ウ・グリッド上に位置し、SK31に壊される。平面形は不明であるが、測定可能な長径は約1.0m、短径は約1.0mで、検出面からの深さは約16cmを測る。

埋土は3層である。

SK34（第66図）

3層上面で検出した。4Lウ・グリッド上で、この調査区の南側に位置する遺構である。SK29・SK30に壊された遺構である。平面形は不明であり、測定可能な長径は約1.2m、短径は約1.1m、検出面からの深さは約16cmを測る。方向軸はN-42°-Eである。埋土は2層である。

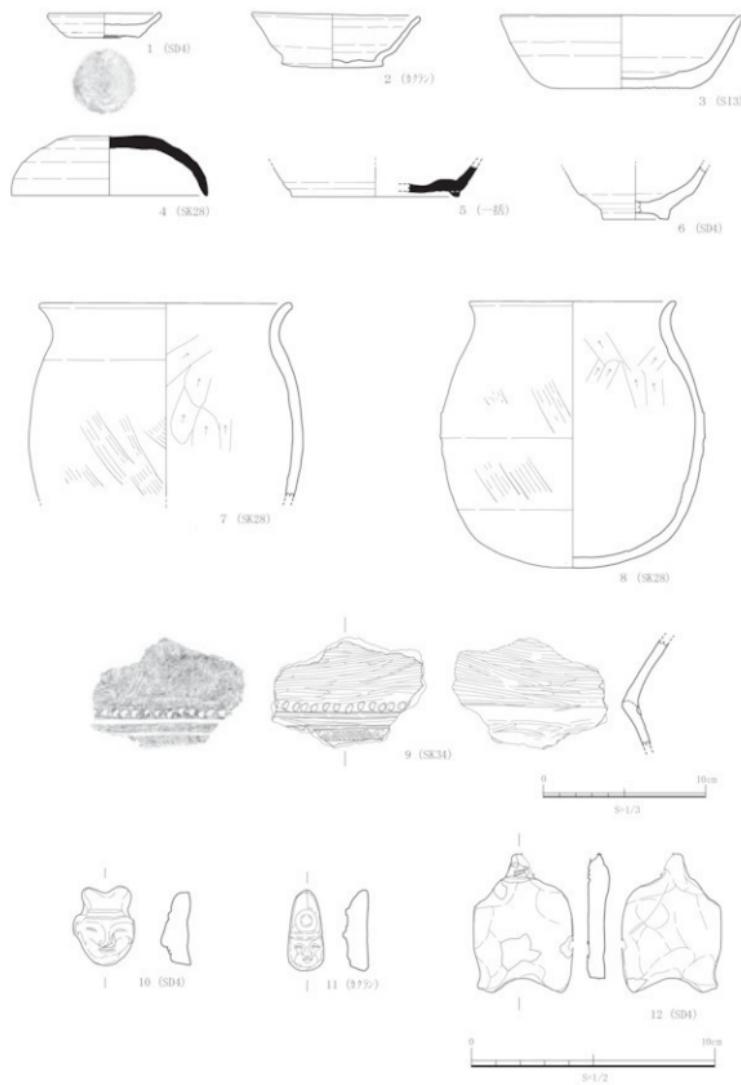
遺物は、縄文土器（第67図9）が出土した。西平式深鉢の頸部で列点文、沈線、磨消縄文の文様が施される。内外面ともにミガキが入る。

SK35（第66図）

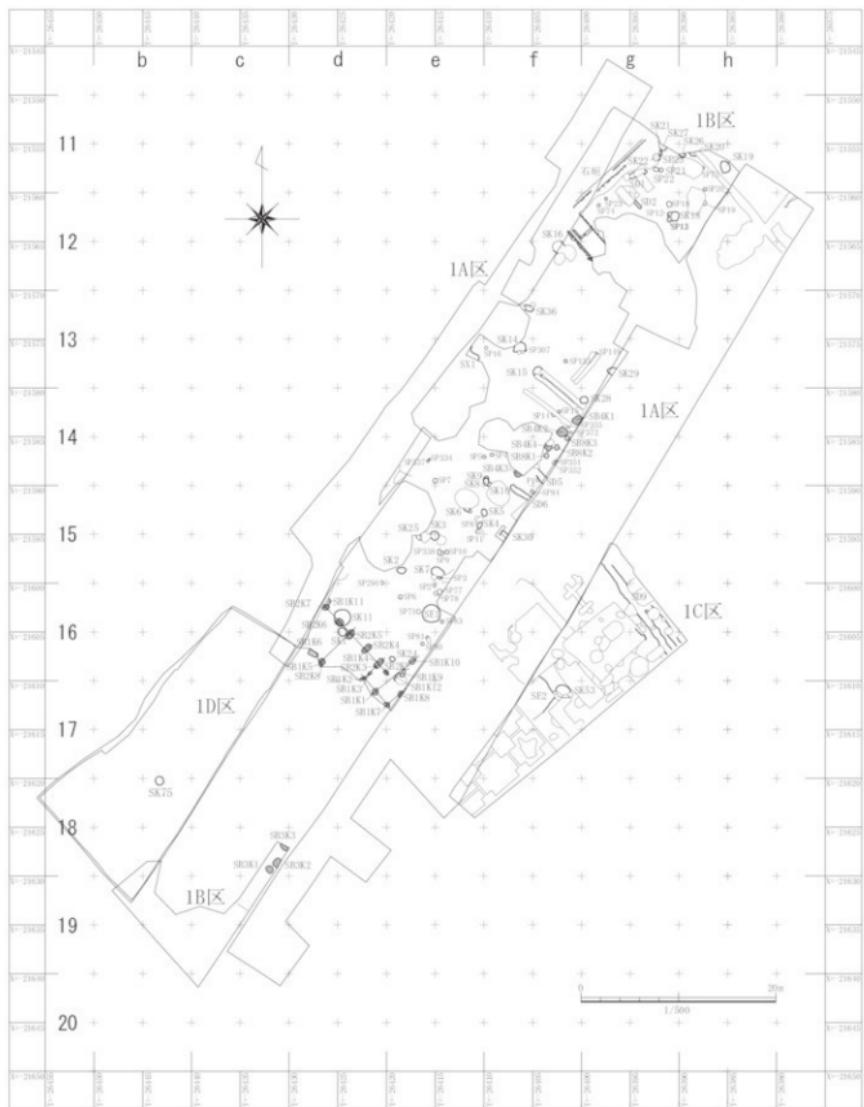
SI8の掘方面で検出した。4Kイ・グリッド上に位置し、SI8の完掘時に検出した遺構である。平面形は梢円形に近く、長径は約0.9m、短径は約0.7m、検出面からの深さは約16cmを測る。方向軸はN-45°-Wである。埋土は3層である。

遺構外出土遺物

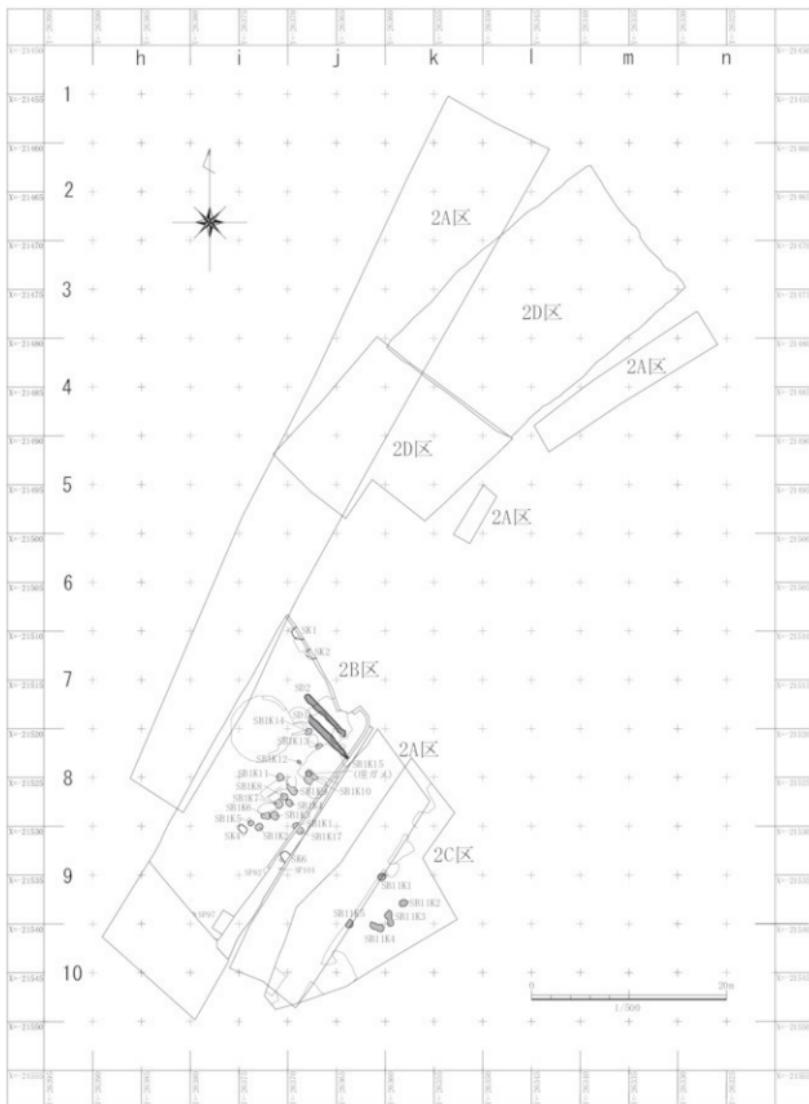
（第67図5）は須恵器碗である。包含層内遺物であるが出土地点は不明である。高台は底部端に小さめのものが付く。（第67図2）は土師器杯である。搅乱から出土した。体部は、口縁部上面に付き、やや開き目に口縁部まで直線的に伸びる。（第67図11）も搅乱から出土した。土人形の顔部分である。



第67図 2D区 出土遺物実測図



第68図 1区近現代主要造構配置図 (1/500)



第69図 2区近現代主要遺構配置図 (1/500)

第4節 1・2区近現代遺構

1. 1B区

近現代建物跡

S B 3 (第70図)

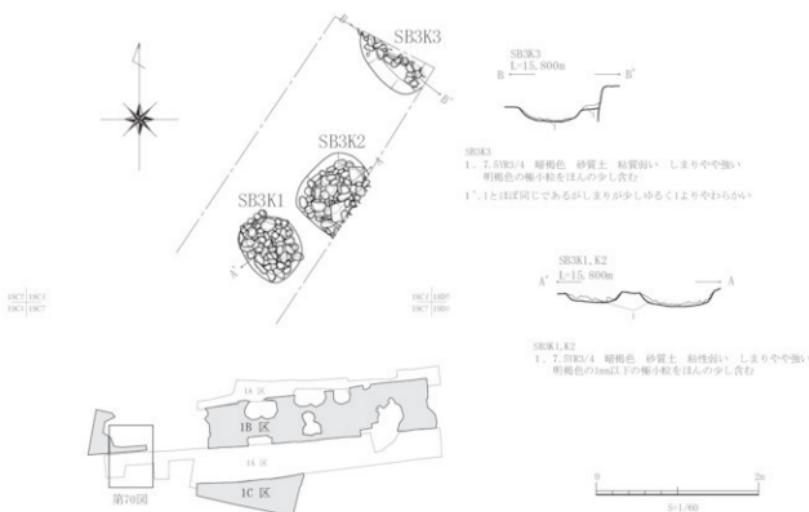
2層上面で検出した。18Cイ・グリッドに位置する。栗石地業が3基出土する。地表面から約30cm下より出土した。表土剥ぎの際に出土した栗石地業である。埋土は硬くしまり、上から突き固められている。栗石の間は土を入れて隙間充填されている。

栗石地業の平面形は隅丸方形である。礎石のようなものは見つけることができなかった。

K1-K2-K3は約2.8mを測る。この建物に伴う他の栗石地業は、南東側の2A区では調査対象といいなかったため記録が残っていない。他の方向は、調査区外であり南西、南東側の状況は不明である。

S B 1 (第71、72図)

2層上面で検出した。1B区南東側、16Dイ・16Eウ・17Eエ・17Dフ・グリッドに位置する。SB2と重複する。SB1K4とSB2K3がほぼ重なるが、栗石のレベルが、SB1付近は高く、SB2付近はやや低いため、SB1の建物が新しいと判断した。表土剥ぎの際に出土した栗石地業で、地表面（約16.0m）より約45cm下より出土した。掘方埋土の硬化はあまり無く、突き固めていないようである。栗石の間には土を入れて隙間充填されている。



第70図 1B区 近代遺構平面・断面図(1)

栗石地業の平面形は円形のもの、隅丸方形のものが見られる。栗石地業の上に礎石、又は土台となる石、角材を置いてその上に柱を立てたと思われるが、礎石、土台となる石、木材は見つけることができなかった。

北西—南東の列の長さは、K2—K1—K7は約3.6m、K3—K8は約3.7m、南西—北東の列は、K7—K8は約1.8m、K2—K3—K4は約2.1mを測る。北東—南西の列の方向はN—52°—Wである。列のK1—K10は南西—北東の列と平行であるため、同一建物の可能性がある。

建物は、南東、南西側に広がると思われるが、調査対象としていなかつたり、南西側は調査区外であったりして南西、南東側の状況は不明である。

S B 2 (第71、72図)

2層上面で検出した。1B区南東側、16Dア・イ・ウ・エ・16Eウ・グリッドに位置する。SB1と同様に表土剥ぎの際に出土した栗石地業である。地表面より約40cm下より出土した。(地表面は西側が低いため、SB1よりも出土レベルは低い。)

K4、K5、K7は栗石を1段しか敷き詰められていなかったため、表土剥ぎの際に栗石が外れてしまった。そのため栗石の範囲としか記録できないものもあった。埋土は石の下のみ硬化しているようで、突き固められていないようである。平面形は隅丸方形、楕円形のものが見られる。この建物も礎石、土台となる石、木材は見つけることができなかった。

K2—K3—K4—K5—K6—K7はほぼ一直線に並び、長さは約9.3mを測る。方向はN—43°—Wである。この列と対になる栗石地業列が南西側に約4.1m離れたK8上にあるかもしれないが、調査区外にかかるため不明である。

S B 4 (第75図)

2層上面で検出した。14Fア・イ・ウ・グリッドに位置する。K1—K2—K4—K3は一直線に並び、長さは約8.3mを測る。方向はN—48°—Eである。1A区で対となる土坑列は検出されていない。土坑間はK2—K4、K1—K2間はほぼ2.1m前後である。K4—K3間は約4.2mで、調査区外にSB4に伴う土坑があると思われる。土坑の上面に栗石が敷き詰められる。平面形は隅丸方形で、検出面からの深さ約20cmを測る。K1、K2、K3ともに栗石の下の埋土はしまりが弱いため、上から突き詰めることはなかったと思われる。

土坑

S K 1 6 (第79図)

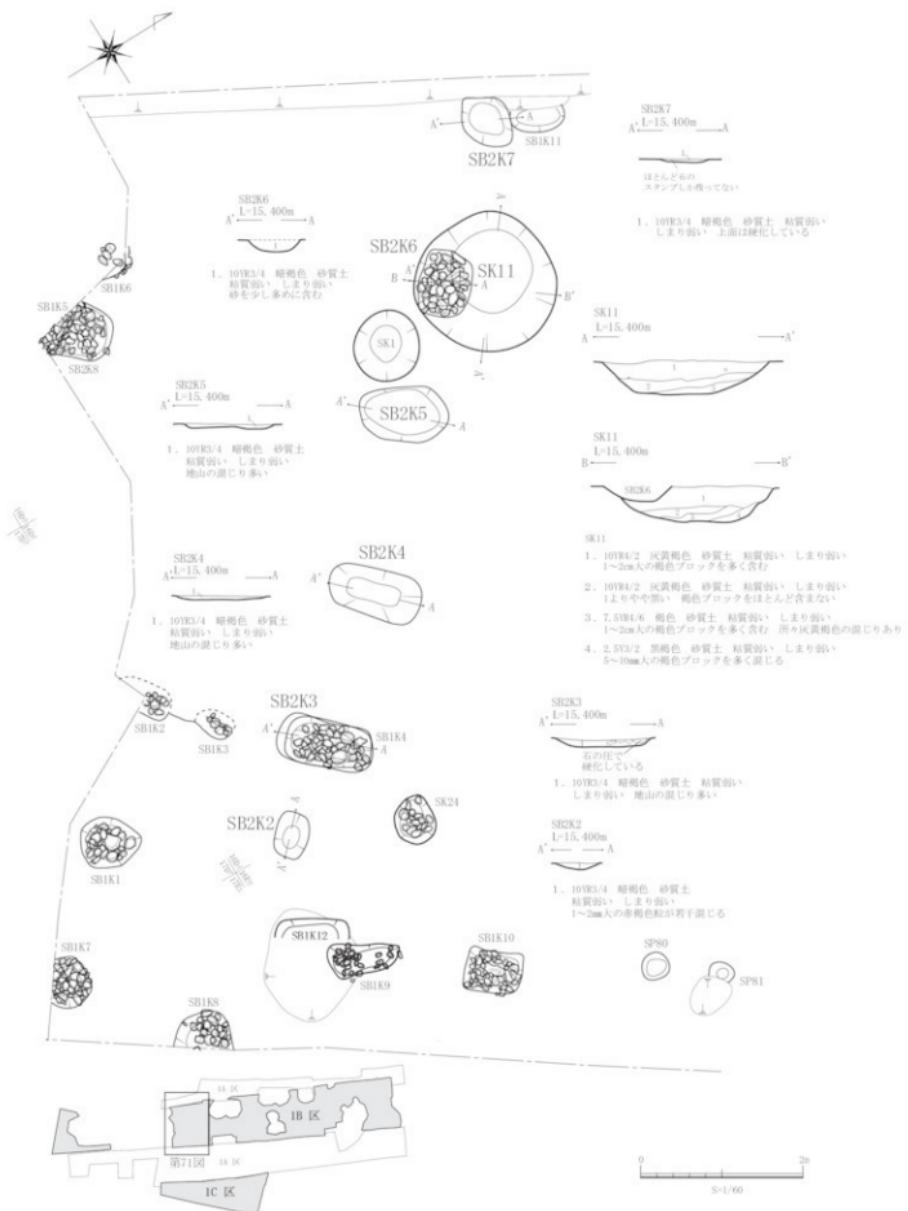
2層上面で検出した。12Fイ・グリッドに位置する。平面形は円形で土坑の周りに川原石が積まれている。径約1.2m、検出面からの深さ約20cmを測る。埋土は黄灰色砂質土である。

S K 2 1・2 2 (第77図)

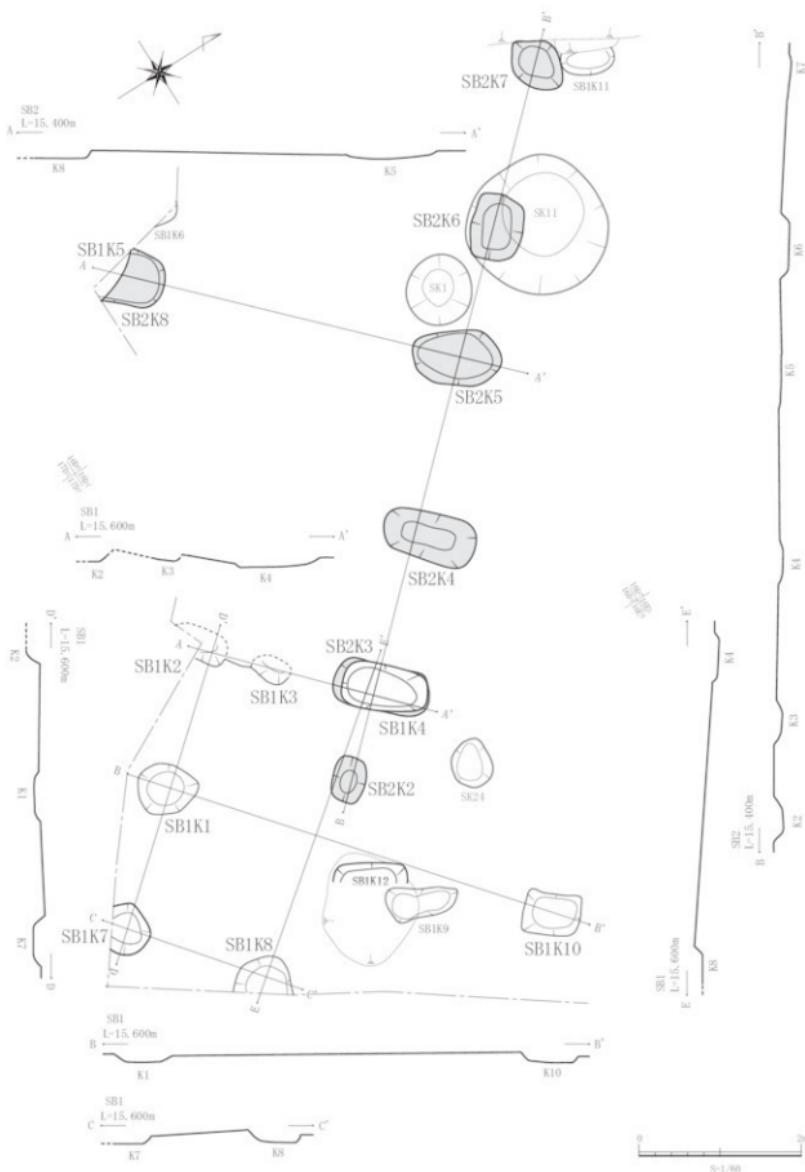
2層上面で検出した。11Gイ・グリッドに位置する。SK21がSK22を壊す。SK21は、攪乱で壊されるため平面形は不明である。検出面からの深さは約15cmを測る。SK22も攪乱で壊されるが、攪乱内に下端が検出され、その平面形は円形であったので、SK22の平面形も円形と推察される。検出面からの深さは約50cmを測る。

S K 2 7 (第77図)

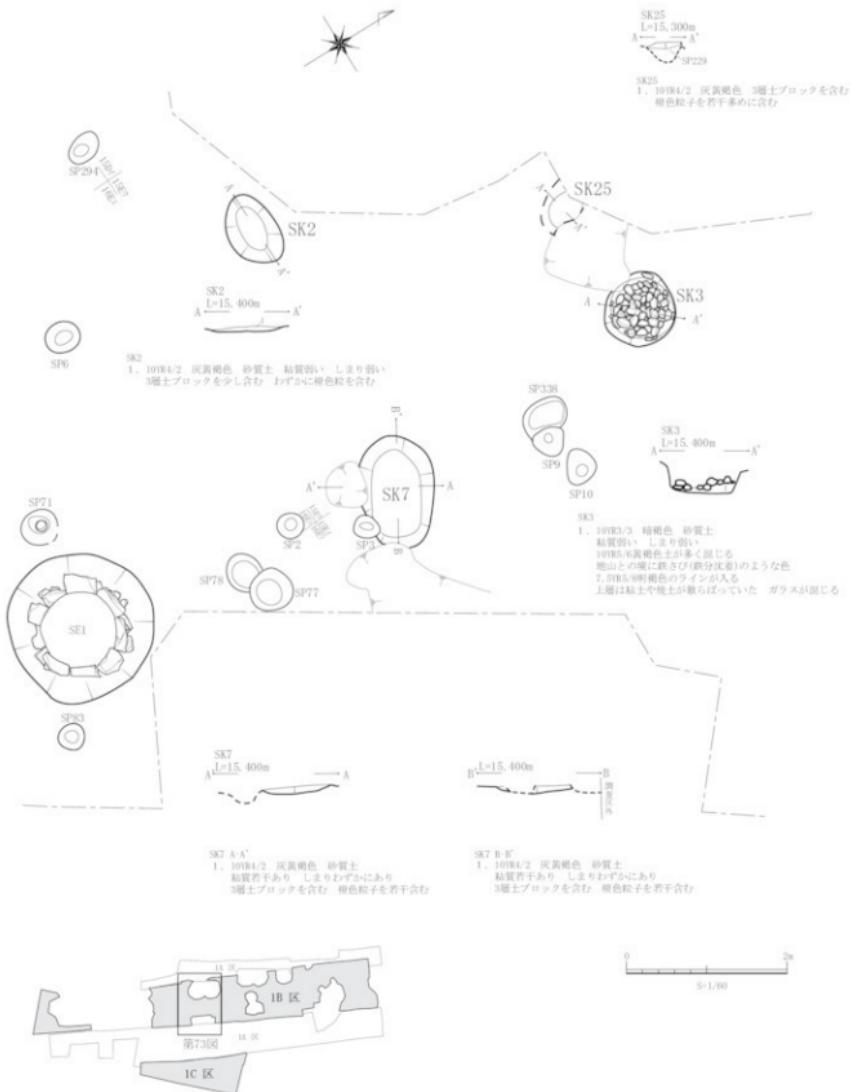
2層上面で検出した。11Gイ・グリッドに位置する。北側は調査区外、西側は攪乱で壊されるが、現況から平面形は楕円形と想定される。長軸101cm以上、短軸約65cm以上、検出面からの深さは約16cmを測る。



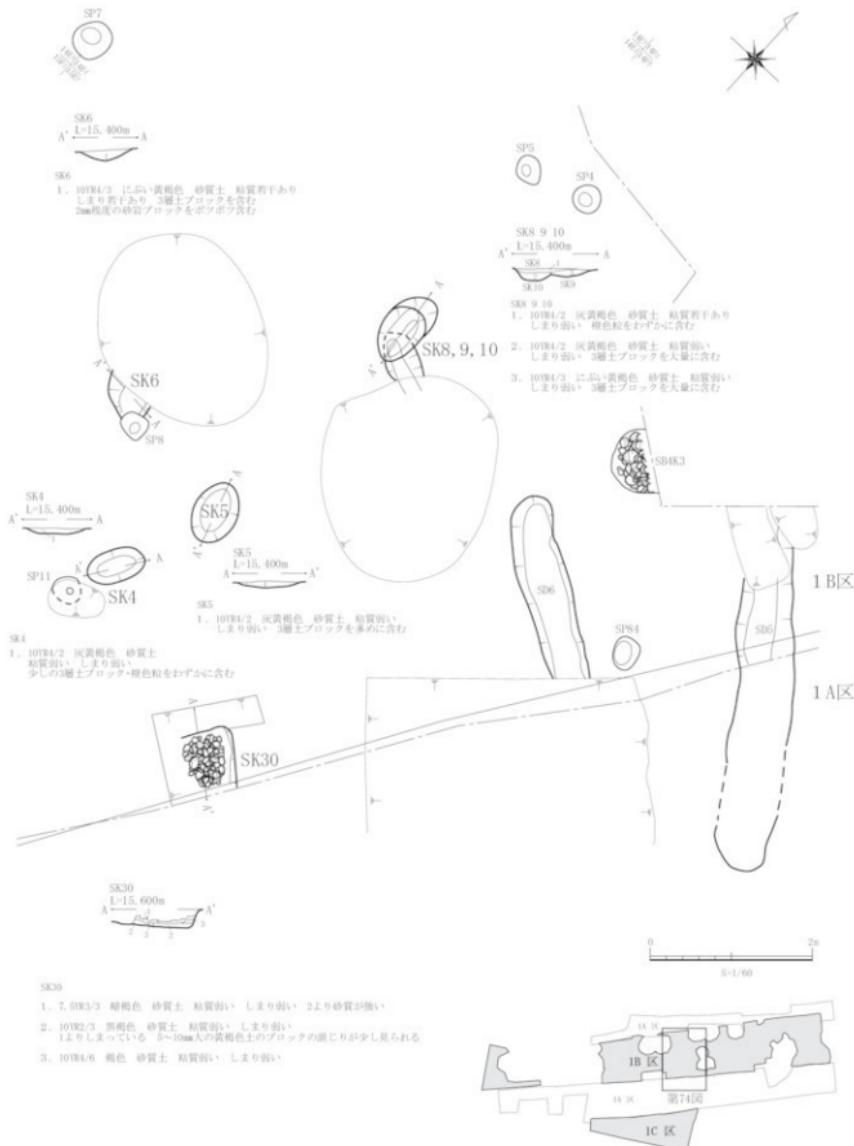
第71図 1B区 近代造構平面・断面図 (2)



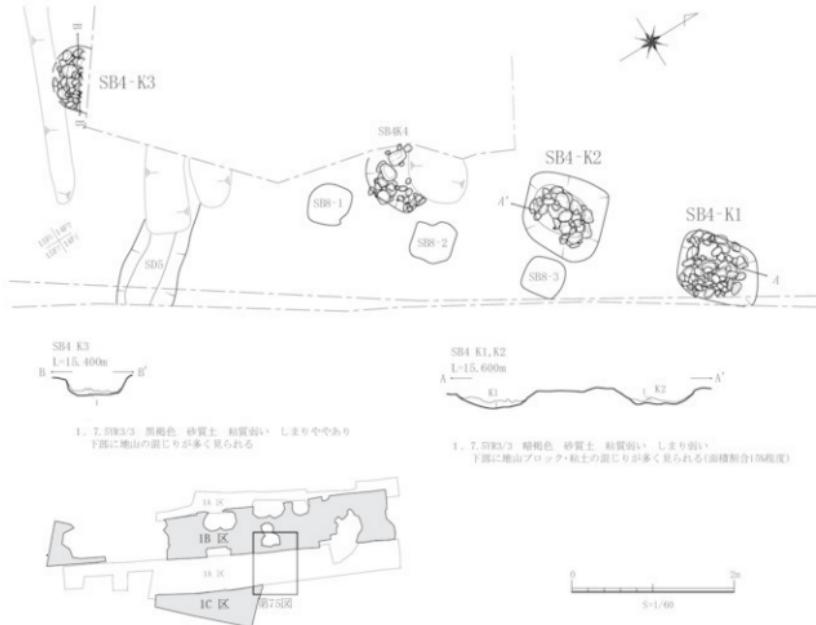
第72図 1B区 SB1、SB2平面・断面図



第73図 1B区 近代構造平面・断面図 (3)



第74図 1B区 近代遺構平面・断面図 (4)



第75図 1B区 近代遺構平面・断面図（5）

埋土は2層で上層は灰黄褐色砂層、下層は暗褐色砂層である。

S K 2 6 (第77図)

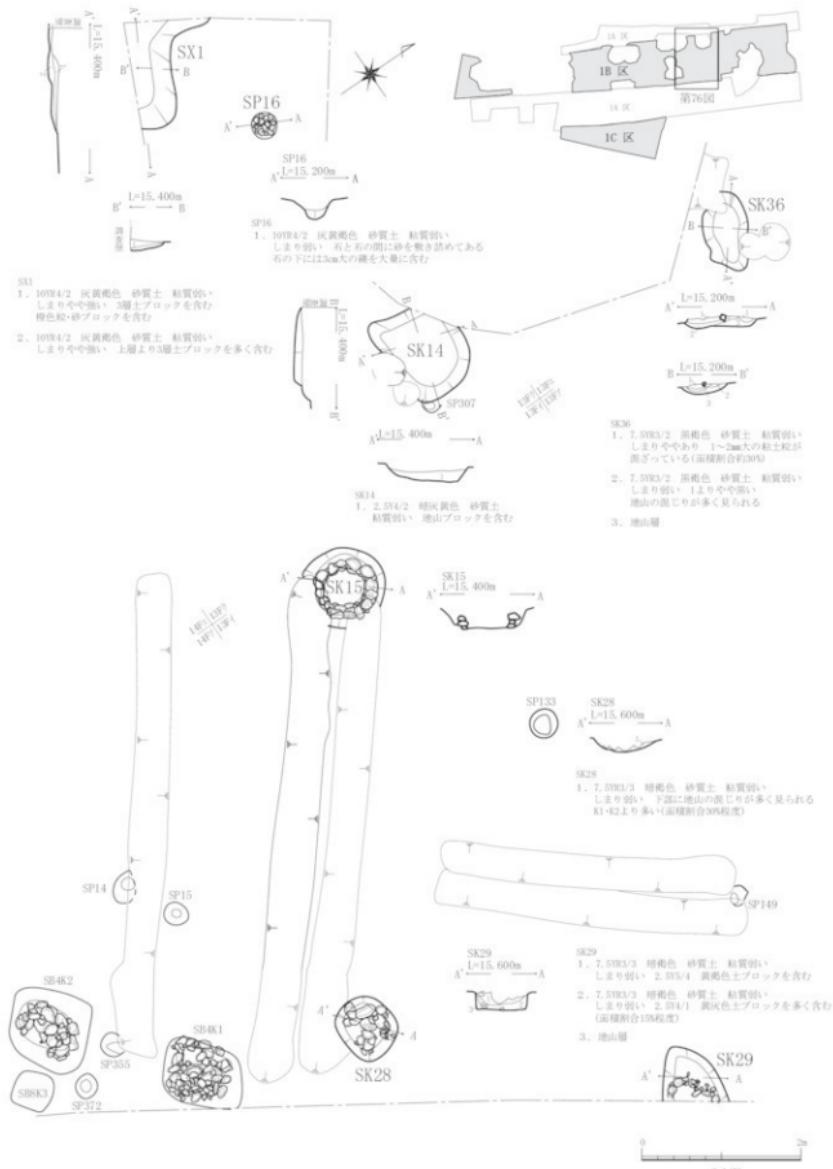
2層上面で検出した。11Hウ・グリッドに位置する。北西側は調査区外であるが、現況から平面形は隅丸方形と想定される。現況で長軸約41cm以上、短軸約46cm、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は暗褐色砂質土である。

S K 2 0 (第77図)

2層上面で検出した。11Hウ・グリッドに位置する。北側は調査区外、北東側は搅乱に壊されるため平面形は不明である。検出面からの深さは約43cmを測る。埋土は灰黄褐色土である。

S K 1 9 (第77図)

2層上面で検出した。11Hウ・グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で、長軸約120cm、短軸約90cm、検出面からの深さは約20cmを測る。埋土は2層で上層は灰黄褐色砂質土、下層はにぶい黄褐色土である。



第76図 1B区 近代遺構平面・断面図 (6)

S K 1 8 (第 77 図)

2層上面で検出した。12G 7・グリッドに位置する。西部を擾乱、SP12、SP13 に壊される。平面形はやや歪んだ隅丸方形で、長軸約 110cm、短軸約 91cm、検出面からの深さ約 20cm を測る。埋土は 2 層で上層は灰黄褐色砂質土、下層はにぶい黄褐色土である。

S K 1 4 (第 76 図)

2 層上面で検出した。13F 9・グリッドに位置する。南西側を擾乱で壊され、SP307 を壊す。北側は調査区外である。現況から平面形は隅丸方形で長軸約 115cm、短軸約 93cm 以上、検出面からの深さは約 21cm を測る。埋土は暗灰黄色砂質土である。

S K 3 6 (第 69 図)

2 層上面で検出した。13F 1・グリッドに位置する。北西部と東部を擾乱で壊される。平面形は長梢円形で長軸約 90cm、短軸約 56cm、検出面からの深さは約 9cm を測る。埋土は黒褐色砂質土であり、上層に 1 ~ 2 mm 大の粘土粒が混ざる。

S K 1 5 (第 76 図)

2 層上面で検出した。13F 4・グリッドに位置する。土坑内周辺部に川原石の石積みが残存し円形を呈する。径は約 105cm、検出面からの深さは約 25cm を測る。

S K 2 8 (第 76 図)

2 層上面で検出した。14G 7・グリッドに位置する。平面形は隅丸方形で上部に川原石積みが残存する。長軸約 77cm、短軸約 67cm、検出面からの深さは約 20cm を測る。川原石積みの下の暗褐色埋土はしまりが弱く、石が地山面に直接置いてあることから、石を置いた後に石と石の間に入ってきた土と推察される。この土坑も栗石地業であることから SB4 に付随するもの可能性がある。

S K 2 9 (第 76 図)

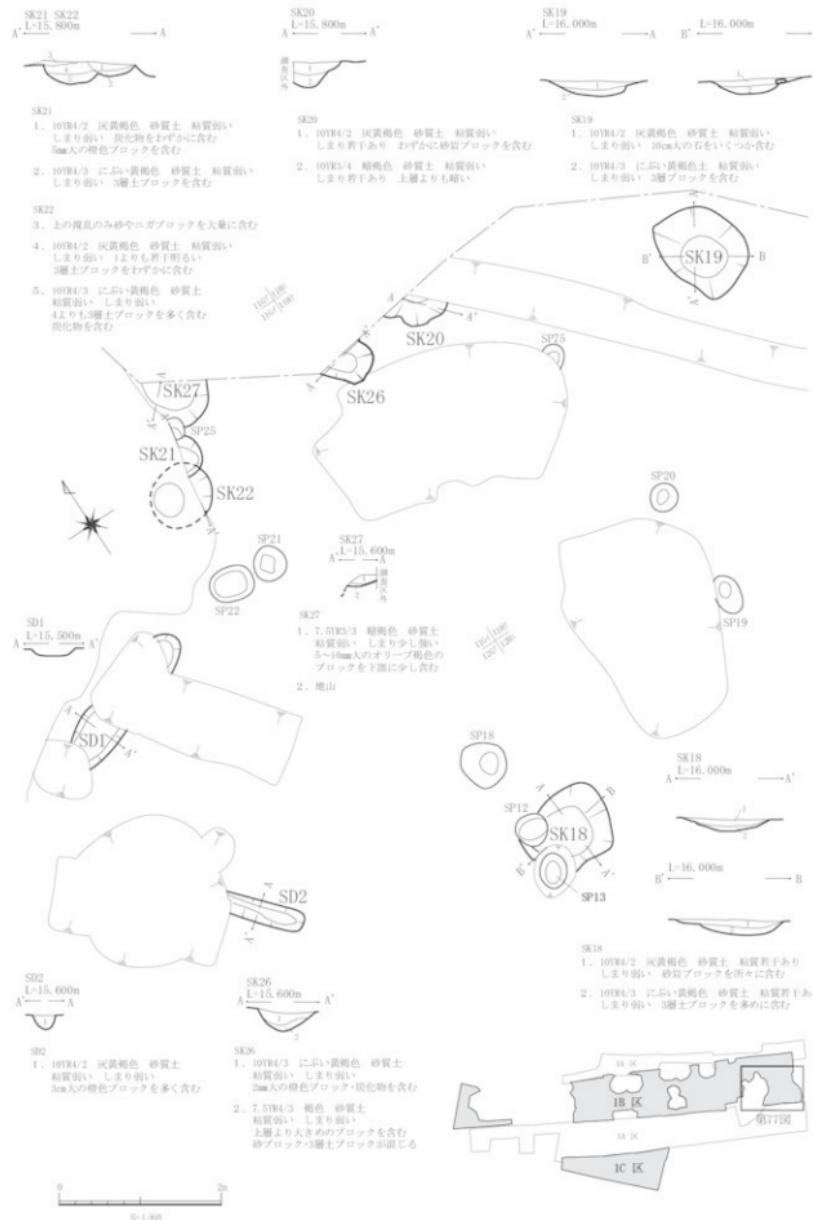
2 層上面で検出した。13G 9・グリッドに位置する。平面形は南東側 1A 区では擾乱としてあるが、不整円形を呈す。現況で長軸は約 93cm、短軸は約 82cm を測る。上面に川原石が円を描くように残存する。埋土は 2 層で石のスタンプが下層には残っていないことから、下層の土を埋めて石を置き、固定するために横を埋めていると思われる。

S K 6 (第 76 図)

2 層上面で検出した。15E 7・グリッドに位置する。SP8 に壊される。北側を擾乱に壊されているため平面形は不明である。現況で長軸 53cm 以上、短軸 34cm、検出面からの深さ約 15cm を測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。

S K 4 (第 74 図)

2 層上面で検出した。15F 7・グリッドに位置する。平面形は長梢円形で、長軸約 74cm、短軸約 38cm、検出面からの深さ約 9cm を測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。



第77図 1B区 近代遺構平面・断面図 (7)

S K 5 (第74図)

2層上面で検出した。15F7・グリッドに位置する。平面形は楕円形で長軸約77cm、短軸約54cm、検出面からの深さ約7cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。

S K 8・9・10 (第74図)

2層上面で検出した。14F9・グリッドに位置する。切り合いはSK9をSK10が壊し、SK9・10埋没後にSK8が掘られている。SK8は楕円形で長軸約73cm、短軸約51cm、検出面からの深さ約9cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。SK10は攪乱に壊されているが、楕円形と思われる。長軸58cm以上、短軸約40cm、検出面からの深さ約11cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。SK9はSK10に壊されているが、長楕円形と思われる。長軸55cm以上、短軸49cm、検出面からの深さ約11cmを測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。

S K 30 (第74図)

2層上面で検出した。14F9・グリッドに位置する。西から南側を攪乱に壊される。土坑内に川原石が敷き詰められる。埋土のしまりが弱いことから川原石を入れた後、突き固めてはいないようである。掘方は残存で長軸78cm以上、短軸43cm以上、検出面からの深さ約13cmを測る。

S K 2 (第73図)

2層上面で検出した。15E9・グリッドに位置する。長軸約95cm、短軸約65cm、検出面からの深さ約10cmを測る。埋土は灰黄褐色砂質土である。

S K 3 (第73図)

2層上面で検出した。15E10・グリッドに位置する。土坑内に川原石が敷き詰められる。平面形はほぼ円形で径約100cm、検出面からの深さ約40cmを測る。埋土は暗褐色砂質土でしまりは弱い。最初、粘土や焼土が入っていたため攪乱として掘っていたが、川原石が出土したことから遺構として記録を取っていった。

S K 25 (第73図)

2層上面で検出した。15E9・グリッドに位置する。攪乱、調査区外にかかるため、平面形は不明であるが現況で、長軸50cm以上、短軸45cm以上、検出面からの深さ約10cmを測る。埋土は灰黄褐色土である。掘方面から古代のピットSP229が出土した。

S K 7 (第73図)

2層上面で検出した。15E10・グリッドに位置する。平面形は長楕円形である。攪乱に壊されるため、現況で長軸132cm以上、短軸83cm以上、検出面からの深さ約10cmを測る。埋土は灰黄褐色土である。

S K 11 (第71図)

2層上面で検出した。16D7・E・グリッドに位置する。上部を一部SB2K6に壊される。平面形は円形で、径は約175cm、検出面からの深さ約45cmを測る。埋1・2層は灰黄褐色砂質土、埋3層は褐色砂質土、埋4層は黒褐色砂質土である。

S K 2 4 (第 71 図)

2層上面で検出した。16E ウ・グリッドに位置する。平面椭円形で、長軸は約 62cm、短軸は 43cm を測る。土坑内に栗石が入るため SB1 に付隨する可能性もある。

S K 1 (第 71 図)

2層上面で検出した。16D 7・グリッドに位置する。平面円形で、径は約 85cm、検出面からの深さは約 12cm を測る。埋土はにぶい黄褐色砂質土である。

溝**S D 1 (第 77 図)**

2層上面で検出した。11G イ・グリッドに位置する。中央部と南東部を擾乱で壊されている。長軸は 177cm 以上、短軸は約 55cm、検出面からの深さは約 10cm を測る。長軸の方向は N - 70° - E である。

S D 2 (第 77 図)

2層上面で検出した。12G 7・グリッドに位置する。北西部は擾乱で壊され、SI4、SI5 を壊す。長軸は約 96cm 以上、短軸は約 26cm、検出面からの深さは約 22cm を測る。長軸の方向は N - 47° - W である。

埋土は灰黄褐色砂質土である。

S D 5 (第 74 図) S D 9 (第 78 図)

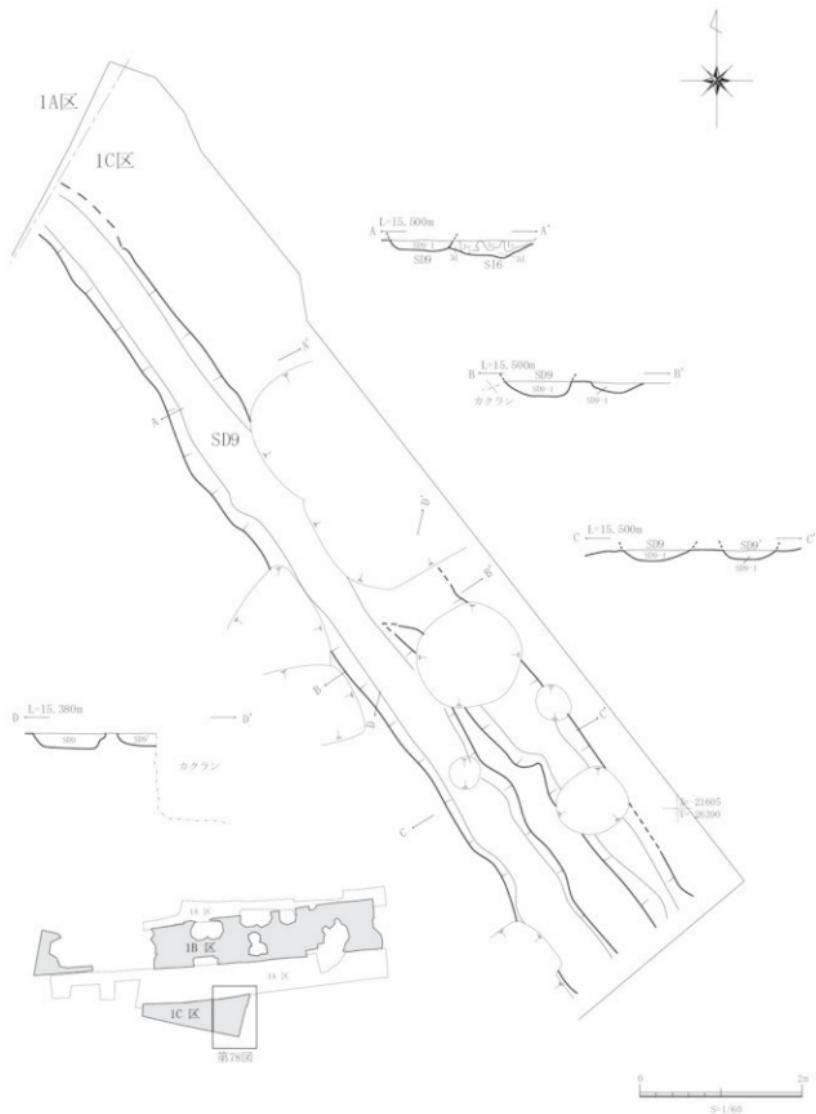
2層上面で検出した。SD5 は古代遺構 SI1 の上部に位置する。1B 区 SD5 と 1A 区の擾乱と 1C 区 SD9 が直線状につながるため、同一の溝と思われる。SD5 は北西部を擾乱で壊される。現況では長軸約 2.0cm、短軸約 0.7cm、検出面からの深さ約 11cm を測る。方向は N - 40° - W である。SD9 は中央部北側から東側にかけて一部擾乱で壊される。現況では長軸約 11.4m、短軸約 0.8m、検出面からの深さ約 20cm を測る。方向は N - 36° - W である。埋土は、SD9 は擾乱で壊されているためはっきりとはしないが、東側で 2 条の溝に分岐すると思われる。SD5 の北西端と、SD9 の南東端の長さは、途中 1A 区の擾乱が無くなる箇所があるが約 23.7m を測る。傾斜は掘方レベルが北西端で 15.30m、南東端で 15.21m とほぼ同じである。

S D 6 (第 74 図)

2層上面で検出した。SD6 は古代遺構 SI1 の上部の遺構である。15F イ・グリッドに位置し南東部は擾乱で壊される。現況で長軸 227cm 以上、短軸約 60cm、検出面からの深さ約 16cm を測る。長軸の方向は N - 53° - W である。

ピット**S P 1 6 (第 76 図)**

2層上面で検出した。13F ウ・グリッドに位置する。ピット上面に川原石が入り、石と石の間に砂を敷き詰められる。石の下には 3cm 大の礫を大量に含む。径は約 47cm、検出面からの深さ約 28cm を測る。



第78図 1C区 SD9平面・断面図

不明遺構

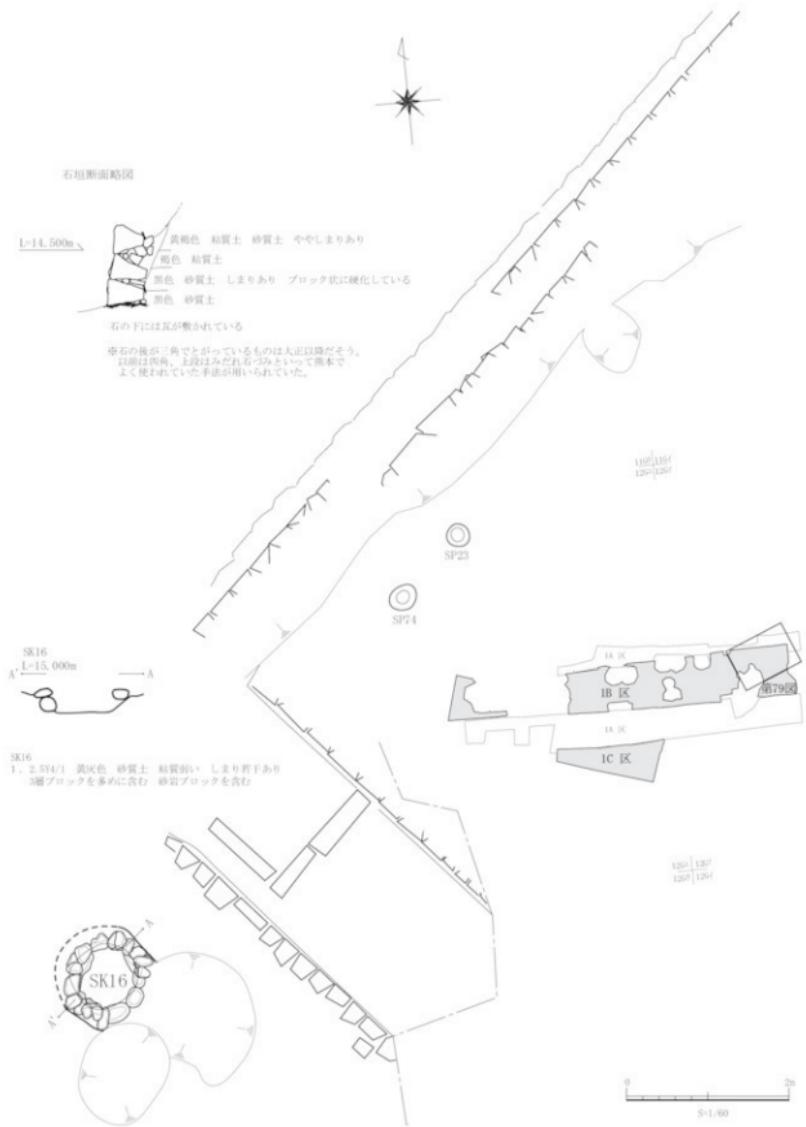
S X 1 (第 76 図)

2 層上面で検出した。13E イ・グリッドに位置する。北西部、南西部は調査区外である。平面形は不定形で、埋土は灰黄褐色土でしまりがやや強い。

石垣

表土剥ぎの際、表土を掘削していく際に検出した。1 区の北西端に位置する。上段と下段の 2 段である。北西側の下段の石垣は壊されている箇所もあるが、長さ約 10.2m、高さは約 1.0m を測る。間地石を 3 段に積み、積み方は布積みである。石の加工は打ち込み接ぎで、横幅は 18 ~ 38cm、縱幅は約 28cm、奥行きは 28 ~ 40cm、後方に向かって角錐状に加工されている。石の下には瓦が敷かれ、沈降するのを防いでいる。裏込めには角石や砂利が敷き詰められる。この石垣は、1 区と 2 区の境にある溝の横面からも確認できる。上段は両端が壊されていて、残存は長さ約 3.9m、高さは約 0.9m を測る。乱れ石積みである。石の加工は打ち込み接ぎであるが、不定形の石が積まれている。

南西側の石垣は南東側が樹木のため未調査であるが、北西側の上段と同じ高さから積まれ、長さ約 3.9m、高さは約 0.7 ~ 0.8m である。積み方は布積みで、南西側から 2 個目までは 2 段、それから南東側へは 3 段で、下から 1、2 段目の石はいちばん上の石よりも小さいものが使われている。石の横幅は 15 ~ 44cm を測る。対面側にある石垣は 2 段で、長さ約 3.3m、高さは 0.5 ~ 0.4m である。間に、石垣の天端の高さで角石が埋め込まれている。この石垣は白川の護岸としては距離が短いため、個人住宅の護岸ではないかと思われる。



第79図 1B区 近代遺構平面・断面図 (8)

2. 2区

掘立柱建物

S B 1 (第80、81図)

2層上面で検出した。2B区北東部8J7・イ・ウ・エ・グリッドに位置する。表土剥ぎの際に出土した栗石地業である。

プランは不明であるが、南東-北東の列1 (K2-K3-K4-K10) は約7.2m、列2 (K5-K6-K7-K8-K9-K10) は約7.6m、列3 (K11-K12-K13) は約5.2mを測る。列1と列2の間は約0.6m、列2と列3の間は約1.8mを測る。北東-南西の列4(K13-K14)は約2.0m、列5(K10-K12)は約1.8m、列6 (K9-K11) も約1.8mを測る。掠乱内であるが列4を南東方向に約2.0m伸ばした箇所に建物基礎を仮定するとほぼ直角になり、建物北東側の隅になる可能性がある。南東-北西の列の方向はN-47°-Eである。

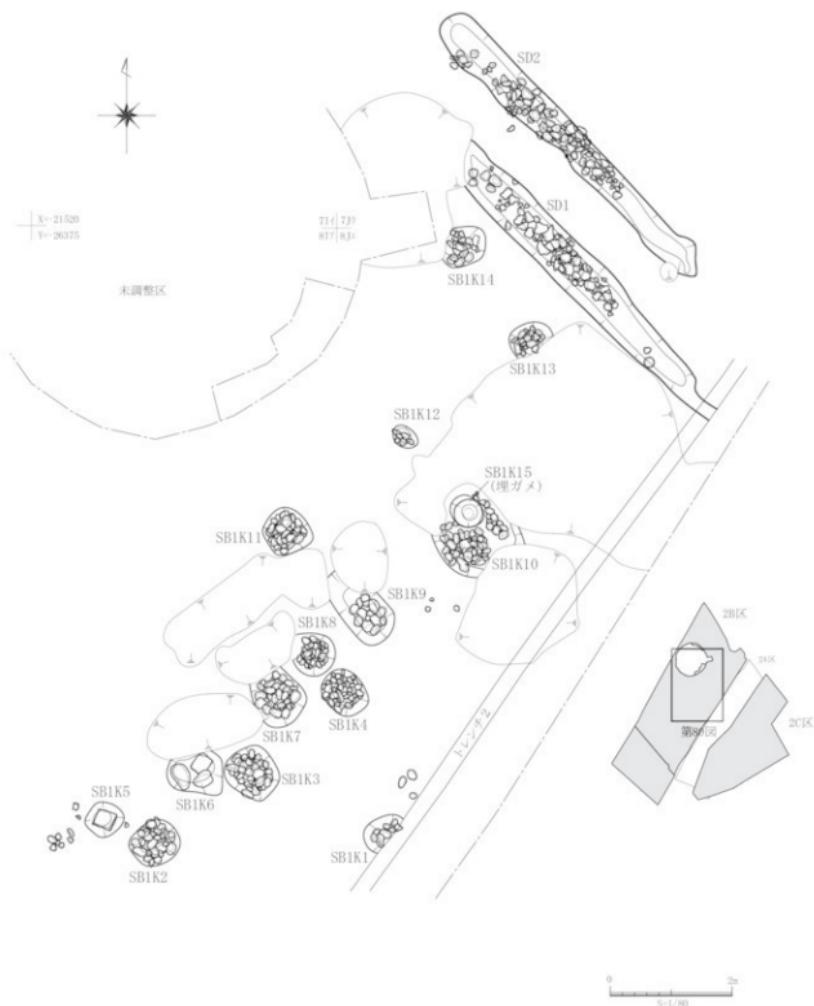
溝状の栗石地業SD1とSD2は列4とほぼ角度が同じであることから、SB1に付随する施設と思われる。

SB1、SD1、SD2は当初、近代からの建物跡と考えていたが、SB1基礎石の間に現代整地層が埋土として入り、又SB1の施設である埋甕の廃棄時の埋土にプラスチックが入っていた事、SD1、SD2の下から防空壕が見つかったことから戦後に建てられた建物跡と思われる。

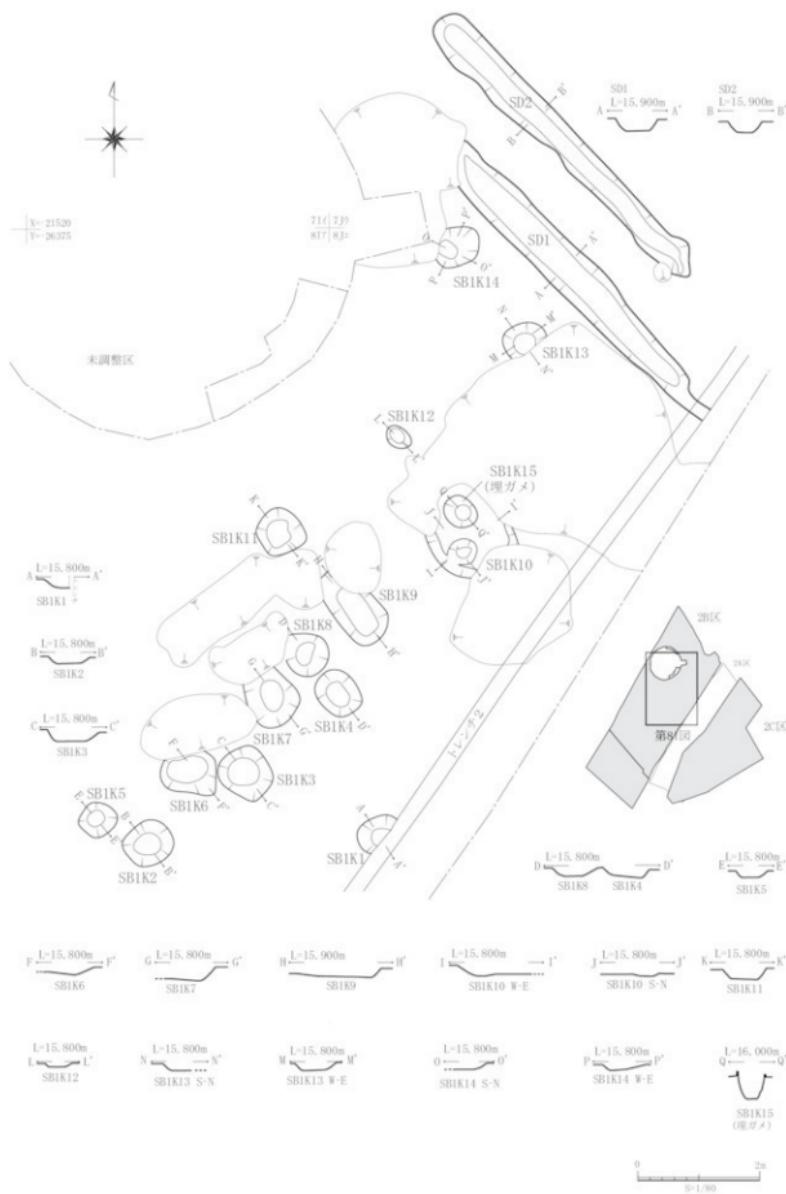
S B 1 1 (第82図)

2層上面で検出した。2C区中央部9Jイ・10Jア・9Kケ・10Kエ・グリッドに位置する。表土剥ぎの際に出土した栗石地業である。

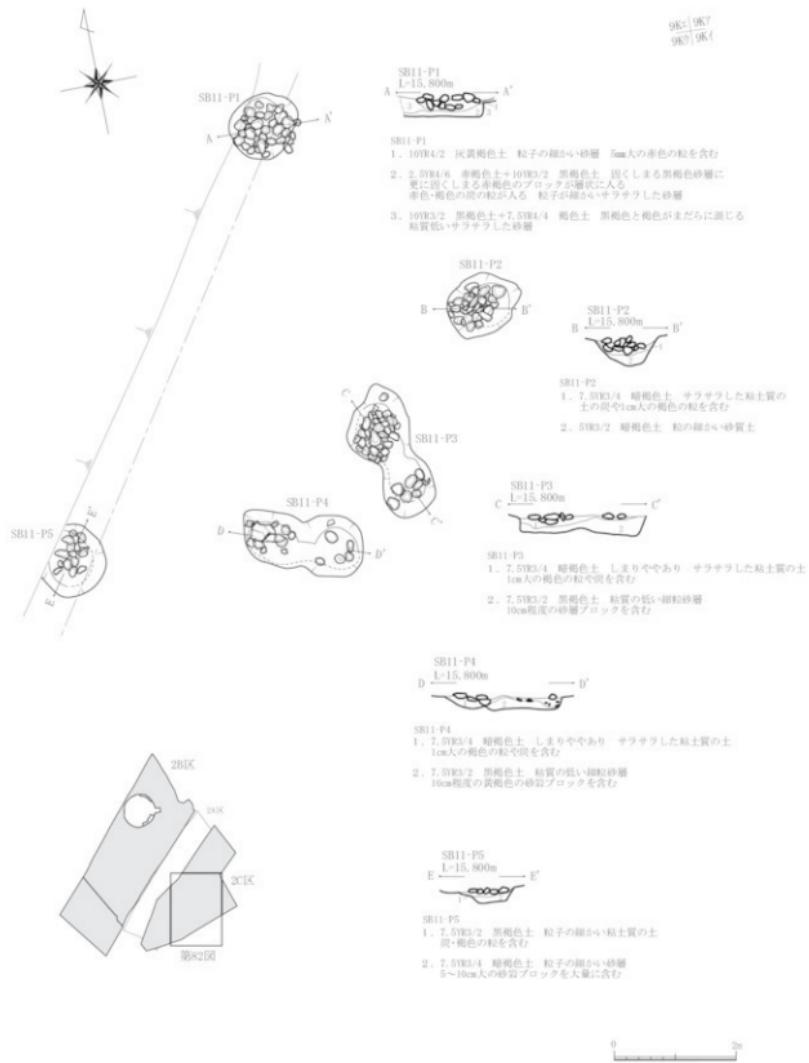
プランは不明であるが北東列 (K1-K2) と南東列 (K2-K3-K4) が直交するため、建物の北西側の隅である可能性もある。K1-K2は約4.8m、K2-K3-K4は約5.1mを測る。



第80図 2B区 近代遺構平面図



第81図 2B区 近代遺構平面・断面図



第82図 2C区 近代遺構平面・断面図

遺物觀察表

出土遺物観察表①

図版 番号	体形 種類 番号	縁構 区	出土地點 番号	基準 高さ cm	基準幅 cm	基準深 cm	性状	外観面	内面面	内面面	色調	写真 部位			
												外観	内面	外観	
第19回 1	土器器	杯	IA区 (134)	537	(132)	(74)	2.9	1/4以下 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄褐色 橙5YR7/3 橙5YR6/6	外観面 板状底 内面面	板状底	第9回	
第19回 2	土器器	杯	IA区	2	2	(110)	(70)	4.2	1/4 良好	回転ナギ	ナギ	明黄褐色 明黄5YR7/6	明黄褐色 明黄5YR7/6	—	第8回
第19回 3	土器器	杯	IA区 (142)	547	—	7.0	(35)	1/2 良好	回転ナギ	ナギ	にごい黄 5YR7/4	外観面 板状底	板状底	第9回	
第19回 4	土器器	碗	IA区 (143)	547	(132)	(74)	7.1	1/4以下 良好	回転ナギ	ナギ	にごい黄 5YR7/3 5YR6/6	外観面 板状底 内面面	板状底	第9回	
第19回 5	土器器	碗	IA区 (142)	547	—	(32)	(26)	1/4 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄褐色 明黄5YR6	淡黄褐色 明黄5YR6	—	第8回	
第19回 6	土器器	碗	IA区 17E	2	2	(135)	(69)	4.0	1/2 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄褐色 明黄5YR6	淡黄褐色 明黄5YR6	—	第8回
第19回 7	土器器	碗	IA区 (547)	547	(127)	(58)	4.6	1/2 良好	回転ナギ	ナギ	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	—	第9回	
第19回 8	土器器	碗	IA区 (142)	547	(131)	(69)	4.4	— 良好	回転ナギ	ナギ	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	—	第9回	
第19回 9	土器器	碗	IA区 (143)	547	(131)	(69)	—	— 良好	回転ナギ	ナギ	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	—	第9回	
第19回 10	土器器	碗	IA区 14G	2	2	—	6.1	(26) 良好	回転ナギ	ナギ	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	にごい黄 5YR7/4 5YR2/	—	第9回	
第19回 11	土器器	碗	IA区 (547)	547	—	8.4	(23) 良好	1/4以下 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄 5YR7/6	淡黄 5YR7/6	内面面 板状底	第9回	
第19回 12	酒器	壺	IA区 13H	—	(155)	—	1.7	1/4以下 良好	回転ナギ	ナギ	青灰 25YH1/1	青灰 25YH1/1	つまみ足付	第9回	
第19回 13	酒器	壺	IA区 14G	2	2	(133)	(74)	6.1	1/2 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄 5YR7/6	淡黄 5YR7/6	外観面 板状底	第9回
第19回 14	酒器	壺	IA区 16D	—	8.0	(26)	1/3 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄 5YR7/3	淡黄 5YR7/3	外観面 板状底	第10回		
第19回 15	土器器	高杯	IA区 17E	2	2	(174)	—	(6.2)	1/4 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄 5YR7/4	淡黄 5YR7/4	外観面 スヌ付器、垂乳	第9回
第19回 16	陶器器	壺	IA区 16G	2	2	—	(5.2)	(1.4)	1/4 良好	回転ナギ	ナギ	青白 C-13S 自然	青白 C-13S 自然	板の川窯台	第10回
第19回 17	土器器	壺	IA区 12H	2	2	(264)	—	(18.2)	1/4以下 良好	回転ナギ	ナギ	にごい黄 5YR7/6	にごい黄 5YR7/6	外観面 板状底 内面面	第10回
第19回 18	土器器	壺	IA区 17E	2	2	16.2	最大直径 29.0	1.2	良好	回転ナギ	ナギ	淡黄 5YR7/6	淡黄 5YR7/6	外観面	第10回
第20回 1	土器器	杯	IA区 27S	—	(2.8)	9.0	3.0	1/2 良好	回転ナギ	ナギ	淡黄 5YR7/6	淡黄 5YR7/6	内面 板状底	第10回	

器形	構造	種別	埋地處	出土位置	法量(cm)	備註	操作者	外觀	外觀	調査	内面	内面	色調	備考		
第20回 2 土瓶器	杯	I-A区 灯油	I-A区	10.1上 10.1下	13.0	7.5	2.3	1.2	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	底板ナギ 底板ナギ	底板ナギ 底板ナギ	底板ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第20回 3 土瓶器	灯油器	I-A区 灯油	I-A区	底土-堆	(5.7)	3.7	1.1	1.2	魚籽	底板ナギ 底板ナギ	底板ナギ 底板ナギ	底板ナギ 底板ナギ	底板ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第20回 4 土瓶器	杯	I-B区 灯油	I-A区	27.2	6.2	4.7	1.4	1.4	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第20回 5 土瓶器	灯油器	I-B区 灯油	I-A区	27.2	6.0	4.0	1.2	2.3	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第20回 6 土瓶器	灯油器	I-A区 灯油	I-A区	27.2	7.4	5.2	1.4	1.4	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第30回 1 土瓶器	杯	I-B区	S5P2	2層	12.2	6.7	3.5	1.3	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第30回 2 土瓶器	杯	I-B区	S5A13	2層	No.5	12.1	6.9	3.5	2.3	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ △底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ △底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁	
第30回 3 土瓶器	杯	I-B区	S5P10	—	(6.0)	(2.0)	1.4	1.4	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第30回 4 土瓶器	灯油器	I-B区 灯油	I-B区	27.2	—	7.4	5.3	1.5	1.5	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁	
第30回 5 土瓶器	杯	I-B区	S5A13	2層	No.7	(11.9)	7.4	5.7	1.3	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁	
第30回 6 土瓶器	杯	I-B区	S5P9	2層	(12.7)	6.3	5.1	1.2	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	青磁 青磁		
第30回 7 土瓶器	杯	I-B区	S5A3	2層	—	(8.0)	(2.1)	1.4	1.4	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁	
第30回 8 土瓶器	托	I-B区	S5P16	2層	—	12.0	7.7	2.0	2.3	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁	
第30回 9 土瓶器	皿	I-B区	S5P16	2層	(11.6)	(13.6)	3.0	1.3	魚籽	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	青磁 青磁		
第30回 10 土瓶器	高杯	I-B区	S5A11	2層	(17.8)	—	(4.0)	1.4	1.4	魚籽	△底板ナギ △底板ナギ	—	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	青磁 青磁	
第30回 11 土瓶器	高杯	I-B区	S512	2層	No.7	(16.6)	—	(4.0)	1.4	1.4	魚籽	ナギ	—	ナギ	—	青磁 青磁
第30回 12 土瓶器	把子杯	I-B区	S512	—	No.3	13.6	(8.6)	10.9	2.4	良好	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	青磁 青磁	
第30回 13 清酒器	杯	I-B区	S5P124	2層	(13.0)	(6.5)	3.6	1.2	魚籽	圓柱ナギ 底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	圓柱ナギ 底板ナギ	青磁 青磁		
第30回 14 清酒器	杯	I-B区	S512	—	No.2	13.2	—	3.6	2.4	良好	△底板ナギ △底板ナギ	—	△底板ナギ △底板ナギ	△底板ナギ △底板ナギ	青磁 青磁	

出土遺物観察表(3)

図版 番号	地名	場所	基盤	区	通号	出土地点	層位	地質	位置 (cm)	状態	保存率	焼灰	外表面	内部面	内形容		外面	内部	写真	備考		
															表面	裏面						
第30図 15	須磨園	科舟	田区	S112	土	小笠原	110区	S112	2層	No.4	13.2	6.4	4.2	3.4	田板ナメ	田板へカケズ	田板ナメ	田板ナメナメ	反N/6/	口縁から底筋にかけて1/2 厚壁の黒筋	図12	
第30図 16	須磨園	科舟	田区	S112	土	土船屋	110区	S112	2層	No.4	(15.0)	—	(2.7)	1.4以下	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	—	—	図12
第30図 17	土船屋	土	小笠原	110区	S112	2層	No.4	15.2	最大限	17.2	4.5	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	反オリーブ5/6/2	—	—	図12	
第30図 18	土船屋	土	土船屋	110区	S112	2層	No.1	(24.6)	—	(20.5)	1.4以下	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	外縁スズシ行 外縁スズシ行	外縁スズシ行 外縁スズシ行	図12		
第30図 19	土船屋	土	土船屋	110区	S112	2層	No.1	(24.6)	—	(20.5)	1.4以下	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	外縁スズシ行 外縁スズシ行	外縁スズシ行 外縁スズシ行	図12		
第34図 1	土船屋	土	土船屋	110区	S112	1層	No.1	(12.4)	—	(8.0)	3.0	1.4以下	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	ケズリ	—	—	図12
第36図 2	土船屋	土	土船屋	110区	S112	—	No.1	(13.6)	(8.6)	2.7	1.4以下	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	外縁スズシ行 外縁スズシ行	外縁スズシ行 外縁スズシ行	図12		
第36図 3	土船屋	土	土船屋	110区	S112	—	No.1	(14.6)	(8.6)	5.8	1.4以下	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	内底延 内底延	内底延 内底延	図12		
第36図 4	土船屋	土	土船屋	110区	S112	1層	—	7.5	(2.3)	1.4以下	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	外縁延 外縁延	外縁延 外縁延	図12			
第36図 5	須磨園	科舟	田区	S119	土	土船屋	110区	S111	—	No.1	13.6	5.0	4.0	(0.8)	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	—	—	図12
第36図 6	土船屋	土	土船屋	110区	S111	—	No.1	13.6	5.0	4.0	(0.8)	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	外縁延 外縁延	外縁延 外縁延	図12		
第36図 7	土船屋	土	土船屋	110区	S112	1層	No.24	(10.5)	—	(10.7)	1.4以下	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	ケズリ	—	—	図12	
第36図 8	土船屋	土	土船屋	110区	S112	1層	No.2	(29.0)	—	(26.4)	2.3	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	内底延 内底延	内底延 内底延	図12		
第40図 1	土船屋	土	土船屋	110区	S119	—	No.1	(4.3)	—	(4.3)	2.3	良好	ハケナメ バクナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	外縁延 外縁延	外縁延 外縁延	図12		
第40図 2	土船屋	土	土船屋	110区	S115	—	—	(7.6)	(4.3)	1.3	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	内底延 内底延	内底延 内底延	図12			
第40図 3	須磨園	科舟	田区	S116	土	土船屋	110区	S119	上層	No.1	(12.3)	7.2	5.0	1.3	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	—	—	図12
第40図 4	須磨園	科舟	田区	S115	土	土船屋	110区	S119	下層	—	—	(1.7)	1.4以下	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	外縁延 外縁延	外縁延 外縁延	図12	
第40図 5	須磨園	科舟	田区	S119	土	土船屋	110区	S119	下層	—	(9.2)	(1.8)	1.4以下	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	内底延 内底延	内底延 内底延	図12	
第40図 6	須磨園	科舟	田区	S119	土	土船屋	110区	S119	下層	—	(9.7)	(2.8)	1.4以下	良好	田板ナメ	田板ナメ	田板ナメナメ	田板ナメナメ	内底延 内底延	内底延 内底延	図12	

図版 番号	種名 学名	場所 地名	出土地点 地名	標号 番号	層位 層	法面 断面	断面形状 断面形態	操作率 操作率	漁獲 量	調査			写真 写真	備考	
										外表面	内表面	内表面			
第40図 7 土師器 瓢 1D区 S015 下層	瓦質	1D区 S019 瓢下層	1D区 S019 瓢下層	14.4)	—	(5.1)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	—	図13
第40図 8 瓢質 瓢 1D区 S019 瓢下層	瓦質	1D区 S019 瓢下層	1D区 S019 瓢下層	(3.6)	(2.2)	(6.3)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	—	図13
第40図 9 瓢質 瓢 1D区 S019 瓢下層	瓦質	1D区 S019 瓢下層	1D区 S019 瓢下層	(6.3)	(2.2)	(6.3)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	—	図13
第40図 10 瓢質 瓢 1D区 S019 瓢下層	瓦質	1D区 S019 瓢下層	1D区 S019 瓢下層	(3.9)	(5.4)	(5.4)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	—	図13
第40図 1 土師器 瓶 2A区 S11 瓶まぐれ	土師器 瓶	2A区 S11 瓶まぐれ	2A区 S11 瓶まぐれ	(9.0)	(9.0)	(5.2)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	横 51786.6	横 51786.6	内外面 本形	図14
第40図 2 土師器 瓶 2A区 S12 瓶まぐれ	土師器 瓶	2A区 S12 瓶まぐれ	2A区 S12 瓶まぐれ	(12.2)	(7.2)	(3.5)	1.3 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	内外面 本形 外表面 傷跡あり [田]か?	図14
第40図 3 土師器 瓶 2A区 S12 瓶まぐれ	土師器 瓶	2A区 S12 瓶まぐれ	2A区 S12 瓶まぐれ	—	—	(2.0)	1.4m以下 魚好	斜行ナメハ ナメハ二色ナメハ 瓶底二色ナメハ	—	斜行ナメハ ナメハ二色ナメハ 瓶底二色ナメハ	—	横 51786.6	横 51786.6	外表面 スス付唇	図14
第40図 4 漆器 瓶 2A区 S11 地土一型	漆器 瓶	2A区 S11 地土一型	2A区 S11 地土一型	—	—	(2.5)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	外表面 薬田 内外面 スス付唇	図14
第40図 5 漆器 瓶 2A区 S11 地土一型	漆器 瓶	2A区 S11 地土一型	2A区 S11 地土一型	(16.4)	—	(3.6)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	外表面 薬田 内外面 スス付唇	図14
第40図 6 土師器 瓶 2A区 地土一型	土師器 瓶	2A区 地土一型	2A区 地土一型	(18.7)	(26.3)	(3.2)	1.2 魚好	回転ナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	横 51786.6	横 51786.6	外表面 薬田 内外面 スス付唇	図14
第56図 1 土師器 灯籠皿 2B区 S96	土師器 灯籠皿	2B区 S96	2B区 S96	(6.3)	(4.5)	1.3 1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	ヘラガチナメハ バケツ	横 51786.6	横 51786.6	外外面 本形	図14
第56図 2 土師器 灯籠皿 2B区 S97	土師器 灯籠皿	2B区 S97	2B区 S97	—	(10.0)	(1.5)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 本形	図14
第56図 3 土師器 灯籠皿 2B区 S12 地土一型	土師器 灯籠皿	2B区 S12 地土一型	2B区 S12 地土一型	(15.0)	—	(3.0)	1.4m以下 魚好	ナメハ二色ナメハ 瓶底二色ナメハ	—	ナメハ二色ナメハ 瓶底二色ナメハ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 本形	図14
第56図 4 土師器 灯籠皿 2B区 S97	土師器 灯籠皿	2B区 S97	2B区 S97	(17.2)	—	(2.7)	1.4m以下 魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 本形	図14
第56図 5 土師器 灯籠皿 2B区 S97	土師器 灯籠皿	2B区 S97	2B区 S97	(13.0)	(7.3)	5.5 1.4	魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 本形 内外面 傷跡あり	図14
第56図 6 漆器 灯籠皿 2B区 S98	漆器 灯籠皿	2B区 S98	2B区 S98	(13.8)	(10.4)	2.8 1.4	魚好	回転ナメハ バケツ	—	回転ナメハ バケツ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 本形 内外面 傷跡あり	図14
第56図 7 土師器 瓶 2B区 S94	土師器 瓶	2B区 S94	2B区 S94	(25.8)	—	大底皿 (19.6)	1.4m以下 魚好	ハケツ後工藝ナメハ バケツ後ヨコナメハ	—	ハケツ後工藝ナメハ バケツ後ヨコナメハ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 本形 内外面 傷跡あり	図14
第56図 8 土師器 瓶 2B区 S97	土師器 瓶	2B区 S97	2B区 S97	(26.9)	(26.7)	1.2	魚好	ヨコナメハ バケツ後ヨコナメハ	—	ヨコナメハ バケツ後ヨコナメハ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 黒斑	図14
第56図 9 土師器 瓶 2B区 S97	土師器 瓶	2B区 S97	2B区 S97	No.2	(17.3)	29.5 3.4	魚好	ハケツ後ヨコナメハ バケツ後ヨコナメハ	—	ハケツ後ヨコナメハ バケツ後ヨコナメハ	—	横 51786.6	横 51786.6	外外面 黒斑	図14

出土遺物観察表(5)

区分	地図	場所	標線	区	出土地点	番号	層位	測定上(下)限 m	測定 高さ cm	測定 高さ cm	残存率	焼灰	外表面	内部面	内表面	外表面	内表面	色調			
																				写真 番号	備考
第67図 10	國文土器	深鉢	2D区 約2.5m	1	~3	1	~1	0.6	—	(4.7)	樹形輪片 波打文	良好	丁寧な丸み 波打文	—	丁寧な丸み 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 1	土器盤	杯	2D区	1	~1	1	~1	0.6	—	—	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 2	土器盤	杯	2D区 約2.5m	1	~1	10.3	6.2	3.4	2.3	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 3	土器盤	杯	2D区 約2.5m	1	~1	14.7	8.5	4.5	1.7	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 4	漆器盤	蓋	2D区 約2.5m	1	~1	12.0	—	3.7	1.3	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 5	漆器盤	蓋	2D区	1	~1	—	—	10.6	1.6	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 6	陶器盤	柄	2D区 約2.5m	1	~1	—	—	4.0	3.2	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 7	土器盤	小笠置	2D区 約2.5m	1	~1	15.4	11.0	1.3	1.4	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 8	土器盤	小笠置	2D区 約2.5m	1	~1	12.6	16.4	1.3	1.4	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 9	國文土器	鉢	2D区 約2.5m	1	~1	—	—	6.6	—	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 10	土器盤	人面	2D区 約2.5m	1	~1	—	—	2.6	1.1	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 11	土器盤	人面	2D区 約2.5m	1	~1	3.3	1.5	1.0	0.5	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
第67図 12	土器盤	人面	2D区 約2.5m	1	~1	金輪	5.1	4.1	0.9	注記無	良好	良好	丁寧な丸み 波打文	—	ナフ	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
未発見 1	土器盤	杯	1A区 約2.5m	6.4	4.6	1.5	注記無	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
未発見 2	土器盤	杯	1B区 約2.5m	5.7	4.1	1.1	注記無	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
未発見 3	土器盤	杯	1B区 約2.5m	5.8	3.6	1.3	注記無	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
未発見 4	土器盤	杯	1B区 約2.5m	6.0	3.9	1.3	注記無	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—
未発見 5	土器盤	杯	1B区 約2.5m	6.2	3.6	1.3	注記無	良好	樹形輪片 波打文	良好	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	樹形輪片 波打文	—	昭和10年1月3日	—	—	昭和10年4月7日	—

器物 番号	種別 番号	種類	出土地點	層位	標高 m	口径 m	底径 m	高さ (cm)	測量			内面	外面	色調	写真 番号	
									横径	縦径	側面					
未規範 6	土器類	灯明皿	1B区	妙2	6.2	3.7	1.2	3.4	魚好	圓柱ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙 打ち穴合	油煙 油煙	
未規範 7	土器類	灯明皿	1B区	妙2	6.2	3.6	1.2	3.3	魚好	圓柱ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 8	土器類	灯明皿	1B区	妙2	5.6	3.6	1.2	3.2	魚好	圓柱ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 9	土器類	灯明皿	1B区	妙2	6.0	4.0	1.2	3.3	魚好	圓柱ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 10	土器類	灯明皿	1B区	妙2	6.2	3.6	1.1	1.2	魚好	圓柱ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 11	土器類	灯明皿	1B区	妙2	7.7	5.0	1.2	3.5	魚好	圓柱ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 12	土器類	灯明皿	1B区	妙2	8.0	5.3	1.3	3.5	魚好	圓柱ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 13	土器類	杯	1B区	妙2	—	—	—	—	—	圓柱ナギ	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙
未規範 14	土器類	杯	1C区	S22	—	—	—	—	—	ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 15	土器類	杯	1B区	S412	—	—	—	—	—	ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 16	土器類	杯	1B区	S30P2	—	—	—	—	—	ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 17	土器類	杯	1C区	1-1	—	—	—	—	—	ナギ	回転ナギ	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙	
未規範 18	土器類	杯	1B区	S206	—	—	—	—	—	—	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙
未規範 19	土器類	杯	1C区	17G2-2	—	—	—	—	—	ナギ	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙
未規範 20	—	楕	1C区	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙
未規範 21	—	楕	1C区	—	—	—	—	—	—	—	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙
未規範 22	土器類	土人形	1A区	妙2	—	—	—	—	—	—	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙
未規範 23	土器類	人面	1A区	1AG	2	—	—	—	—	—	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙
未規範 24	土器類	人面	1A区	妙2	—	—	—	—	—	—	—	—	〔二-5-NB 15YR7/4	〔二-5-NB 15YR7/4	内面 油煙	油煙

出土遺物観察表(7)

番号	地図	場所	埋深	出土地点	層位	基盤	位置 (cm)	外観	操作等	状況	調整		内面	外側	内面	外側		
											番号	層位						
未規範	25	土製品	±人形 (手)	JA区 約57	—	—	—	—	—	—	型押し加工ナシ 指ナシ	—	ナフ	—	【二点NB】75/97/4 に点い焼 75/97/4	—	【点い焼 75/97/4 に点い焼 75/97/4	
未規範	26	土製品	±人形 (足)	JA区 約57	—	—	—	—	—	—	型押し加工ナシ 指ナシ	—	ナフ	—	【点い焼 75/97/4 に点い焼 75/97/4	—	【点い焼 75/97/4 に点い焼 75/97/4	
未規範	27	土製品	坐?	JA区	—	—	—	—	—	—	型押し加工ナシ 指ナシ	—	ナフ	—	【点い焼 75/97/4 に点い焼 75/97/4	—	【点い焼 75/97/4 に点い焼 75/97/4	
未規範	28	須世器	要	JA区	180	—	—	—	—	—	回転ナシ	—	回転ナシ	—	灰白 257/1	灰白 257/2	灰白 257/1	灰白 257/2
未規範	29	須世器	筋持串	JA区	50	2層	金縛 (38)	源六 6.2	1.5	格子タキ	—	ナフ	—	黄正 257/1	黄正 257/1	淡褐色 孔径 0.8mm	淡褐色 孔径 0.8mm	
未規範	30	瓦質土器	火入A.P?	OB区	1層	—	7.1	11.2	6.1	直立形	良好	【少少凹痕ナシ】	【少少凹痕ナシ】	【點打テクニ】	【點打テクニ】	—	【点い焼 75/98/4 に点い焼 75/98/4	
未規範	31	土的陶	土持	2D区	9025	壁土-埴	金縛 6.3	丸目 0.3	0.3	丸形	良好	—	—	—	【点打テクニ】	【點打テクニ】	【点打テクニ】	
未規範	32	瓦質	瓦	2D区	S01	3~4層	—	—	—	—	—	—	—	—	オリーブ 75/3/1	灰白 NB/	—	
未規範	33	瓦質土器	埴輪	2D区	S01	1~2層	—	—	—	—	—	—	XU#	—	灰 75/5/1	灰 75/5/2	—	

第5章 まとめ

1区・2区の古代遺構について

検出遺構は主に古代の遺構で6世紀末から9世紀に位置づけられる。竪穴建物、掘立柱建物、溝の主要な遺構に関して、遺物から推定される時期を記す。

竪穴建物

1区 SI1：8世紀中葉～後半 SI2：6世紀末～7世紀初頭 SI7：9世紀中葉～後半

SI9：6世紀末～7世紀初頭

2区 SI1：8世紀後半～9世紀初頭 SI2：8世紀中葉～後半 SI3：8世紀後半～9世紀初頭

1区 SI4、SI5、SI6、2区 SI4、SI5、SI6、SI7、SI8、SI9は実測できる遺物が無く、時期が判別できる遺物が出土した遺構との切り合いもないため、遺物からの時期の推定はできない。

掘立柱建物

1区 掘立柱建物の柱穴から時期の推定できる遺物が出土しなかったため、遺物からの時期の推定はできない。SB11P2はSB12P8に壊されることから、SB11はSB12より古い。そしてSB12P5を壊すSP176の遺物が9世紀中葉～後半の遺物のため、SB11・SB12は9世紀後半には存在しないことが推定される。また、SB15は道路状遺構SX3の硬化面をP1が壊す。SX3の遺物は8世紀後半～9世紀初頭のものであるため、9世紀初頭以降の建物と推定される。

2区 SB7：8世紀後半～9世紀初頭 SB6：9世紀後半

他にはSB9P8に壊されるSP93の遺物は、8世紀末～9世紀初頭の遺物のため、SB9は9世紀初頭以降の建物と推定される。

1区 SB5、SB6、SB7、SB9、SB16、2区 SB2、SB4、SB5、SB8、SB10は切り合った遺構からも時期の推定できる遺物は出土しなかったため、時期を特定できない。

道路状遺構・溝

1区 SX7：9世紀中葉～後半 SD15～19：9世紀初頭～後半 SX3：8世紀後半～9世紀初頭

2区 SD4：12世紀前半？

次に間連遺構の重複を列記する（古→新）

1区 SI5→SI4 SI2、SI7、SI8→SX7 SB11→SB12

SI8はSX7に壊される。SX7からは9世紀中葉～後半の遺物が出土していることから、9世紀中葉以前の建物と推察される。また、SI7も9世紀中葉～後半の遺物が出土しているが、SX7から壊されていることから9世紀中葉と位置づけたい。

2区 SI9→SI7→SI6→SI5→SD4

遺物と遺構の重複から遺構の時期的な位置づけを行う。

6世紀末～7世紀初頭 1区 SI2 1区 SI9

8世紀中葉～後半 1区 SI1 2区 SI2

8世紀後半～9世紀初頭 1区 SI3 2区 SB7 1区 SB11 1区 SB12 2区 SB9 1区 SD19 1区 SX3

9世紀中葉～後半 1区 SI8 1区 SI7 2区 SB6 1区 SX7 SD18 SD17 SD16 SD15

9世紀後半以降 2区 SD12

1・2区では、6世紀から7世紀初頭の竪穴建物が出現する。竪穴建物のピークは8世紀中葉～9世紀初頭で、やや遅れて掘立柱建物のピークとなるが、竪穴建物と掘立柱建物が並立する時期があると考えられる。

道路状遺構について

1ABC区において道路状遺構SX7が出土した。平行する2条の溝を持ち、直線部は幅2m程度で、道路中央部には硬化面が残存する。長さは約75mを測る。北側の方向には「養蚕駅場推定地」である黒髪町遺跡が存在する。南側では古代の三叉路の残存が確認された。道路状遺構SX7から三叉路へは下り道となる。ここで疑問に思うのは、三叉路となる溝と道路状遺構SX7、同時期に掘られたのか、どちらかが先に掘られたのかということである。溝の土層断面から、道路として機能している部分はSD18から検出された硬化面（埋2層）とすると、硬化面は掘方面より約1mの高さになるため、同時に掘ったとすると、約1m埋められたことになる。しかし、硬化面下の堆積は自然堆積のため埋め戻しではない。このことから白川に下る溝が、先に掘られたと考えられる。

三叉路については、残存する硬化面は上に行くに従って、（三叉路が埋没するに従って）白川へ下る溝方向から、三叉路を越えて真っ直ぐに進むように変化していく。どの時期に溝が埋没していくのかは不明であるが、白川に下る溝SD15中の遺物には9世紀後半と思われるものが出土することから、比較的早い時期には埋没するのではないかと思われる。

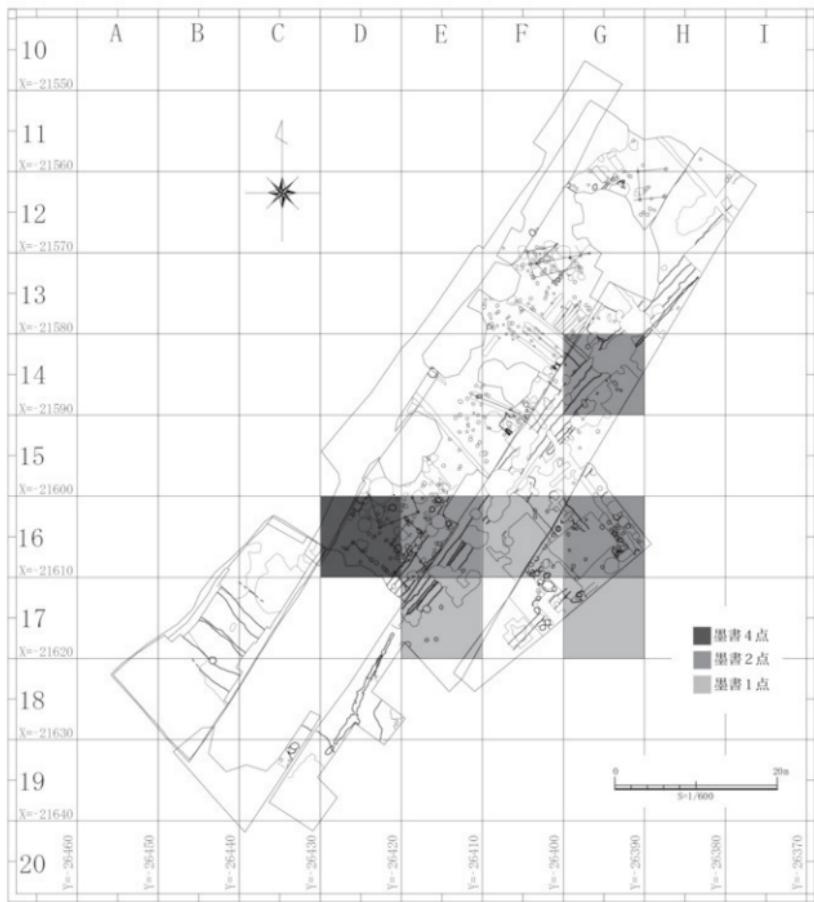
栗石地業について

1B区、2BC区において栗石地業が出土した。栗石地業とは穴を掘り、小端立て（コバダテ）と言って地面に突き刺さるように立てて川原石を敷き並べる。川原石を縦に隙間なく積み砂利などで目つぶしし、付き固めて弱い地盤を強くる地業である。1B区SB3では、土坑内は硬く締まっているが他の建物については、穴を掘り（掘っていない場合もある）川原石、礫などを何段かに置くような地業であった。

墨書・刻書土器について

墨書・刻書土器出土集中域を右図に表す。墨書土器は破片であり、文字を特定することはできなかった。出土集中区は16Dグリッドに4個、14G、16E、16Gに2個、17E、17Gに1個出土した。16DグリッドはSB6、SB7、SB5、SB15が検出されたグリッドであり、実測は行っていないが、SB6P3からも墨書土器が出土した（未掲載16）ことから、掘立柱建物にまつわる人物は字の読み書きができる人物かもしれない。残念ながら、出土した墨書土器は時期を特定できるようなものではないため、想像の域を超えるものではない。

新屋敷遺跡は主に8世紀から9世紀にかけての建物の様子や溝など集落跡の様子が垣間見える遺跡である。白川左岸側の調査を包括し、改めて検討していかなければならない。



参考文献

- 建設省河川局 2000 「白川水系河川整備基本計画」
- 熊本市新熊本市史編纂室 1996 「新熊本市史 史料編 第一巻 參古資料」
- 網田龍生 1994 「肥後における回転台土師器の成立と展開」『中世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
- 網田龍生 1994 「奈良時代肥後の土器」『先史学・考古学論叢IV—熊本大学文学部考古学研究室創設20周年記念論文集ー』 龍田考古会
- 網田龍生 2003 「古代荒尾產須恵器と宇城產須恵器」『先史学・考古学論叢IV—熊本大学文学部考古学研究室創設30周年記念論文集ー』 龍田考古会
- 網田龍生 1993 「古代肥後の土器」『大江遺跡群II』熊本市教育委員会
- 美濃口雅朗 1994 「熊本県における中世前期の土師器について」『中世土器の基礎研究』X 日本中世土器研究会
- 木村元浩 2002 「大江遺跡群」熊本県文化財調査報告第211集
- 馬場正弘 2006 「大江遺跡群」熊本県文化財調査報告第232集
- 松本健郎他 1980 「生産遺跡基本調査報告書II」熊本県調査報告第48集 熊本県教育委員会
- 美濃口雅朗・諸富国博 2007 「大江遺跡群V」熊本市教育委員会
- 網田龍生・美濃口雅朗・金田一精・林田和人・岩谷史記 2007 「二木木遺跡群II」熊本市教育委員会
- 網田龍生・美濃口雅朗 1999 「新屋敷遺跡第1次調査区」「新屋敷遺跡第4次調査区」
『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成10年度－』熊本市教育委員会
- 林田和人 2003 「新屋敷遺跡第11次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成13・14年度－』熊本市教育委員会
- 網田龍生 2004 「新屋敷遺跡第2次調査区」「新屋敷遺跡第12次調査区」「新屋敷遺跡第27次調査区」
『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成15年度－』熊本市教育委員会
- 松村真紀子 2005 「新屋敷遺跡第13次調査区」「新屋敷遺跡第16次調査区」「新屋敷遺跡第34次調査区」
『新屋敷遺跡第35次調査区」「新屋敷遺跡第36次調査区』
『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成16年度－』熊本市教育委員会
- 岩谷史記 2006 「新屋敷遺跡第41次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成17年度－』熊本市教育委員会
- 美濃口雅朗 2007 「新屋敷遺跡第26次調査」「新屋敷遺跡第33次調査」「新屋敷遺跡第42次調査」
『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成18年度－』熊本市教育委員会
- 美濃口雅朗 2008 「新屋敷遺跡第15次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成19年度－』熊本市教育委員会
- 美濃口雅朗 2010 「新屋敷遺跡第47次調査区」『熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成21年度－』熊本市教育委員会
- 豊崎晃一 2011 「新屋敷遺跡第48次調査区」『熊本市の文化財 第12集 熊本市埋蔵文化財発掘調査報告集－平成23年度－』熊本市教育委員会
- 文化庁編 2010 「発掘調査のびき」 同成社
- 荒木志伸 1999 「墨書き土器にみえる諸痕跡について」『墨書き土器の基礎的研究』お茶の水史学43号
- 伏見沖敬編 「書道大辞典」上、下 角川書店

写真図版

図版 1



1A 区 SX7 道路状遺構出土状況



1A 区 SX7 道路状遺構機能面 3 検出状況（南から）



1A 区 SX7 道路状遺構機能面 3 検出状況（東から）



1B 区 SX7 道路状遺構側溝完掘状況



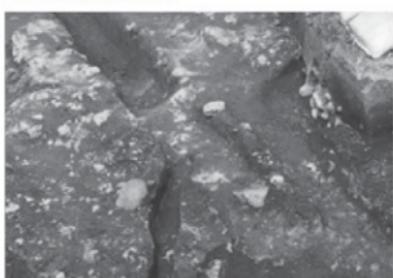
1A 区 SI7 完掘状況



1A 区 SI8 硬化面検出状況



1B 区 SI1 完掘状況



1B 区 SI1 かまど残存状況



1B区 SI2 完掘状況（1B区側）



1B区 SI2 完掘状況（1A区側）



1B区 SI2 かまと埋土遺物出土状況（上層）



1B区 SI2 かまと埋土遺物出土状況（下層）



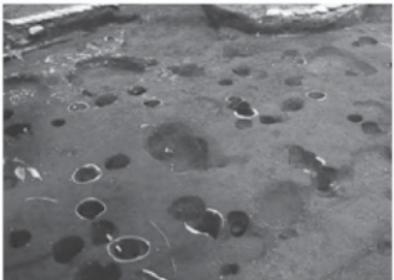
1B区 SI4 機能面完掘状況



1B区 SI4 かまと残存状況

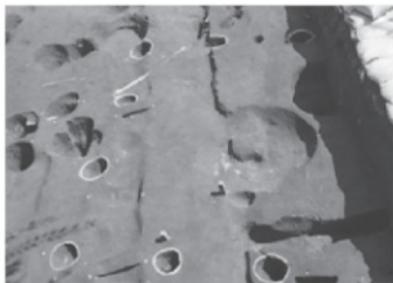


1B区 SI5 機能面完掘状況

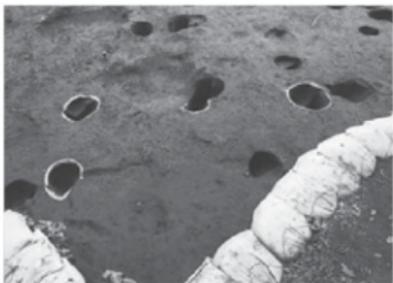


1B区 SB5(手前) SB7(奥) 完掘状況

図版 3



1B 区 SB15 完掘状況



1B 区 SB6 完掘状況



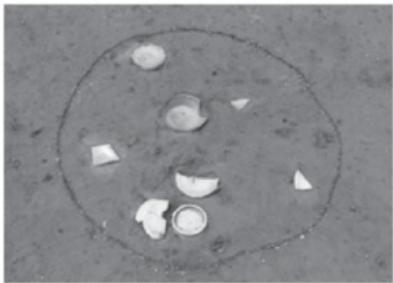
1B 区 SB9 完掘状況



1B 区 SB11 完掘状況



1B 区 SB12 完掘状況



1B 区 SK13 遺物出土状況



1C 区 SI6 完掘状況



1C 区 SI6 かまど検出状況



1C 区 SI9 かまど土層断面



1C 区 SB16 完掘状況



1D 区 SD19 土層断面完掘状況



1C 区 SK62 遺物出土状況



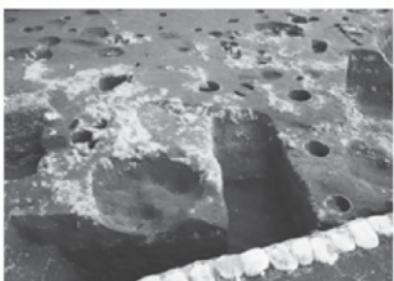
2B 区 SI2 完掘状況



2B 区 SI2 かまど残存状況



2A 区 SI1 硬化面検出状況（旧 SB5）



2B 区 SB2 完掘状況 防空壕完掘状況

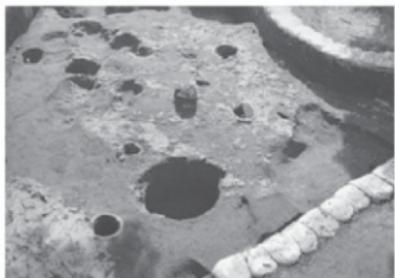
図版 5



2B 区 SB4 完掘状況（右は防空壕）



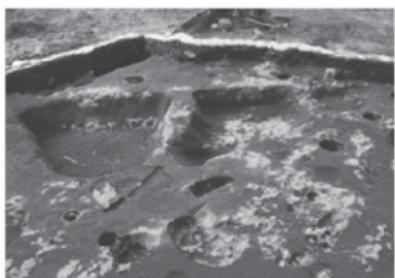
2B 区 SB5 完掘状況



2B 区 SB8 完掘状況



2B 区 SB9 完掘状況



2B 区 SB6 完掘状況



2B 区 SB7 完掘状況



2B 区 SB10 完掘状況



2B 区 SK7 遺物出土状況



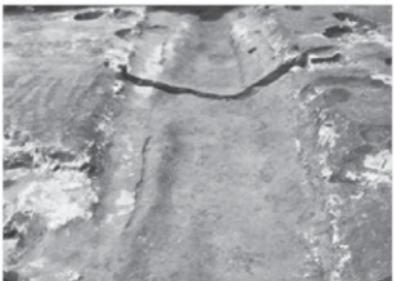
2C 区 調査区全景



2D 区 SI3 完掘状況



2D 区 SI5 完掘状況



2D 区 SD4 完掘状況



2D 区 SI8 完掘状況



2D 区 SI8 かまと残存状況



2D 区 調査区完掘状況



1B 区 SB3 要石出土状況

図版 7



1B 区 SB1 SB2 栗石出土状況 (K1 より北西側)



1B 区 SB1 K7 ~ K10 栗石出土状況



1B 区 SB4 K1 K2 栗石出土状況



1B 区 SK15 組石出土状況



1B 区 石垣出土状況 (北西から)



1B 区 石垣出土状況 (南西から)



1B 区 石垣南部出土状況



1B 区 石垣土層断面



1C区 SD9 完掘状況



1B区 近現代窯跡出土状況



2B区 SB1 栗石出土状況



2C区 SB11 栗石出土状況



2A区 石垣出土状況



1B・1C区 完掘状況

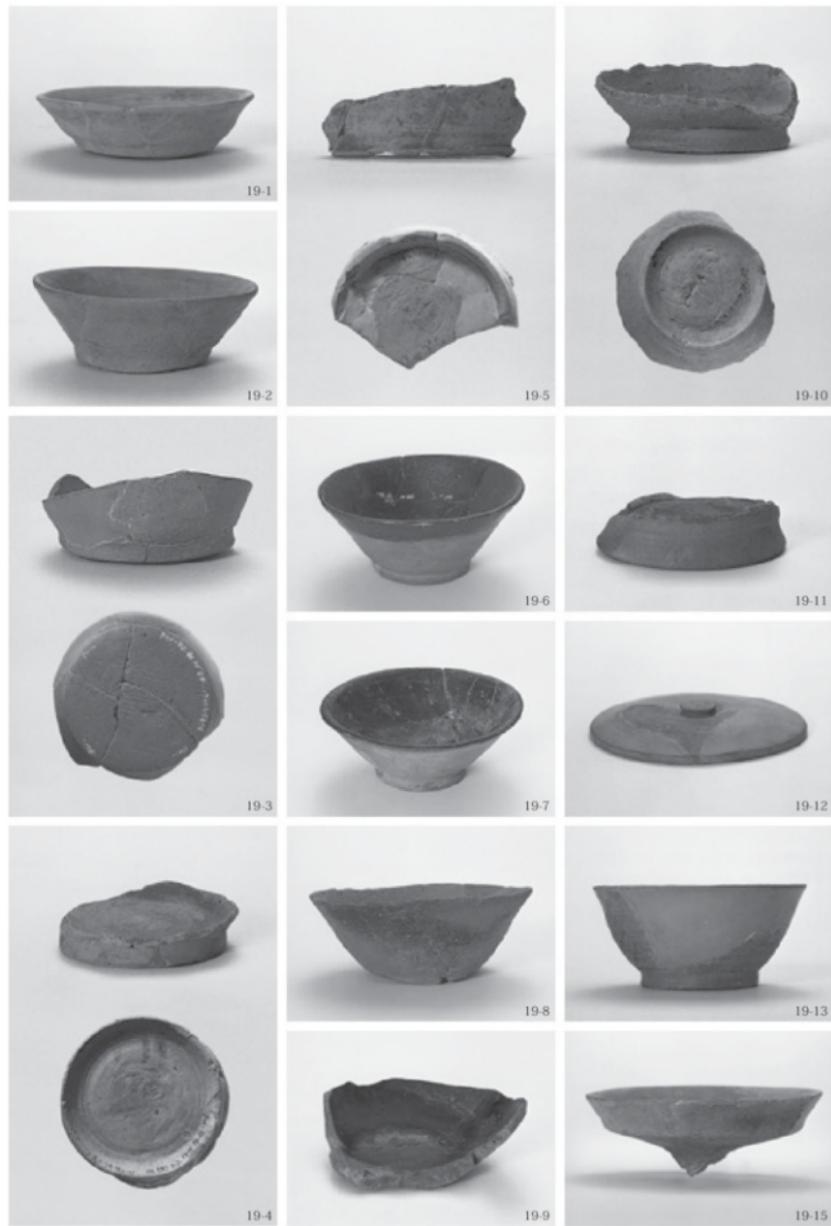


1C区 完掘状況



1区土層断面

図版9





図版 11



30-2



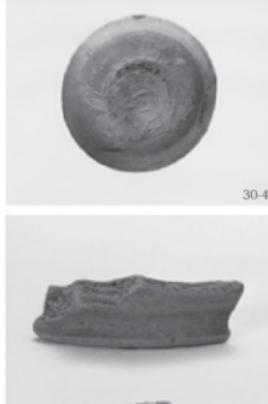
30-4



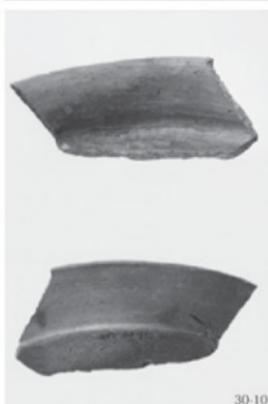
30-8



30-3



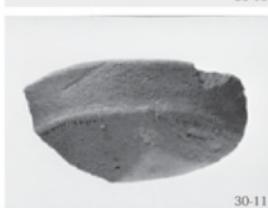
30-7



30-10



30-5



30-11

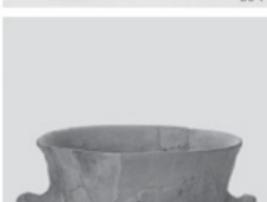


30-6

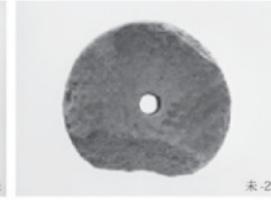
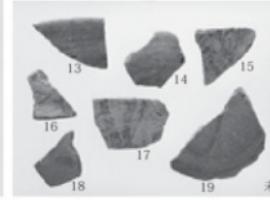
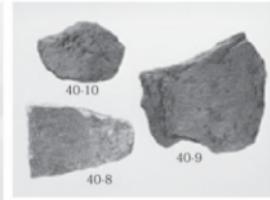


30-9

30-12

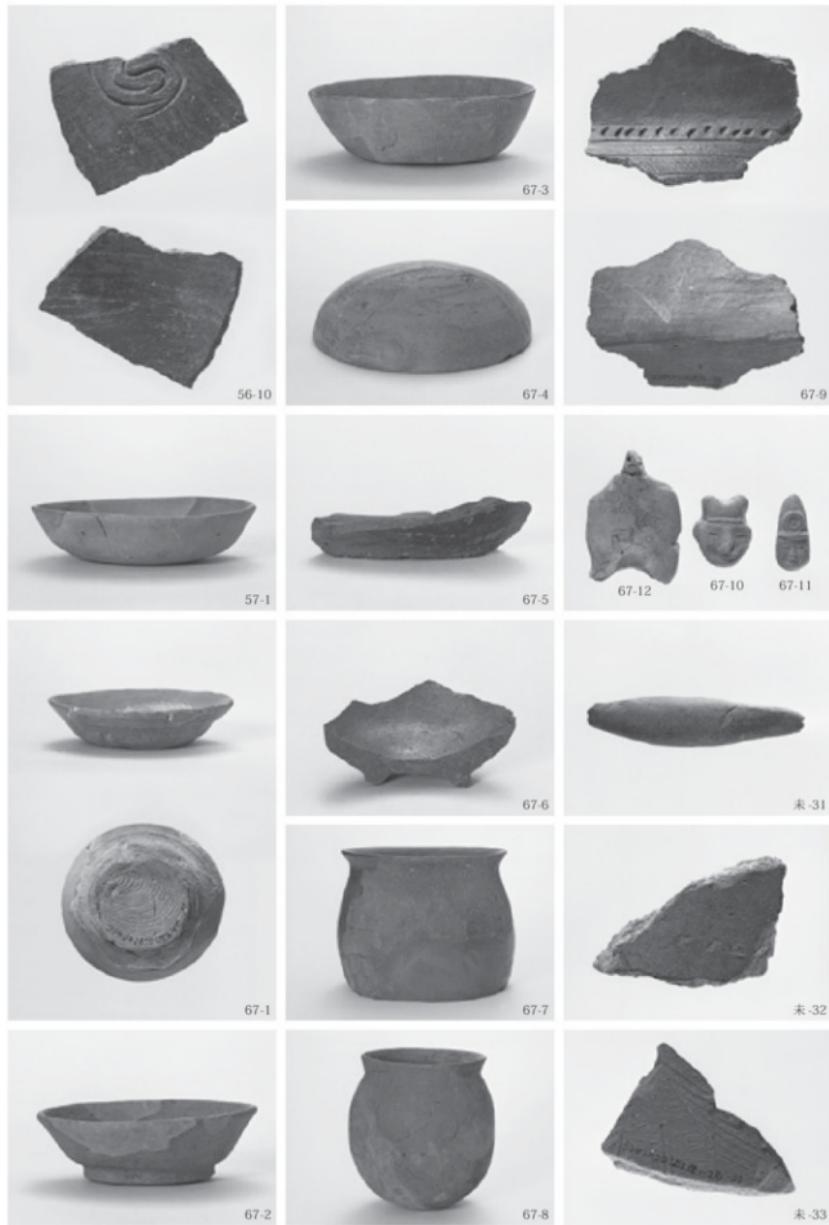


図版 13





図版 15



あとがき

新屋敷遺跡4の報告書が完成しました。

多くの方々にいろいろなご助言をいただき調査、報告書としてまとめさせていただきました。

今回の報告書作成では、埋蔵文化財の現場での調査の大切さを感じました。また、4人の調査員の調査箇所をまとめたのですが、とまどいながらやっとまとめた次第です。2D区は現場を調査した上村文化財保護主事が調査の成果を執筆し、水上が全体のまとめを行ったのですが、上村保護主事のみならず調査者の思い、また遺跡を十分に伝えることができたのか不安であります。

この報告書が、地域の歴史を探るための基礎資料として、埋蔵文化財に対する理解と保護に役立てれば幸いです。

発掘調査時、整理報告書作成時とたいへん多くの方にご指導、ご協力をいただきました。おかげで何とか調査から報告書の作成まで行うことができました。本当にありがとうございます。

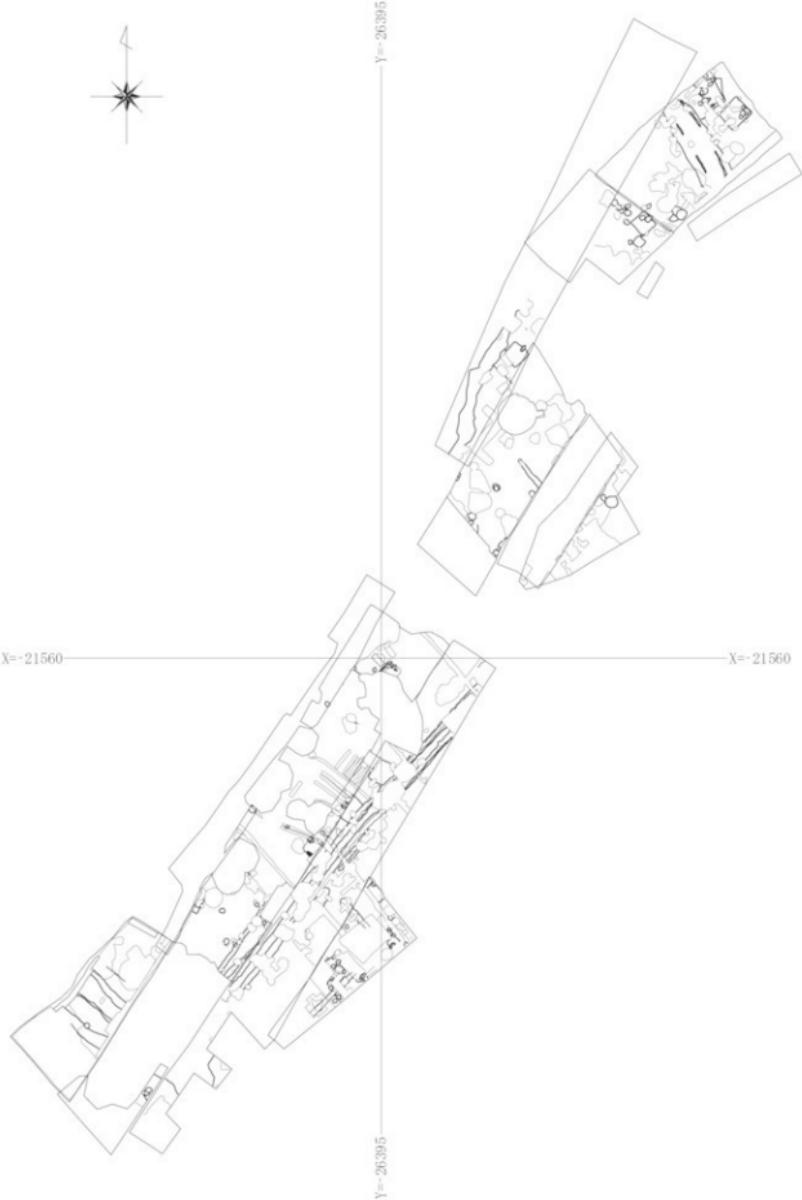
最後に、本文中で触れることができなかつた実際の作業に携わられた方々の名前を記して、感謝の意を表したいと思います。(敬称略)

発掘調査

石倉武夫 伊津野博 井手美幸 伊藤千代子 今村明美 上原靖夫 浦部福次 江藤恵子
大隈清成 岡野学 岡本久三夫 岡本敬裕 奥村龍則 小田恰 小田須磨子 川口哲男
河野義勝 河原良江 栗崎強 後藤まや 坂田正良 笹木薫 柴田真一 柴田やよひ
白石美枝子 園田輝雄 新福克也 田添るり子 田上次敏 田上利子 土島安臣 鐘戸亮子
中村孝昭 西本裕 野田昇 早田咲百合 広瀬多津美 藤井勇二 藤川勇 増田由美
松下義章 松本晋治 三宅幸生 宮嶋徹 宮本厚 森川征子 森川護 森田登 森本敏夫
森山義喜 吉田秋満 米光史朗 羅美鳳 渡辺正三 (五十音順)

整理報告書作成

要甲貴子 井王直嚴 川上薫 清田幸恵 栗崎香代子 古閑知子 坂本貴美子 立石美代子
田中さつき 永山邦子 橋本英子 溝口健造 結城あけみ (五十音順)



第83図 座標測地点図

報告書抄録

平成27年3月31日 印刷

平成27年3月31日 発行

新屋敷遺跡4

熊本県文化財調査報告第314集

国土交通省白川河川改修工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

編集・発行 熊本県教育委員会

印刷 〒861-3102 熊本県上益城郡嘉島町下六嘉1765

株式会社 啓文社

発行者：熊本県教育委員会
所屬：教育総務局文化課
発行年度：平成26年度